

樽味遺跡 V

— 樽味遺跡 6 ～ 8 次調査報告 —

愛媛大学埋蔵文化財調査室

2013

序 文

国立大学法人愛媛大学の敷地は、松山市内および愛媛県内各所に点在し、敷地総面積は464ヘクタールに及ぶ。そのうち、大学本部と4つの学部が所在する城北団地には文京遺跡と道後樋又遺跡、農学部と附属高等学校がある樽味団地には樽味遺跡、国際交流会館がある鷹子団地では鷹子遺跡、教職員宿舎のある北吉井団地では桑原西稲葉遺跡など、数多くの遺跡がある。愛媛大学では、埋蔵文化財調査室を設置し、校舎建設や営繕工事等の際、埋蔵文化財への影響度をはかるための試掘調査を行い、埋蔵文化財が諸工事で影響を受ける場合には、影響度に応じて全面調査、立会調査の発掘調査を実施してきた。また、大学構内における遺跡の有無や精度の高い分布状況を把握する確認調査を実施し、埋蔵文化財の保護に努めている。

こうした発掘調査成果を客観的に資料化し、調査報告書にまとめて公開することによって遺跡の評価が行われる。ところが、頻繁な発掘調査と出土品の多さによって、速やかな報告書刊行を容易に行えない状況にあった。こうした状況を打開するため、2001年度以降、小規模調査である試掘・立会・確認調査についての報告と、本格調査の概要報告を併せた『埋蔵文化財調査室年報』を刊行してきた。さらに、2010年度からは、小規模調査の正式報告書も年報で報告する形式をとりながら、停滞してきた報告書の刊行に努めている。

本書は、2001年度に樽味団地で実施した環境産業研究施設新営工事に伴う樽味遺跡6次調査、2002年度の農学部2号館改修工事に伴う樽味遺跡7次調査、そして2006年度の樽味団地総合研究棟改修工事に伴う樽味遺跡8次調査の発掘調査報告である。本書の刊行に当たっては、学内はもとより学外の多くの機関・個人の方々から協力をえながら、当初2011年度の刊行に向けて編集作業を終えていたが、ようやく2012年度に刊行ができた。協力をえた方々に深く感謝するとともに、本書が多くの方々にご利用・活用されることを願っております。

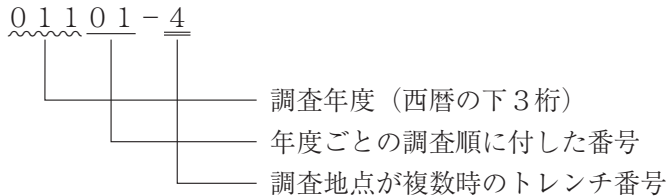
平成25年3月29日

愛媛大学埋蔵文化財調査

室長 田 崎 博 之

例 言

1. 本書は、愛媛大学埋蔵文化財調査室が2001年度に樽味団地で実施した環境産業研究施設新営工事に伴う樽味遺跡6次調査、2002年度に行った農学部2号館改修工事に伴う樽味遺跡7次調査、そして2006年度に実施した樽味団地総合研究棟改修工事に伴う樽味遺跡8次調査の発掘調査報告であり、愛媛大学埋蔵文化財調査報告X X Vにあたる。
2. 埋蔵文化財調査室では、本格全面調査・構内遺跡確認調査については、遺跡ごとに調査次数を付しているが、同時に、1975年から始まった大学構内の発掘調査まで遡って、立会・試掘形式の小規模調査も含めて、すべての調査に調査番号を与えている。調査番号は、西暦の下3桁の後に年度ごとの調査順に01からの2桁の通し番号を加えた5桁の番号で表示している。調査番号に加えて、複数の地点（トレンチ）を調査した場合、-の後に地点番号を付して表示している。



3. 埋蔵文化財調査室では、遺構番号に冠して、掘立柱建物：SB，竪穴式住居：SC，溝：SD，炉跡・竈：SF，柵列：SA，水田：SS，土壙：SK，柱穴・小穴：SP，墓：SQ，自然流路：SR，その他の遺構：SXの記号で遺構の種別を表している。
4. 発掘調査においては、日本測地系（Tokyo Datum）平面直角座標系第IV系によって調査区割りを設定しており、本書で表示している方位・標高数値も平面直角座標系第IV系にしたがっている。
5. 土色・遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）『新版標準土色帖』に準拠しているが、本文中ではマンセル記号は省略した。
6. 本書は、序説及び第I章を田崎博之，第II・III・V章を田崎と濱田美加，第四章を三吉秀充が執筆し，田崎が編集を行った。
7. 本書で使用了遺構図は，田崎・三吉・宮崎直栄・濱田・田中いづみが作成し浄写を行った。
8. 本書で使用了遺物図は，田崎・三吉・宮崎・濱田・田中が実測・浄書を行った。
9. 本書で使用了写真は，田崎・三吉が撮影した。
10. 本書に報告した調査に係わる記録類・出土遺物は，愛媛大学埋蔵文化財調査室において保管している。

本文目次

序説

1	調査にいたる経緯	1
	(1) 6次調査	
	(2) 7次調査	
	(3) 8次調査	
2	発掘調査の体制と経過	2
	(1) 6次調査	
	(2) 7次調査	
	(3) 8次調査	
3	発掘調査・整理作業・調査報告書刊行	4
	(1) 基本層序及び調査区の設定	
	(2) 出土遺構・遺物の記録の方法と保管	
	(3) 整理作業と調査報告書の刊行	
I	位置と環境	7
II	樽味遺跡6次調査の記録	
1	層序と遺構・遺物の概要	15
	(1) 層序	
	(2) 出土遺構と遺物の概要	
2	出土遺構と遺物の記録	16
	(1) 掘立柱建物 SB-17 (16)	
	(2) 土壙	
	SK-1 (19) SK-2 (19) SK-3 (19) SK-4 (19) SK-5 (19)	
	SK-7 (19) SK-8 (21) SK-9 (21) SK-10 (21) SK-12 (21)	
	SK-13 (21) SK-14 (21) SK-15 (22) SK-16 (22) SK-18 (22)	
	SK-32 (22) SK-38 (22) SK-40 (22) SK-41 (23)	
	(3) 溝 SD-6 (24)	
	(4) 柱穴・小穴	
	SP-22 (24) SP-35 (24) SP-39 (24) SP-42 (24) SP-49 (25)	
	SP-59 (25) SP-74 (25) SP-75 (26)	
	(5) その他の遺物	
III	樽味遺跡7次調査の記録	
1	I区の調査	31
	(1) 層序と遺構・遺物の概要	
	1) 層序	
	2) 出土遺構と遺物の概要	
	(2) 出土遺構と遺物の記録	33
	1) 竪穴式住居跡 SC-17 (33) SC-28 (35) SC-50 (36)	
	2) 掘立柱建物 SB-77 (36)	

3) 溝	SD-8 (37)	SD-18 (38)			
4) 土壙	SK-1 (38)	SK-7 (39)	SK-19 (39)	SK-51 (39)	SK-55 (39)
	SK-61 (39)	SK-63 (40)	SK-64 (40)	SK-69 (40)	
5) 自然流路	SR-13 (40)				
6) 土器溜まり	SX-29 (53)				
7) 柱穴・小穴	SP-3 (55)	SP-27 (55)	SP-32 (56)	SP-33 (56)	SP-39 (57)
	SP-40 (57)	SP-53 (57)	SP-70 (57)	SP-71 (57)	SP-74 (57)
	SP-75 (58)	SP-76 (58)			
8) その他の出土遺物					
2 II区の調査60				
(1) 層序と出土遺構					
(2) 出土遺物					
3 III区の調査62				
4 IV区の調査62				
(1) 層位					
(2) 遺構と遺物					
1) 溝	SD-102 (63)				
2) 自然流路	SR-101 (63)				
2) III層出土の遺物					
5 V区の調査65				
IV 樽味遺跡8次調査の記録					
1 1区の調査81				
2 2区の調査82				
3 3区の調査82				
(1) 層序と遺構の概要					
(2) 出土遺構と遺物の記録					
1) 土壙	SK-1 (82)	SK-3 (84)			
2) 溝	SD-2 (84)				
3) 柱穴・小穴	SP-5 (84)	SP-7 (85)	SP-8 (85)	SP-10 (85)	SP-11 (85)
	SP-12 (85)	SP-13 (85)	SP-17 (86)	SP-41 (86)	SP-42 (86)
4 4区の調査86				
(1) 層序と遺構の概要					
(2) 出土遺構と遺物の記録					
1) 土壙	SK-32 (86)				
2) 柱穴・小穴	SP-22 (87)	SP-23 (87)	SP-25 (87)	SP-26 (87)	SP-27 (87)
	SP-28 (87)	SP-30 (88)	SP-31 (88)	SP-34 (88)	SP-35 (88)
	SP-36 (88)	SP-38 (88)	SP-39 (88)		
5 5区の調査89				
V 樽味遺跡6～8次調査のまとめ92				

【参考文献】

【調査抄録】

挿 図 目 次

<p>図1 道後平野の地形概要と樽味遺跡の位置 (平井1989より作成)……………7</p> <p>図2 松山平野北東部周辺主要遺跡分布図 (縮尺1/25,000)……………8</p> <p>図3 樽味遺跡周辺の発掘調査地点 (縮尺1/5,000)……………9</p> <p>図4 樽味遺跡調査地点位置及び6～8次調査区 位置(縮尺1/2,000)……………12</p> <p>図5 6次調査全体図(縮尺1/150)……………16-17</p> <p>図6 6次調査SB-17実測図(縮尺1/50)……………17</p> <p>図7 6次調査SB-17SP-48出土遺物実測図 (縮尺1/3)……………17</p> <p>図8 6次調査SK-2・4・8・9・10・15・16・ 18・38・40・41実測図(縮尺1/50) ……………18</p> <p>図9 6次調査SK-5, SD-6実測図 (縮尺1/50)……………19</p> <p>図10 6次調査SK-7・12・13実測図 (縮尺1/50)……………20</p> <p>図11 6次調査SK-14実測図(1/50)……………22</p> <p>図12 6次調査SK-40出土遺物実測図 (縮尺1/3)……………23</p> <p>図13 6次調査SK-41出土遺物実測図 (縮尺1/3)……………23</p> <p>図14 6次調査SP-22・32・35・39・42・49・59・ 74・75実測図(縮尺1/50)……………24</p> <p>図15 6次調査SP-49出土遺物実測図 (縮尺1/3, 1/4)……………25</p> <p>図16 6次調査SP-48・59ほか出土遺物実測図 (縮尺1/3)……………25</p> <p>図17 6次調査攪乱部分出土遺物実測図 (縮尺1/3, 1/4)……………25</p> <p>図18 7次調査I区全体図及び土層断面図 (縮尺1/100, 1/50)……………32-33</p> <p>図19 7次調査I区SC-17・28・50, SD-18実測 図(縮尺1/50)……………34</p> <p>図20 7次調査I区SC-17・28・50出土遺物実測 図(縮尺1/3, 1/2)……………35</p> <p>図21 7次調査I区SC-17出土遺物実測図</p>	<p>(縮尺1/4)……………35</p> <p>図22 7次調査I区SB-77, SP-54出土遺物実測 図(縮尺1/3)……………36</p> <p>図23 7次調査I区SB-77, SD-8, SK-51・55・ 61・63・64実測図(1/50)……………37</p> <p>図24 7次調査I区SD-8・18出土遺物実測図 (縮尺1/3)……………38</p> <p>図25 7次調査I区SK-7・51・64出土遺物実測 図(縮尺1/3)……………39</p> <p>図26 7次調査I区SR-13①層出土遺物実測図1 (縮尺1/3)……………41</p> <p>図27 7次調査I区SR-13①層出土遺物実測図2 (縮尺1/3)……………42</p> <p>図28 7次調査I区SR-13②層出土遺物実測図1 (縮尺1/3)……………44</p> <p>図29 7次調査I区SR-13②層出土遺物実測図2 (縮尺1/3)……………46</p> <p>図30 7次調査I区SR-13④層出土遺物実測図1 (縮尺1/3)……………47</p> <p>図31 7次調査I区SR-13④層出土遺物実測図2 (縮尺1/3)……………48</p> <p>図32 7次調査I区SR-13④層出土遺物実測図3 (縮尺1/3)……………50</p> <p>図33 7次調査I区SR-13④層出土遺物実測図4 (縮尺1/3)……………50</p> <p>図34 7次調査I区SR-13④層出土遺物実測図5 (縮尺1/3)……………51</p> <p>図35 7次調査I区SR-13④層出土遺物実測図6 (縮尺1/3)……………52</p> <p>図36 7次調査I区SR-13④層出土遺物実測図7 (縮尺1/8)……………53</p> <p>図37 7次調査I区SX-29出土遺物実測図1 (縮尺1/3)……………54</p> <p>図38 7次調査I区SX-29層出土遺物実測図2 (縮尺1/3)……………55</p> <p>図39 7次調査I区SX-29層出土遺物実測図3 (縮尺1:1/3, 2～7:1/4)……………56</p> <p>図40 7次調査I区SK-69, SP-32・33・39・40・ 53・71・74～76実測図(1/50)……………57</p>
---	--

図41	7次調査 I 区SP-27・32・33・39・40・70・71・74~76出土遺物実測図7 (縮尺1/3)57	図50	8次調査 1 区全体図及び土層断面図 (縮尺1/50)82
図42	7次調査 I 区Ⅲ-1・2層出土遺物実測図 (縮尺1/3)58	図51	8次調査 3・4区全体図及び土層断面図 (縮尺1/50)83
図43	7次調査 I 区Ⅲ-3出土遺物実測図 (縮尺1/3)59	図52	8次調査 3・4区柱穴及び小穴実測図 (縮尺1/50)84
図44	7次調査 I 区 I 層出土遺物実測図 (縮尺1/3)59	図53	8次調査出土遺物実測図 1 (縮尺1/3)85
図45	7次調査 I 区攪乱内出土遺物実測図 (縮尺1/3)59	図54	8次調査出土遺物実測図 2 (縮尺1/4)87
図46	7次調査Ⅱ・Ⅲ区全体図及び土層断面図 (縮尺1/100, 1/50)60	図55	8次調査 5 区全体図及び土層断面図 (縮尺1/50)89
図47	7次調査Ⅱ区出土遺物実測図 (縮尺1/3)61	図56	6世紀中頃~7世紀の土師器・須恵器の比較 (須恵器・土師器高坏1/4, 土師器甕1/6)92-93
図48	7次調査Ⅳ・Ⅴ区全体図及び土層断面図 (縮尺1/100, 1/50)62-63	図57	樽味遺跡周辺 of 古墳時代後期及び古代後半~中世の遺構分布94-95
図49	7次調査Ⅳ区出土遺物実測図 (縮尺1/3)64		

表 目 次

表 1	樽味遺跡における調査概要一覧表13-14	表 6	7次調査遺構観察表66-69
表 2	6次調査出土遺構一覧表15	表 7	7次調査出土遺物観察表69-80
表 3	6次調査遺構観察表27-29	表 8	8次調査出土遺構一覧表81
表 4	6次調査出土遺物観察表30	表 9	8次調査遺構観察表90-91
表 5	7次調査出土遺構一覧表31	表10	8次調査出土遺物観察表91

写真図版目次

図版 1 - 1	愛媛大学樽味団地全景 (北西から)	図版 4 - 1	6次調査 J-2・3区調査区西壁土層断面(天地返し of 状況, 南東から)
2	6次調査区遠景 (表土剥ぎ後, 北東から)	2	6次調査 I-4・5区調査区西壁土層断面 (遺構 of 残存状況)
図版 2 - 1	6次調査区遠景 (完掘後, 北東から)	3	6次調査天地返し部分を除去した後の遺構精査状況
2	6次調査区全景 (完掘後, 東から)	図版 5 - 1	6次調査 SB-17 (南から)
図版 3 - 1	6次調査区全景 (完掘後, 南西から)		
2	6次調査区西半部 (完掘後, 南から)		

- 2 6次調査 SB-17SP-30 立柱痕跡検出状況 (南東から)
- 3 6次調査 SB-17SP-43 立柱痕跡検出状況 (北西から)
- 4 6次調査 SB-17SP-48 立柱痕跡検出状況
- 5 6次調査 SK-1 完掘状況(東から)
- 6 6次調査 SK-2 完掘状況(東から)
- 図版6-1 6次調査 I・J-3・4区遺構検出状況(北から)
- 2 6次調査 I・J-3・4区遺構完掘状況(南から)
- 図版7-1 6次調査 SK-3・4・32 検出状況(南東から)
- 2 6次調査 SK-3・4・32 完掘状況(北から)
- 図版8-1 6次調査 SK-5, SD-6 完掘状況(南から)
- 2 6次調査 SK-7 土層断面(南西から)
- 図版9-1 6次調査 SK-7 検出状況(南から)
- 2 6次調査 SK-7 完掘状況(南から)
- 3 6次調査 SK-8 完掘状況(北から)
- 4 6次調査 F~H-7・8区遺構検出状況(南から)
- 図版10-1 6次調査 SK-9・13・14 完掘状況(西から)
- 2 6次調査 SK-10・12 完掘状況(北西から)
- 図版11-1 6次調査 SK-9 土層断面(北から)
- 2 6次調査 SK-10 土層断面(南から)
- 図版12-1 6次調査 SK-12 完掘状況(南西から)
- 2 6次調査 SK-13 土層断面(南西から)
- 図版13-1 6次調査 SK-18, SP-79 完掘状況(北から)
- 2 6次調査 SK-38 完掘状況(南東から)
- 図版14-1 6次調査 SK-38 土層断面(南から)
- 2 6次調査 SK-40・41 検出状況(北から)
- 図版15-1 6次調査 SK-40・41 完掘状況
- 2 6次調査 SK-40 遺物出土状況
- 図版16-1 6次調査 SK-40 土層断面(北から)
- 2 6次調査 SK-41 土層断面(南から)
- 図版17-1 6次調査 SP-32 土層断面(北から)
- 2 6次調査 SP-39 土層断面(北から)
- 3 6次調査 SP-35 土層断面(北から)
- 4 6次調査 SP-49 土層断面(南西から)
- 5 6次調査 SP-59 遺物出土状況(北から)
- 6 6次調査 SP-74 土層断面(東から)
- 7 6次調査 SP-75 土層断面(南から)
- 8 6次調査 C-1区拡張区西壁土層断面(東から)
- 図版18-1 6次調査 K-4区拡張区完掘状況(北西から)
- 2 6次調査 K-4区拡張区完掘状況(東から)
- 図版19 6次調査出土遺物
- 図版20-1 7次調査 I A~I F区全景(Ⅲ層除去後, 南西から)
- 2 7次調査 I D~I H区全景(完掘後, 南から)
- 3 7次調査 I D~I H区全景(完掘後, 北から)
- 図版21-1 7次調査 I H・I G区全景(完掘後, 北から)
- 2 7次調査 I I・I J区IV層上面遺構検出状況(南から)
- 3 7次調査 I J区IV層上面遺構検出状況(南から)
- 4 7次調査 I A~I C区IV層上面の遺構検出状況(南から)
- 図版22-1 7次調査 I A~I C区IV層上面の検出遺構完掘状況(南から)
- 2 7次調査 I B区 SD-8 完掘状況(南から)
- 図版23-1 7次調査 I B・I C区北壁土層断面(南西から)
- 2 7次調査 I C区 SC-17・SD-18完掘状況及びSC-28検出状況(南から)

- 図版24-1 7次調査I C区 SC-17・SD-18 完掘状況(北から)
 2 7次調査I C・I D区Ⅲ層下面の遺構検出状況(北から)
 3 7次調査I C・I D区Ⅲ層下面の遺構完掘状況(北西から)
- 図版25-1 7次調査I D区 SK-63・64・69 完掘状況(南から)
 2 7次調査I G区 SP-39 遺物出土状況(西から)
 3 7次調査I H区完掘状況(北から)
- 図版26-1 7次調査I D～I F区 SR-13 完掘状況(南から)
 2 7次調査I D～I F区 SR-13 埋土②～④層の礫出土状況1(南から)
- 図版27-1 7次調査I D～I F区 SR-13 埋土②～④層の礫出土状況2(南から)
 2 7次調査I E・I F区 SR-13 上部SX-29遺物出土状況(北から)
 3 7次調査I E・I F区 SR-13 上部SX-29遺物出土状況(南から)
 4 7次調査I H・I I区 SK-51 検出状況(北東から)
- 図版28-1 7次調査I I・I J区 SB-77(北西から)
 2 7次調査 SB-77SP-56 土層断面(西から)
 3 7次調査 SB-77SP-54 土層断面(西から)
 4 7次調査Ⅱ区全景(北から)
- 図版29-1 7次調査Ⅱ・Ⅲ区遠景(北東から)
 2 7次調査ⅡA区南壁土層断面
 3 7次調査ⅡB区南壁土層断面
 4 7次調査Ⅲ区全景(南東から)
- 図版30-1 7次調査Ⅲ区Ⅳ層上面検出状況(東から)
 2 7次調査ⅣD～ⅣF区全景(西から)
 3 7次調査ⅣA・ⅣB区全景(南から)
- 図版31-1 7次調査ⅣC・ⅣD区北壁土層断面(南東から)
 2 7次調査ⅣE・ⅣF区北壁土層断面(南東から)
- 3 7次調査ⅣG・ⅣH区東壁土層断面(北西から)
 4 7次調査Ⅴ区全景(北から)
- 図版32 7次調査出土遺物(1)
 図版33 7次調査出土遺物(2)
 図版34 7次調査出土遺物(3)
 図版35 7次調査出土遺物(4)
 図版36 7次調査出土遺物(5)
 図版37 7次調査出土遺物(6)
 図版38 7次調査出土遺物(7)
 図版39 7次調査出土遺物(8)
 図版40 7次調査出土遺物(9)
 図版41 7次調査出土遺物(10)
 図版42 7次調査出土遺物(11)
- 図版43-1 8次調査1・2区遠景(南から)
 2 8次調査1区完掘状況(北から)
 3 8次調査1区南壁土層断面(北から)
 4 8次調査2区完掘状況(東から)
- 図版44-1 8次調査3・4区遠景(北東から)
 2 8次調査3・4区遠景(東から)
- 図版45-1 8次調査3区遺構検出状況(西から)
 2 8次調査3区遺構完掘状況(西から)
- 図版46-1 8次調査3区遺構検出状況(北から)
 2 8次調査3区遺構完掘状況(北から)
- 図版47-1 8次調査3区北壁土層断面(南東から)
 2 8次調査3区 SK-1 検出状況(南から)
 3 8次調査3区 SK-1 完掘状況(南から)
 4 8次調査3区 SP-3 土層断面(北から)
 5 8次調査3区 SP-5 土層断面(南から)
- 図版48-1 8次調査4区 SP-7 土層断面(南から)
 2 8次調査4区 SP-8・9 土層断面

- (南から)
- 3 8次調査4区 SP-10 土層断面
(北から)
- 4 8次調査4区 SP-11 土層断面
(北から)
- 5 8次調査4区 SP-12・13 土層断面
(南から)
- 6 8次調査4区 SP-12土層断面
(南から)
- 7 8次調査4区 SP-13 土層断面
(南から)
- 8 8次調査4区 SP-17 土層断面
(南から)
- 図版49-1 8次調査4区遺構検出状況
(東から)
- 2 8次調査4区完掘状況 (東から)
- 図版50-1 8次調査4区遺構検出状況
(西から)
- 2 8次調査4区完掘状況 (西から)
- 図版51-1 8次調査4区 SP-22・39 (北から)
- 2 8次調査4区 SP-23 土層断面
(東から)
- 3 8次調査4区 SP-25・26土層断面
(南から)
- 4 8次調査4区 SP-27 (北から)
- 5 8次調査4区 SP-28 (北から)
- 6 8次調査4区 SP-30 土層断面
(北から)
- 7 8次調査4区 SP-31 土層断面
(北から)
- 8 8次調査4区 SK-32, SP-34 土層
断面(北から)
- 図版52-1 8次調査4区 SP-35 土層断面
(北から)
- 2 8次調査4区 SP-36 土層断面
(西から)
- 3 8次調査4区 SP-38 土層断面
(南から)
- 4 8次調査5区遠景 (北東から)
- 5 8次調査5区完掘状況 (南から)

序 説

1 調査にいたる経緯

(1) 6次調査

平成13年5月22日、埋蔵文化財調査室に対して、白石雅也農学部長から、三浦工業株式会社寄付講座（環境産業科学講座）の充実拡大と環境分野研究の発展のため研究施設が寄付されることが伝えられ、建物建設に伴う発掘調査について打診された。ところが、外部資金導入という形式での建物建設であり、調査費用・調査後の整理費・報告書刊行費用などが確保されているか未決定の状況であった。しかも、この時点では、城北団地理学部構内において、総合研究棟新営工事（Ⅰ期）に伴う調査を実施中であり、引き続き総合研究棟新営工事（Ⅱ期）に伴う調査が予定され、発掘調査日程の調整が難しい状態にあった。

そこで、埋蔵文化財調査室は、建物建設予定地の試掘調査を行うとともに、調査期間の調整や発掘費用についての協議を、農学部・施設部と進めることとした。

試掘調査（調査番号：00102）は6月7日に実施した。その結果、建設予定地の南半部は、基盤層まで達する深い畝立てによる天地返しがおよんでいる可能性が高いが、それでも一部に包含層や遺構が残ることを確認できた。建物建設に先立って掘削範囲の全面調査が必要であることを、施設部を通じて農学部に報告した。

また、7月4日に開かれた埋蔵文化財調査委員会では、下條信行埋蔵文化財調査室長から、今回の発掘調査について経緯と対応が報告され、調査費用の負担とその執行方法、調査後の整理費・報告書刊行費用の負担などの発掘調査の条件整備の対応についての要望が出された。これに対して、小松正幸委員長からは調査費は国費で執行されることが確認された。また、白石農学部長からは、建物は大学では前例がなく、今後事務局と調整を行い、発掘調査に関わる条件整備を行いたい旨の

発言があった。

この埋蔵文化財委員会の審議結果をうけ、7月18日に施設部・農学部・埋蔵文化財調査室で協議し、実施中の総合研究棟新営工事（Ⅰ期）に伴う調査が終了後に着手すること、調査期間を短縮するために工事範囲をできるだけ縮小することなどを確認した。（田崎）

(2) 7次調査

平成14年3月、施設部から埋蔵文化財調査室に、農学部2号館の改修工事に伴う電気・通信・排水の管路の敷設計画が提示された。埋蔵文化財調査室では、既往の調査成果から、計画されている管路周辺には埋蔵文化財が分布し、工事により影響が生じると判断し、施設部と協議を重ね、管路部分の発掘調査を実施することとした。（田崎）

(3) 8次調査

平成18年6月、施設基盤部から、(樽味)総合研究棟改修工事計画について報告があり、埋蔵文化財調査室では既往の調査成果を検討し、以下の依頼を申し入れた。

- ①耐震補強の地中梁補強工事に伴う掘削範囲を建物建設時の余掘り内に収めること。
- ②耐震補強工事に伴う樹木伐採は地表下30cmまでの掘削にとどめること。
- ③避雷針改修工事に伴う接地局の埋設箇所は建物建設時の余掘り範囲に収めること。
- ④実験排水管改修に伴う検水槽の設置および排水管更正工事では、検水槽の設置位置を建物建設時の余掘り範囲にできるだけ収め、排水管更生も既設管路内に収めること。

これを受けて、11月中旬に、施設基盤部から具体的な工事計画が報告されるとともに、耐震補強の地中梁補強工事の掘削範囲を建物建設時の余掘

り内に収めるため、その範囲を確認する発掘調査が必要なこと、余掘り内に収まらない検水槽の設置地点があることが報告された。そこで、再々度

の計画の協議・調整を進め、12月上旬に建物建設時の余掘り範囲の確認し、検水槽の設置地点の発掘調査は1月中旬に着手することとした。(三吉)

2 発掘調査の体制と経過

(1) 6次調査

6次調査を進めるに当たっての調査体制は、以下の通りである。

〈埋蔵文化財調査委員会〉

委員長	小松 正幸	副学長
委員	藤川 研策	法文学部長
委員	下條 信行	法文学部教授
委員	松原 弘宣	法文学部教授
委員	金藤 泰伸	教育学部長
委員	川岡 勉	教育学部教授
委員	真鍋 敬	理学部長
委員	小西 正光	医学部長
委員	清水 顯	工学部長
委員	白石 雅也	農学部長
委員	塩谷 幾雄	事務局長
委員	大和田和平	総務部長
委員	高橋 伸一	経理部長
委員	土居 昌弘	施設部長

〈埋蔵文化財調査室〉

室長	下條 信行	法文学部教授
調査員	田崎 博之	法文学部教授
調査員	吉田 広	法文学部講師
調査員	三吉 秀充	法文学部助手
調査補助	宮崎 直栄	施設部事務補佐員
	上山 喜也	施設部技術補佐員
庶務担当	横本 順子	施設部事務補佐員
整理作業	井出野文江	施設部技術補佐員
	生鷹 千代	施設部技術補佐員
	門田 都	施設部技術補佐員
	松本美和子	施設部技術補佐員
	丸岡美智子	施設部技術補佐員
	村上 洋子	施設部技術補佐員

6次調査は、平成13年11月15日に着手した。調査事務所に発掘機材を搬入するとともに、大型重機を用いて表土剥ぎを開始した。試掘調査で予想

されていた天地返しは調査区全面におよんでいるが、部分的に土壌や柱穴、小穴などの遺構が検出され始める(図版1-2)。11月22日、重機による表土剥ぎ作業を終わり、測量杭の設置を行う。11月27日から、人力で天地返し部分を掘り下げ始める。その一方で、調査区南側の管路部分の調査を先行させた。また、調査区西側の管路部分の表土剥ぎを開始した。基本層序Ⅲ層を検出した後、掘り下げを進め、Ⅳ層上面で小穴などを検出し調査を進める。12月3日以降、天地返し部分を掘り下げ終わった調査区東半部から、遺構検出と遺構検出状況図の作成を開始する。さらに、12月10日からは、作業員を増員し、天地返し部分の掘り下げ作業と併行して遺構の精査を行う(図版4-3)。12月20日、調査区の西半部までの天地返し部分の除去を完了する。12月26日、仕事納めに際して、施設部・農学部の担当者と、これまでの調査経過を踏まえ、今後の調査を進めるにあたっての調査日程・作業員数の調整を打ち合わせた。12月27日～1月6日は年末年始の休業。1月7日に発掘作業を再開し、1月9日には、調査区全面に広がる天地返し部分を完全に掘り終わり、以後、検出遺構の精査と遺構実測を進める。1月30日には、遺構の精査を完了し、完掘状況の調査区の全体写真を撮影する。その後、調査区壁面の土層断面の再確認などの補足的な調査を行い、2月4日、機材を撤収し、現地での発掘調査を完了した。

(田崎)

(2) 7次調査

7次調査の発掘体制は、以下の通りである。

〈埋蔵文化財調査委員会〉

委員長	小松 正幸	副学長
委員	藤川 研策	法文学部長
委員	下條 信行	法文学部教授

委員	松原 弘宣	法文学部教授
委員	金藤 泰伸	教育学部長
委員	川岡 勉	教育学部教授
委員	柳澤 康信	理学部長
委員	小西 正光	医学部長
委員	鈴木 幸一	工学部長
委員	白石 雅也	農学部長
委員	塩谷 幾雄	事務局長
委員	大和田 和平	総務部長
委員	高橋 伸一	経理部長
委員	土居 昌弘	施設部長

〈埋蔵文化財調査室〉

室長	下條 信行	法文学部教授
調査員	田崎 博之	法文学部教授
調査員	吉田 広	法文学部講師 (10/1より助教授)
調査員	三吉 秀充	法文学部助手
調査補助	宮崎 直栄	施設基盤部教務補佐員
	嶋田 史子	施設部技術補佐員
	武田 尊子	施設部技術補佐員
庶務担当	横本 順子	施設基盤部事務補佐員
整理作業	井出野文江	施設部技術補佐員
	生鷹 千代	施設部技術補佐員
	門田 都	施設部技術補佐員
	松本美和子	施設部技術補佐員
	丸岡美智子	施設部技術補佐員
	村上 洋子	施設部技術補佐員

7次調査では、後述するように、分散している工事地点にあわせてⅠ～Ⅴ区の調査区を設定して、平成14年4月3日に発掘調査を開始した。まず、Ⅰ区周辺の植栽を除去するなどの発掘調査にはいるための環境整備を行い、4月5日、Ⅰ区南端から重機を用いて表土剥ぎを開始した。Ⅰ区は総延長48mの調査区で、中央に歩道が横断し大講義棟や自転車置き場への通路とされている。歩道よりも南側を一旦調査し埋め戻した後、北側を調査することとした。4月10日には、Ⅰ区南半部の表土剥ぎを終え、基本層序Ⅲ層の上面を検出した。4月13日、Ⅰ区南半部の調査で人員の余裕ができたため、Ⅲ区の表土剥ぎを人力で行う。Ⅲ区では、給水・排水・ガス管が埋設されており、遺構・遺物は出土しなかった。測量・写真撮影を行い、調査を終える。4月15日には、Ⅱ区の調査を

開始。Ⅰ区では後述する基本層序Ⅲ層の中ほどで検出した遺構の精査と実測を進めた。4月19日、調査区南端部で出土した遺構の精査を始める。4月25日、Ⅰ区南半部で検出した自然流路で土器溜まりを確認し精査を始める。5月7日、Ⅰ区南半部の調査を終え、歩道より北側の調査に着手する。5月17日には、Ⅰ区の調査を終了し、Ⅳ区の調査を開始し、5月20日にはⅤ区の調査も始める。5月23日、すべての調査区で調査を終え、出土遺物や発掘器材などを埋蔵文化財調査室へ搬出し、発掘調査を完了した。(田崎)

(3) 8次調査

8次調査の発掘を実施するに当たっての調査体制は、以下の通りである。

〈埋蔵文化財調査委員会〉

委員長	林 和男	副学長
委員	亀井 崇	副学長
委員	森 孝明	法文学部長
委員	下條 信行	法文学部教授
委員	松原 弘宣	法文学部教授
委員	曲田 清維	教育学部長
委員	川岡 勉	教育学部教授
委員	野倉 嗣紀	理学部長
委員	橋本 公二	医学部長
委員	高松 雄三	工学部長
委員	泉 英二	農学部長
委員	山之内恵一	経理企画部長
委員	八木 修一	財務部長
委員	山地 久司	施設基盤部長

〈埋蔵文化財調査室〉

室長	下條 信行	法文学部教授
調査員	田崎 博之	法文学部教授
調査員	吉田 広	法文学部助教授
調査員	三吉 秀充	法文学部助手
調査補助	宮崎 直栄	施設基盤部教務補佐員
	濱田 美加	施設部技術補佐員
庶務担当	渡邊かおる	施設基盤部事務補佐員
整理作業	井手野文江	施設部技術補佐員
	門田 都	施設部技術補佐員

8次調査では工事地点にあわせて1～5区を設定し、平成18年12月4日に調査に着手した。1・2区では、表土剥ぎを行ったところ、工事範囲が

建物建設時の余掘り範囲に収まることがわかり、余掘り壁面での土層断面の観察とともに、写真撮影・図面作成を行い、埋め戻し作業を行う。平成15年1月15日、調査を再開。3・4区の表土剥ぎを行う。3区で遺構検出作業を進める。3区では表土層の下層でⅡ層が出土し、Ⅱ層の直下ではⅣ層があらわれる。小穴、土塊などが出土した。4区ではⅠ層直下でⅣ層があらわれた。小穴を検出する。1月16日、5区の表土剥ぎを始める。5区は建物余掘りが大部分を占めているが、西端でⅣ層を確認。3区の遺構検出状況を写真撮影した。1月18日、5区の完掘状況の写真撮影を行う。4区の遺構検出作業を進める。1月19日、4区では、遺構の検出作業を行う。3区の遺構埋土メモを作成し、遺構の精査作業に入る。5区の平板測

量を行い、5区の調査を終了。測量用の基準点を3・4区周辺へ移動する。1月22日、3区では遺構の精査を開始する。3区で立柱・杭痕のある小穴・柱穴の土層断面の撮影を行い、土層断面図を作成する。4区では遺構の検出状況を写真撮影し、遺構精査を始める。1月23日、4区の検水槽設置位置を変更することとなり、4区調査区を東側へ1.5m拡張する。重機を用いて表土剥ぎを行う。3区では、調査区壁の土層断面図を作成。1月24日、4区の遺構の検出状況を写真撮影し、遺構の精査を始める。1月25日、4区の遺構を完掘。完掘状況の撮影ならびに図面作成を行うとともに、南壁土層断面図を作成する。1月26日、すべての作業を終え、器材を調査室に搬入して、調査を終了した。(三吉)

3 発掘調査・整理作業・調査報告書刊行

(1) 基本層序及び調査区の設定

樽味団地では、遺跡が営まれた土地環境を把握・理解するために、以下のように樽味団地全域にわたる基本層序を設定している。この基本層序は、平成5年に実施した3次調査時に設定したもので、以後、調査ごとに、この基本層序に準拠して大区分の分層を行い、それを構成する細かな土層ごとに枝番号を付けて特徴や構成を観察し記録化している。

- I層：表土層にあたる瓦礫を含む樽味団地造成土。
- Ⅱ層：団地造成以前の灰色系の近世～近代の水田層。
- Ⅲ層：遺物を包含する黒色～黒褐色系の土層。調査地点によっては上下に二分できる。上部は黒褐色シルト質土で、5mm以下の砂粒が混じり、下部ほど粘性が強く、古代～中世を中心とした遺物を包含する。下部は、より黒みの強い黒色粘土質シルトで、粘性が強く、砂礫も混じらず、土質もしまりが弱い。下部と共通する埋土をもつ遺構には、弥生時代に溯るものがある。

Ⅳ層：黄褐色系のシルト～砂質土層で、下部は小礫が多く混じる。

Ⅴ層：Ⅳ層下の花崗岩を主体とする砂礫ないし礫層。

また、調査地点の配置や規模を勘案しながら、調査区を設定している。6次調査の場合、平面直角座標系第Ⅳ系の $X = 92800$ 、 $Y = -65155$ を基点として、5mごとに東から西へA・B・……・K・L、南から北へ1・2・……・5・6とする5m方眼の調査区を設定した。遺構の位置表示やⅢ層の掘り下げに際する遺物の取り上げなどに利用した。

これに対して、7次調査では、計画された電気・通信・排水の管路を樽味団地の各所に埋設するため、敷設される管路を北からⅠ～Ⅴ区とした。加えて、多くが細長い調査区となっているため、平面直角座標系第Ⅳ系を利用して調査区を、さらに細かく区割りしている。

- Ⅰ区：樽味団地の正門西にある守衛室西側から農学部2号館までをつなぐ電気・通信管路部分。
- Ⅱ区：農学部本館と2号館に囲まれた中庭北西部に埋設される污水管路部分の調査区。
- Ⅲ区：Ⅱ区と同じく、農学部本館と2号館に囲

まれた中庭の南西部に敷設される污水管路部分。

Ⅳ区：三科実験室建物と農学部本館をつなぐ電気・通信管路部分。

Ⅴ区：Ⅳ区西側に位置する污水管路部分。

また、8次調査でも、工事地点が4ヶ所であり、調査順に1～4区とした。

(2) 出土遺構・遺物の記録の方法と保管

埋蔵文化財調査室では、調査回数ごとに出土遺構に、1からの連番の遺構番号を付している。さらにSD：溝、SK：土壙、SP：柱穴・杭穴・小穴、SX：その他の遺構など、遺構の種別を示す略号を遺構番号に冠し、遺構台帳を作成している。これとともに、調査区内のすべての遺構の全体図と、調査区壁の土層断面図を20分の1の縮尺で作成し、主要な遺構については20分の1の縮尺で個別図を作成して記録化している。また、写真記録とともに、埋土の特徴や埋積状況を記録している。

出土した遺物にも、遺構番号と混同しないようにRを冠した連番の遺物登録番号を与えている。また、同じ登録番号をもつ複数の遺物で実測した遺物には、新たに遺物登録番号を付与している。遺物には、遺物登録番号を注記し、遺物台帳を作成する。遺構実測図及び遺物実測図についても、登録番号を付し、台帳を作成して整理し、遺物を収納したコンテナ箱に登録番号を付して、保管・管理している。調査報告書に掲載した遺物については、各報告書の巻末にまとめた遺物観察表に遺物登録番号・コンテナ番号の項を設けて表記し、報告書から遺物の検索ができるようにしている。

撮影した写真類には、35mmデジタルカメラによるデジタル写真、6×7モノクロ・カールスライドによる写真がある。これらの写真にも通しの登録番号を付し、台帳を作成し、検索できるようにしている。

(3) 整理作業と調査報告書の刊行

出土した遺物の洗浄・注記・復元といった整理作業の初期段階は、6次調査分は平成14年度、7次調査分は平成17年度、8次調査分は平成18年度内に終了した。6・7次調査概要を平成16年刊行

の『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2001・2002年度－』、8次調査概要を平成20年刊行の『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2006年度－』に報告するとともに、平成19年度に調査報告書を刊行する計画をたてていた。ところが、平成19年度には文京遺跡32～34次調査、持田団地構内遺跡2次、平成20年度には文京遺跡35～36次調査が実施されることとなり、平成18年度下半期に実施した8次調査を加えて、平成20年度に刊行する計画に変更せざるをえなかった。

さらに加えて、平成21年度には文京遺跡39～43次調査持田団地構内遺跡3次調査、御幸遺跡1次調査と大小の本格調査が続き、それに対応して試掘調査と立会調査も件数も増加した。そのため、整理作業と報告書の原稿執筆作業は、連続する発掘調査の合間を見ながらの作業となり、遅々として進まなかった。とは言え、遺物実測作業を平成19～20年度、遺物写真撮影作業を平成20年度に進め、最終的な報告書の原稿執筆を平成21～22年度に行うことができた。

こうした長期にわたる整理作業と報告書刊行の準備にかかわる埋蔵文化財調査室の平成19年度以降の体制は以下の通りである。

〈平成19年度〉

室長	下條 信行	法文学部教授
調査員	田崎 博之	法文学部教授
調査員	吉田 広	法文学部准教授
調査員	三吉 秀充	法文学部助教
調査・整理補助		
	宮崎 直栄	施設基盤部教務補佐員
	濱田 美加	施設基盤部事務補佐員
庶務	須之内慶子	施設部技術補佐員
整理	井手野文江	施設部技術補佐員
	門田 都	施設部技術補佐員
総務	沖野錬太郎	施設基盤部TL

〈平成20年度〉

室長	田崎 博之	法文学部教授
調査員	吉田 広	法文学部准教授
調査員	三吉 秀充	法文学部助教
調査・整理補助		
	宮崎 直栄	施設基盤部教務補佐員
	濱田 美加	施設基盤部事務補佐員
庶務	須之内慶子	施設部技術補佐員

整理 井手野文江 施設部技術補佐員
 門田 都 施設部技術補佐員
 総務 藤村 宋 施設基盤部TL

〈平成21年度〉

室長 田崎 博之 法文学部教授
 調査員 三吉 秀充 法文学部助教
 調査員 吉田 広 愛媛大学ミュージアム
 准教授（兼任）

調査・整理補助・庶務

宮崎 直栄 施設基盤部教務補佐員
 濱田 美加 施設基盤部事務補佐員

整理 井手野文江 施設部技術補佐員
 門田 都 施設部技術補佐員

総務 藤村 宋 施設基盤部TL

〈平成22年度〉

室長 田崎 博之 法文学部教授
 調査員 三吉 秀充 法文学部助教
 調査員 吉田 広 愛媛大学ミュージアム
 准教授（兼任）

調査・整理補助・庶務

宮崎 直栄 施設基盤部教務補佐員
 田中いづみ 施設基盤部研究補助員

整理 井手野文江 施設部技術補佐員
 門田 都 施設部技術補佐員
 （4月まで）

坂本あずさ 施設部技術補佐員
 （5月から）

総務 大西 洋之 施設基盤部TL

（田崎）

I 位置と環境

樽味遺跡は松山市樽味町3丁目5番の愛媛大学農学部構内に所在する。松山市の位置する道後平野は、四国北西部の高縄半島の南西基部に開けた重信川が、石手川・小野川・砥部川などが造る平野で、平野北東部を流れる石手川は幅5km、奥行き4kmほどの扇状地面を形成している。この扇状地は、山麓近くの正円寺・畑寺にかけての古期扇状地面、道後・中村・一番町の現世の扇状地である新期扇状地面、そして石手川南岸東側に広がる古期扇状地面と新期扇状地面との間の段丘化した低位段丘面に区分される（鹿島・高橋1980）。

こうした地形区分の中で、樽味遺跡は石手川南岸の低位段丘面上に立地する。樽味遺跡1次調査では、約2.2～2.5万年前に降下した始良Tn火山灰（AT火山灰）が、ポケット状の窪みに堆積し（平井1989）、樽味四反地遺跡5次調査では成層堆積

と考えられる堆積が確認され、石手川南岸の低位段丘面はAT火山灰降下・堆積期には段丘化し、石手川本流は扇状地北部を通り堀江低地へと流れていたと推測されている。そのため、樽味遺跡が位置する石手川南岸は、更新世末期から完新世には比較的安定した土地環境にあったと考えられている（平井幸弘1991）。

道後平野では、旧石器時代の明確な遺構は確認されておらず、樽味地区では樽味四反地遺跡6次調査でナイフ形石器が出土しているにとどまっている。つづく縄文時代草創期～後期の遺跡も発見例は少なく、樽味地区では、東本遺跡4次調査で鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）の下位から早期の槍先形石器、スクレイパーが出土しているのみである。

縄文時代晩期以降、少ないながらも、遺構が確

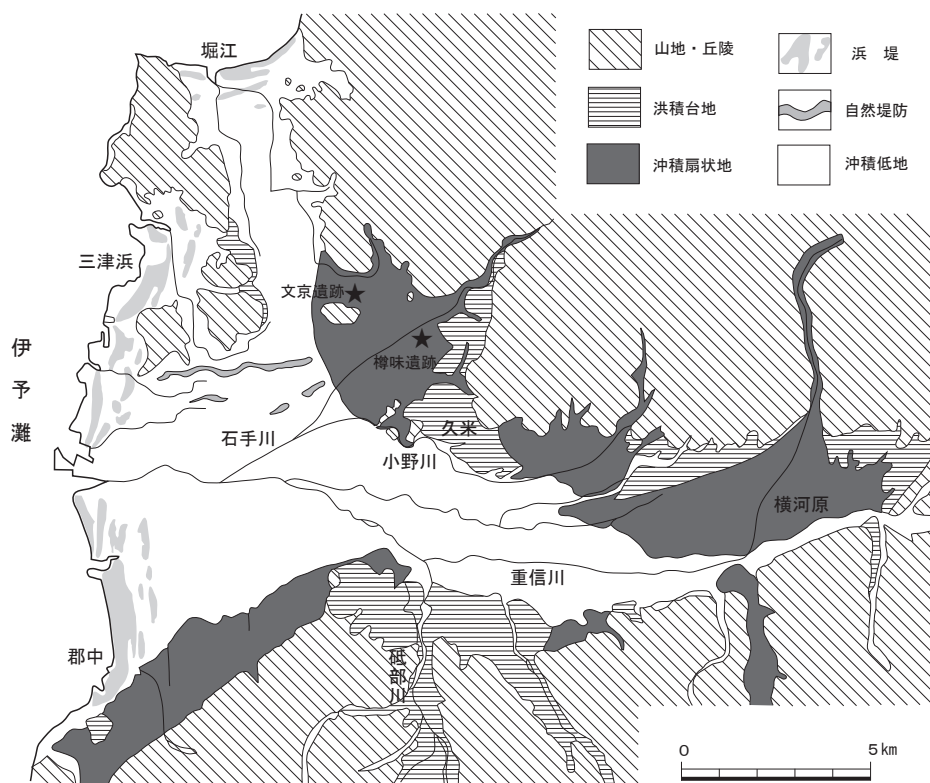
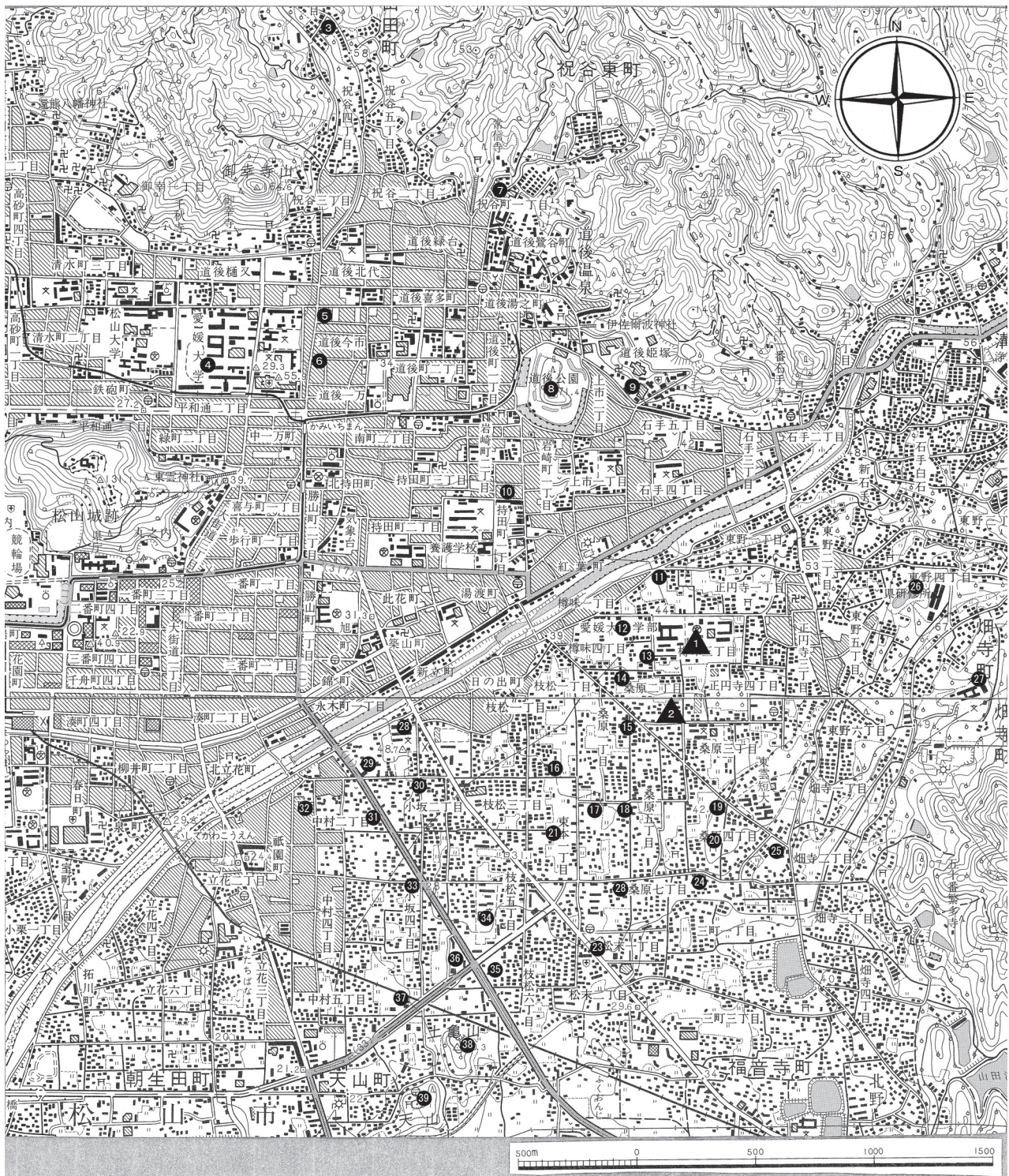


図1 道後平野の地形概要と樽味遺跡の位置（平井1989より作成）



- 1 樟味遺跡 2 桑原西稲葉遺跡 3 祝谷六丁場遺跡 4 文京遺跡 5 (伝) 樋又銅剣出土地 6 道後今市銅剣出土地 7 土居の段遺跡・湯ノ町廃寺遺跡 8 湯築城跡・道後公園山麓遺跡 9 義安寺遺跡・内代廃寺跡 10 岩崎遺跡 11 樟味立添遺跡 12 樟味高木遺跡 13 樟味四反地遺跡 14 桑原西稲葉遺跡 1・2次 15 桑原高井遺跡 16 枝松遺跡1~4次 17 桑原稲葉遺跡 18 桑原小石原遺跡 19 桑原本郷遺跡 20 經石山古墳 21 枝松遺跡5次 22 東本遺跡1~4次 23 松末遺跡 24 桑原遺跡 25 三島神社神社古墳 26 東野遺跡・東野お茶屋台古墳群 27 畑寺竹ヶ谷古墳群 28 素鷲小学校校内遺跡 29 中村松田遺跡・中村長正寺遺跡 30 七ノ坪遺跡 31 中村経田遺跡 32 素鷲神社遺跡 33 釜ノ口遺跡2~8次 34 拓南中学校遺跡 35 福音寺竹ノ下遺跡 36 榎田遺跡 37 西山遺跡 38 土壘山弥生墳墓群 39 天山古墳・天山北遺跡

図2 松山平野北東部周辺主要遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)

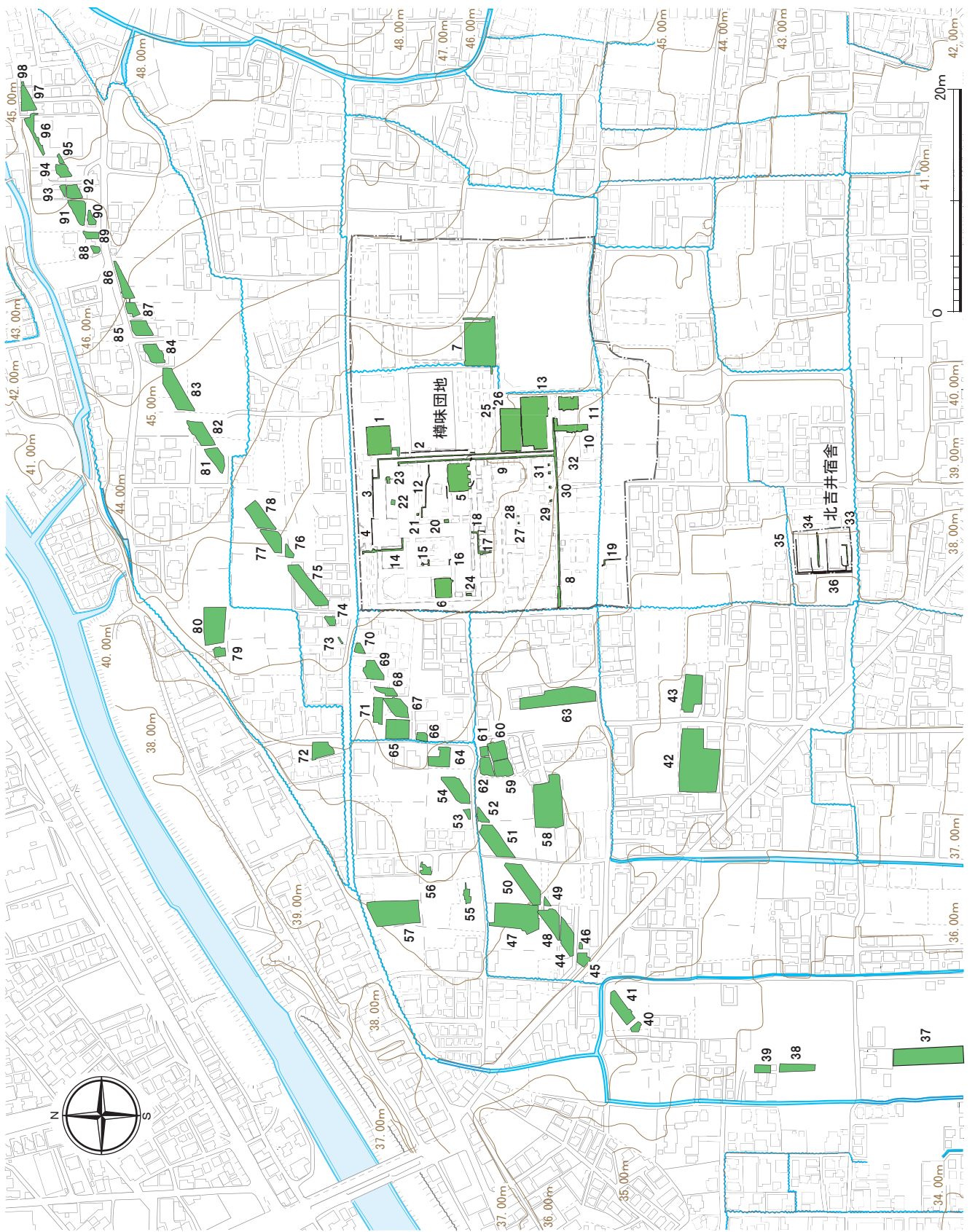


図3 梅味遺跡周辺の発掘調査地点 (縮尺 1/5,000)

図3 調査地点一覧

1：樽味遺跡1次調査Ⅰ区，2：樽味遺跡1次調査Ⅱ区，3：樽味遺跡1次調査Ⅲ区，4：樽味遺跡1次調査4区，5：樽味遺跡2次調査，6：樽味遺跡3次調査，7：樽味遺跡4次調査，8：樽味遺跡5次調査Ⅰ区，9：樽味遺跡5次調査Ⅱ区，10：樽味遺跡5次調査Ⅲ区，11：樽味遺跡5次調査Ⅳ区，12：樽味遺跡5次調査Ⅴ区，13：樽味遺跡6次調査，14：樽味遺跡7次調査Ⅰ区，15：樽味遺跡7次調査Ⅱ区，16：樽味遺跡7次調査Ⅲ区，17：樽味遺跡7次調査Ⅳ区，18：樽味遺跡7次調査Ⅴ区，19：樽味遺跡7次調査Ⅵ区，20：樽味遺跡8次調査Ⅰ区，21：樽味遺跡8次調査Ⅱ区，22：樽味遺跡8次調査Ⅲ区，23：樽味遺跡8次調査Ⅳ区，24：樽味遺跡8次調査Ⅴ区，25：樽味遺跡9次調査，26：樽味遺跡10次調査Ⅰ区，27：樽味遺跡10次調査Ⅱ区，28：樽味遺跡10次調査Ⅲ区，29：樽味遺跡11次調査Ⅰ区，30：樽味遺跡11次調査Ⅱ区，31：樽味遺跡11次調査Ⅲ区，32：樽味遺跡11次調査Ⅳ区，33：桑原西稲葉遺跡3次調査Ⅰ区，34：桑原西稲葉遺跡3次調査Ⅱ区，35：桑原西稲葉遺跡4次調査，36：桑原西稲葉遺跡5次調査，37：東本遺跡4次調査，38：枝松遺跡4次調査南区，39：枝松遺跡4次調査北区，40：枝松遺跡6次調査Ⅱ区，41：枝松遺跡6次調査Ⅰ区，42：桑原西稲葉遺跡1次調査，43：桑原西稲葉遺跡2次調査，44：樽味四反地遺跡9次調査Ⅰ区，45：樽味四反地遺跡9次調査Ⅱ区，46：樽味四反地遺跡11次調査，47：樽味四反地遺跡6次調査，48：樽味四反地遺跡8次調査Ⅰ区，49：樽味四反地遺跡8次調査ⅡA区，50：樽味四反地遺跡8次調査ⅡB区，51：樽味四反地遺跡7次調査Ⅱ・Ⅲ区，52：樽味四反地遺跡7次調査Ⅰ区，53：樽味高木遺跡7次調査Ⅰ区，54：樽味高木遺跡7次調査Ⅱ区，55：樽味高木遺跡2次調査B区，56：樽味高木遺跡2次調査A区，57：樽味高木遺跡6次調査，58：樽味四反地遺跡5次調査，59：樽味四反地遺跡2次調査，60：樽味四反地遺跡3次調査1992年度調査区，61：樽味四反地遺跡3次調査1993年度調査区，62：樽味四反地遺跡4次調査，63：樽味四反地遺跡1次調査，64：樽味高木遺跡1次調査，65：樽味高木遺跡5次調査，66：樽味高木遺跡9次調査Ⅱ区，67：樽味高木遺跡9次調査Ⅰ区，68：樽味高木遺跡9次調査Ⅵ区，69：樽味高木遺跡9次調査Ⅳ・Ⅴ区，70：樽味高木遺跡9次調査Ⅲ区，71：樽味高木遺跡3次調査，72：樽味高木遺跡4次調査，73：樽味高木遺跡11次調査Ⅲ区，74：樽味高木遺跡11次調査Ⅱ区，75：樽味高木遺跡11次調査Ⅰ区，76：樽味高木遺跡8次調査Ⅰ区，77：樽味高木遺跡8次調査Ⅱ区，78：樽味高木遺跡8次調査Ⅲ区，79：樽味立添遺跡2次調査，80：樽味立添遺跡1次調査，81：樽味立添遺跡3次調査Ⅲ区，82：樽味立添遺跡3次調査Ⅱ区，83：樽味立添遺跡3次調査Ⅰ区，84：東野森ノ木遺跡1次調査Ⅲ区，85：東野森ノ木遺跡1次調査Ⅱ区，86：東野森ノ木遺跡1次調査Ⅰ区，87：東野森ノ木遺跡3次調査，88：東野森ノ木遺跡2次調査Ⅰ区，89：東野森ノ木遺跡2次調査Ⅱ区，90：東野森ノ木遺跡2次調査Ⅲ・Ⅳ区，91：東野森ノ木遺跡2次調査Ⅴ区，92：東野森ノ木遺跡4次調査Ⅵ区，93：東野森ノ木遺跡4次調査Ⅴ区，94：東野森ノ木遺跡4次調査Ⅳ区，95：東野森ノ木遺跡4次調査Ⅳ区東拡張，96：東野森ノ木遺跡4次調査Ⅲ区，97：東野森ノ木遺跡4次調査Ⅱ区，98：東野森ノ木遺跡4次調査Ⅰ区

認されている。樽味立添遺跡3次調査Ⅰ区では、縄文晩期前半の土壌，東野森ノ木2・4次調査でも土壌が調査され，樽味立添遺跡や樽味四反地遺跡6次調査では縄文時代晩期～刻目凸帯文土器が出土している。

その後，弥生時代になると，樽味地区を含めて，道後平野内で次第に遺跡数が増加し始める。樽味地区では，弥生時代前期，樽味遺跡1次調査で溝や土壌，樽味四反地遺跡7次調査Ⅱ・Ⅲ区や19次調査で溝が確認され，樽味高木遺跡，樽味四反地16次調査や桑原田中遺跡2次調査では弥生時代前期の土器が出土している。また，樽味四反地遺跡17次調査では弥生前期末～中期初頭の土壌，樽味立添遺跡3次調査Ⅰ区では弥生時代中期初頭

の溝が調査されている。

弥生時代中期後葉～後期になると，遺跡が一気に増加する。遺構が確認された代表的な地点に限ってみても，弥生時代中期後葉～後期前葉には，樽味四反地遺跡5次調査で竪穴式住居跡，樽味四反地遺跡7次調査Ⅱ・Ⅲ区や20次調査2区で土壌，同8次調査Ⅰ区や18次調査2区で溝，同14次調査で土壌，同17次調査では竪穴式住居跡と土壌が出土している。また，樽味高木遺跡7次調査Ⅱ区，8次調査Ⅱ区では大型円形の竪穴式住居跡，同9次調査Ⅰ・Ⅵ区では土壌と掘立柱建物，樽味立添遺跡3次調査Ⅱ区では竪穴式住居跡や掘立柱建物，土壌，東野森ノ木遺跡2次調査Ⅲ・Ⅳ区では土壌，同Ⅴ区では竪穴式住居跡，東野森ノ

木遺跡4次調査V区では土壌が調査されている。さらに、樽味四反地遺跡16次調査で弥生時代中期～後期の住居跡、土壌、井戸が確認されている。

弥生時代後期中葉～後葉には、樽味四反地遺跡5次調査と9次調査I区で竪穴式住居跡、同17次調査で土壌、樽味高木遺跡9次調査IV・V・VI区と8次調査II区で竪穴式住居跡、樽味高木遺跡11次調査I・II区で竪穴式住居跡と土壌、樽味立添遺跡3次調査I・II・III区でも竪穴式住居跡、東野森ノ木遺跡1次調査I・II区で竪穴式住居跡や土壌、同III区では大型円形住居を含む竪穴式住居跡や小型の掘立柱建物、柵列、土壌、東野森ノ木遺跡2次調査V区では土壌、同4次調査IV区東拡張では多角形住居跡が出土している。また、注目される遺物には、樽味高木遺跡3次調査の船舶を描く線刻絵画土器がある。

弥生時代終末期には、樽味四反地遺跡8次調査II B区では大型方形土壌と柱穴、同9次調査I・II区では竪穴式住居跡、同19次調査では掘立柱建物や土壌、樽味高木遺跡8次調査III区や11次調査I区では竪穴式住居跡と溝が調査され、14次調査では竪穴式住居跡からガラス小玉や鉄滓が出土している。また、樽味立添遺跡3次調査II区で竪穴式住居跡や土壌、同4次調査でも竪穴式住居跡、東野森ノ木遺跡1次調査I区では竪穴式住居跡、同2次調査II区では土壌、同4次調査IV区東拡張では大型円形の竪穴式住居跡が調査されている。

その後、古墳時代前期初頭と考えられる樽味四反地遺跡6・13・18次調査では3棟の大型建物が発見されている。しかし、同時期の古墳時代前期初頭の遺構は、樽味四反地遺跡18次調査2区で竪穴式住居、樽味四反地遺跡20次調査2区で弥生後期末～古墳前期初頭の竪穴式住居跡と土壌があるだけである。樽味地区では古墳時代前期を通じて遺跡数はそれほど多くなく、樽味四反地遺跡5次調査と同16次調査の竪穴式住居跡、樽味四反地遺跡20次調査1・2区の土壌、東野森ノ木遺跡3次調査の土壌が報告されているにとどまる。

古墳時代中期～後期には遺跡数は再び増加する。樽味地区南西部の樽味四反地遺跡や樽味高木遺跡で竪穴式住居跡を含む集落域の調査が進んでいる。古墳時代中期には、樽味四反地遺跡5次調査では竪穴式住居跡、同7次調査I・II・III区や

9次調査I区では竪穴式住居跡と土壌、同8次調査II B区では竪穴式住居跡と柵列、樽味四反地遺跡17次調査では竪穴式住居跡と土壌、同18次調査1区では土壌や柱穴、同18次調査2区では竪穴式住居跡や柱穴、同19次調査では竪穴式住居跡や掘立柱建物、同20次調査1・2区では竪穴式住居跡と土壌、樽味高木遺跡7次調査II区や8次調査I・II区、9次調査III区、11次調査I区では竪穴式住居跡が調査されている。さらに、樽味四反地遺跡や樽味高木遺跡では、縄蓆文や格子目タタキを施した韓国系軟質土器が出土し注目される。また、古墳時代中期末～後期初頭にも、樽味四反地遺跡8次調査I・II A・II B区や19次調査で住居跡と掘立柱建物、樽味高木遺跡7・8次調査II区で竪穴式住居跡が確認されている。

つづく古墳時代後期には、樽味四反地遺跡5次調査、7次調査I・II・III区、9次調査I区、11次調査、14次調査、15次調査、16次調査、18次調査2区、19次調査、20次調査1区、樽味高木遺跡7次調査II区、樽味高木遺跡9次調査I・III・IV・V・VI区、11次調査I・II区、8次調査II・III区、樽味立添遺跡4次調査では、竪穴式住居跡、土壌、溝、掘立柱建物などが調査され、樽味四反地遺跡17・19・20次調査や樽味高木遺跡11次調査I区では、古墳時代後期末～7世紀の竪穴式住居跡や掘立柱建物、土壌、焼土集積が出土している。

さて、樽味地区周辺では、古代の遺構の発見例は少ない。樽味遺跡4・5次調査で8世紀以降の自然流路、溝、土壌、柱穴、樽味四反地遺跡5次調査で7世紀後半～8世紀の掘立柱建物と自然流路、同跡14次調査で溝、樽味高木遺跡8次調査III区で8世紀前半の掘立柱建物と石組み遺構が調査されている。その中で、樽味四反地遺跡5次調査では円面硯や奈良三彩が出土している。また、樽味立添遺跡4次調査では10世紀代の自然流路、樽味四反地遺跡8次調査I区では10～11世紀の土壌、東野森ノ木遺跡1次調査II区では11世紀後半の大型土壌が出土している。

一方、古代でも後半期の11世紀から中世の遺構は、樽味地区の各所で発見されている。樽味遺跡7次調査では古代後半～中世前半に埋没する自然流路が確認され、樽味四反地遺跡15次調査では11



図4 梅味遺跡調査地点位置及び6～8次調査区位置 (縮尺 1/2,000)

世紀後半～12世紀の溝，東野森ノ木遺跡1次調査 I 区では12世紀後半以降の溝，樽味四反地遺跡20次調査1区で土壌をあげることができる。さらに，13世紀～15世紀には，樽味遺跡1次調査地点でL字状の溝，同2次調査で掘立柱建物群を溝や柵列で囲む方形区画が確認され，樽味四反地遺跡8次調査II B区では土壌，樽味高木遺跡9次調査IV・V区で土壌，東野森ノ木遺跡1次調査I区で溝や土壌，東野森ノ木遺跡4次調査VI区で14世紀

の土壌，柱穴，樽味四反地遺跡15次調査で13世紀の土壌や柱穴，樽味四反地遺跡19次調査で13世紀後半の土壌（地鎮関連遺構）や14世紀以降の土壌，同20次調査2区で14～15世紀の土壌や柱穴，樽味四反地遺跡20次調査1区では土壌が出土している。こうした11世紀～16世紀の集落遺跡の展開は，古代後半～中世の樽味地区周辺における土地開発の状況を物語る資料である。（田崎）

表1 樽味遺跡における調査概要一覧表

調査番号	遺跡名	調査の種別	担当者	該当工事名	該当工事名	文献
						(愛大埋文報告)
98604	樽味	試掘	下條信行	連合農学研究科校舎新営計画	5	愛大埋文報V
98702		1次事前試掘	下條信行	連合農学研究科校舎新営計画	18	愛大埋文報V
98703		試掘	下條信行	附属農業高校課外活動施設新営計画	6	愛大埋文報V
98704	樽味1次	本格	宮本一夫	連合農学研究科校舎新営工事	684	愛大埋文報I
99101	樽味2次	本格	田崎博之	農学部研究実験棟新営工事	506	愛大埋文報IV
99201		立会	田崎博之	農学部屋外ガス本管改修工事	6	愛大埋文報V
99203		3次事前試掘	田崎博之	附属図書館農学部分館新営工事に伴う電気工事計画	1	愛大埋文報V
99206		立会	田崎博之	農学部拓翠寮他自転車置場新設工事(その1)	3	愛大埋文報V
99207		立会	田崎博之	農学部拓翠寮他自転車置場新設工事(その2)	2	愛大埋文報V
99214		立会	田崎博之	樽味団地自転車置場取設その他工事	3.3	愛大埋文報V
99302		立会	田崎博之	附属図書館農学部分館新営(樹木移植)工事	14	愛大埋文報V
99303		試掘	田崎博之	農学部自転車置取設計画	80.8	愛大埋文報V
99304	樽味3次	本格	田崎博之	附属図書館農学部分館新営工事	258.5	愛大埋文報VI
99306		試掘	田崎博之	附属図書館農学部分館新営(外灯設備管路)計画	3	愛大埋文報V
99307		立会	田崎博之	城北団地他情報通信電気設備工事(その1)	7	愛大埋文報V
99311		立会	田崎博之	農学部附属図書館新営(配水管理設)工事	19.8	愛大埋文報V
99312		立会	田崎博之	農学部自転車置場排水管路工事	29.7	愛大埋文報V
99403		試掘	田崎博之	樽味団地環境整備(附属農業高等学校他自転車置場取設)計画	7.8	愛大埋文報V
99507		立会	田崎博之	公共下水道柵取設工事	2	愛大埋文報VII
99603		4次事前試掘	田崎博之	附属農業高等学校校舎新営計画	21.7	愛大埋文報VII
99604		6次事前試掘	田崎博之	附属農業高等学校温室新営計画	5.1	愛大埋文報VII
99605		試掘	田崎博之	農学部構内光ケーブル敷設計画	1	愛大埋文報VII
99703		本格	田崎博之	A T M - L A N 整備工事	131	愛大埋文報VII
99707		試掘	吉田 広	樽味団地(附農高)校舎新営計画	12.2	愛大埋文報VII

調査番号	遺跡名	調査の種別	担当者	該当工事名	該当工事名	文 献
						(愛大埋文報告)
99708		立会	吉田 広	樽味団地排水工事	2.4	愛大埋文報Ⅶ
99712	樽味4次	本格	吉田 広	農学部附属農業高等学校校舎新営工事	1168	愛大埋文報Ⅶ
99713		試掘	吉田 広	附属農業高運動場東側防護ネット及び第3棟東側フェンス増設計画	6.1	愛大埋文報Ⅶ
99714		立会	吉田 広	附属農高校舎埋蔵文化財調査に伴う支障建物（農機舎及び車庫）整備工事	186.5	愛大埋文報Ⅶ
99716		立会	吉田 広	附属農高運動場東側防護ネット及び第3棟東側フェンス増設工事	21.2	愛大埋文報Ⅶ
99804		5次事前試掘	吉田 広	遺伝子実験施設新営その他工事計画	21.8	愛大埋文報Ⅶ
99807	樽味5次	本格	吉田 広	遺伝子実験施設新営その他工事	979	愛大埋文報Ⅶ
99903		立会	吉田 広	農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事（1期）	1.4	愛大埋文報Ⅹ
99904		立会	吉田 広	農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事（2期）	25	愛大埋文報Ⅹ
99905		立会	吉田 広	農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事（3期）	31	愛大埋文報Ⅹ
99906		立会	吉田 広	農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事（4期）	2.5	愛大埋文報Ⅹ
99913		確認	田崎博之	農学部生態観察実験のための水田設置工事	1	愛大埋文報Ⅹ
99916		立会	吉田 広	農学部附属農業高等学校校舎新営工事	-	愛大埋文報Ⅹ
00102		6次事前試掘	吉田 広	農学部寄附建物新営計画	16	愛大埋文報ⅩⅠ
00106	樽味6次	本格	田崎博之	農学部寄附建物新営工事	1205	本書
00201	樽味7次	本格	田崎博之	農学部2号館改修工事	170	本書
00402		立会	吉田 広・三吉秀充	避難標識整備事業関連工事	2.6	愛大埋文報ⅩⅤ
00509		立会	吉田 広	農学部附属農業高校暖房蒸気漏修理工事	7.8	愛大埋文報ⅩⅦ
00602		立会	田崎博之	農学部上水道水漏れ修繕工事	0.5	愛大埋文報ⅩⅧ
00603		立会	田崎博之・三吉秀充	農学部敷地内の電柱建て替え工事	0.7	愛大埋文報ⅩⅧ
00608	樽味8次	本格	田崎博之・三吉秀充	(樽味)総合研究棟改修工事	42	本書
00609		立会	吉田 広	農学部附属農業高校ボイラー室新設工事	2.9	愛大埋文報ⅩⅧ
00614		立会	吉田 広	樽味団地総合研究棟改修機械設備工事	21.6	愛大埋文報ⅩⅧ
00713		試掘	田崎博之	農学部制御化農業実験実習棟外上水道引込工事	0.6	愛大埋文報ⅩⅨ
00714		立会	田崎博之	育成ハウス設置工事	2.1	愛大埋文報ⅩⅨ
00906		立会	田崎博之	市道桑原82号線道路改良工事に伴う上水道引込管・電柱・ガス管移設工事	4.6	愛大埋文報ⅩⅩⅡ
00909		試掘	田崎博之	愛媛大学(樽味)植物工場他新営工事	49.7	愛大埋文報ⅩⅩⅡ
01001	樽味9次	本格	三吉秀充	愛媛大学附属高校畜舎新築工事	8.2	愛大埋文報ⅩⅩⅢ
01002	樽味10次	本格	三吉秀充	愛媛大学(樽味)植物工場新営その他工事	652.8	愛大埋文報ⅩⅩⅢ
01004	樽味11次	本格	三吉秀充	植物工場環境制御システム一式の据付調整工事	8.43	愛大埋文報ⅩⅩⅢ

II 樽味遺跡6次調査の記録

1 層序と遺構・遺物の概要

調査番号 00106
 調査面積 1,205㎡
 調査期間 2001年11月15日～2002年2月4日
 調査原因 環境産業研究施設新営工事
 調査担当 田崎博之
 調査補助 宮崎直栄

(1) 層序

6次調査区は、樽味団地のほぼ中央部に位置する(図4, 図版1)。表土の造成土層である基本層序Ⅰ層、灰色系の近世～近代の水田層のⅡ層を除去すると、西側管路部分のK-4区を除いて、基本層序Ⅲ層はみられず、黄褐色系のシルト～砂質土層のⅣ層をベースとして調査区の全面に天地返しがおよんでいた(図版4-1・2)。また、調査区でも西半部のⅣ層が黄褐色シルトであるのに対して、東半部では砂礫が多く混じる黄褐色砂質シルトに変化する。既往の調査では、砂礫が多く混じる黄褐色砂質シルト層は、Ⅳ層中でも黄褐色シルト層下に堆積する土層である。Ⅲ層が調査区内でまったく残存していないこともあわせ、調査区東半部を中心としてⅢ層及びⅣ層最上部が削平されているものと判断した。

(2) 出土遺構と遺物の概要

6次調査では、掘立柱建物1棟、土壇19基、溝1条、柱穴もしくは小穴61の遺構が出土した(図

5, 表2, 図版2・3)。調査にあたり、土壇・掘立柱建物・溝には1～18, 柱穴と小穴には21～91の遺構番号を与えている。ただし、32・38・40・41号遺構は、当初柱穴もしくは小穴として遺構番号を付したが、調査後に土壇と判断した。掘立柱建物は複数の柱穴から構成される。これらについても個々に遺構番号を与えている。そのために、1棟の竪穴式住居跡が複数の登録番号をもつ遺構から構成されていることとなっている。また、11・19・20・73号遺構は、遺構検出時に小穴もしくは柱穴と判断したが、調査の結果攪乱部分の掘り残しを誤認したもので、欠番とした。

発掘面積に比べて、出土した遺構数は少なく、分布も調査区西半部に偏っている。前述したように、調査区東半部を中心として削平されているためと考えられる。

こうした遺構の埋土は、A～Cに分類できる。

埋土A：黒褐色粘質土もしくは黒褐色シルト質土(クロボク土)を埋土とする遺構。出土遺構の中でもっとも多く、SB-17, SK-1～5・8～10・12～16・18・32・38・40・41, SD-6, SP-21～24・26・29・31・34～37・39・42・45～47・49・55・61・63～72・74～77・79・81～83・85～89がある。

埋土B：褐色シルト質土を埋土とする遺構で、SK-7, SP-25・33・50～52・54・56

表2 6次調査出土遺構一覧表

遺構の種類	出土遺構数	遺構名
掘立柱建物(SB)	1	SB-17
土壇(SK)	19	SK-1～5・7～10・12～16・18・32・38・40・41
溝(SD)	1	SD-6
柱穴もしくは小穴(SP)	61	SP-21～26・28・29・31・33～37・39・42・45～47・49・50～72・74～91

～60・84・91がある。

埋土C：その他の埋土をもつ遺構で、SP-28・53・62がある。SP-62は黄褐色シルトの中に黒褐色シルト質土が混じる。SP-28・53は、Ⅱ層の灰色シルト質土が混じる褐色シルト質土が混じり、天地返しの掘り残し部分である可能性が高い。

埋土Aの遺構の中で、黒褐色粘質土を埋土とする遺構はSP-21・23で、Ⅲ層が残存していたK-4区の西側管路部分で出土している。SK-8・13やSP-79・86は、黒色粘質シルト質土（クロボク土）を主体とする。SB-17を構成する各柱穴や、SK-1・2・4・10・12・18・32・38・40、SP-29・31・35・36・39・42・45～47・49・55・61・65・67・68・70～72・74～77・82は、黄褐色

色のシルトや砂質シルトの土塊が混じる。SK-41やSP-63の埋土には黒褐色シルト質土（クロボク土）の小塊が混じる。SP-81～83・85では砂礫が目立って含まれる。また、SK-2・9・12、SD-6には、部分的に埋土Bの褐色シルト質土がみられる。

埋土Bの遺構では、SP-51・58には黄褐色シルトの小塊、SP-59・60では黒褐色シルト質土（クロボク土）塊が混じる。SP-54・56はやや灰色みをおびるシルト質土が混じる。SP-91は暗褐色砂質土で、褐色シルト質土塊が混じる。

遺構埋土は以上の分類ができるが、埋土A・Bの埋土をもつ遺構からは、量は少ないが、古代後半～中世前期の遺物が出土している。当該期の遺構である。（田崎）

2 出土遺構と遺物の記録

(1) 掘立柱建物（遺構略号：SB）

掘立柱建物はSB-17の1棟が出土している。

SB-17（図6、図版5-1～4）

調査区西半部のI・J-2・3区に位置する。西側の桁行中央の柱穴を欠くが、SP-27・30・43・44・48から構成される梁間1間、桁行2間の掘立柱建物である。主軸はほぼ真北方向。梁間長は、南側のSP-24・43間が2.49mであるのに対して、北側のSP-30・48間が2.36mと若干狭い。桁行長は、東西ともに4.54mを測る。

柱穴であるSP-27は、直径35～38cm、深さ22cmを測る不整な長円形の掘り形をもつ。埋土は黒褐色シルト質土で、径3～5cmの黄褐色シルト塊が多く混じる。立柱痕跡は確認できなかった。埋土中から、土師器の坏もしくは皿の胴部片が出土したが、小片であるため、図化できなかった。

SP-30は、直径32～36cm、深さ26cmを測る不整な長円形の掘り形をもつ。南東側に偏って径18×20cmの立柱痕跡を確認できた（図版5-2）。立柱痕跡である①層は、黒褐色シルト質土に親指先大の黄褐色シルト塊が点々と混じる。②・③層は掘

り形埋土。下半部に、黒褐色シルト質土と黄褐色シルトを厚さ3～4cmごとに縞状に詰め込み（③層）、柱を固定した上で、上半部に親指先大の黄褐色シルト塊がごく少量混じる黒褐色シルト質土（②層）を詰め込んでいる。SP-30の埋土中からは、土師器の細片が3点出土したが、いずれも図化できなかった。

SP-43は、径32～34cm、深さ32cmを測る。不整円形の掘り形で、北西よりで直径12cm前後の立柱痕跡を確認できた（図版5-3）。立柱痕跡である①層は、黒褐色シルト質土に小指先大の黄褐色シルト塊が点々と混じる。②・③層は掘り形埋土。下部に、親指先大の不整形な黄褐色シルト塊が混じる黒褐色シルト質土（③層）を入れながら柱をたて、最後に親指先大の黒褐色シルト質土塊が混じる黄褐色シルト（②層）を詰める。SP-43では、立柱痕跡である①層から土師器の細片が3点出土したが、小片のため図化できなかった。

SP-44は、長径41cm、短径30cm、深さ30cmの楕円形の掘り形をもつが、立柱痕跡は確認できなかった。埋土は黒褐色シルト質土で、小指先大の黄褐色シ

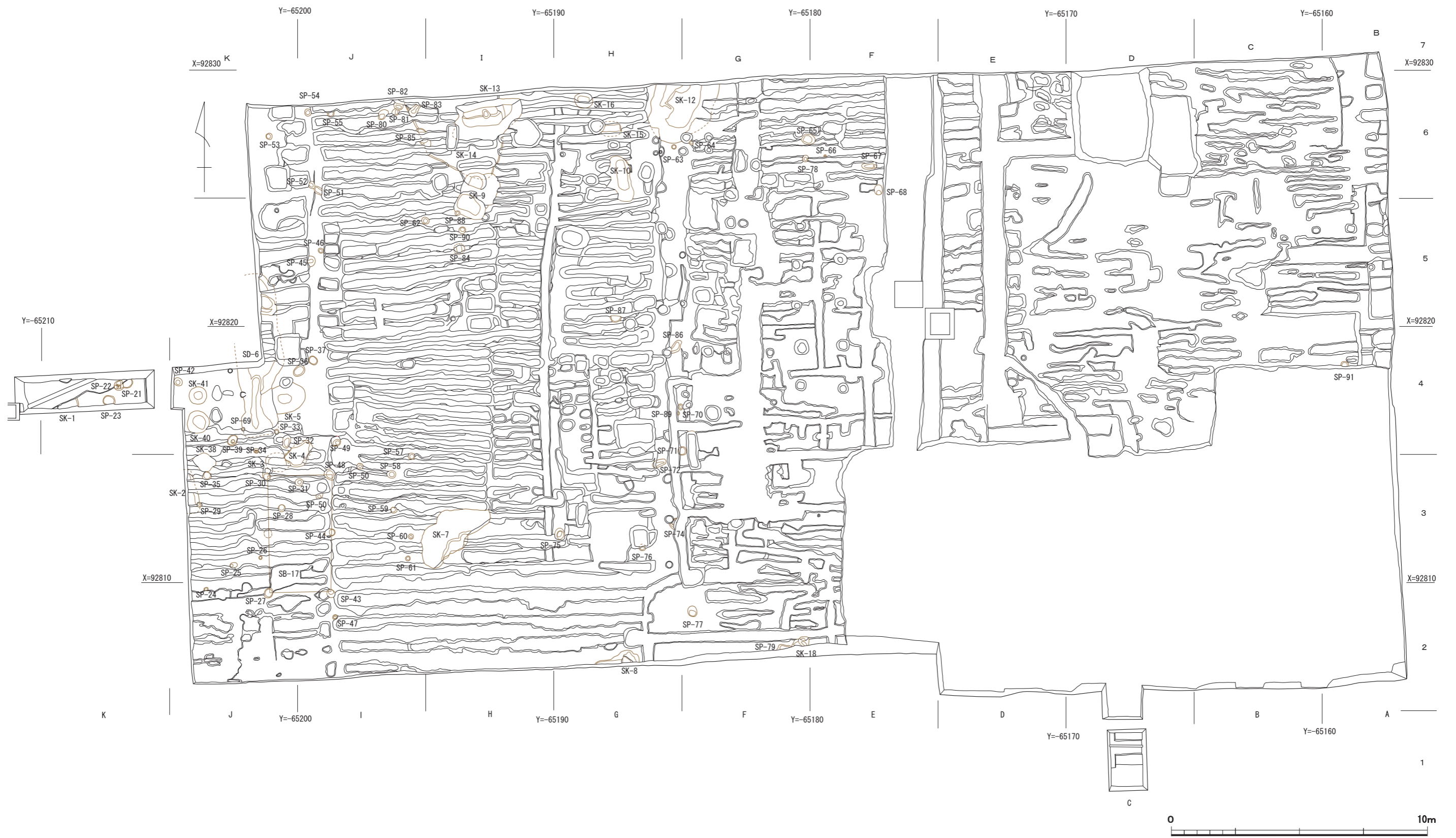


図5 6次調査全体図 (縮尺 1/150)

ルト塊が少量混じる。

SP-48は、長径47cm、短径37cm、深さ42cmの楕円形の掘り形をもち、西側に偏った位置で、直径12~13cmの立柱痕跡を確認できた(図版5-4)。立柱痕跡である①層は、黒褐色シルト質土で、小指先大の黄褐色シルト塊がごく少量混じる。掘り形埋土である②層は、黒褐色シルト質土で、中位~下部に縞状に薄い黄褐色シルト層がみられる。SP-48の掘り形埋土の②層から、土師器坏、古墳時代後期の土師器の胴部細片が出土しているが、図化できた遺物は土師器坏1点だけである(図7)。ほぼ直線的にのびる胴部を持ち、内外面ともに横ナデ調整で仕上げる。胎土には粗砂を多く含み、淡い暗灰黄色を呈し、その上に赤色粘土を化粧がけする。古代後半に比定できる。

以上、SB-77を構成する柱穴は、いずれも黒褐色粘質土もしくは黒褐色シルト質土を埋土とし、柱穴SP-47からは10世紀~11世紀前半の土師器坏が出土している。SB-77は10世紀~11世紀前半の時間幅に収まる掘立柱建物と考える。

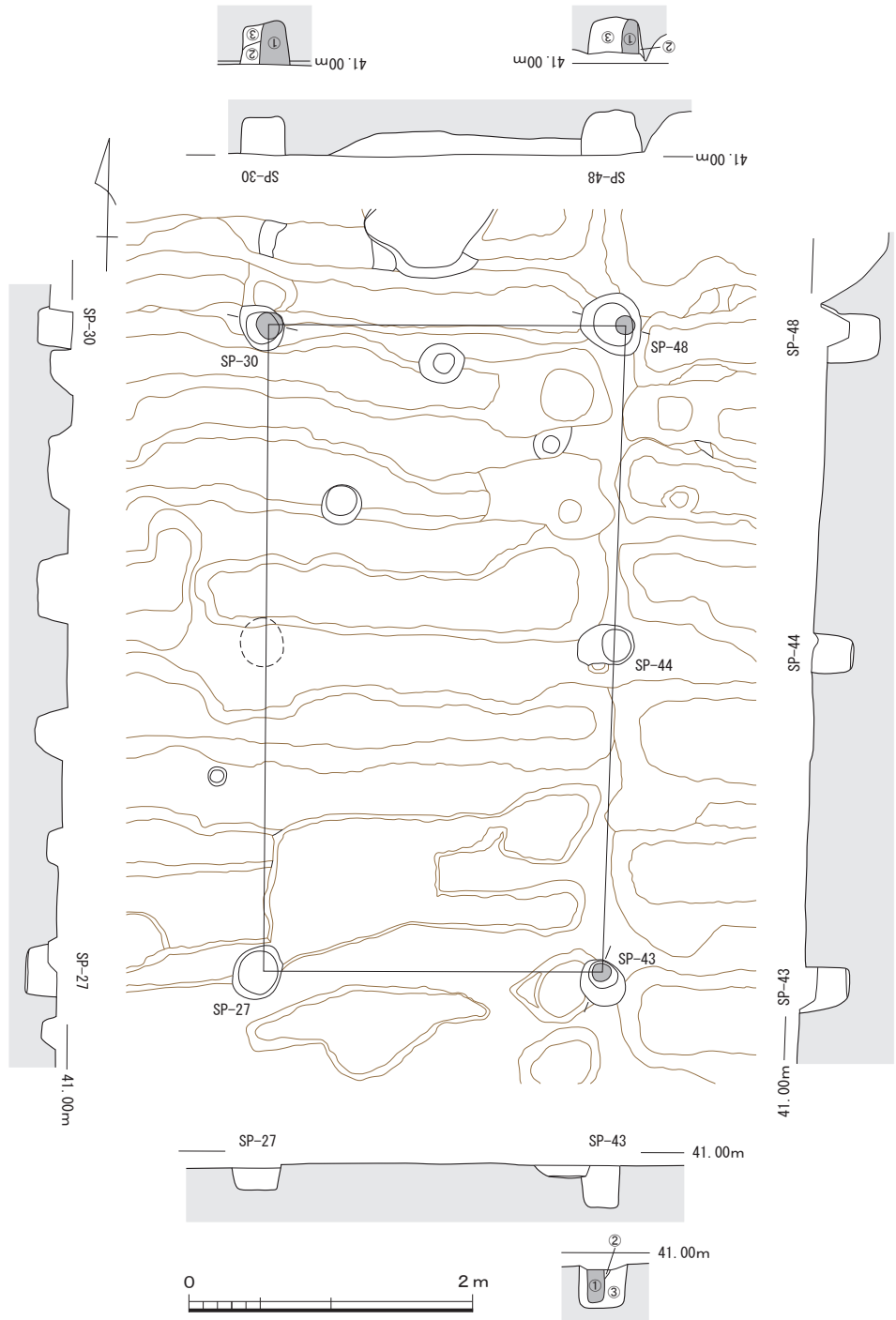


図6 6次調査SB-17実測図(縮尺 1/50)

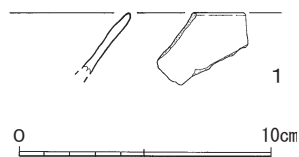


図7 6次調査SB-17SP-48出土遺物実測図(縮尺 1/3)

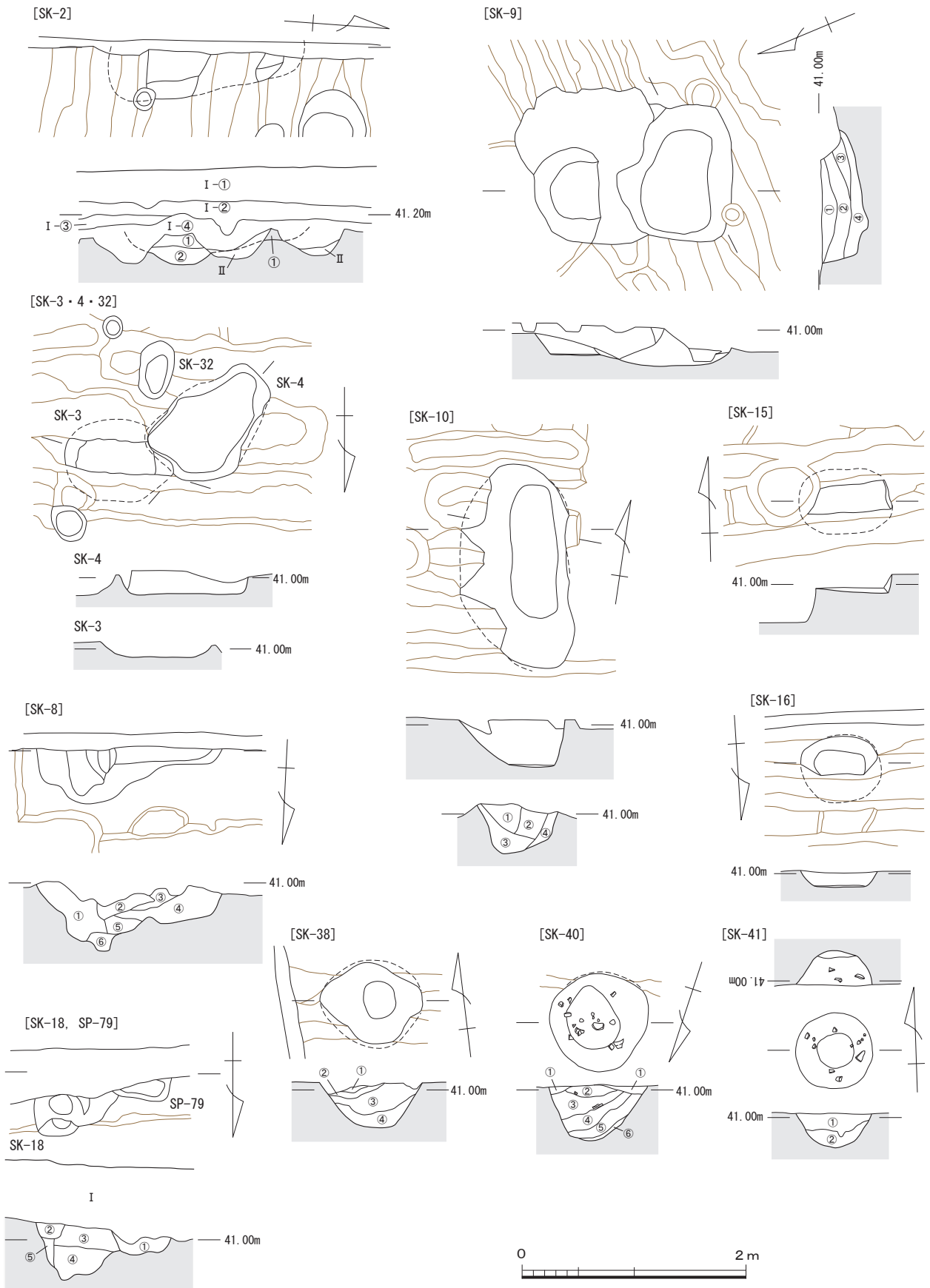


図8 6次調査SK-2・4・8・9・10・15・16・18・38・40・41実測図(縮尺1/50)

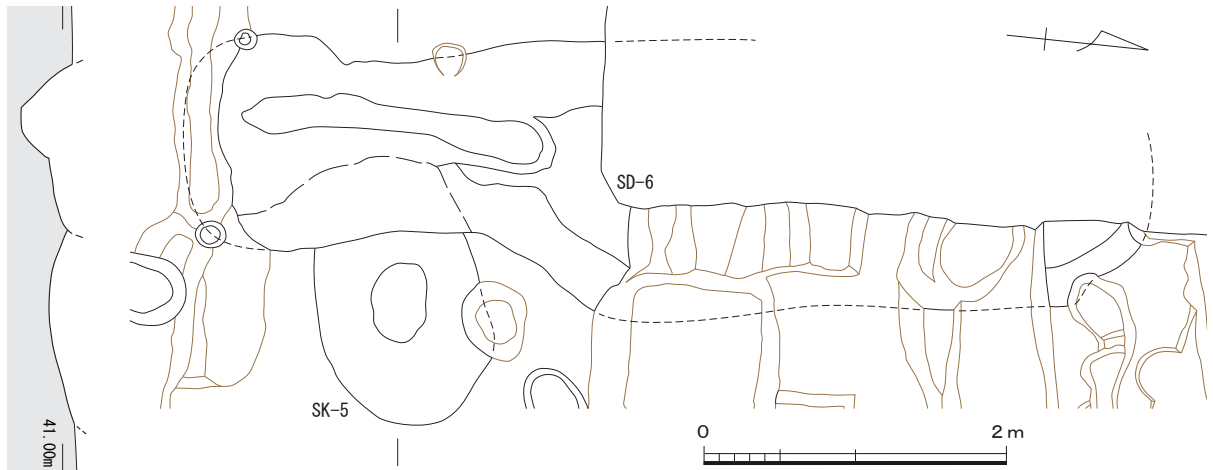


図9 6次調査SK-5, SD-6実測図(縮尺1/50)

(2) 土壌(遺構略号:SK)

SK-1~5・7~10・12~16・18・32・38・40・41の19基の土壌が出土した。いずれも調査区の西半部に位置する。

SK-1 (図5, 図版5-5・18)

建物本体から西側の道路までのびる管路部分であるK-4区で出土した。Ⅲ層下面で検出し、深さ4~8cmを測る。掘り形の南半部は調査区外にのび、北半部は攪乱で破壊され、全体の平面形状は不明である。底面は小さな凹凸がある。埋土は黒褐色粘質土で、褐色シルト質土や径0.5cmの丸い黒褐色シルト質土塊が混じる。出土遺物はない。

SK-2 (図8, 図版5-6)

J-3区の調査区西壁際に位置する。SP-29と切り合うが、時間的な先後関係は不明である。西半部は調査区外にのび、天地返しによって大部分を破壊されているが、長さ1.5~2mほどの長楕円形の土壌と考えた。深さ10~28cmを測り、南半部へ向かって次第に深くなる。埋土上半部の①層は黒褐色シルト質土、下半部の②層は褐色シルト質土である。遺物は出土していない。

SK-3 (図8, 図版7)

J-3区に位置する。天地返しによって南北を破壊され、掘り形の中央部分しか残存していない。長径1mほどの長円形の小型土壌と考えられる。深さは15cmほどを測る。SK-4と切り合うが、時間的な先後関係は不明である。埋土は黒褐色シルト質土。土壌底付近から土器片が1点出土

したが、細片のため、図化できなかった。

SK-4 (図8, 図版7)

I・J-3・4区で出土した。SK-3と切り合うが、先後関係は不明である。長さ1.15m、幅0.8m、深さ22~23cmの不整形の土壌で、底面には緩やかな凹凸がある。埋土は、SK-3と同じく、黄褐色砂質シルトが混じる黒褐色シルト質土。遺物は出土していない。

SK-5 (図9, 図版6・8-1)

I・J-4区。西端をSD-6に切られる。短径1.1m、推定長径1.6~1.7mの長円形で、深さ12~14cmの浅い皿状の土壌である。埋土は黒褐色シルト質土。土壌底付近から土師器と考えられる土器片が出土したが、細片のため図化できなかった。

SK-7 (図9, 図版6, 8-2, 9-1・2)

H-3区西南端に位置する半月形の土壌である。幅3.18m、径1.55m、深さ0.8mを測る。南東側の壁がほぼ垂直に立ち上がる一方で、北西壁は緩やかに傾斜する。

埋土は、上部は天地返しによって攪乱されているが、南東壁の中央沿いには黄褐色シルト(②層)が詰まる。土色や土質は基本層序のⅣ層と共通するが、縦方向の縞状に細砂やシルトの細かな堆積が観察でき、Ⅳ層の一部が一気にひっくり返されたブロック状の堆積と考えた。その北西側には上層から褐色シルト質土(①層)、不整形で拳大のクロボク土塊や指先大の黄褐色シルトが点々と混じる黒褐色シルト質土(③層)、小指先大の

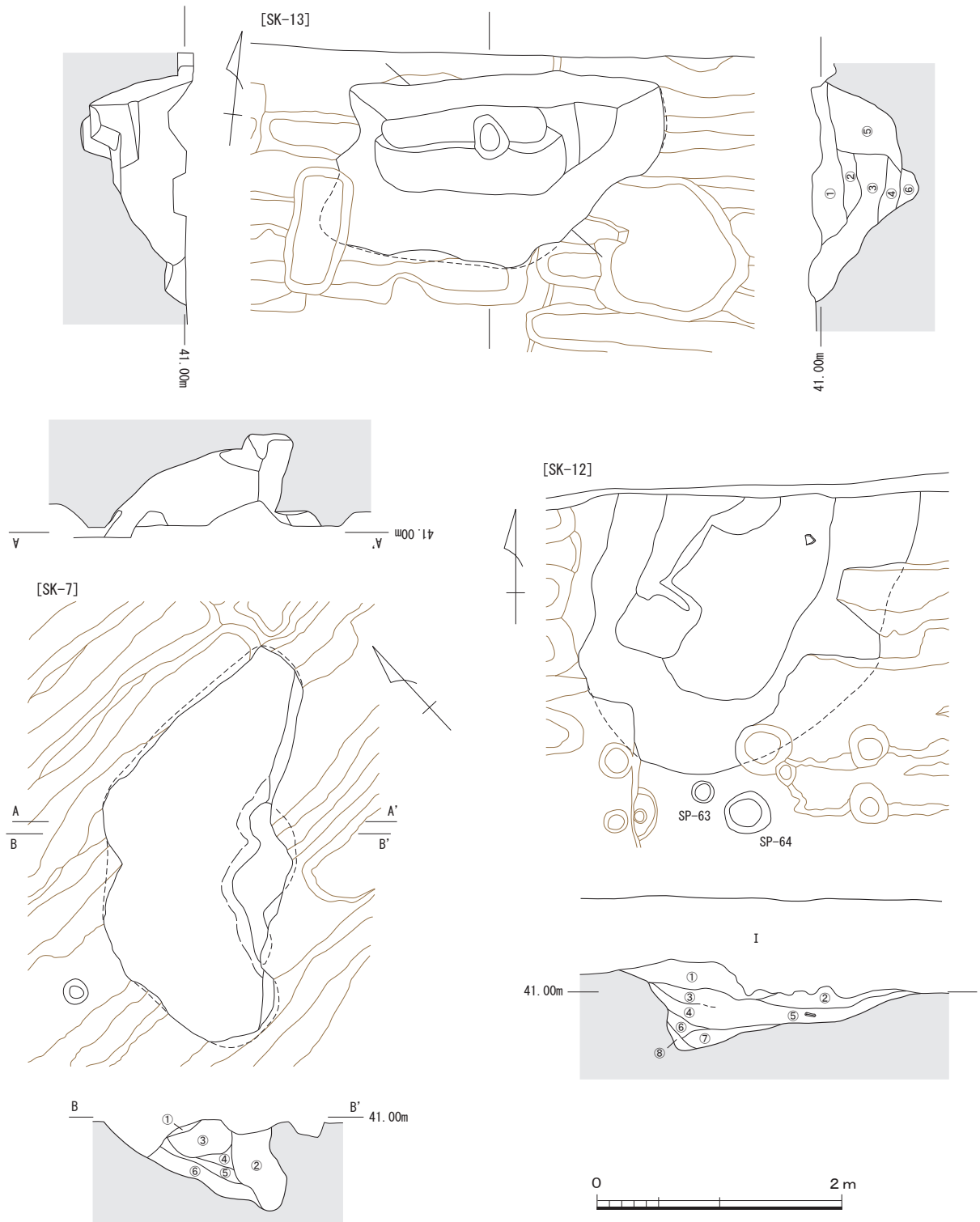


図10 6次調査SK-7・12・13実測図（縮尺 1/50）

黄褐色シルト塊が多く混じる褐色シルト質土（④層），親指～小指先大の黄褐色シルト塊が点々と混じる褐色シルト質土（⑤層），最下面にはパサついた質感のクロボク土（⑥層）がみられる。北

西側から流れ込んだ堆積状況を示す。

以上の土壌内の埋土の状況から，風倒木痕と判断した。遺物は出土していない。

SK-8 (図8, 図版9-3・4)

G-2区の調査区南壁際に位置する。南半部は調査区外にのびる。東西幅1.65m、深さ0.6mほどを測る。埋土は黒色粘質のクロボク土を主体とする。最下底面の幅25cmほどの窪みには、径1~3cmの丸い黄褐色細砂のブロックが多く混じる黒褐色粘質シルト質土(⑥層)が堆積し、東壁際には径1cmの丸い褐色シルト質土塊がごく少量混じる黒色粘質土(①層)がみられる。西側からは、径1~2cmの楕円形の黄褐色粘質シルト塊が多く混じる黒褐色粘質土(⑤層)、褐色シルト質土と黄褐色シルトが混じり合う径0.5~1cmの不整形な土塊が多く混じる黒色粘質シルト質土(④層)、灰黄褐色粘質シルト質土が全体的に混じる褐色シルト質土ないし黄褐色シルト(③層)、わずかに灰色みをおびる黒色粘質土(②層)が流れ込む。遺物は出土していない。

SK-9 (図8, 図版10-1, 11-1)

H-5・6区の境界部に位置する。南北長1.93m、東西幅1.38mを測る。深さ30~34cmを測り、底面は南側と比べて北側がわずかに高いテラス状で、平面形が不整形であることから、2基の土壙が重複している可能性が残る。南側では、上半部には砂粒が少量混じり、黒褐色シルト質土(①層)、褐色シルト質土(②層)が周囲から流れ込む。下半部は黒褐色シルト質土(③・④層)で埋積され、上部の③層には砂礫が混じるのに対して、下部の④層には砂礫は含まれない。遺物は出土していない。

SK-10 (図8, 図版10-2, 11-2)

G-5・6区の境界部に位置する。南北長1.86m、東西幅0.96mの細長い不整形な楕円形の土壙である。深さは42cmほどを測る。東西から黒褐色シルト質土(③・④層)が流れ込み埋積されている。③層には小指先大の褐色シルト質土塊が点々と混じり、④層には小指先大の丸い黄褐色シルト塊が多く含まれる。上部には、パサついた質感の黒褐色シルト質土(①層)やクロボク土(②層)が堆積する。出土遺物はない。

SK-12 (図10, 図版10-2, 12-1)

F・G-6区に位置する。東西幅2.5mほどの楕円形の大土壙である。北半部は調査区外にのびる。東壁は、一部テラス状の段をつくりながら深

くなるが、西壁は急に立ち上がり、西壁沿いの底面は幅35~80cmの溝状に窪む。この窪み内と底面には、径0.2cmの黄褐色シルトの土粒が多く混じる暗褐色砂質シルト(⑥層)、砂粒がまばらに混じる黒褐色粘質土(⑦層)、やや黄色みをおびる暗褐色粘質土(⑧層)が堆積する。埋土中位には、径0.2cmほどの褐色シルト質土の土粒が多く混じる暗褐色粘質シルト質土が西側から流れ込む。最上面は、径1~3cmの風化が進んで脆くなった花崗岩塊が混じる黒褐色シルト質土(①層)、やや黒みが強い黒褐色シルト質土(②層)で覆われる。

SK-12は形態や埋土の堆積状況から、風倒木痕と考えられる。東側のテラス状の段部底面近くから、土器片が出土した。ただし、小片で器面の風化が著しく、弥生土器もしくは古墳時代の土師器であると考えられるが、詳細な時期や器種は不明である。

SK-13 (図10, 図版10-1, 12-2)

H-6区北半部に位置する不整形な半月形の土壙である。東西長2.65m、南北幅1.57m、深さ75~80cmを測る。北側の壁は立ち上がり急であるのに対して、南側の壁は低いテラス状の段をつくりながら緩やかに立ち上がる。埋土は、最上面を親指先大の花崗岩の角礫が多く混じるクロボク土が覆うが、埋土の中位~下部では、北壁沿いに親指先大の花崗岩の角礫が少量混じるクロボク土の大きな塊がみられ、南から礫混じりの黄褐色砂質シルトの④層、クロボクと黒褐色シルト質土が混じり合う③層、小指先~親指先大の角礫が多く混じる褐色シルト質土の②層が流れ込む。底面の小さな小穴状の窪みに堆積した⑥層は、黄褐色シルトと褐色シルト質土が縞状に互層堆積する。

土壙の形態や、②層の堆積状況から、風倒木痕である可能性が高い。遺物は出土していない。

SK-14 (図11, 図版10-1)

H・I-6区で、SK-9・13や周辺の小穴を検出中、H-6区西半部からI-6区北東隅にかけて黒褐色シルト質土が広がっていることに気がついた。天地返しで縦横に攪乱されているが、攪乱壁を観察すると2~5cmと浅いがしっかりした壁の立ち上がりを確認できた。黒褐色シルト質土を埋土とする遺構で、その広がりから竪穴式住居跡の

可能性も考えた。しかし、平面形は極端に不整形で、伴う柱穴も検出できず、竪穴式住居跡ではなく土壇として報告しておく。SK-9とSP-83に切られる。SK-13、SP-85との先後関係は不明である。遺物は出土していない。

SK-15 (図8)

G-6区の中央北よりに位置する。ほとんどを天地返しで攪乱・破壊され、東端の壁と底面の一部が確認できただけである。長径80cmほどの小型の楕円形の掘り形をもつ土壇と考えられる。埋土は黒褐色シルト質土。遺物は出土していない。

SK-16 (図8)

G-6区北西部に位置する。南半部分は天地返しで破壊されているが、径70cmほどの長円形の小型土壇と推定される。深さは17cm前後で、底面にはわずかに凹凸がある。埋土は、SK-15と同じく、黒褐色シルト質土である。遺物は出土していない。

SK-18 (図8, 図版13-1)

F-2区の調査区壁際で確認した。南半部分は調査区外にのびる。東西幅75cm、深さ20cmを測る。東半部は深さ50cmほど円形の小穴SP-79に掘り込まれる。埋土は、上半部に径0.2~0.3cmの丸い黄褐色シルト塊がごく少量混じる部分的に粘性をもつ黒褐色砂質土(②層)、ややしまった黒褐色粘質シルト質土(③層)がみられる。下部には、黒色粘質シルト質土のクロボク土で、厚さ1cmほどの褐色シルト質土の薄いレンズ状ブロックがごく少量含まれる(④層)。壁際には、サクサクした質感の黒色粘質シルト質土のクロボク土(⑤層)がみられる。①層はSP-79の埋土。遺物は出土していない。

SK-32 (図8, 図版7)

J-4区南東隅に位置する。長径60cm、短径45

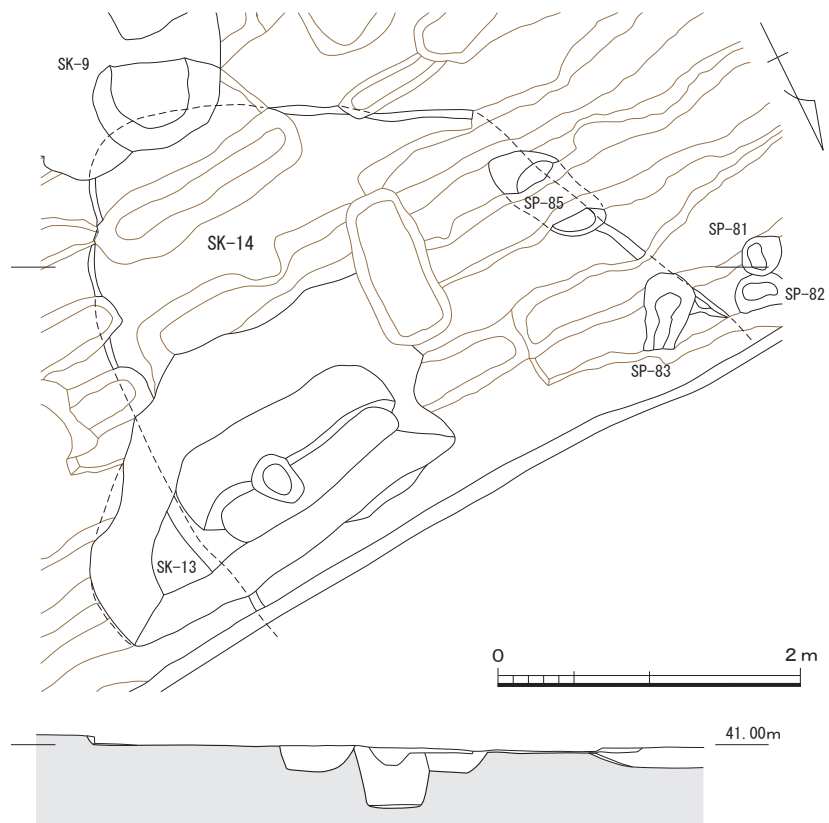


図11 6次調査SK-14実測図(縮尺 1/50)

cmの隅丸長方形の掘り形をもつ小型土壇である。深さ24cmを測る。埋土上部は黒褐色シルト質土で、上げた親指先大の黄褐色シルト塊が多く混じる。下半部には、長さ2~3cm、幅1~2cm大の黒褐色シルト質土と黄褐色シルトの塊が折り重なるように詰まる。出土遺物はない。

SK-38 (図8, 図版13-2, 14-1)

J-3区北西隅に位置する。南北両端を攪乱で破壊されているが、径90~95cmの円形の土壇と考えられる。埋土最上部には、親指先大の黄褐色シルト塊が非常に多く混じる黒褐色シルト質土(①層)がみられる。調査時には立柱痕跡と誤認してしまった。下層には、黒褐色シルト質土(②・③層)が堆積する。②層には親指先大の黄褐色シルト塊、③層には親指先大~直径4cm大の黄褐色シルトの塊や黒褐色シルト質土の塊が多く混じる。土壇底にたまる土層(④層)は、黄褐色シルトの親指先大~径4cmの塊が積み重なり、その間に黒褐色シルト質土がはさまる。遺物は出土していない。

SK-40 (図8・12, 図版14-2, 15, 16-1・19)

J-4区南西隅に位置する円形の掘り形をもつ小型土壇である。径87~89cm, 深さ50cmを測る。最上面には, 小指先大の黄褐色シルト塊が点々と混じる黒褐色シルト質土(①層)がみられ, その下部には, 黄褐色シルトの親指先~3cm大の塊が重なり, その間に黒褐色シルト質土が縞状に入る②層がレンズ状に堆積する。埋土中位~下半には黒褐色シルト質土を主体とする③~⑥層が西側から流れ込む。③層は①層と同じ土質・土色。④層は, 黒褐色シルト質土と黄褐色シルトが厚さ2cmほどの縞状に互層堆積する。⑤層は①層と類似するが, 黄褐色シルトの小塊の量は少ない。⑥層は②層と同じ土層である。

埋土中位~上半の②~④層から, 須恵器・土師器が出土した(図12-1~8)。1は須恵器の口縁端部の細片。6世紀中葉~後半の坏蓋である。土師器は杯の口縁部と底部, 鍋が出土。2・3は土師器碗。ともに口径13cm前後を測る。2の口縁端部は尖り気味に収められ, 外面は横ナデの痕跡が残る。3(図版19-1)は口縁部が湾曲し, わずかに外反する。4~7は土師器の底部片。4(図版19-4)は底径から坏と考えた。外底面は回転ヘラ切り離しか。5・6は円盤高台の碗の底部。外底面には回転ヘラ切り痕跡が残る。7(図版19-3)も碗で, 外面には横ナデ調整によって凹線状の窪みがめぐる。10世紀に比定できる。8(図版19-2)は土師器鍋。口縁端部を面取りし, 頸部はわずかに外傾する。胴部はわずかに膨らみを持ち, 内面には右斜め方向の指頭痕がみられる。器壁芯部には黒化層が残る。12~13世紀前半に比定できる。

SK-41 (図8・13, 図版14-2, 15-1, 16-2)

J-4区北西隅に位置する。径68cmの円形の掘り形をもつ土壇である。深さ32cmを測る。埋土上半部の①層は, 黒褐色シルト質土に黒色シルト質土のクロボク土や黄褐色シルトの小指先大の小塊

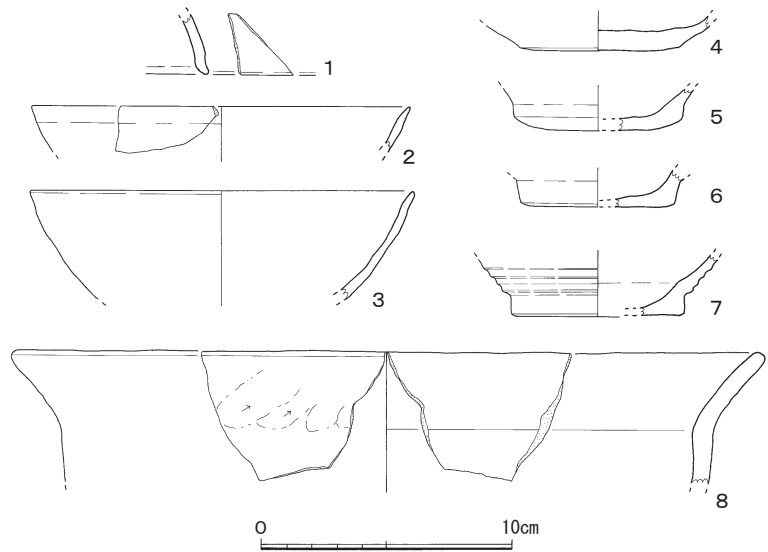


図12 6次調査SK-40出土遺物実測図(縮尺 1/3)

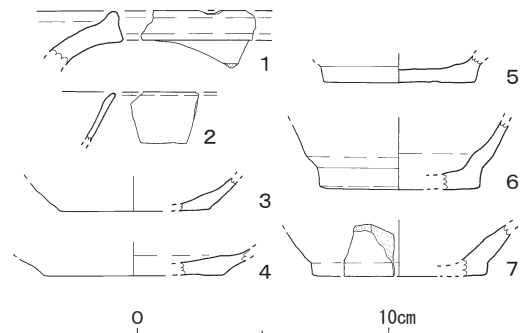


図13 6次調査SK-41出土遺物実測図(縮尺 1/3)

が点々と混じる。下半部の②層は, 黄褐色シルトに黒褐色シルト質土が厚さ1cm前後の縞状に混じる。部分的にクロボク土の親指先大の小塊が含まれる。

埋土上半部の①層から, 須恵器・土師器の小片が出土した。1は須恵質土器の壺の口縁部片で, 横ナデで口縁端部を上下に拡張する。頸部は逆八字形に外反する。2~7は土師器。2は口縁端部を尖り気味に収め, 口縁部近くがやや肥厚し, 体部にかけて内湾し内傾する。3・4は坏, 5~7は碗の底部片である。外底面には回転ヘラ切り離し痕跡が残る。胴部外面は横ナデ, 5~7は円盤高台で, 垂直に立ち上がり内湾気味に外傾する。内面には回転ナデ。底径は6~7cmを測る。6(図

版19-7)の外底端部は部分的にめくれ上がる。10世紀に比定できる。

(3) 溝 (遺構略号:SD)

SD-6 (図9, 図版6-2, 8-1)

調査区西端のJ-4・5区に位置する。南北にのびる溝である。南端と北半部は天地返しで大きく破壊されており、残存部分を繋いで、幅1.1~1.8mの溝状遺構を推定した。北端では深さ10cmと比較的浅いが、南側は23cmとやや深く、細い溝状の窪みとなっている。埋土上半部は黒褐色シルト質土、下半部は褐色シルト質土である。遺物は出土していない。

(4) 柱穴・小穴 (遺構略号:SP)

調査区西半部を中心として61基の柱穴・小穴が出土した。その中で、以下のSP-22・39・49・74・75は、立柱もしくは杭の痕跡をもつ。ただし、掘立柱建物や柵列を構成する他の小穴や柱穴は確認できていない。また、SP-35・42・59も、比較的深くしっかりした掘り形をもち、立柱痕跡は確認できなかったが、柱穴である可能性が高い。以上の小穴・柱穴を報告するが、他については27頁以降の表3を参照されたい。

SP-22 (図14, 図版18-2)

建物本体から西側の道路までのびる管路部分であるK-4区に位置する。南半部の上部は破壊されているが、径40cm前後の円形の掘り形をもつものとする。掘り形の東壁際で径18cmの立柱痕跡を検出した。立柱痕跡(①層)は、黒褐色粘質土で、径3~5cmの黒色シルト質土(クロボク土)塊を含む。掘り形埋土(②層)も黒褐色粘質土であるが、径0.5~1cmの黒色シルト質土(クロボク土)や褐色シルト質土丸い塊が少量混じる。全体として、切り合っているSK-21よりも、黒みをおびた土色である。出土遺物はない。

SP-35 (図14, 図版17-3)

J-3区北西隅に位置する。径35cm、深さ38cmを測る円形の掘り形をもつ小穴である。埋土下部(③層)は、黒褐色シルト質土に小指先大の黄褐色シルト小塊がごく少量混じる。中部(②層)は、逆に黄褐色シルトに小指先大の黒褐色シルト質土塊がごく少量混じり、上部(①層)には、黒

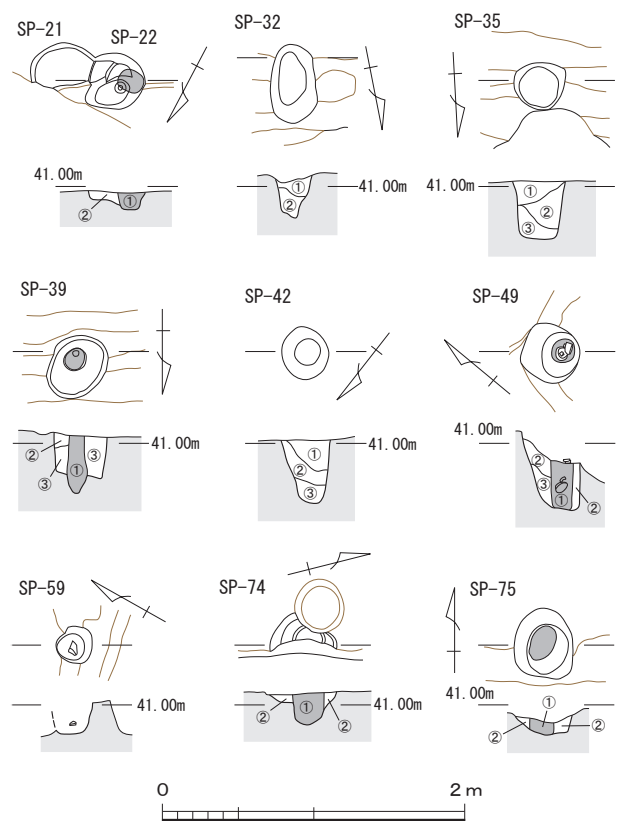


図14 6次調査SP-22・32・35・39・42・49・59・74・75実測図(縮尺1/50)

褐色シルト質土に小指先大の黄褐色シルト塊が点々と混じる。遺物は出土していない。

SP-39 (図14, 図版17-2)

J-4区南端に位置する。北半部は破壊され攪乱されているが、長径46cm、短径40cmの長円形の小穴である。掘り形のやや北寄り径13~14cmの杭痕跡を確認できた。杭痕跡は先端が尖り、黒褐色ないし褐色シルト質土(①層)が詰まる。杭を打ち込んだ後、黄褐色シルトに厚さ1~3cmの黒褐色シルト質土が縞状に混じる③層、黒褐色シルト質土にひしゃげた小指先大の黄褐色シルトが混じる②層が詰め込まれている。出土遺物はない。

SP-42 (図14・15)

J-4区北西隅に位置する。径32~35cmの長円形の掘り形をもつ小穴である。深さは42cmほどを測る。埋土中位の径4cmの不整形で拉げた黄褐色シルト小塊が多く混じる黒褐色シルト質土である②層を挟んで、拉げた親指先大の黄褐色シルト小塊が点々と混じる黒褐色シルト質土である①・③

層がみられる。10世紀に比定できる土師器塚の破片が出土している。

SP-49

(図14・15, 図版17-4・19)

I-4区南西部の攪乱壁面で確認した。推定径35~40cm, 深さ43cmほどを測る。中央南東よりで, 直径15cmの立柱痕跡を検出した。立柱痕跡

(①層)は, 黒褐色シルト質土に, 小指先大以下の黄褐色シルト塊が点々と混じる。掘り形の下部(③層)には, 黄褐色シルトの拳大~親指先大の塊が折り重なり, その間に黒褐色シルト質土が挟まる。上部(②層)には, 親指先大の黄褐色シルト小塊が多く混じる黒褐色シルト質土がみられる。柱を立てながら, ②層を詰め込んで固定し, さらに①層で固めたものと考えられる。

立柱痕跡内から, 亀山焼き・土師器・敲石が出土した(図15-1~3)。柱の抜き跡に詰め込まれた遺物である。1(図版19-6)は亀山焼きの壺。頸部は肩部から緩やかに反転して外反する。横ナデで口縁端は面取りする。胴部外面には格子タタキが残されている。13世紀のものか。2は土師器鍋の口縁部片。3(図版19-10)は花崗岩の円磔を利用した敲石。下端部に敲打痕が集中して残る。

SP-59 (図14・16, 図版17-5・19)

I-3区中央東寄りに位置する。北半部のほとんどを天地返しによって破壊されている。埋土は褐色シルト質土に, 小指先大の黒褐色や黄褐色のシルトの小塊が多く混じる。底面からやや浮いて底部を下にして土師器塚(図16-3, 図版19-8)が

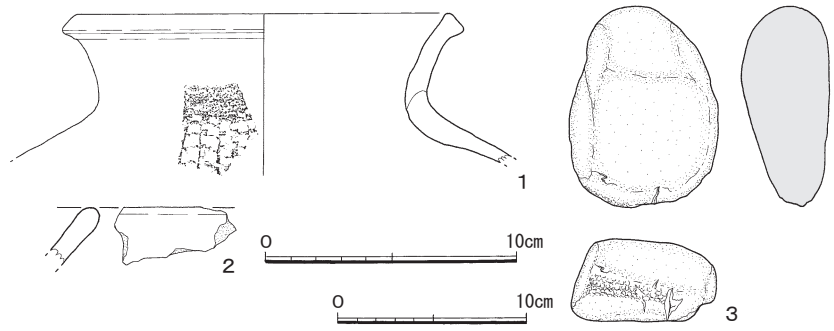


図15 6次調査SP-49出土遺物実測図(縮尺1/3, 1/4)

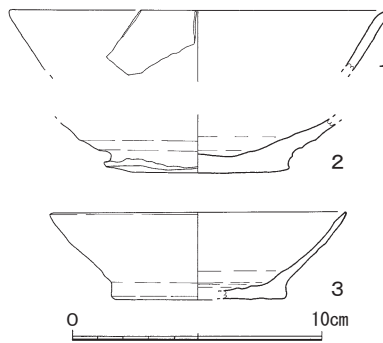


図16 6次調査SP-48・59ほか出土遺物実測図(縮尺1/3)

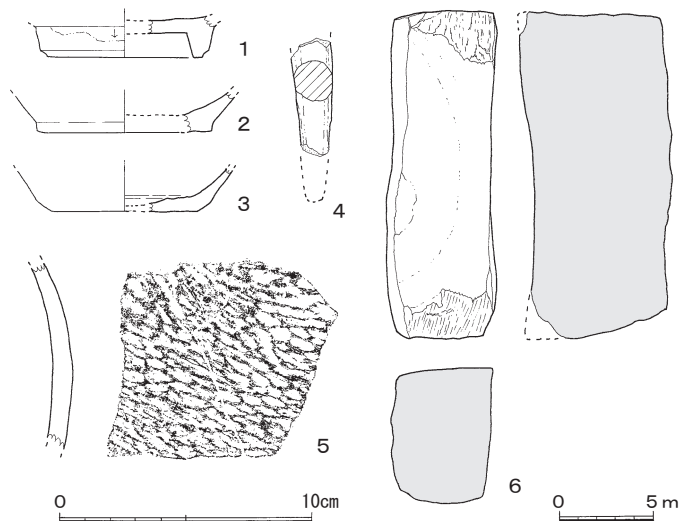


図17 6次調査攪乱部分出土遺物実測図(縮尺1/3, 1/4)

出土した。円盤高台の底部をもち, 外底面には回転ヘラ切り離し痕が残る。内外面とも橙色を呈する。轆轤の回転方向は反時計回りである。10世紀に比定できる。

SP-74 (図14, 図版17-6)

G-3区東端に位置する。東西両端が攪乱部で壊されている。不整な楕円形の掘り形をもつ。長

径48cm, 短径40cm, 深さ20cmを測る。掘り形のほぼ中央で、直径17cm前後の立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡(①層)は基盤層に打ち込まれており、径1~2cmのクロボク土や褐色土の塊が多く混じる黒褐色シルト質土である。掘り形内(②層)は、クロボク土が多く混じる黒褐色シルト質土に、小指先大の黄褐色シルトが点々と含まれる。遺物は出土していない。

SP-75 (図14, 図版17-7)

G-3区南西部に位置する。長径48cm, 短径40cm, 深さ20cmの不整円形の掘り形をもつ。ほぼ中央で径22×15cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡は不整形な楕円形である。柱痕部(①層)は黒褐色シルト質土で、小指先大の黄褐色シルト小塊がごく少量混じる。掘り形には、褐色シルト質土(②層)が詰め込まれている。小指先大の黄褐色

シルト塊が点々と混じり、全体に①層と比べて明るい土色を呈する。

(5) その他の遺物 (図16・17, 図版19)

6次調査区では、畠の天地返しによる攪乱が全域に及んでいたが、そうした攪乱部分からも古代~中世の遺物が出土している。その中で、図16-2(図版19-9)は、SK-5を切る小穴状の攪乱部から出土した。円盤高台の土師器碗の底部片。内面には回転横ナデの痕跡が残る。図17-1は、中国・白磁の輪高台の破片である。2~5は土師器。2・3は坏の底部片。4は三足付き土鍋の脚部片。5は壺の胴部片で、外面には右斜め方向の細かなタタキ目が残る。6(図版19-11)は白灰色の泥岩で造られた砥石である。(田崎・濱田)

表3 6次調査遺構観察表

遺構 種別	番号	調査区	形状・埋土の特徴等	埋土 類型	時代
SK	1	K-4区	Ⅲ層下面で検出した土壙。詳細は本文19頁に報告。	A	古代～中世
SK	2	J-3区	長さ1.5～2mほどの長楕円形の土壙。詳細は本文19頁に報告。	A	古代～中世
SK	3	J-3区	SK-4と切り合う。長径1mの長円形の小型土壙。詳細は本文19頁に報告。	A	古代～中世
SK	4	I・J-3・4区	長さ1.15m、幅0.8mの不整形土壙。SK-3と切り合う。本文19頁に報告。	A	古代～中世
SK	5	I・J-4区	長円形の浅い皿状の土壙。詳細は本文19頁に報告。	A	古代～中世
SD	6	J-4・5区	幅1.1～1.8mの溝状遺構。詳細は本文24頁に報告。	A	古代～中世
SK	7	H-3区	幅3.18m、径1.55mの半月形の土壙。風倒木痕。詳細は本文19頁に報告。	B	古代～中世
SK	8	G-2区	東西幅1.65m、深さ0.6mほどの土壙。詳細は本文21頁に報告。	A	古代～中世
SK	9	H-5・6区	南北長1.93m、東西幅1.38mの不整形の土壙。詳細は本文21頁に報告。	A	古代～中世
SK	10	G-5・6区	細長い不整形楕円形の土壙。詳細は本文21頁に報告。	A	古代～中世
	11	欠番	攪乱の掘り残し部分を誤認。		古代～中世
SK	12	F・G-6区	東西幅2.5mほどの楕円形の大型土壙。風倒木痕。詳細は本文21頁に報告。	A	古代～中世
SK	13	H-6区	半月形の土壙。風倒木痕。詳細は本文21頁に報告。	A	古代～中世
SK	14	H・I-6区	SK-9とSP-83に切られる不整形の掘り形の土壙。詳細は本文21頁に報告。	A	古代～中世
SK	15	G-6区	径80cmほどの小型の楕円形土壙。詳細は本文22頁に報告。	A	古代～中世
SK	16	G-6区	径70cmほどの長円形の小型土壙。詳細は本文22頁に報告。	A	古代～中世
SB	17	I・J-2・3区	SP-27・30・43・44・48から構成される掘立柱建物。詳細は本文16頁に報告。	A	古代～中世
SK	18	F-2区	東西幅75cmの土壙。詳細は本文22頁に報告。	A	古代～中世
	欠番		攪乱の掘り残し部分を誤認。		
	欠番		攪乱の掘り残し部分を誤認。		
SP	21	K-4区	攪乱のために南半部を欠くが、推定径40～45cmの円形掘り形をもつ小穴と考えられる。SP-21と切り合う。埋土は、黒褐色粘質土で、径0.5cmほどの丸い黒褐色シルト塊や褐色シルト塊が多く混じる。	A	古代～中世
SP	22	K-4区	径40cm前後の円形の掘り形をもつ。立柱痕跡を確認。詳細は本文記載。	A	古代～中世
SP	23	K-4区	Ⅲ層下面で確認。長径48cm、推定短径40cm前後、深さ9cmの浅い皿状の小穴。埋土は、黒褐色粘質土で、径0.5cmほどの黒褐色シルト塊が多く混じる。	A	古代～中世
SP	24	J-2区	径16～18cmのやや拉げた不整形の小穴。埋土は黒褐色シルト質土。古代～中世の土師器と考えられる土器片が出土。	A	古代～中世
SP	25	J-3区	長径30cm、短径21cm、深さ28cmの長円形の小穴。埋土は、他の遺構とは異なる褐色シルト質土で、樹根の可能性も残す。	B	古代～中世
SP	26	J-3区	径13cm、深さ14～15cmの円形の掘り形をもつ。埋土は、SP-24と同じく、黒褐色シルト質土。古代～中世と考えられる土師器の小片が出土。	A	古代～中世
SP	27	J-2区	SB-17の柱穴。詳細は本文16頁に報告。	A	古代～中世
SP	28	J-3区	北半部上部を攪乱で破壊。径30cm、深さ16cmの円形の掘り形をもつ。埋土は、褐色シルト土に、一部暗灰色シルトがごく少量混じる。暗灰色シルトが混じるので、天地返し掘り残し部分である可能性も残す。	C	
SP	29	J-3区	径20～22cmの不整形の小穴。SK-2と切り合う。埋土は黒褐色シルト土で、上部には小指先大、下部には親指先大の黄褐色シルト塊が点々と混じる。	A	古代～中世
SP	30	J-3区	SB-17の柱穴。詳細は本文16頁に報告。	A	古代～中世
SP	31	I・J-3区	南半部を一部攪乱で欠くが、径26～32cm、深さ6～7cmの円形の掘り形をもつと考えられる。埋土は黒褐色シルトで、小指先大の黄褐色シルト塊がまばらに混じる。	A	古代～中世
SK	32	J-4区	長径60cm、短径45cm、隅丸長方形の小型土壙。詳細は本文22頁に報告。	A	古代～中世
SP	33	J-4区	長径20cm、短径18cm、深さ8cmの不整形の小穴。埋土は褐色シルト土。	B	古代～中世
SP	34	J-4区	径20cmほどの円形小穴。攪乱底面で検出したが、深さは30cm近くある。埋土は黒褐色シルト土。	A	古代～中世

遺構 種別	番号	調査区	形状・埋土の特徴等	埋土	時代
				類型	
SP	35	J-3区	径35cm, 深さ38cmの円形小穴。詳細は本文24頁記載。	A	古代～中世
SP	36	I・J-4区	長径50cm, 短径37cm, 深さ6～8cmの長円形の掘り形をもつ。埋土は, 黒褐色シルト土に, 小指先大の黄褐色シルト塊が非常に多く混じる。	A	古代～中世
SP	37	I-4区	長径37cm, 短径30cmの長円形の掘り形をもつ。埋土は黒褐色シルト土。	A	古代～中世
SK	38	J-3・4区	径90～95cmの円形の土壇。詳細は本文22頁に報告。	A	古代～中世
SP	39	J-4区	長径46cm, 短径40cmの長円形の小穴。詳細は本文24頁に報告。	A	古代～中世
SK	40	J-4区	径87～89cmの円形の小型土壇。詳細は本文23頁に報告。	A	古代～中世
SK	41	J-4区	径68cmの円形の土壇。詳細は本文23頁に報告。	A	古代～中世
SP	42	J-4区	径32～35cmの長円形の小穴。詳細は本文24頁に報告。	A	古代～中世
SP	43	I-2区	SB-17の柱穴。詳細は本文16頁に報告。	A	古代～中世
SP	44	I-3区	SB-17の柱穴。詳細は本文16頁に報告。	A	古代～中世
SP	45	I-5区	西半分を攪乱で破壊されているが, 掘り形は径42～45cmの円形と考えられる。深さは14cmほど。埋土は, 黒褐色シルト土に, 小指先大の黄褐色シルト塊がごく少量混じる。	A	古代～中世
SP	46	I-5区	長径22cm, 短径19cm, 深さ13cmの円形の掘り形をもつ。埋土は, SP-45と同じく, 黒褐色シルト土に小指先大の黄褐色シルト塊がごく少量混じる。	A	古代～中世
SP	47	I-2区	東端を攪乱で欠く。径21cm, 深さ28cmの円形の掘り形。埋土は, SP-36と同じく, 黒褐色シルト土に黄褐色シルトの小塊が非常に多く混じる。	A	古代～中世
SP	48	I-3区	SB-17の柱穴。詳細は本文17頁に報告。	A	古代～中世
SP	49	I-4区	推定径35～40cmを測り, 立柱痕跡を検出。詳細は本文25頁に報告。	A	古代～中世
SP	50	I-3区	南北両端を攪乱で欠く。短径23cm, 推定長径30cm, 深さ23cmの長円形の掘り形をもつ。埋土は, SP-33と同じく, 褐色シルト土。	B	古代～中世
SP	51	I-6区	東端を攪乱で破壊されている。幅26cm, 残存長40cm, 深さ6cmの細長い円形の小穴。埋土は褐色シルト土で, 小指先大の黄褐色シルトの小塊が混じる。	B	古代～中世
SP	52	I-6区	東西端を攪乱で破壊されている。短径27cm, 長径35～40cmの長円形の掘り形をもつものと考えられる。埋土は褐色シルト土。	B	古代～中世
SP	53	J-6区	径25cm, 深さ15cmのややゆがんだ円形の掘り形をもつ。埋土は灰色シルトが混じる褐色シルト土。	C	
SP	54	I-6区	径27cm, 深さ17～19cmの円形の掘り形をもつ。埋土は褐色シルト土で, やや灰色みをおびるシルトが混じる。	B	古代～中世
SP	55	I-6区	南北端を攪乱で欠く。径25cm, 深さ8～10cmの不整円形の小穴。埋土上部は黒褐色シルト土, 下部には黄褐色シルトが多く混じりに明るい土色となる。	A	古代～中世
SP	56	I-3区	径22～24cm, 深さ48cmの円形の掘り形。埋土は, 灰色みをおびる褐色シルト土で, 親指先大の黄褐色シルト塊が点々と混じる。	B	古代～中世
SP	57	I-3・4区	径25cm, 深さ21cmの円形小穴。北半部の上部を攪乱で切られている。埋土は褐色シルト土。	B	古代～中世
SP	58	I-3区	天地返しの攪乱底面で検出。長径35cm, 短径32cm, 深さ28cmの長円形の掘り形を確認。埋土は褐色シルト土で, 親指先大の黄褐色シルト塊が混じる。	B	古代～中世
SP	59	I-3区	古代の土師器塊の比較的大きな破片が出土。詳細は本文25頁に報告。	B	古代
SP	60	I-3区	径20～21cm, 深さ16cmの不整円形の掘り形をもつ。埋土は, SP-59と同じく, 褐色シルト土に小指先大の黒褐色・黄褐色シルト塊が多く混じる。	B	古代～中世
SP	61	I-3区	径20cm, 深さ18cmの不整円形の掘り形をもつ。埋土は黒褐色シルト土で, 親指先大の黄褐色シルト塊が少量混じる。	A	古代～中世
SP	62	H・I-5区	径27～30cm, 深さ24cmの不整円形の掘り形をもつ。埋土は, 黄褐色シルトの中に黒褐色シルト土が混じる。	C	
SP	63	G-6区	径20cm, 深さ18～19cmの円形の小穴。埋土は, 黒褐色シルト土に, 黄褐色シルトやクロボク土の小指先大の小塊が点々と混じる。	A	古代～中世
SP	64	F-6区	上半部のほとんどを攪乱で破壊されている。径20～25cm, 深さ6cmの円形の小穴と考えられる。埋土は黒褐色シルト土。	A	古代～中世
SP	65	E・F-6区	北西端を攪乱で欠くが, 短径43cm, 推定長径60cmほどの長円形の小穴。深さ12～14cmを測る。埋土は, SP-68と同じく, 黒褐色シルト土に小指先大の黄褐色シルトの小塊が点々と混じる。	A	古代～中世

遺構		調査区	形状・埋土の特徴等	埋土 類型	時代
種別	番号				
SP	66	E-6区	径10cm, 深さ1cmほどの掘り形をもつ。埋土は黒褐色シルト土。	A	古代～中世
SP	67	E-6区	長さ60cm, 幅25cmの細長い溝状の掘り形をもつ。深さ18cmを測り, 東端は小さな小穴状に5cmほど深くなる。埋土は, SP-68と同じく, 黒褐色シルト土に小指先大の黄褐色シルトの小塊が点々と混じる。	A	古代～中世
SP	68	E-6区	長径40cm, 短径32cm, 深さ37cmの長円形の掘り形をもつ。埋土は, 黒褐色シルト土に小指先大の黄褐色シルトの小塊が点々と混じる。	A	古代～中世
SP	69	J-4区	径13～15cm, 深さ19cmの円形の掘り形をもつ。埋土は黒褐色シルト土。	A	古代～中世
SP	70	F・G-4区	長径24cm, 短径19cm, 深さ5cmほどの浅い不整形円形の掘り形である。埋土は, SP-68と同じく, 黒褐色シルト土に小指先大の黄褐色シルトの小塊が点々と混じる。	A	古代～中世
SP	71	F・G-3・4区	西半部を攪乱で欠くが, 径30～33cm, 深さ9cmほどの不整形長円形の掘り形をもつ小穴である。埋土は, SP-68と同じく, 黒褐色シルト土に小指先大の黄褐色シルトの小塊が点々と混じる。	A	古代～中世
SP	72	G-3区	西半部を攪乱で欠くが, 最大幅27cm, 残存長40cmの細長い溝状の掘り形をもつ。深さは4cmほどで, 浅い皿状をなす。埋土は, SP-68と同じく, 黒褐色シルト土に小指先大の黄褐色シルトの小塊が点々と混じる。	A	古代～中世
欠番	73		攪乱の掘り残し部分を誤認。		
SP	74	G-3区	長径48cm, 短径40cmの不整形楕円形の穴。詳細は本文25頁に記載。	A	古代～中世
SP	75	G-3区	長径48cm, 短径40cmの不整形円形の穴。本文26頁に報告。	A	古代～中世
SP	76	G-3区	北半部を攪乱で欠く。径25cm, 深さ17cmほどの不整形円形の掘り形をもつ。埋土は, SP-68と同じく, 黒褐色シルト土の中に, 小指先大の黄褐色シルトの小塊が点々と混じる。	A	古代～中世
SP	77	F-2区	長径42cm, 短径35cm, 深さ10cmの不整形長円形の穴。埋土は黒褐色シルト土で, 黄褐色砂質シルトの不整形の塊が多く混じる。	A	古代～中世
SP	78	F-6区	ほとんどを攪乱で破壊されているが, 掘り形は径25～30cmの円形と考えられる。埋土は, 記録メモを混乱させたため不明。		
SP	79	F-2区	東西幅60cmほどの不整形の掘り形をもつ。SK-13を切る。南半部は調査区外にのびる。埋土は, 黒色粘質シルトのクロボク土で, サクサクした質感。径0.5cmほどの丸い褐色シルト塊がごく少量混じる。	A	古代～中世
SP	80	I-6区	上半部南側を攪乱で欠く。径40cmほどの不整形円形の掘り形と考えられる。深さ27cm前後。埋土は, 観察メモが混乱したため不明。		古代～中世
SP	81	I-6区	掘り形は復元径30cm前後の不整形円形と考えられる。深さ16cmほど。埋土は, 砂礫混じりの黒褐色シルト土。	A	古代～中世
SP	82	I-6区	北端を攪乱で欠く。短径37cm, 推定長径30cm前後, 深さ16cmの不整形長円形の掘り形と考えられる。埋土は, SP-81と同じく, 砂礫混じりの黒褐色シルト土。	A	古代～中世
SP	83	I-6区	幅32cm, 残存長52cm, 深さ16cmの不整形長円形の掘り形である。北西側から細い溝状の窪みが連結する。埋土は砂礫混じりの黒褐色シルト土。	A	古代～中世
SP	84	H-5区	南北を攪乱で削られている。径45cm, 深さ10～14cmの円形の掘り形と考えられる。埋土は褐色シルト土。	B	古代～中世
SP	85	H・I-6区	中央を東西に攪乱で破壊されている。長さ78cm, 幅40cm前後と考えられる細長いやや大きめの掘り形と考えられる。埋土は, 砂礫混じりの黒褐色シルト土で, 親指先大の黄褐色シルト塊が多く含まれる。	A	古代～中世
SP	86	G-4区	西端を攪乱で欠く。幅33cm, 残存長55cm, 深さ7cmほどの細長い不整形の小穴。内部にはクロボク土が詰まり, 壁の立ち上がりは緩やかで船底状となる。IV層上面の自然の窪みに, III層の一部が食い込んだものか。	A	古代～中世
SP	87	G-5区	北半部は攪乱で破壊されているが, 掘り形は推定直45cm前後の円形と考えられる。深さは12cmを測る。埋土は黒褐色シルト土。	A	古代～中世
SP	88	H-5区	径20～22cm, 深さ16cmの円形の掘り形をもつ。SK-9と切り合う。埋土は黒褐色シルト土。	A	古代～中世
SP	89	G-4区	西半部は攪乱で破壊されているが, 掘り形は推定径18cm, 深さ4cmほどの浅い円形と考えられる。埋土は黒褐色シルト土。	A	古代～中世
SP	90	H-5区	径26cm, 深さ25cmの円形の小穴。観察メモを亡失し, 埋土については不明。		
SP	91	A-4区	南半部は攪乱で破壊されている。径30～32cm, 深さ7cmほどの不整形円形の小穴。埋土は, 暗褐色砂質土で, 径0.5cm前後の褐色シルト塊が混じる。	B	古代～中世

表4 6次調査出土遺物観察表

挿図・ 遺物番号	調査区 遺構・層位	種別	器種	出土状況・観察所見ほか	遺物登録 番号	収納 コンテナ		
図7	1	I-3区	SB-17 SP-48	土師器	坏	掘り形埋土から出土。口縁部の小片。赤色塗彩。内外面ともに回転横ナデ仕上げ。	R-60	1
図12	1	J-4区	SK-40	須恵器	坏蓋	口縁端部内面を横ナデして面取り。内外面ともに灰色。	R-49	〃
	2	〃	〃	土師器	埴	外面はナデ調整。内面は荒れのため調整不明。内外面とも淡黄褐色。胎土は精製良好。口径約15cm。	R-8	〃
	3	〃	〃	〃	〃	内外面ともに回転横ナデ調整。口縁部はわずかに外反する。浅黄橙色を呈する。図版19-1。	R-25	〃
	4	〃	SK-40 ②層	〃	坏	底部破片。底径から坏と考えた。器面が荒れているが、外底面は回転ヘラ切り離しか。内外面ともに灰白色。図版19-4。	R-11	〃
	5	〃	SK-40	〃	埴	円盤高台の底部片。外底面は回転ヘラ切り離しか。体部内外面は回転横ナデ。内面は浅い灰白色。外面は灰黄色、一部橙色を呈する。胎土は砂粒をわずかに含むが、精良。	R-10	〃
	6	〃	〃	〃	〃	円盤高台の底部片。外底面には回転ヘラ切り離しの痕跡が残る。底径約6.2cm。内外面ともにぶい橙色。	R-23	〃
	7	〃	〃	〃	〃	円盤高台の底部破片。外底面には回転ヘラ切り離し痕跡が残る。体部外面にはロクロ目が残る。図版19-3。	R-29	〃
	8	〃	〃	〃	土鍋	口縁部の破片。内面は浅黄色、外面は口縁部灰黄色、頸部は暗灰黄色を呈する。胎土には粗砂が多く混じる。器壁の芯部には黒化層が残る。図版19-2。	R-40	〃
図13	1	J-4区	SK-41	須恵質 土器	甕	口縁端面と内面を横ナデして、端部をわずかに摘み上げる。内外面ともに横ナデ仕上げ。内外面ともに灰色。	R-52	〃
	2	〃	〃	土師器	坏	口縁部の破片。内面は横ナデ調整。外面は器面が荒れているため、調整不明。内外面ともに淡黄色を呈する。胎土は精良。	R-18	〃
	3	〃	SK-41 ②層	〃	皿	底部破片。底径から皿と考えた。内外面とも器面が荒れ調整不明。内外面とも灰白色、やや橙色をおびる。	R-1	〃
	4	〃	SK-41 ①層	〃	坏	底部破片。器面が荒れ、調整は不明。内面はぶい橙色、外面は灰白色を呈する。胎土は精良。	R-20	〃
	5	〃	SK-41	〃	埴	円盤高台の底部破片。外底面には回転ヘラ切り離し痕が残る。内面は回転ナデ仕上げ。内面はぶい黄橙色、外面はぶい橙色を呈する。胎土は精良。	R-21	〃
	6	〃	〃	〃	〃	円盤高台の底部破片。外底面には回転ヘラ切り離しの痕跡が残る。内外面とも黄橙色。図版19-7。	R-2	〃
	7	〃	〃	〃	〃	円盤高台の底部破片。内面はナデ仕上げ。内面は浅黄橙色、外面はやや灰色みをおびた色調。内外面とも調整不明。	R-53	〃
図15	1	I-4区	SP-49	須恵質 土器	壺	亀山焼き。口縁部破片。胴部外面には格子のタタキ目が残る。内外面とも灰色。図版19-6。	R-5	〃
	2	〃	SP-49 ①層	土師器	土鍋	口縁端部の小片。内面は茶褐色、外面は黒褐色。胎土には径0.2~0.5cmの小礫がやや多く混じる。	R-7	〃
	3	〃	〃	石製品	敲石	砂岩の重円礫を利用。一端の側面に敲打痕が残る。図版19-10。	R-6	〃
図16	1	I-3区	SP-48	土師器	坏	推定口径15cm。内外面ともに横ナデ仕上げ。内外面ともにぶい橙色を呈する。図版19-8。	R-60	〃
	2		攪乱部	須恵質 土器	不明	SK-5を切る後世に掘り込まれた小穴から出土。内面には回転ナデの痕跡が見られる。内外面ともに白色を呈する。図版19-9。	R-70	〃
	3	I-3区	SP-59	土師器	坏	円盤高台の底部破片。外底面にはヘラ切り離しの痕跡が残る。内外面とも橙色。轆轤は反時計回り。	R-4	〃
図17	1		攪乱部	白磁	碗	中国白磁。輪高台の破片。外面にはヘラケズリを施す。胎は灰白色を呈する。釉はごくわずかにかかっている。	R-115	〃
	2		〃	土師器	埴	底部破片。内外面ともに淡黄色を呈する。器面が荒れ、内外の器面ともに調整は不明。	R-110	〃
	3		〃	〃	皿	平底。外面は内湾気味に外傾する。器面が荒れ、調整は不明。内外面ともに淡黄色を呈する。	R-91	〃
	4		〃	〃	土鍋	三足付き土鍋の脚部破片。指頭痕が残る。黄褐色を呈する。	R-95	〃
	5		〃	〃	壺	胴部破片。外面右下斜めに細かいタタキを施す。内面は灰黄褐色、外面上部は明褐色、下部は暗褐色を呈する。胎土には径0.1~0.3cmの砂礫が多く混じる。	R-98	〃
	6		〃	石製品	砥石	白色泥岩製。一部欠損。図版19-11。	R-27	〃

III 樽味遺跡 7 次調査の記録

調査番号 00201
 調査面積 170m²
 調査期間 2002年 4 月 3 日～5 月 23 日
 調査原因 農学部 2 号館改修工事
 調査担当 田崎博之
 調査補助 宮崎直栄

7 次調査では、表 5 に示すように、竪穴式住居跡 4（Ⅱ区で竪穴式住居跡と確定できなかった遺

構 1 を含む）、掘立柱建物 1、土壙 9、溝 3、自然河道 2、土器溜まり 1、柱穴・小穴 63 が検出され、弥生時代・古墳時代・中世の遺物が出土している。調査に当たって、Ⅰ区で出土した遺構には 1～89、Ⅳ区の出土遺構には 101・102 の遺構番号を付して調査を進めた。また、前述したように、樽味団地の各所にⅠ区～Ⅴ区の調査区が散在し、しかも出土遺構の分布密度も異なる（図 4）。7 次調査については、調査区ごとに報告する。

1 I 区の調査

Ⅰ区は樽味団地の正門西にある守衛室西側から農学部 2 号館までをつなぐ電気・通信管路部分である。細長い調査区であるため、平面直角座標系第Ⅳ系を利用して調査区を、5 m ごとに南から北へ向かってⅠA～ⅠJ 区に区割りした（図 18）。

ⅠA 区は、農学部本館建物際の Y = -65285 以西。ⅠB 区は、2 号館に平行する東西方向の Y = -65285～-65290 の部分。ⅠC 区は、管路が折れ

る Y = -65290～-65295、X = 92935～92940 の区域である。ⅠD～ⅠJ 区は南から北へ、X = 92940～92945 間をⅠD 区、X = 92945～92950 間をⅠE 区、X = 92950～92955 間をⅠF 区、X = 92955～92960 間をⅠG 区、X = 92960～92965 間をⅠH 区、X = 92965～92970 間をⅠI 区とした。そして、ⅠJ 区は北端の L 字形に管路が折れる X = 92970 以北、および Y = -65295 以西の区域である。

表 5 7 次調査出土遺構一覧表

	遺構の種別	出土遺構数	遺構名
Ⅰ区	竪穴式住居跡 (SC)	3	SC-17・28・50
	掘立柱建物 (SB)	1	SB-77 (SP-54・56 で構成)
	土壙 (SK)	9	SK-1・7・19・51・55・61・63・64・69 (SK-55・61 は風倒木痕)
	溝 (SD)	2	SD-8・18
	自然流路 (SR)	1	SR-13
	土器溜まり (SX)	1	SX-29
	柱穴もしくは小穴 (SP)	63	SP-2～6・11・12・14・15・20～24・26・27・30～48・53・54・56～60・65～68・70～71・74～76・78～89
Ⅱ区	竪穴式住居跡？	小範囲の深掘り部分での確認のため、遺構番号を付さず。	
Ⅲ区	遺構・遺物は出土していない。		
Ⅳ区	溝 (SD)	1	SD-102
	自然流路 (SR)	1	SR-101
Ⅴ区	遺構・遺物は出土していない。		

また、調査に当たっては、大講義棟や自転車置き場への通路を確保するために、I A～I F区の調査を先行し、その後I A～I C区を埋め戻し、その上でI G～I J区の調査を進めることとした(図版20-1～3)。

(1) 層序と遺構・遺物の概要

1) 層序

前述したように、調査区全域を一気に発掘できなかつたため、SR-13の最上層に堆積する土層(後述するSR-13①層と②層)をⅢ層と誤認するなどの混乱が生じた。そこで、I区の調査の最終段階に、層序関係の再検討を行い、現地で層序番号や出土遺物の取り上げ層序の読み替えを行った。I区の層位は、以下の通りである(図18)。

I層：表土層にあたる瓦礫を含む造成土。

II層：造成以前の近世～近代の水田層で、上部の灰オリーブ色砂質シルトの耕作土層にあたるII-1層と、下部の同質・同色であるがマンガンが沈着した床土層にあたるII-2層に分層できる。

Ⅲ層：I B～I F区では、後述するSR-13埋土①層を挟んで、Ⅲ-1～Ⅲ-2層とⅢ-3層に分層できる。

Ⅲ-1層は暗灰黄色砂質シルト、Ⅲ-2層は砂礫が多く混じる暗灰黄色砂質シルトである。Ⅲ-1～Ⅲ-2層は、Ⅲ層に区分したが、土色はII層に近似し、層序的にはSD-13の上部に堆積した土層で、本来II層として分層することが適当である土層である。また、土質的には水田層の可能性が高い。また、Ⅲ-1層とⅢ-2層からは、弥生時代～中世までの遺物が混在する状態で出土している。細片化したものがほとんどであるが、弥生時代中期～後期の甕底部片、古墳時代後期の須恵器坏身口縁部片、7世紀後葉の須恵器高台付坏の高台部片、8世紀中葉の土師器高台付坏の高台部片・須恵器坏蓋口縁部片、古代の黒色土器の埴口縁部片、中世の土師器脚部片・土鍋脚部片など、比較的大形の破片も含まれる。他に砥石がある。

Ⅲ-3層は、暗褐色砂質シルトで、下半部はIV層の砂礫を含む褐色シルトが混じり、IV層へ漸移的に移行する。I G～I J区のⅢ層は、土質・土色の特徴がⅢ-3層と共通し、これに対応する堆積物と考えられる。Ⅲ-2層上面で遺構検出に努め、中世以降の灰褐色系の埋土をもつ土壌・小穴を確認できた。Ⅲ-3層中から出土する遺物は、古墳時代後期の須恵器・土師器が圧倒的に多いが、これに弥生土器甕の底部片、古代～中世の土師器皿、土鍋の脚部片、緑釉陶器片が混じる。

IV層：小指先～拳大の円礫や小礫が多く混じる褐色シルトで、基本層序IV層でも下部を構成する堆積物である。IV層上面で、Ⅲ層を掘り下げ中に見逃した灰褐色系の埋土をもつ中世の小穴の一部と、黒褐色～暗褐色の埋土の古墳時代～古代の土壌・小穴・自然河道を検出した。IV層自体には遺物は含まれていない。

V層：SR-13はIV層下に堆積したV層まで削り取っている。SR-13下半部の壁面では、標高49.5～50.0mで、人頭大の花崗岩の円礫が混じる褐色の礫層であるV層を確認できた。V層からは遺物は出土していない。

2) 出土遺構と遺物の概要

I区で出土した遺構には、1～89の遺構番号を付したが、この中で、9・10・16・25・49・52・62・72・73号遺構は、他の遺構の埋土の一部を誤認したり、重複して遺構番号を付したりしたために、欠番とした。したがって、I区で検出した遺構の総数は81遺構である。

種別ごとには、竪穴式住居跡3(SC-17・28・50)、掘立柱建物1(SB-77)、土壌9(SK-1・7・19・51・55・61・63・64・69)、溝2(SD-8・18)、自然流路1(SR-13)、土器溜まり1(SX-29)、小穴もしくは柱穴63である(表6)。

さらに、これらは、埋土の特徴から、以下のA～Dの埋土をもつ遺構に分類できる。

A：やや白っぽく光沢のある灰色シルト質土(SK-1・7, SP-2～6・11・12・81), 灰

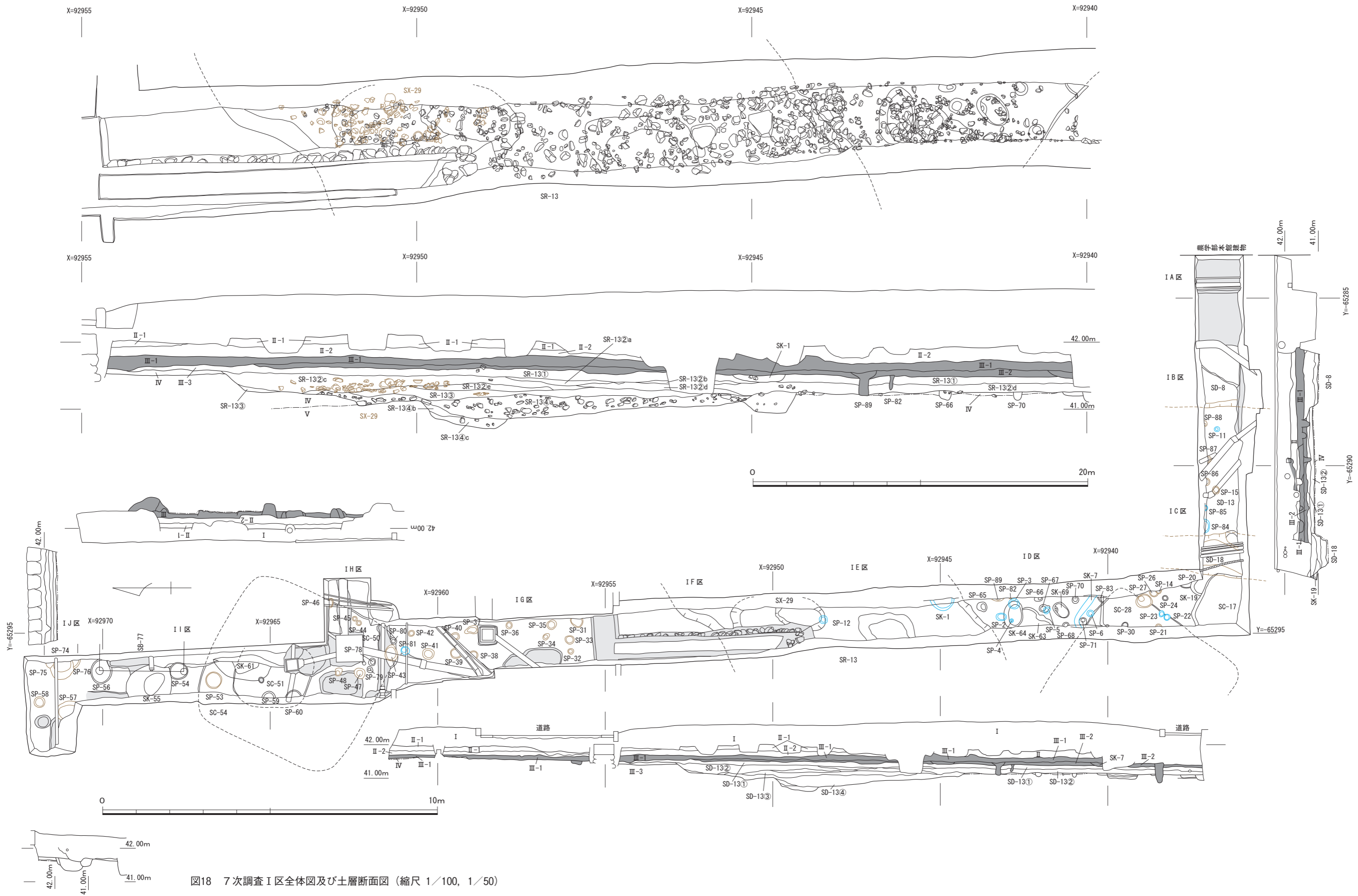


図18 7次調査I区全体図及び土層断面図 (縮尺 1/100, 1/50)

色みをおびた褐色砂質シルト質土ないし暗褐色シルト(SP-22・23・84・85)の埋土をもつ遺構。また、炭化物小片を埋土中に多く含む点が共通する。この中で、SK-1・7, SP-2~6・11・12はⅢ-1層を掘り下げ中に検出され、SP-84・85は調査壁面の観察でⅢ-1層を切り込むことを確認できた。層位関係から近世以降の遺構である。

B: 褐灰色の砂質シルト(SP-40・42・43~47・57)およびシルト(SP-31~35・37・39・41・48・74~76・89), 灰色みをおびた暗褐色土(SD-8上部, SP-21・27), 灰色みをおびる黒褐色砂質土(SP-14・15・88), 灰褐色砂質シルト(SP-86), 褐灰色シルトが少量混じる暗褐色シルト(SP-36・38)など、灰色みをおびる埋土をもつ遺構である。この他、灰褐色微細砂が混じって全体に灰色みがかった埋土のSD-18がある。

これらの遺構は、SD-18がSR-13の埋土①層下面から掘り込まれ、SC-17を切り、調査区北壁面でSK-19を切る。また、SP-74はⅢ層を切り、SP-75・76はⅢ層上面、SP-82・87はⅢ-2層下面、SD-8とSP-89はⅢ-1層とⅢ-2層の層界部から掘り込まれている。SP-21はSR-13の埋土①層を切って掘り込まれる。加えて、白磁碗の口縁部片1点(SP-40), 黒色土器(SP-21・33・39・48), 壺や皿と考えられる中世の土師器片(SP-26)が出土し、SP-74~76からは糸切り離し底の土師器皿が出土している。以上の層位関係と出土遺物から古代後半期~中世の遺構と考えられる。

C: 黒色シルト(SC-50, SP-80), 黒褐色シルト(SC-28, SK-51, SP-30・54・59・78・79), 黒褐色砂質シルト(SP-56), 暗褐色砂質土(SK-19), 暗褐色シルト(SP-60), 暗褐色シルト質土ないしは茶褐色砂質シルト質土(SC-17)など、黒みをおびたシルト~砂質シルトを主体とする埋土をもつ遺構。また、SR-13の下層で検出した遺構も、淡い褐色砂質シルト質土のSK-64・69, SP-65~68・70・71, 暗褐色砂質シルト質土のSK-63, 黄褐色砂質土に黒褐

色砂質土ないしは暗褐色シルトの小塊が混じるSP-20・24と、黒みをおびたシルト~砂質シルトを主体とする点では共通する。

出土遺物は、弥生時代中期~後期の土器もあるが、古墳時代後期の土師器や須恵器が大半で、古代以降の遺物は出土していない。古墳時代後期以前の遺構である。

D: SK-55・61は、クロボク土のサラサラした質感でしまりがいい埋土の遺構。埋土の堆積状況から風倒木痕と考えた。出土遺物はないが、SK-55が古墳時代後期のSB-77の柱穴であるSP-54, SK-61が古墳時代後期のSC-50やSK-51に切られている。

この他、層位関係や出土遺物から古代~中世と考えられる遺構にも、粘性が強い黒褐色粘質土を埋土とするSP-87, 暗褐色シルトのSP-53・58, 黄褐色砂質土と褐色砂質シルト質土が縞状に互層堆積するSP-26がある。例外的な埋土をもつ遺構である。また、個々の遺構を報告する際にも述べるが、遺構が重複するため、Aの埋土をもつ遺構をⅣ層上面でやっと確認できた場合もある。

以上、埋土の特徴と出土遺物から近世以降と考えられる遺構には、SK-1・7, SP-2~6・11・12・22・23・81・84・85がある。また、灰色みをおびる黒褐色砂質土、ないしは褐灰色シルト質土を埋土とする遺構である古代~中世の遺構は、I B~I F区に集中する。そして、古墳時代以前の遺構には、竪穴式住居跡(SC-17・28・50), 掘立柱建物(SB-77), 土壇(SK-19・51・63・64・69)および風倒木痕(SK-55・61), 自然流路(SR-13), 土器溜まり(SX-29), 小穴(SP-20・24・30・54・56・59・60・65~68・70・71・78~80・83)がある。

(2) 出土遺構と遺物の記録

1) 竪穴式住居跡

I C区の管路が折れ曲がる部分でSC-17, I C~I D区でSC-28, I H・I I区でSC-50の3棟の竪穴式住居跡が出土した。後述するように、いずれも古墳時代後期6世紀後半代の住居跡である。

SC-17 (図19~21, 図版22~24・33)

I C区の管路が折れ曲がる部分で、SR-13②層を除去後に検出した。隅が丸いやや矩形の竪穴式

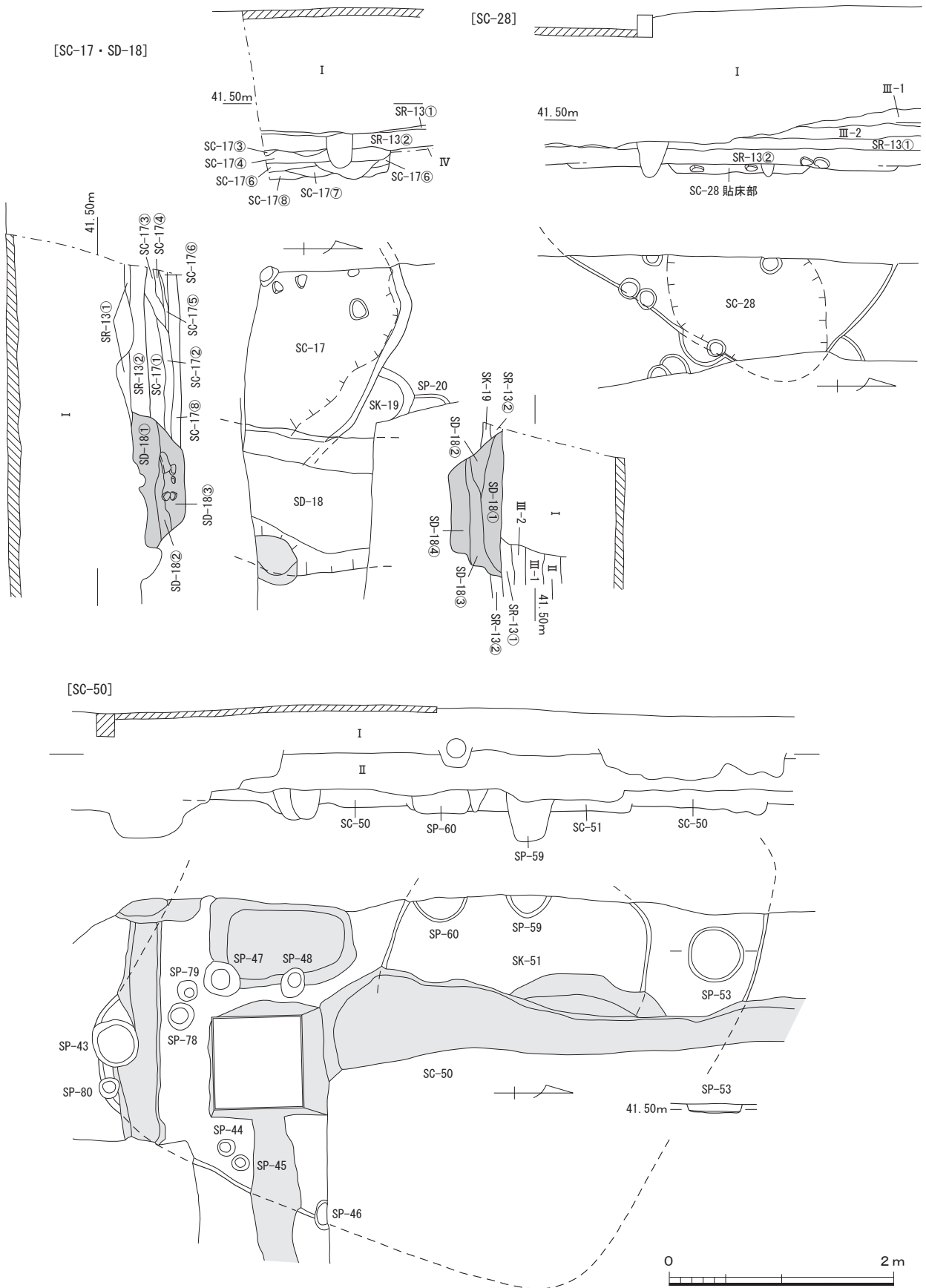


図19 7次調査I区SC-17・28・50, SD-18実測図(縮尺1/50)

住居跡と考えた。SD-18に切られる。調査区西壁面では、SR-13②層上面から掘り込まれた炭化物が多く混じる暗褐色の小穴が埋土を切り込み、SC-17の埋没途中に掘り込まれた暗褐色シルトの埋土を皿状の小穴が認められる。貼床が施されるが、柱穴などは調査範囲が狭いこともあり確認できなかった。

①～⑥層は埋土、⑦・⑧層は貼り床部分である。①層は暗褐色シルト質土で、にぶい黄褐色土の小指～親指先の小塊が点々と混じる。②層は茶褐色砂質シルト質土で、暗褐色シルトやにぶい黄褐色土の親指先の小塊が点々と混じる。③層は暗褐色シルト質土を主に、薄いレンズ状のクロボク土やにぶい黄褐色土層が縞状に互層堆積する。④層は暗灰褐色と暗褐色のシルト質土が縞状に堆積した部分である。⑤層は調査区南壁面だけでみられる薄い暗褐色シルト層である。⑥層は床面を覆う暗褐色砂質土層。③～⑤層は、堆積状況から、西側から流れ込んだ流水によって堆積したものと考えられる。貼り床部分の⑥層は、暗褐色シルトで、クロボク土やにぶい黄褐色土の小指の小塊が多く混じる。⑦層は褐色砂質シルトで、上部には暗褐色砂質シルトやにぶい黄褐色土の薄くひしゃげた小塊がほぼ水平に集中する。

埋土中から出土した遺物には須恵器及び土師器があるが、胴部の小片や細片がほとんどで、出土量も少ない。その中で、図化できた遺物として、須恵器の蓋と高坏がある（図20-1・2）。1は径から短頸壺の蓋と考えた。2（図版33-7）は、坏蓋とも考えたが、器高が低いことから、高坏の坏部と考える。口縁端部内面に浅い沈線が1条めぐる。また、花崗岩の円礫を用いた台石が出土している（図21）。この他、小片のため図示できなかったが、貼り床部分の⑥層からも須恵器坏身の口縁部片が出土している。以上の遺物は、いずれも古墳時代後期6世紀後半代に比定できる。

出土遺物と埋土の特徴から、SC-17は古墳時代後期6世紀の住居跡と考える。

SC-28（図19～20、図版22・23・33）

I C区とI D区の境界部に位置する隅丸方形の竪穴式住居跡である。埋土は、SD-13の埋土②層に類似する砂礫まじりの黒褐色シルト質土で、若干砂質が弱い。床面の中央に不整形の掘り込みが

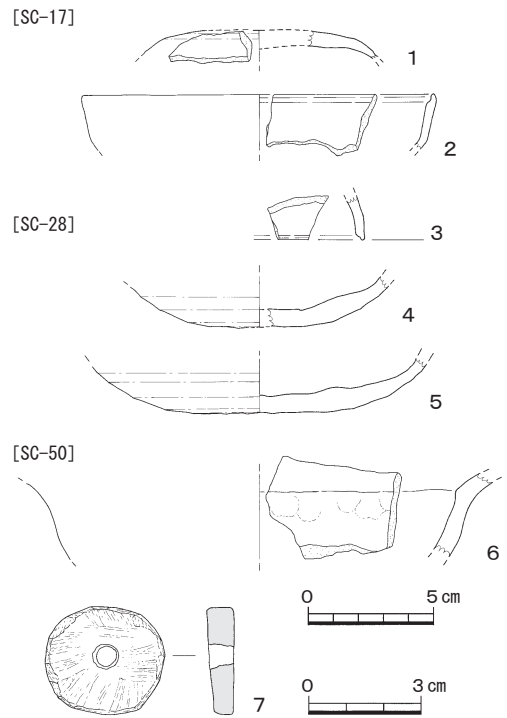


図20 7次調査 I 区SC-17・28・50出土遺物実測図（縮尺 1/3, 1/2）

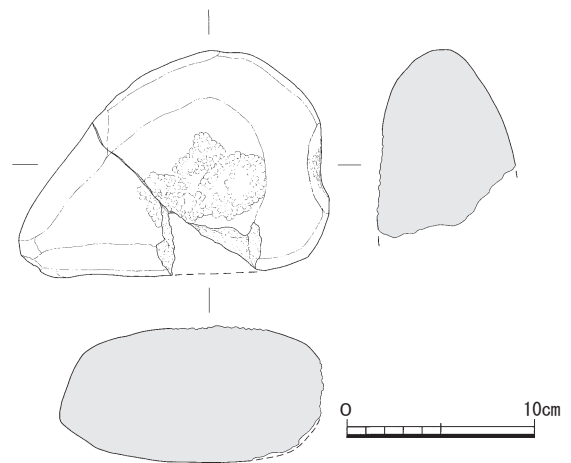


図21 7次調査 I 区SC-17出土遺物実測図（縮尺 1/4）

あり、貼り床地業と考えた。SP-30が床面から掘り込まれているが、柱穴とするには小さすぎる。埋土中から拳大の花崗岩の円礫が多く出土し、円礫に混じりながら土師器や須恵器が出土した（図20-3・4）。3は須恵器の蓋で、口縁端部内面に横ナデで浅い段をめぐらす。4は、底部片で、内底面に不定方向のナデを施し面ができていることと、器壁の厚さと径から、短頸壺またはハソウの

底部と考えた。この他、弥生土器あるいは古墳時代後期の土師器や須恵器胴部などの小片及び細片が30～40点出土している。また、貼り床部分から、図20-5(図版33-8)の須恵器壺の底部片に加えて、弥生土器あるいは古墳時代後期の土師器の胴部小片、古墳時代後期の須恵器胴部小片など計7点が出土している。

以上の出土遺物は、いずれも古墳時代後期6世紀後半代に比定でき、埋土の特徴をあわせて、SC-28は古墳時代後期6世紀の住居跡と判断できる。

SC-50 (図19・20, 図版33)

I H・I I区で、SP-48・SK-51などを挟んで確認できた落ち込みラインをつなぎ、一辺5mほどの隅丸方形の竪穴式住居跡を推定した。調査区壁面で、Ⅲ層の途中から、掘り込みを確認できた。床面は2～5cmほどの緩やかな凹凸がある。床面でSP-78・79を検出したが、小さく柱穴とは考えられない。埋土は黒色シルトで、埋土最上部を中心として、暗褐色シルト・にぶい黄褐色シルトの親指から径1～4cmの塊が斑文状に混じる。

SC-50から出土した遺物は少ない。SK-51よりも北側の埋土中から、弥生土器や古墳時代後期の土師器の甕胴部片が出土。SP-48よりも南側の埋土中からは、古墳時代後期の土師器鉢の胴部片(図20-6)や滑石製有孔円盤(図20-7)など数点が出土している。7(図版33-9)は片岩製で、2.85×3.2cm、厚さ5～7mmの楕円形を呈する。中央に片側穿孔で径7mmほどの小孔を穿つ。上面及び側面には線条痕が残る。

以上、SC-50は、出土遺物が少ないが、埋土の特徴とあわせ、古墳時代後期6世紀後半代の住居跡と考える。

2) 掘立柱建物

SB-77 (図23, 図版28・33)

I I区北半部でSP-54と、I I区とI J区の境界部でSP-56を、Ⅳ層上面で確認した。やや深さが異なるが、ほぼ同径の立柱痕跡を確認でき、近接して他に柱痕跡を持つ小穴がみあたらないので、SB-77とした(図23, 図版28-1～3)。柱間は2.5mを測る。

SP-54は、60×75cmの楕円形の掘り形を持ち、径18～20cmの立柱痕跡を検出した。底面は柱を据

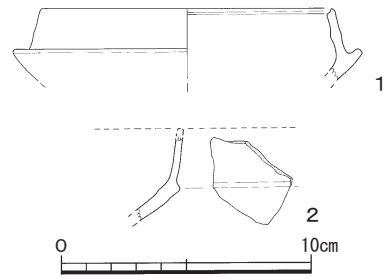


図22 7次調査I区SB-77, SP-54出土遺物実測図
(縮尺 1/3)

えた部分がわずかに窪む。柱痕跡の①層は、黒褐色シルトで、にぶい黄褐色シルトの小指先大の小塊が上半部を中心として混じる。②・③層は掘り形埋土。上部の②層は、にぶい黄褐色シルトの親指先大の小塊が多く混じる黒褐色シルトで、下半部の③層には、黒褐色シルトの中ににぶい黄褐色シルトの幅3～5cmの平たくひしゃげた塊が非常に多く混じる。

立柱痕跡の①層からは、古墳時代後期の土師器胴部の小片1点が出土している。また、掘り形埋土である②・③層からは、土師器の胴部小片が10点、古墳時代後期の須恵器坏身の口縁部片1点が出土(図22-1, 図版33)。口縁端部内面に浅い段がめぐる。受け部先端部上面には、蓋との重ね焼きを示す自然釉が幅1mmほど付着する。さらに、たち割りを行った埋土西半部分からは、土師器胴部片に混じって、古墳時代後期の須恵器高杯の口縁部片が出土した(図22-2)。焼成不良の須恵器で、内外面ともに荒れが進み、器面調整は不明である。

SP-56は、62×70+a cmの不整な楕円形の掘り形で、直径20cm前後の立柱痕跡を掘り形の南壁寄りで確認できた。掘り形底面は柱を据えた部分が少し窪む。立柱痕跡である①層は黒褐色砂質シルトで、小指先大の平たくひしゃげたにぶい黄褐色の小塊がごくわずかに混じる。掘り形内の埋土上部にあたる②層は、黒褐色砂質シルトに小指先大のにぶい黄褐色の小塊が多く混じる。下半部の③層は、さらににぶい黄褐色の小塊が多く混じるとともに、塊も大きくなる。立柱痕跡の①層から古墳時代後期の土師器、掘り形埋土である②・③層からは弥生土器及び古墳時代後期の土師器の胴部小片が10点ほど出土している。

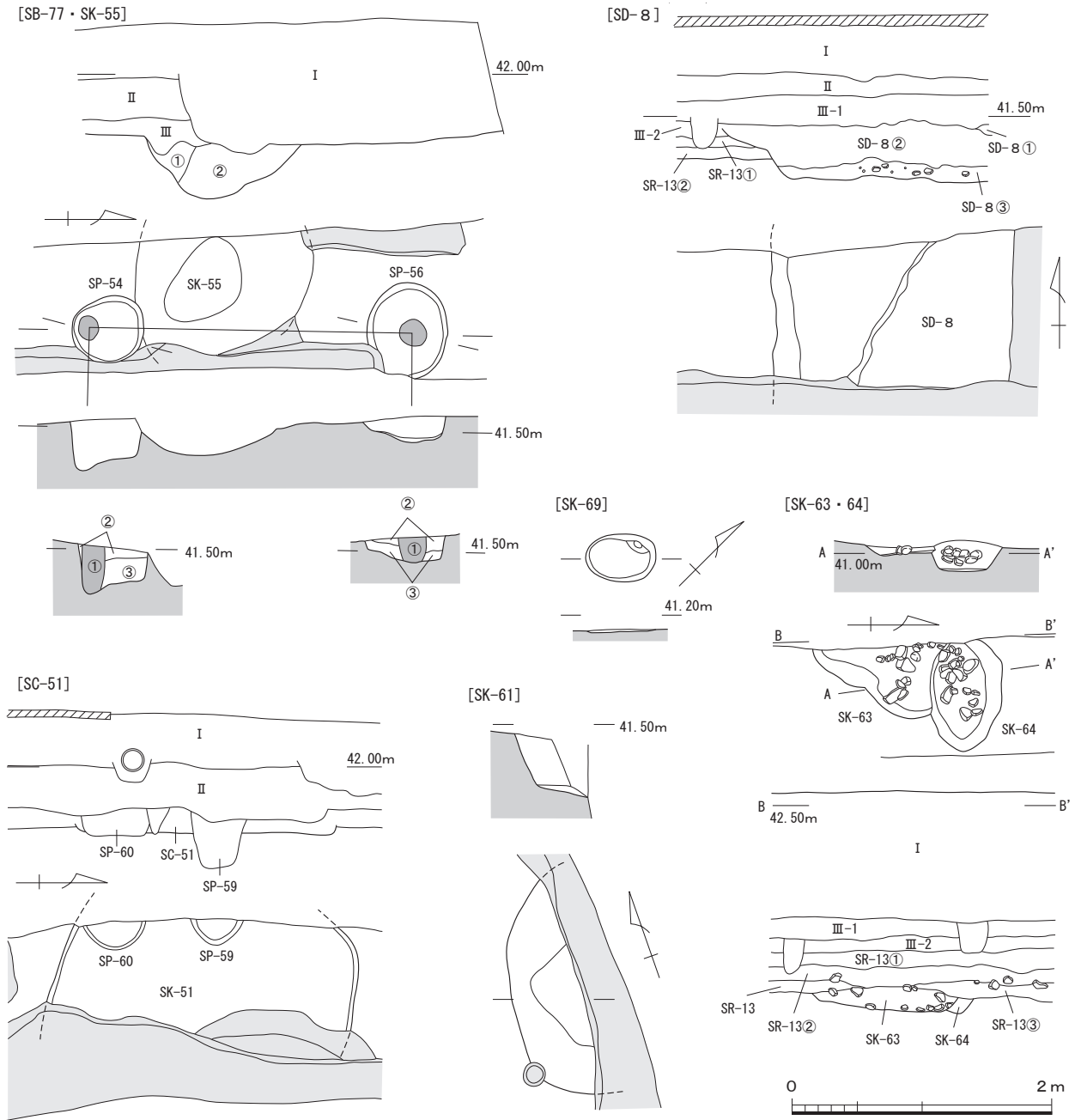


図23 7次調査 I区SB-77, SD-8, SK-51・55・61・63・64実測図(縮尺 1/50)

以上、埋土の特徴と出土遺物から、SB-77は古墳時代後期に比定できる。

3) 溝

I B区でSD-8, I C区でSD-18の南北方向にのびる溝が出土している。

SD-8 (図23・24, 図版22~24)

I B区で出土した南北方向にのびる溝である。III-1層とIII-2層の層界部分から掘り込まれてお

り、SR-13の埋土(①・②層)を切る。埋土上部はIII-2層と近似するやや灰色みをおびた暗褐色シルト質土で、7cmほど掘り下げた埋土下部になると、かなり砂礫が多く混じりはじめ、底面には暗灰褐色砂層が幅20cm前後の帯状に南北に堆積する。埋土下部の砂礫層では、粗砂や細砂の薄いレンズ状のラミナが確認でき、流水があったことを示す。

出土遺物は、埋土上部を中心として、古墳時代

後期と考えられる須恵器・土師器や10世紀～11世紀前半の土師器の小片が出土。埋土下部の砂礫層上面からは、拳大の花崗岩円礫が出土している。古墳時代後期の遺物が多いが、埋土中部・上部から古代～中世の土師器が少量ながら出土している(図24-1～5)。1は埋土上部から出土した黒色土器である。両黒土器の壙の口縁部片。口縁端内面には細く浅い沈線が1条めぐるとはならず、調整の際に生じたものか？ 2～5は埋土中部から出土している。2は土師器壙の口縁部片。口縁部直下を強く横ナデするため、わずかに反転する。3は土師器の坏の底部片。全周の1/6ほどの破片のため、底径は不確実である。4は土師器壙で、円盤高台の底部片である。全周の1/8～1/9の破片のため、底径は不確実。5は須恵器の頸部下半の破片である。頸部の付け根付近は、折り曲げに際して強い横ナデを施すため、器面には凹線様の窪みがめぐるとはならず、調整の際に生じたものか？

出土遺物からSD-8は10世紀～11世紀前半、開削時期は10世紀代に遡ると考える。

SD-18 (図19・24, 図版22～24・33・34)

I C区に位置する。ほぼ南北方向にのびる溝で、SR-13①層を除去後、SR-13の埋土②層を掘り下げ中に確認した。調査区北壁面では、SR-13の埋土①層下面から掘り込まれている。また、SC-17を切り、調査区北壁面でSK-19を切ることを確認できた。溝の断面形は逆台形で、溝幅は1.3m前後、検出面からの深さは45cmほどを測る。

埋土上部には、砂礫混じりの暗褐色砂質シルトの①層、暗褐色砂質シルトに薄いレンズ状の灰色細砂層がみられる②層がみられ、下部には灰褐色微細砂層の③層、直径3～5cmの花崗岩や砂岩の円礫が多く混じる砂礫層が堆積する。

埋土中からは、古墳時代後期～古代の須恵器・須恵質土器・土師器の破片が出土している(図24-6～9)。出土量も少なく細片が多いが、6(図版34-1)・7(図版34-2)は埋土下部から出土した須恵器である。6は坏あるいは長頸壺の蓋。天井部外面は回転ヘラケズリ、内面及び口縁部付近は回転ナデを施す。7は長頸壺の可能性もあるが、胴径から甕と考えた。胴部に1条の細い沈線をめぐらし、その下方にヘラ状工具を押捺して短斜線文を帯状に施す。外面には自然釉が残

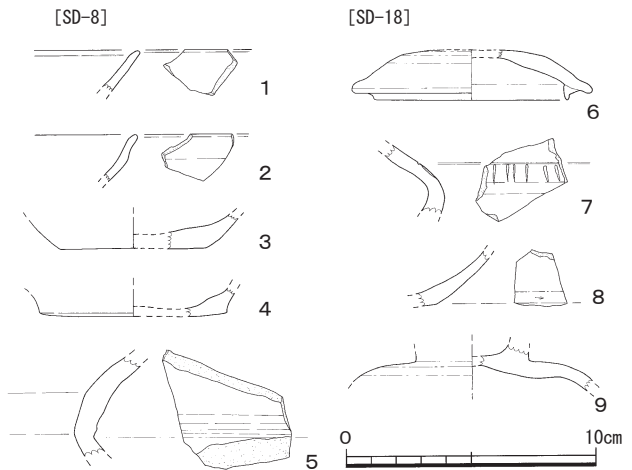


図24 7次調査I区SD-8・18出土遺物実測図
(縮尺 1/3)

る。外面は回転ヘラケズリの後に横ナデで仕上げている。内面は横ナデ仕上げである。ともに古墳時代後期に比定できる。この他、埋土下部から出土した遺物には古墳時代後期の須恵器や土師器がほとんどであるが、古代の土師器坏の胴部と考えられる細片が2点ほど混じる。8・9(図版33-12)は東側の壁際から出土。8は古代の土師器の坏である。外面は回転横ナデ仕上げを施すが、外底面には回転ヘラ切り離し痕が残り、回転ヘラケズリは底部側面にも及ぶ。4は古代の須恵質土器。天井部内面に不定方向のやや乱雑なナデを施すので、蓋と考えた。天井部外面は回転ヘラケズリの後に横ナデ調整で仕上げている。

以上の出土遺物、SC-17との重複関係、SR-13との関係から、SD-18は10世紀～11世紀前半の水路与判断できる。

4) 土壌

I区では、SK-1・7・19・51・55・61・63・64・69の9基の土壌が出土した。この中で、SK-55・61は風倒木痕である。

SK-1 (図18, 図版24-2・3)

I D区とI E区の境界部分に位置する。東半部分は調査区外にのびるが、径80cm前後のほぼ円形の浅い土壌と考えられる。Ⅲ-1層を5cmほど掘り下げた時点で、SP-2～5とともに、掘り形を検出できた。埋土は、やや灰青色みをおびたシルト質土で、わずかに光沢をもつ。Ⅲ-1層が、鉄

分が沈着してわずかに赤みをおびるのに対して、光沢があるシルト質の埋土である。調査区壁面の観察では、Ⅲ-1層から掘り込まれている。埋土Aの遺構であり、近世以降の土壌と考える。

SK-7 (図18・25, 図版24-2・3)

I D区南半部に位置する。SK-1と同じく、Ⅲ-1層を掘り下げ中に検出した。調査範囲が狭いため全体の形状は不明であるが、隅丸方形の深さ10cm前後の浅い土壌と考えられる。埋土は、灰青色みをおびたシルト質土で、わずかに光沢をもつ。小指先大の炭化物片が多く混じる。埋土中から須恵器・土師器の胴部小片が出土し、埋土下部からは土師器の坏の口縁部と底部の破片が出土した(図25-1・2)。1は土師器の小皿の口縁部片。内外面ともに横ナデ調整で仕上げられている。2は、胴部外面にはロクロ目が残る。内面は荒れが著しいために調整は不明である。1・2は10世紀に比定できる。しかし、SK-1と共通する埋土Aをもつ土壌で、近世以降の土壌と判断した。

SK-19 (図19, 図版23-1)

I C区の管路が北に向かって折れる部分で出土した。深さ16cm前後の小型土壌である。SR-13②層の下面で検出した。SC-17・SP-20を切り、SD-18に切られる。埋土は暗褐色砂質土で、にぶい黄褐色の小指先大の小塊が多く混じる。遺物は出土していないが、出土層位と埋土がCに分類できることから、古墳時代後期の遺構と考えた。

SK-51 (図23・25, 図版27-4)

I H区とI I区の境界付近に位置する。東側を攪乱で破壊され、西側は調査区外にのびるが、隅丸方形の土壌と推定できる。SC-50を切る。南北2.25mを測る。埋土は黒褐色シルトで、下半部を中心としてひしゃげた幅1~2cmのにぶい黄褐色シルトの小塊が多く混じる。

出土遺物には弥生時代中期、古墳時代前期と後期の遺物がある(図25-4~9)。5・6は遺構検出時に出土。5は、須恵器の高坏の破片、6は凹線文を施す弥生時代中期後葉の壺の口縁部片である。4・7~9は埋土中から出土。4は坏蓋もしくは短頸壺の蓋の口縁部片である。内外面ともに横ナデ調整を施す。横ナデによって口縁端部には小さな面がつくられる。7は古墳時代後期の「く」字形に屈曲する口縁部をもつ甕の破片であ

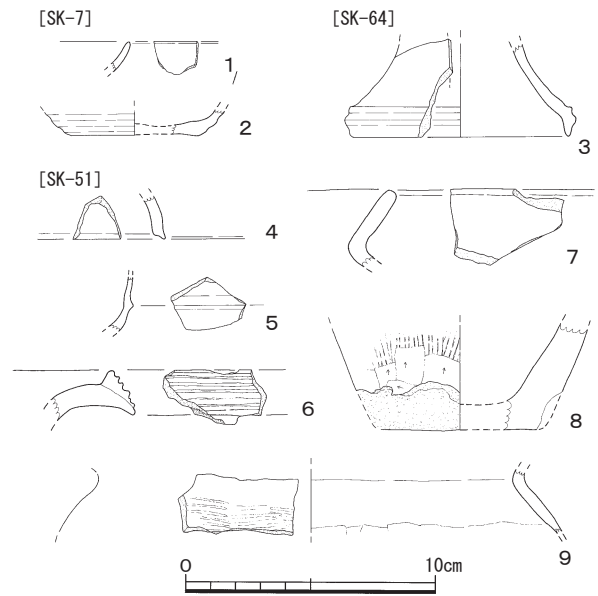


図25 7次調査I区SK-7・51・64出土遺物実測図
(縮尺 1/3)

る。内外面ともに横ナデ調整を施す。器壁の芯部には厚い黒色の黒化層が残る。8は弥生時代中期初頭の甕の底部片。底部側縁は一部剥落している。外面は目の粗い刷毛目調整を施した後、ヘラ状工具で強く押しつけるようなナデ調整を施す。9は古墳時代前期の甕の肩部片。薄でのつくりで、口縁部の屈曲部周辺は横ナデ調整を施す。外面には平行条線のタタキ目を施した後にナデ仕上げを行う。胴部内面はヘラケズリを施す。

以上、埋土から出土した遺物には、弥生時代中期と古墳時代前期の遺物が混じるが、古墳時代後期の須恵器蓋と土師器甕があり、Bに分類できる埋土をもつことから、SK-51は古墳時代後期の土壌と判断できる。

SK-55 (図23)

I C区の北半部で確認した。断面半月形の土壌で、SP-54に切られる。しまりのない軟らかいクロボク土の②層が詰まり、南端部ににぶい黄褐色シルトの大きな塊が混じる暗褐色シルト土の①層が挟まる。出土遺物はない。埋積状況から風倒木痕跡と判断した。

SK-61 (図23)

I I区に位置する。SC-50とSK-51の床面で検出した。東側を攪乱で破壊されているが、SK-55

と同じく、断面半月形の土壌である。埋土はクロボク土で、しまりが無い。風倒木痕と考えられる。出土遺物はない。

SK-63 (図23, 図版25-1)

I D区に位置する。SK-64に切られた不整形の土壌である。SR-13の埋土①・②層を除去後に掘り形を確認できた。検出面からの深さは16~18cmで、底面には小さな凹凸がある。掘り形内には砂岩や花崗岩の拳大の円礫が詰まり、埋土はSK-64と比べて黒みをおびた暗褐色砂質シルト土である。出土遺物はないが、層位と切り合い関係から、古墳時代後期の遺構と考える。

SK-64 (図23・25, 図版25-1)

I D区に位置する。長径85cm, 短径55cm, 深さ22cmほどの長楕円形の土壌である。SK-63を切る。SR-13の埋土①・②層を除去後に、SK-63とともに掘り形を確認した。埋土は淡い褐色砂質シルト質土で、中位~上部には砂岩や花崗岩の拳大の円礫が詰まり、その間から須恵器の高坏脚部片、土師器甕の口縁部や胴部片、弥生土器の胴部片が出土した。また、底面近くから、弥生土器や土師器の胴部片が出土している。その中で図示できたのは図25-3の高坏の脚部片だけで、埋土中位~上部から円礫に混じって出土した遺物である。「ハ」字形にひらく脚部で、脚部に凸線をめぐらし鉤状に屈曲させる。脚部に透かし穴を施すが、破片のために形状は不明である。出土層準と出土遺物から、SK-64は古墳時代後期の土壌と考える。

SK-69 (図23, 図版25-1)

I D区に位置する。長径55cm, 短径35cm, 深さ8cmほど浅い楕円形の土壌である。SR-13の埋土①・②層を除去後に、SK-63・64とともに掘り形を確認した。埋土は淡い褐色砂質シルト土で、埋土Cに分類できる。古墳時代後期と考えられる土師器の胴部小片10点ほどが出土した。埋土の特徴と出土遺物から、SK-69は古墳時代後期に比定できる。

5) 自然流路

SR-13 (図18・26~36, 図版26・27)

I B~I F区でⅢ-1・2層を掘り下げると、I F区以南に砂礫混じりの暗灰黄色砂質シルト

(後述するSR-13埋土①層)の広がりを確認できた。それを掘り下げた後、I F区中央部でⅢ-3層を切る落ち込みラインを検出できた。しかし、南側では対応するラインを検出できず、Ⅲ層が自然の落ち込みの可能性も考え、10cmごとに人工的に層位を区切り、前述の砂礫混じりの暗灰黄色砂質シルト層をⅢ-3層、I F区中央部以南の落ち込みを埋める黒褐色土層をⅢ-4・5層として調査を進めた。黒褐色土層を掘り下げると、I B~I D区中央部では基本層序のⅣ層があらわれ、I D区北端部でI F区中央部に対応する落ち込みラインを検出できた。この幅6~7mほどの間は、黄灰色粗砂と大量の拳大~人頭大の花崗岩・砂岩の円礫で埋積され、流水を示すラミナが発達している。そこで、自然流路SR-13として、以後、調査を進めることとした。しかし、混乱を避けるため、それまでⅢ-の3~5層に続け、黄灰色粗砂層をⅢ-5最下部、拳大~人頭大の花崗岩・砂岩からなる砂礫層をⅢ-5下砂礫層とし、調査終了後に、以下のようにSR-13埋土①層~④層に振り替えた。

- ①層：調査時にⅢ-3層とした砂礫混じりの暗灰黄色砂質シルトである。I F区中央部より南側全面に広がる。SR-13の最上面を覆う土層である。
- ②層：調査時にⅢ-4・5層として調査を進めた黒褐色土層。①層と同じく、I F区中央部より南側全面に広がる。さらに②a層~②e層に分層できる。
 - ②a層：砂礫まじりの黒褐色シルト層。
 - ②b層：薄くレンズ状に堆積する灰黄色粗砂層。
 - ②c層：I F区のSR-13が南に向かって落ち込む部分に堆積する黒褐色粘質シルト層。
 - ②d層：砂礫が多く混じる黒褐色砂質シルト層。灰黄色粗砂の薄いレンズ状のラミナを観察できる。
 - ②e層：②d層と同じく、砂礫が多く混じる黒褐色砂質シルトで、灰黄色粗砂のレンズ状のラミナを観察できる。
- ③層：調査時にⅢ-5最下部とした黄灰色粗砂層。

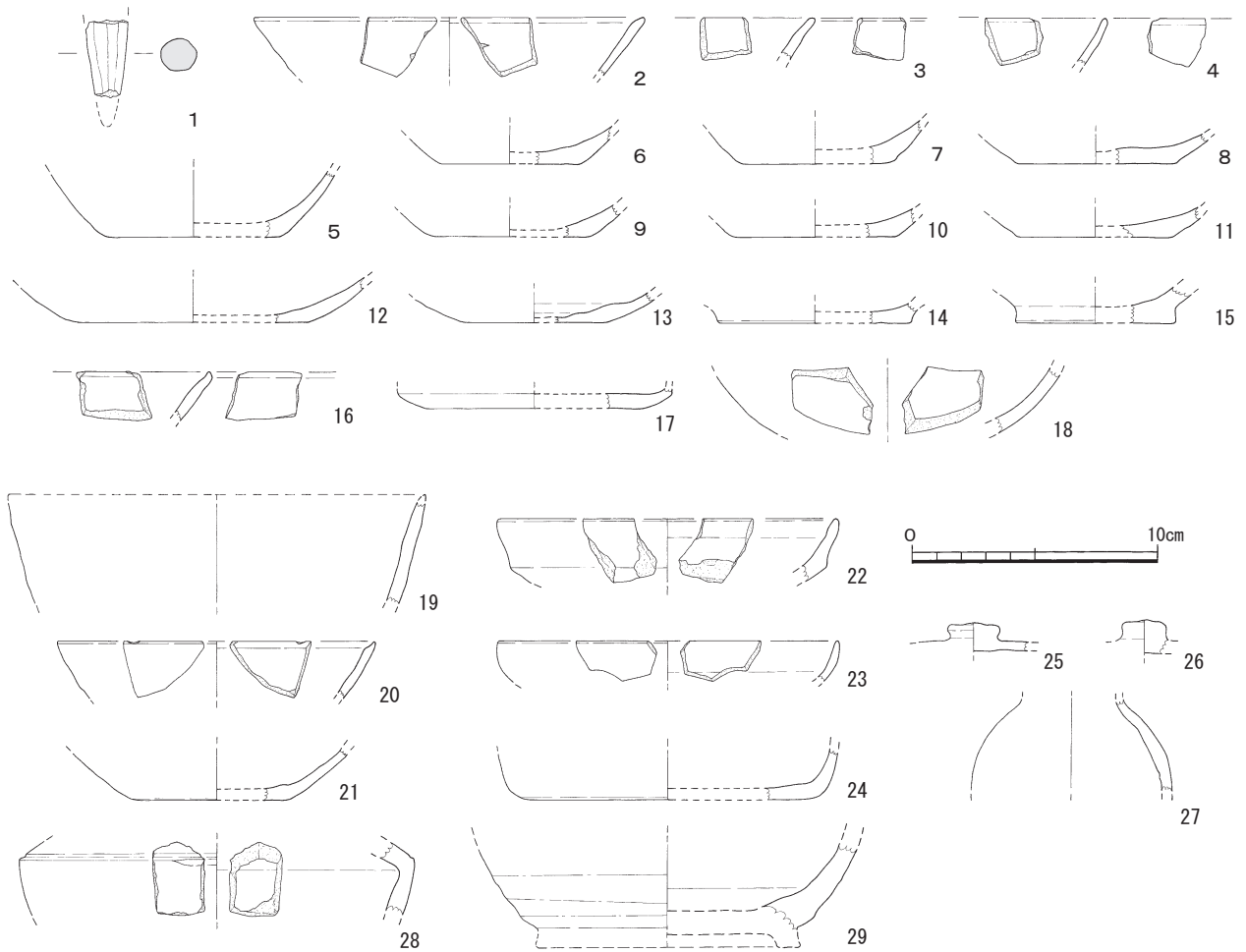


図26 7次調査I区SR-13①層出土遺物実測図1 (縮尺 1/3)

④層：調査時にⅢ-5下砂礫層とした拳大～人頭大の花崗岩・砂岩の円礫からなる砂礫層で、土石流による堆積物である。④a～④c層に分層できる。

この中で、SR-13の埋土上部にあたる①層と②層は、I F区より南側に広く分布する。出土遺物は古墳時代後期の遺物が圧倒的に多い一方で、古代～中世の遺物が少量混じる。当初、古代～中世の遺物は①・②層の掘り下げ中に見逃した小穴などに伴う遺物である可能性を考えたが、②層の下面で検出したSP-26やSP-27から中世の土師器が出土することから、①層と②層の堆積時期は古代～中世と判断した。

これに対して、埋土下半部にあたる③・④層は、I D区北端部～I F区中央部の幅6～7mほどの落ち込み内に堆積している。古墳時代後期の

土師器の甕・高坏・把手、須恵器の短頸壺、坏蓋、坏身、底部片、弥生時代後期中葉の甕底部片、砥石、緑泥片岩の破片など、弥生時代中期～後期と、古墳時代後期の遺物が出土している。古墳時代後期の遺物が圧倒的に多く、それ以降の遺物は含まれていない。また、②c層が堆積するSR-13が南へ向かって落ち込む部分には、完形に近くに復元できる須恵器・土師器が集中して投棄されていた。上流部から流されてきた弥生中期土器の小片も混じるが、一括して投棄された状況なので、土器溜まりSX-29とした。

こうした堆積物の分布状況と出土遺物から、SR-13は自然流路で、古墳時代後期に土石流によって③層と④層が堆積することで埋没し、その後、長期間、窪地の状態が続き、そこに古代～中世に①層と②層が堆積し、平坦な地形面となるも

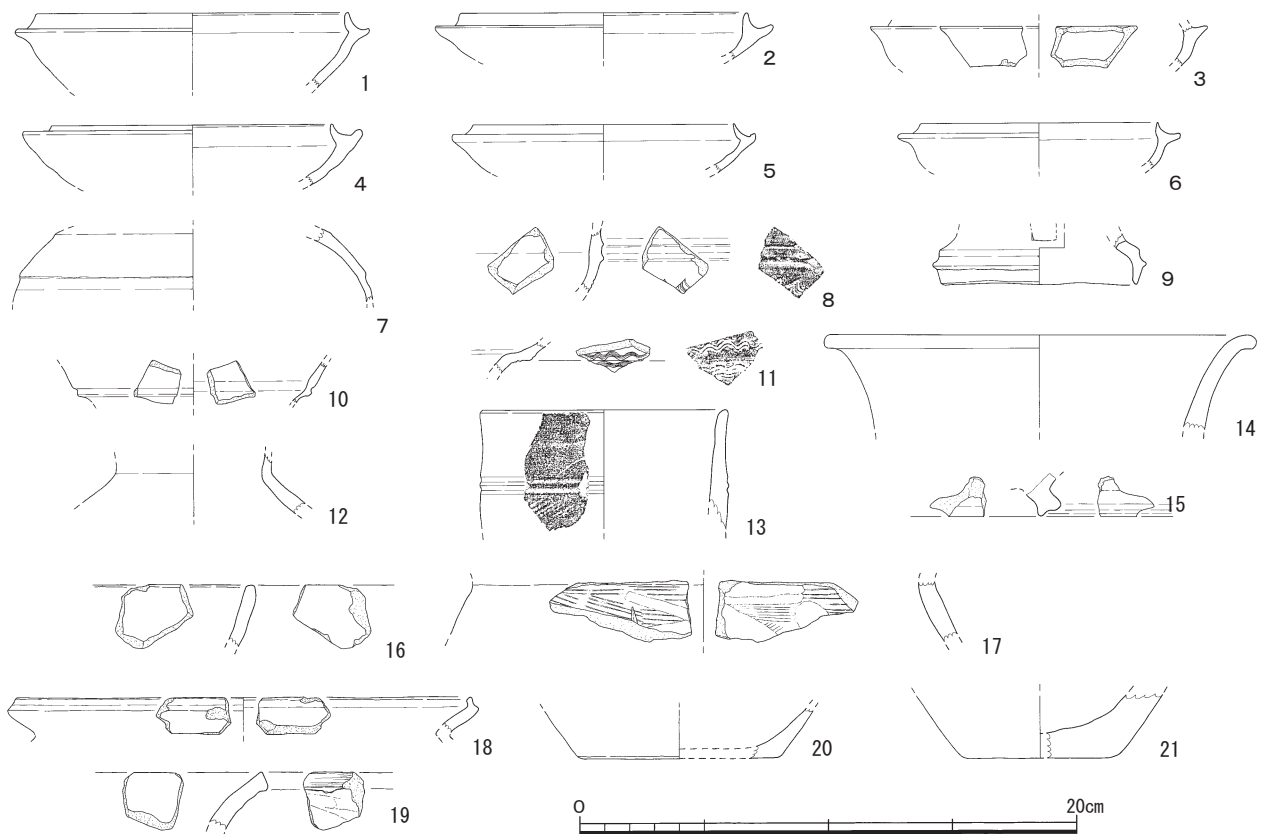


図27 7次調査I区SR-13①層出土遺物実測図2 (縮尺 1/3)

のと考えた。

以下、出土遺物を報告するが、埋土③層の遺物は出土範囲が限られSX-29としたもので、ここでは①・②・④層の出土遺物を報告する。

〔①層出土の遺物〕(図26・27, 図版34・35)

①層からは、古代～中世, 古墳時代, 弥生時代の遺物が出土している。その中でも古代～中世の遺物を図26に図示した。土師器, 土師質土器・緑釉陶器がある。

1は土師質土器の土釜の脚部片。丁寧なナデ調整で仕上げられている。13世紀後半以降に比定できる。

2～17は土師器。いずれも小片で、全形を復元しうる資料はないが、10世紀～12世紀前半の時間幅に収まるものと考えられる。坏・壺・皿が出土している。

2～15は土師器の壺ないしは坏である。その中でも2～4は口縁部片。2・3はやや外反, 4はやや内湾気味にのび, 端部は丸く収められてい

る。2は内外面ともに回転ナデ調整が施されている。3は内外面ともナデ仕上げ。4も回転ナデ調整が施されている。

5～15は壺もしくは坏の底部片。5(図版34-6)～7は平底からやや内湾する体部に至る。8～13は前者よりも外側にひろく体部をもつ。これらの外底面は器面が荒れ, 10・14・15は切り離し痕を特定できないが, 8には回転ヘラ切り離し痕が不明瞭ながら残る。また, 7もその可能性が高い。6・9・12は回転ヘラ切り離し後のナデを施している。さらに, 5・11・13はナデ仕上げ。5の胴部の内外面は回転ナデ調整が施されている。6の胴部外面は磨滅のため不明であるが, 内面はナデ仕上げされる。7の胴部の内外面は磨滅のため調整方法は不明。8(図版34-3)の胴部内外面は回転ナデ調整が施されている。9の胴部内面は回転ナデ調整。外面は磨滅のため調整は不明。10は胴部内外面ともにナデ仕上げ。11の胴部内外面には回転ナデ調整が施されている。12の胴部内外

面には回転ナデ調整。13(図版34-4)は胴部内外面ともに器面が磨滅しており、調整は不明。14・15(図版34-5)は円盤高台壙の底部片。緩やかに内湾する体部に至ると推定される。14は全面が磨滅しており、調整は不明。15の胴部は内外面ともにナデ仕上げされている。

16・17は土師器の皿。16(図版34-7)は端部内面に段がめぐる口縁部と、直線的にのびる体部をもつ。口縁端部内面に段がめぐる。内外面とも回転ナデ調整が施されている。17は底径が約9cmとやや大きな平皿状である。胴部内外面には回転ナデ調整、外底面は回転ヘラ切り離し後にナデを施す。

18(図版34-8)は緑釉陶器の壙の胴部片。内外面とも横方向のミガキ調整の後に回転ナデ仕上げ。黄灰色の素地に薄く緑色釉を施す。図42-7と同一個体である可能性が高く、9世紀後半～10世紀に比定できる。

19～29は古代の須恵器で、坏身、坏蓋、皿、壺などがある。19～21は坏。19は大型の坏の口縁部片で、内外面とも回転ナデ調整を施す。外面にのみ自然釉がかかる。20は端部内面に段がめぐる口縁部片。内外面ともに回転ナデ調整が施されている。21も平底の底部で、体部はやや外方にひらく。内外面とも回転ナデ調整を施す。

22～24は皿。22は体部下半で屈曲し、口縁部はやや立ち上がって短くのびる。内外面とも回転ナデ調整が施されている。23は口縁部がわずかに膨らむ皿で、内外面とも回転ナデ調整を施す。24は胴部の立ち上がりの度合いから皿と考えた。内外面とも回転ナデ調整を施す。25・26は坏蓋の摘み部分の破片。25は扁平で小さい擬宝珠状の摘み。26はより扁平なボタン状の摘みである。27～29は壺。27(図版34-9)は小型の長頸壺の肩部片。なで肩で、外面は緑色の自然釉に覆われる。内外面ともに回転ナデ調整を施されている。28も長頸壺の肩部片。肩部と体部の境に沈線が1条めぐる。29は輪高台がつく壺の胴部下半部の破片。内外面ともに回転ナデ調整、外面下半は横方向のケズリ調整が施されている。

図27には弥生時代～古墳時代の遺物を図示している。1～15は古墳時代後期の須恵器、16・17は古墳時代後期の土師器、18～21は弥生時代中期後葉の土器である。

1～6は坏身で、口縁部の立ち上がりが小さく摘み上げられた形状をもち、受け部が小さく突出する。内外面ともに回転横ナデが施されている。いずれも6世紀末～7世紀初頭に比定できる。1の器体は焼き歪んでいる。5(図版34-11)の胴部外面には薄く自然釉がかかる。

7(図版34-13)は坏蓋の胴部片。薄でのつくりで、天井部と体部の境には、横ナデ調整によって緩やかな段が生じている。8・9は高坏。8は2条の突帯をめぐらした下方に櫛描き波状文を施す。9は脚端部の小片で、長方形透かし穴をもつ。10・11は甕の口頸部と考えた。10は薄でのつくりで、頸部と口縁部の境に段がめぐる。内外面とも自然釉がかかる。11は口縁部～頸部に1単位5本以上の櫛描き波状文が施される。12～14は壺。12は短頸壺と考えられる肩部の破片。口頸部は肩部にくらべて薄い。13(図版35-1)は直口壺の口頸部と考えた。2条の緩やかな沈線の下方に、板状工具の小口を押捺して右上がりの単斜線文を連続して施す。14は広口壺の口頸部の破片で、端部付近で屈曲し、端部を丸く収める。15は高台の破片。端面に強い横ナデを施すことで、窪みが生じている。焼成は堅緻で胎土もきめ細かく、中世の須恵質土器である可能性も残す。

16・17は土師器。16は「く」字形口縁の甕と考えた。口縁端部を横ナデで丸く収める。17は甕の肩部片で、外面にヘラ状工具の痕跡が残されている。

18～21は弥生土器。18は弥生時代中期後葉の「く」字形に屈折する甕の口縁部で、口縁端部を細い粘土紐を貼り付けて摘み上げたように成形する。19はわずかに湾曲しながら「く」字形に屈曲させる甕の口縁部。後期前半に比定できる。20・21は壺の底部片である。

この他に、図化できなかつた古代～中世の土師器・須恵器の細片が10数点と、弥生土器および古墳時代の土師器・須恵器の小片が多数出土している。下層で多く出土した石器類は①層では出土していない。

〔②層出土の遺物〕(図28・29, 図版35)

②層からは少量の古代～中世の遺物と弥生時代～古墳時代の遺物が出土している。中でも、古墳時代後期の遺物がもっとも多い。図28には中世と古墳時代後期の遺物、図29には弥生土器を報告し

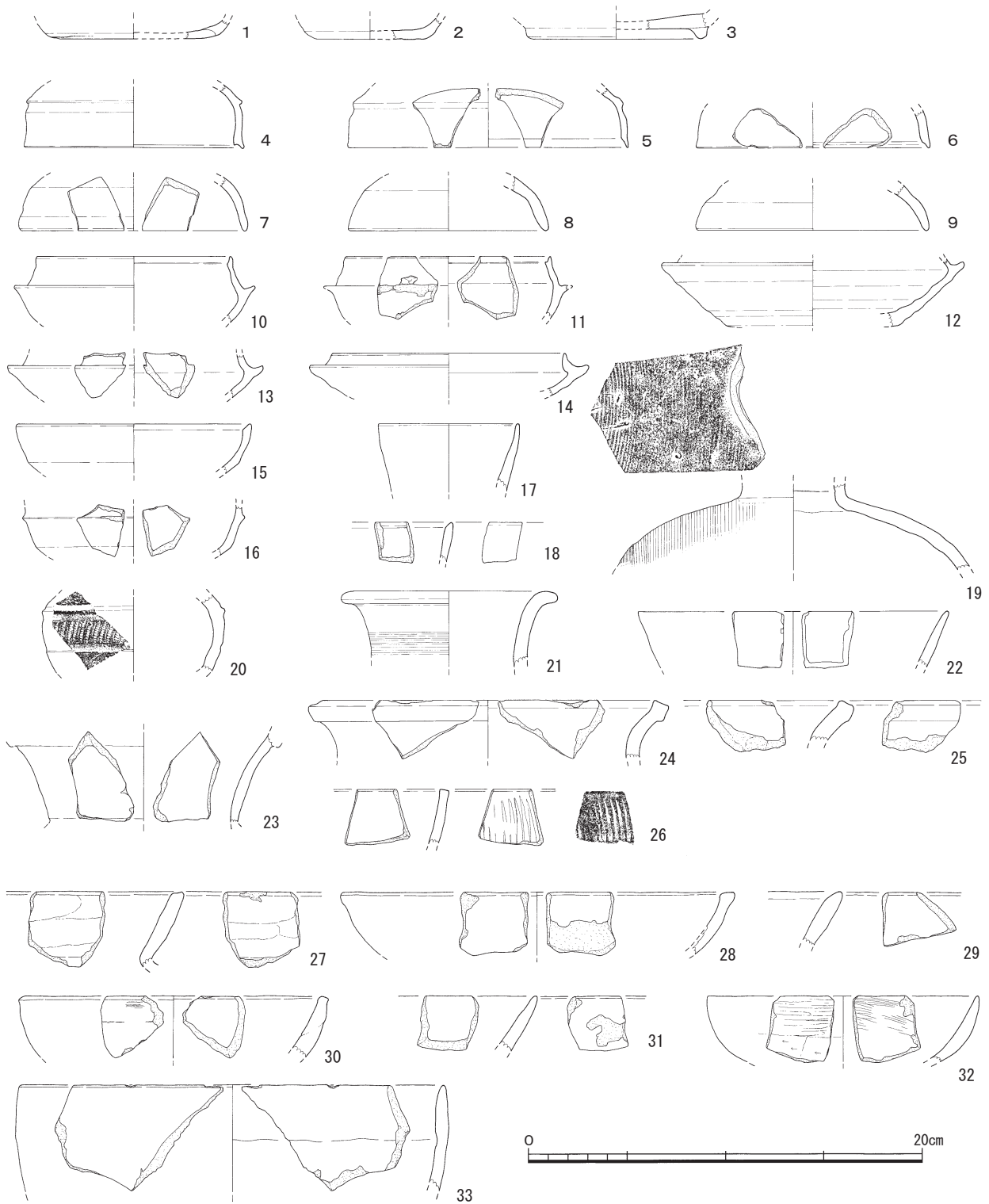


図28 7次調査I区SR-13②層出土遺物実測図1 (縮尺 1/3)

ている。また、図28-7・9・12・14・27・29・31～33、図29-5・6は②層でも上部、図28-11・24は中部、4・10・15・19・20～22・25・28・30、図29-1・4・7は下部の砂礫層から出土している。

図28-1・2は中世の土師器、3は古代の須恵器である。1は平底からわずかに膨らみのある胴部が立ち上がる坏。2は小皿である。底部径が比較的大きく、皿に近い。ともに外底面の切り離し方法は、器面が荒れているために不明である。3は須恵器の高台付き坏で、高台は磨滅しているが、本来は断面逆台形の高台と考えられる。8世紀後半頃のものとする。

4～26は古墳時代の須恵器である。4～9は坏蓋の下半部の破片。4(図版35-2)は天井部と体部の境には突線状の段が、口縁端部内面には小さな段がめぐる。内外面とも回転ナデ調整を施す。5・6は口縁端部内面の段が緩やかで、天井部と体部の境の段もなだらかである。5は内外面とも回転ナデ調整を施す。外面には自然釉がかかる。6の口縁端部内面には緩やかな段がめぐる。内外面ともに回転ナデ調整を施す。体部の傾きから短頸壺の蓋の可能性も残る。4は5世紀後半、5・6は6世紀前半に比定できる。7～9は口縁端部内面に段はなく端部を丸く収められている。天井部と体部との境に明確な段はなく、回転ナデで若干窪む。内外面に回転ナデ調整を施す。径の大きさから6世紀後半～7世紀初頭のものと考えたが、8(図版35-5)は器体の歪みが著しく、口径が小さめで、時期がやや新しい可能性がある。

10～14は須恵器の坏身。10・11は口縁部の破片で、口縁部は内傾してのび、端部内面に段がめぐる。受け部は上外方に短くのびる。内外面とも回転ナデ調整を施す。11の体部は丸みをおびる。内外面ともに回転ナデ調整を施し、口縁部下半に焼成時に他の個体の破片が付着している。

12～14は受け部から体部にかけての破片で、受け部を上方にひねりだし、口縁部が短く立ち上がる。12は、内外面ともに回転ナデ調整を施すが、底部付近の外面には回転ヘラケズリ調整を施す。器体は若干歪む。13は内外面ともに回転ナデ調整を施す。14は内外面とも回転ナデ調整。10・11は5世紀後半～6世紀前葉、12～14は6世紀後半と考える。

15・16は須恵器の高坏の坏部片。15の口縁端部内面には緩やかな段がめぐる。内外面とも回転ナデ調整。16の口縁部との境には小さな突稜がめぐる。内外面ともに回転ナデ調整を行うが、外面底部付近には回転ヘラケズリ調整を施す。

17は提瓶もしくは平瓶の口縁部の破片。口縁端部は横ナデで丸く収める。内外面ともに回転ナデ調整で仕上げられる。

18は須恵器の口縁部片。口縁端部内面には浅い段がめぐる。坏身や壺類の口縁部の可能性も考えたが、小片のため確実ではない。内外面ともに回転ナデで調整する。

19(図版35-5)は須恵器の横瓶。肩部外面にはカキメ調整を施す。内面には回転ナデ調整を施す。小片のため径はもう少し大きくなる可能性が高い。

20～23は須恵器の壺。20(図版35-6)は、壺の肩部から胴部にかけての破片で、肩部と胴部の境界に稜がめぐり、その下方に工具小口による連続列点文を施文する。内外面ともに回転ナデで調整する。

21～23は広口壺の口頸部の破片。21は、口縁端部を外方にわずかに折り曲げ、端部を横ナデで丸く収める。外面はカキメ調整の後に、口縁部付近に回転ナデ調整を施す。内面は回転ナデ調整。22は、外傾しながら直線的にのび、端部は尖り気味。内外面とも回転ナデで調整する。外面には自然釉がかかる。23は頸部の破片で、小型の甕である可能性も残す。内外面ともに回転ナデ調整を施す。

24・25は須恵器の甕の口縁部から頸部の破片で、端部を肥厚させる。24は内外面とも回転ナデ調整。25は全面が磨滅しており、調整は不明。焼成不良で、軟質の焼き上がりである。

26は須恵器であるが、器種は不明である。口縁部の破片で、外面にヘラ描文を施す。内外面ともに回転ナデで調整されている。

27～33は古墳時代中～後期の土師器。27～31は甕の口縁部。27、28はナデにより端部が小さな面をなし、若干窪む。27は内外面ともに横方向のナデ調整を施す。28は口縁端部を横ナデで外方に拡張させている。29も「く」字形口縁で、内外面ともに横ナデで調整している。30は小型の甕の口縁部と考えた。外面は横方向の刷毛目調整の後にナデ調整、内面はナデ調整を施す。31は、内外面と

もに横方向のナデ調整を施す。

32は土師器の鉢の口縁部片。口縁端部は横ナデ調整で尖り気味に成形する。外面上半は横方向にミガキ調整，下半に横方向にケズリ調整，内面は横方向の刷毛目調整を施す。33(図版35-7)は土師器の甑。口縁部の破片で，内外面ともナデ調整を施す。

図29-1～4は，弥生土器の甕。1は口縁端部を上方に肥厚させ沈線を1条めぐらす。内外面ともナデ調整。2は，口縁端部を上方に摘み上げて拡張し，端部外面に2条の凹線文をめぐらす。内外面ともにナデ調整で仕上げられている。1・2は弥生時代後期初頭に比定できる。3は肩部片で，肩部と口頸部の境に突帯が貼り付けられ，爪を押しつけて刻目を施す。弥生時代中期末～後期初頭。4は，「ハ」字形に屈曲する口縁部片。外面は粗い刷毛目調整の後にナデ調整，内面はナデ調整を施す。5は高杯の杯部分。外面には左上がりの刷毛目調整，内面には横方向の刷毛目調整を施す。6は平底の底部片。薄でのつくりで，外面は縦方向のミガキ調整，端部付近に横方向のナデ調整。胴部内面は縦方向のケズリ調整，底部はナデ調整。7は小さな平底の底部の破片。外面は刷毛目調整の後に底部付近にタタキ調整，内面はケズリ調整を施す。8は脚台状の上げ底の底部で，外面は磨滅しており，調整は不明。内面はナデ調整を施す。

この他，古代の土師器の坏，須恵質土器の甕や壺，弥生土器及び古墳時代の土師器・須恵器の小片が多数出土している。古代の土師器には，ヘラ切り離し痕を外底面に残す坏，底面に「×」形のヘラ記号が残る坏があり，古墳時代の須恵器には生焼けのものも多く含まれる。また，幅8cm，長さ10cm，厚さ1.4cm，現重量168.7gの扁平な結晶片岩が1点出土している。磨滅が著しい。

〔④層出土の遺物〕(図30～36, 図版35～38)

④層からは，弥生時代と古墳時代の遺物が出土している。古墳時代の遺物には須恵器(図30・31)，土師器(図32)がある。また，図30-11・15・19・20・23・27・31・32・33，図31-2・5・8～10，図32-10，図33-1・3・4・8・9・12・13・15，図34-4・6・7・11，図35-1・9・10・15，図36-2は④層でも上部，

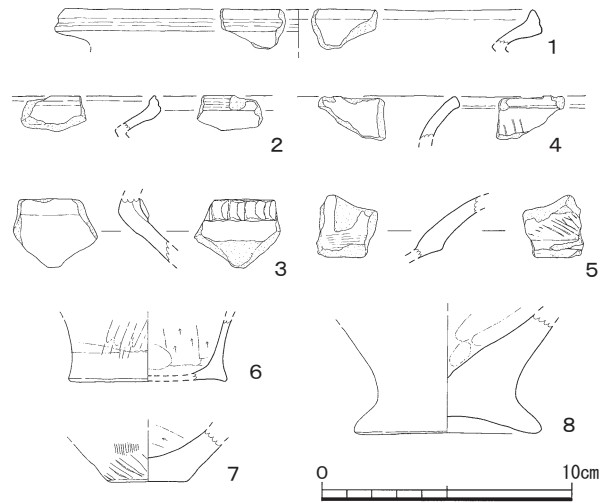


図29 7次調査I区SR-13②層出土遺物実測図2
(縮尺 1/3)

図30-1・3～5・9・13・25・26・28・30，図31-4・7，図32-2～8・12，図33-6・14，図34-3・9・10・12～16，図35-2・3・5～7・11・12～14は下部～最下底部から出土している。

図30-1～8は坏蓋である。1～3は，天井部と体部の境に小さな突線状の段がめぐる。1(図版36-1)・3(図版35-9)の口縁端部内面には横ナデ調整によって段がめぐる。2は小片であるため，口径は不確実。4～7は，天井部と体部の境に回転ナデ調整による段や凹線状の窪みがめぐる。口縁端部に横ナデ調整を施す結果，4(図版35-8)には面ができ，5(図版36-2)・6には小さな段が生じている。4は高坏坏部の可能性も考えられる。5の口縁部外面には左上がりの刷毛目調整に似た痕跡が残る。6の口縁端部外面には刻目が施されている。8(図版36-3)は回転ナデ調整による凹線状の窪みで，天井部と体部が区画されている。口縁端部は横ナデで尖り気味に収められる。

9～19は坏身である。9(図版36-4)は，口縁端部内面に段をもち，受け部は比較的短い厚くしっかりとしたつくりで仕上げられている。10～12は口縁部が比較的長く，受け部は面を上に向ける。10の受け部は短く突出する。11(図版36-5)は，口縁部が短く内傾し，端部を丸く収める。やや厚ぼったいつくりである。12は，口縁部は比較

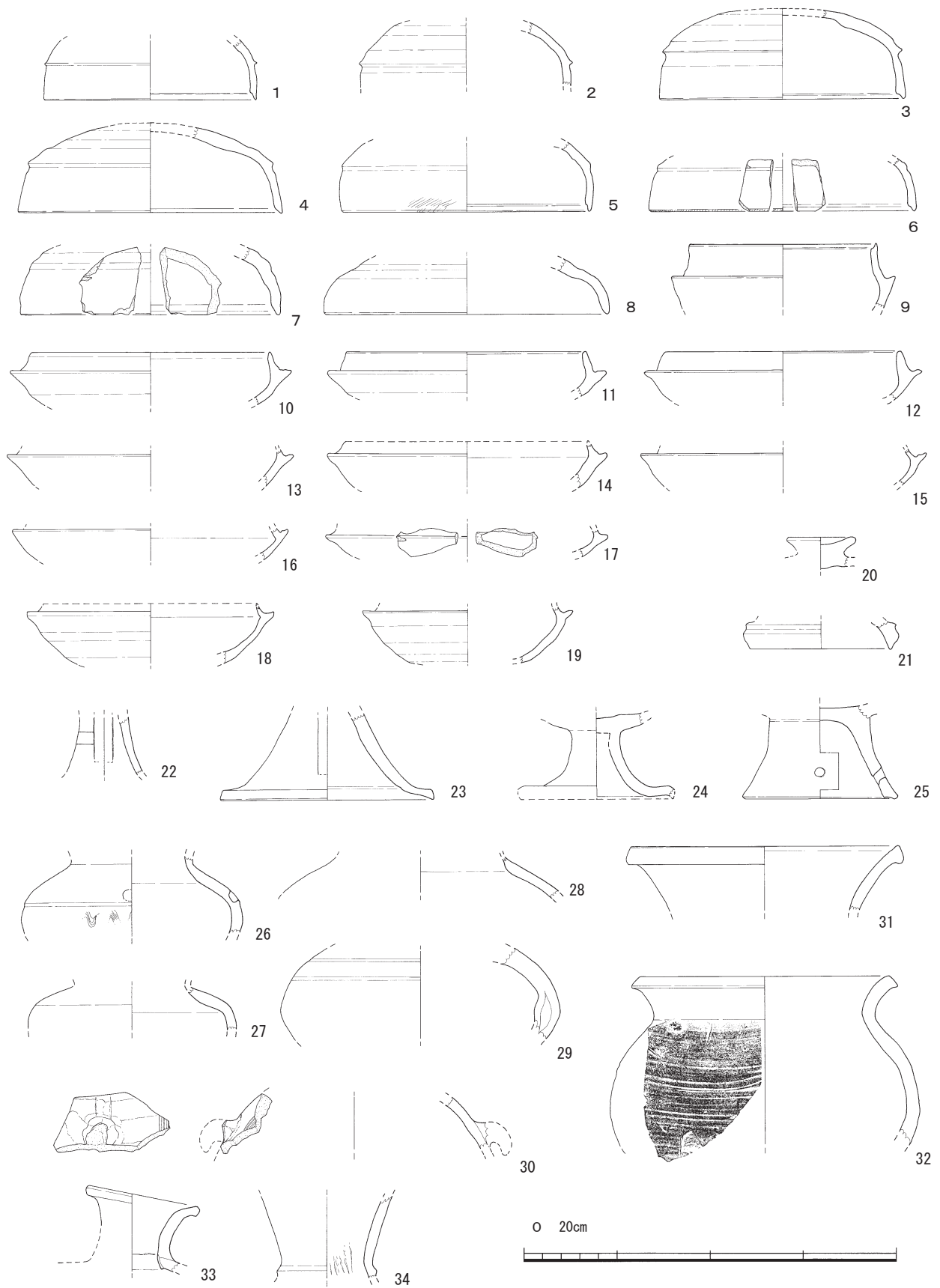


図30 7次調査I区SR-13④層出土遺物実測図1 (縮尺 1/3)

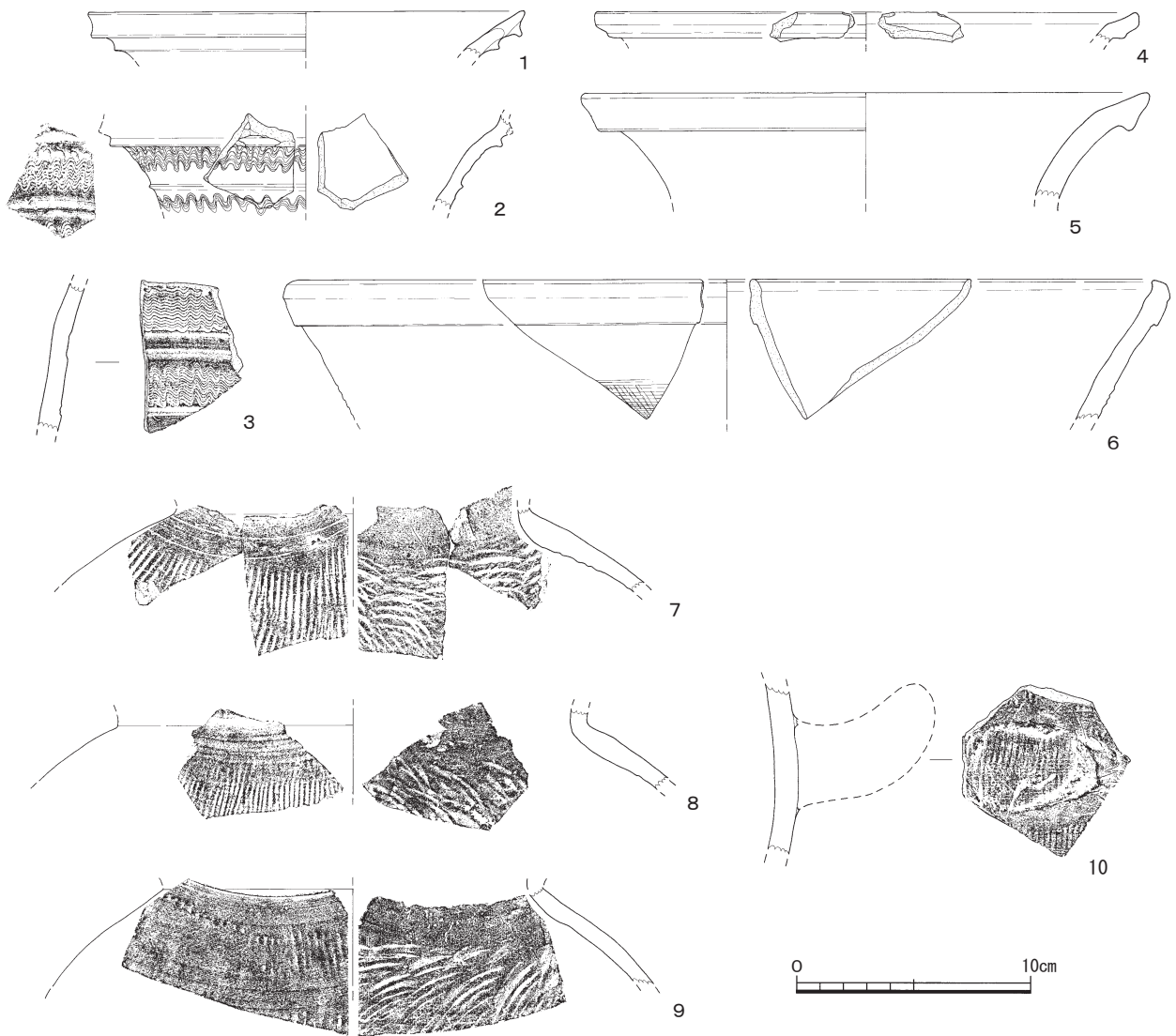


図31 7次調査I区SR-13④層出土遺物実測図2 (縮尺 1/3)

的厚みがある。小片のため径は不确实。13~17は口縁端部を欠くが、10~12よりも口縁部がやや短いものと考えられる。内外面ともに回転ナデ調整が施されている。14は、厚手のつくりである。15は、口縁部、受け部ともに小さく薄い。16・17は、小片のため径は不确实。18・19は同じく短く突出する口縁部と受け部をもつが、13~17より径が小さい。18は、受け部、口縁部ともに小さい。19の体部は深みがあるが、受け部は小さく、径も小さい。

20(図版36-9)~24は高坏。20は有蓋高坏の蓋の摘み部と考えた。扁平な摘みで、上部を窪ませる。21~24は脚部の破片。21は短脚高坏の脚端部、22は4方向の長方形透かし孔をもつ。脚部中

位に浅い2条の沈線がめぐる。23は脚裾部で、長方形透孔が脚端部に近い部分にまで及ぶため、長脚の二段透かし孔をもつ高坏と考えた。裾部内面には浅い沈線状の窪みがめぐる。24(図版36-10)は短脚高坏の脚部から坏部下半にかけての破片。25(図版36-11)は低脚で、小円形の透かし孔をもつ。

26(図版36-6)は甕の胴部片で、肩部の円孔は未貫通。胴部最大径よりやや上位に沈線をめぐらし、その下方に櫛描き波状文を施す。部分的に厚く自然釉がかかっている。

27~29は壺。27は肩部の屈曲から短頸壺と考えた。28は壺の肩部。外面には自然釉が残る。29は肩部から胴部にかけての破片で、浅い沈線が2条めぐる。下半は焼き膨れによって歪んでいる。肩

部外面を中心に自然釉がかかる。

30は提瓶の把手接合部周辺の破片。破片の屈曲の度合いとカキメ調整から、向かって左側面の肩部と判断した。腹面外面にはカキメ調整、外側面には横方向のナデ調整、内面には縦方向のナデ調整を施す。外面では縦方向に走る接合痕を確認できる。31(図版36-7)は広口壺の口頸部の破片。口縁部内面の端部は上方に摘み上げられているが、自然釉が内面全面にかかっているため無段に見える。32(図版36-8)は広口壺の破片。胴部から反転して外反する口縁部がつく。口縁端部は横ナデ調整で面取りされている。33は平瓶の口頸部の破片。34は、頸部と肩部の境に断面三角形の突帯がめぐり。小片のため器体の傾きは不明である。

この他、図版36-15は、甕と考えられる頸部片で、外面にはカキメ調整の後に不規則な波状文を施す。内面は回転ナデ調整が施されている。I E区南半部から出土した。

図31-1・2は須恵器の壺の口縁部～頸部の破片である。1の外面に断面三角形の突帯を2条以上めぐらす。小片のため、口径は不確定。2(図版36-13)には、頸部に2条以上の突帯がめぐり、その間に櫛描き波状文を施文する。

3～10は須恵器の甕。3(図版36-14)は口頸部の破片で、沈線と回転ナデ調整による幅の広い凹線状の窪みの間に櫛描き波状文を施す。4～6は口縁部片。4は小片のため、口径は不確定。5(図版37-1)の口縁端部は断面三角形に拡張され、6(図版36-16)の端部には薄く幅広の粘土帯を貼り付ける。7(図版37-2)～9(図版37-3)は肩部の破片。10は、胴部中位の把手接合部分の破片。器壁の厚みと破片の曲面から甕と判断した。カキメの方向から、把手の断面形状は横長の楕円形と考えた。器体の傾きは不明である。

以上の須恵器は、いずれも5世紀後葉～7世紀初頭の時期幅に収まる。

図32-1～12は古墳時代の土師器である。1～7は甕。1・2・4(図版37-4)は、内湾しながら「く」字形に屈曲する口縁部である。1は、接合できない口縁部と肩部の2つの破片であるが、同一個体と判断して図上復元した。口縁端部は横ナデ調整で、内側に摘み出されている。2の口

縁端部は丸く収められる。小片のため口径は不確定。4の口縁端部は面取りされている。3・5(図版37-5)・6は、「く」字形口縁部でわずかに内湾する。3の口縁端部は小さく摘み上げられている。5の口縁端部は面をなすが、やや丸みをおびる。6の口縁端部には、横ナデ調整で内傾する小さな歪みが生じている。5～7は、小片のため口径は不確定。7は、甕の肩部片。

8は小型丸底壺の肩部片。内面には接合痕と指頭圧痕が残る。器壁は厚い。9(図版37-6)は甕または甗の把手の破片。10～12は高坏。10は坏部下半の破片。11(図版37-7)は坏部下半から脚部にかけての破片である。坏部と脚部は別作り。

図33-1～15は弥生土器。1～4は甕。1は、「く」形口縁で、口縁端部を上下に拡張し、2～3条の凹線文をめぐらす。口縁部屈折部に突帯を貼付し、爪で刻目を施す。2は、「く」字形に屈折する口縁で、口縁端部に細い粘土紐を貼り付け、上方に跳ね上げる。3・4は、「く」字形に屈折させる口縁部をもち、3の口縁端部はナデ調整上方に摘み上げられている。4の口縁端面には斜格子の刻目が施文される。5は、緩やかに外湾しながらのびる「く」字形口縁で、口縁端面は横ナデで面取りされている。器壁の厚みから、壺の口縁部である可能性も残す。6(図版37-8)は、甕の肩部片で、やや厚ぼったいつくりで、粘土紐の接合痕がよく残る。7は、厚での底部の破片。8は、小さな凸レンズ状の底部片。内底面にはクモの巣状に刷毛目調整が施される。

9～14は壺。10～13は小片のため、口径は不確定。9は、大形壺の口縁部片で、口縁部端面に沈線様状の凹線文を3条めぐらす。10は、口縁端部を上下に拡張して、端面に沈線様の凹線文を4条めぐらす。11は、口縁端面に沈線様の凹線文を3条めぐらす。12はラップ形にひらく口縁部の破片で、端面は横ナデで面取りされている。13は、複合口縁壺の口縁部片。14は大形壺の平底の破片。15は、胎土に石英・長石・土器粒と考えられる赤色粒の微細粒を含み、大きさにバラつきがあることから、弥生土器と判断した。外面に2段の列点文を施し、口唇部にも部分的に刻目を施す。加飾性に富む点と破片の傾きから弥生時代後期の高坏の口縁部の破片と考えた。

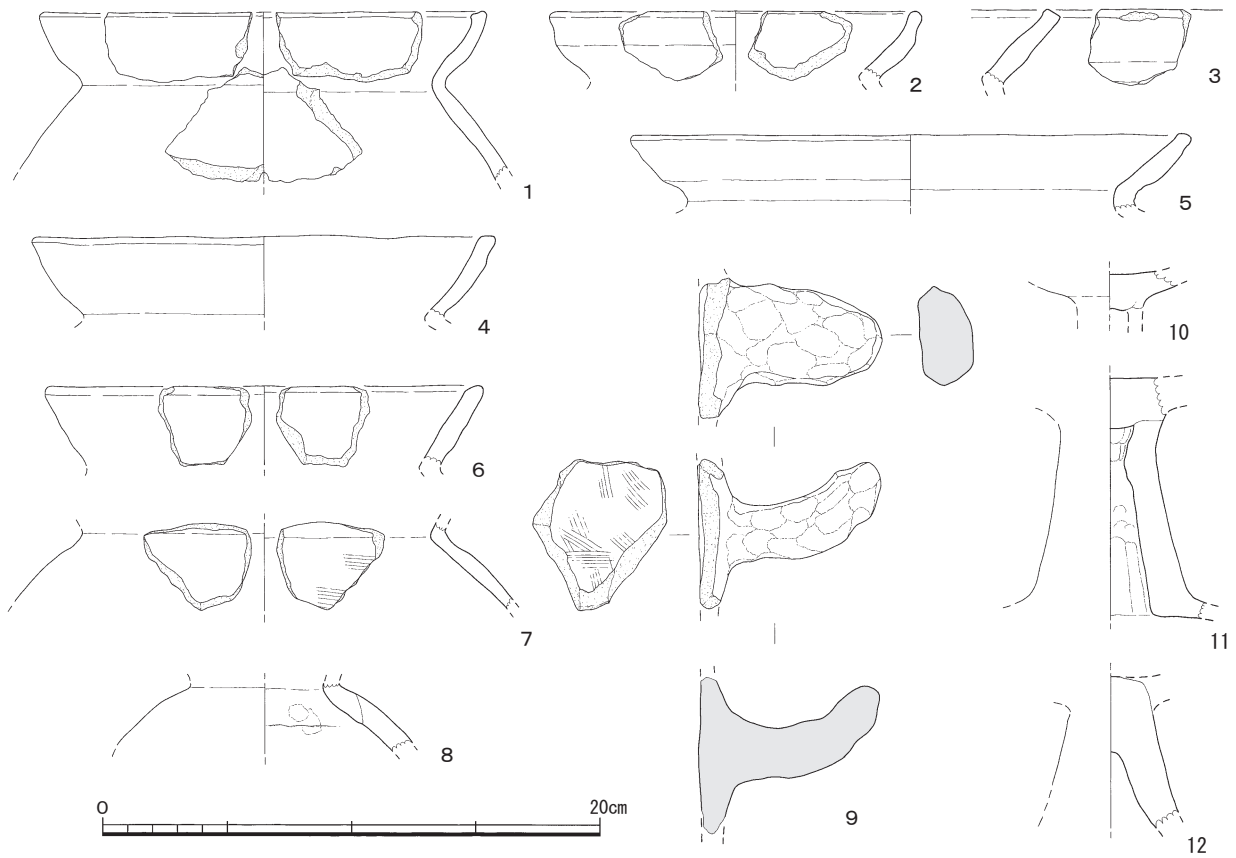


図32 7次調査I区SR-13④層出土遺物実測図3 (縮尺 1/3)

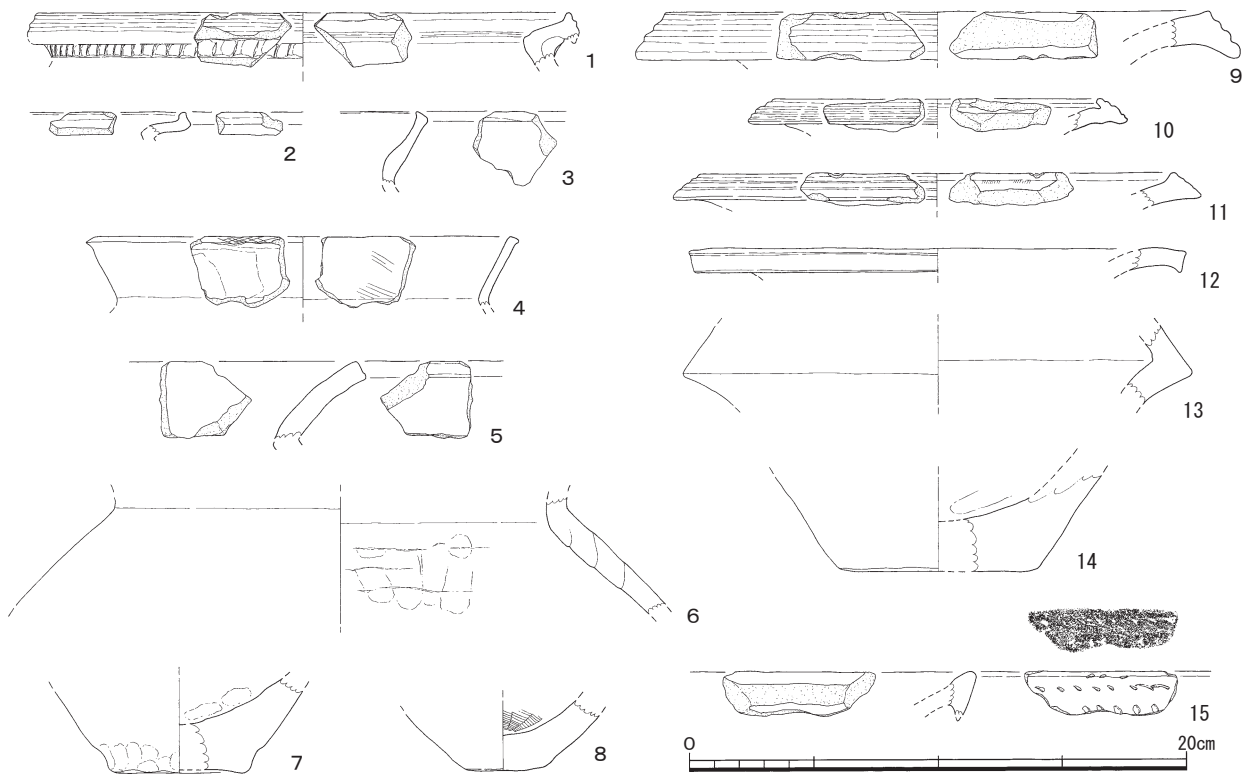


図33 7次調査I区SR-13④層出土遺物実測図4 (縮尺 1/3)



図34 7次調査I区SR-13④層出土遺物実測図5 (縮尺 1/3)

この他、多数の弥生土器が出土しているが、細片化した胴部片であるため図化しなかった。いずれも弥生時代中期後葉～古墳時代後期に位置づけられる。

石製品としては砥石、磨石・敲石、台石が出土している(図34・35)。図34-1～4(図版37-9)は砥石である。いずれも流紋岩類の亜角礫を利用

している。1は3面を砥面として使用しており、研ぎ痕は約1cm幅のものが多くみられる。5(図版38-1)は砂岩製の砥石。幅3mm程度の線條痕が残る。6～13は砂岩を利用している。6～8は、いずれも端部に敲打痕、平らな面に擦過痕が残り、磨石及び敲石として用いられている。6(図版38-2)・7(図版37-10)は両面・両端部を



図35 7次調査I区SR-13④層出土遺物実測図6 (縮尺 1/3)

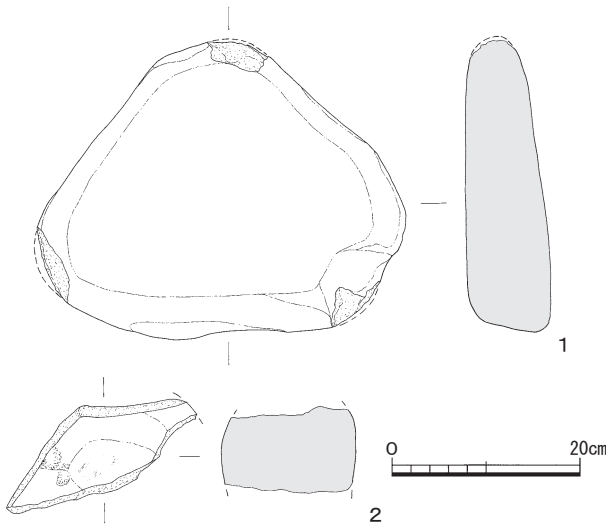


図36 7次調査 I 区SR-13④層出土遺物実測図7
(縮尺 1/8)

使用。8は片面・一方の端部のみを使用している。9・10(図版37-11)・12(図版38-3)は敲石、11は磨石である。13(図版38-4)は、敲打痕が所々にみられ、一部を磨面として利用する磨石及び敲石である。14は花崗岩の磨石及び敲石に用いており、全面に敲打痕が顕著に残る。15・16は閃緑岩の石材を用いている。15は、平らな一面にも敲打痕と擦過痕が見られる磨石及び敲石である。16は敲石。両端部に敲打痕が残る。図35-1～11は砂岩、12は礫岩、13・14は花崗岩、15は閃緑岩を利用した台石である。4(図版38-6)、6(図版38-7)～10、12(図版38-10)、15には敲打痕が顕著に残る、その他は敲打面としての利用の他に磨面としても利用しており、痕跡は明瞭でない。

図36-1(図版38-12)は花崗岩の台石である。主に3側面を使用している。それぞれに緩やかな窪みが認められ、非常に滑らかである。2は砂岩製の台石。大部分が欠損している。

この他、花崗岩や砂岩を用いた敲打具や台石が出土している。重量131.2gと51.3gのチャート片や4.8×3.5×1.1cmで重量18.3gのサヌカイト片もある。

6) 土器溜まり

SX-29 (図18・37～39, 図版27・39～40)

SR-13②層下部を掘り下げていく過程で、I E区とI F区の境界付近で、古墳時代後期の須恵器や

土師器の完形品や比較的大形の破片が集中して出土することに気がついた。層序的には、SR-13②層下部～③層にあたり、遺物の出土範囲も限られている。SR-13の埋没過程で一括して投棄された遺物と考え、SX-29とした(図18, 図版27-2・3)。

SX-29の出土遺物は、弥生土器や石器が少量混じるが、須恵器・土師器が大半を占め、完形品や全形を復元できるものが多い。

図37-1～9は須恵器である。1・2は坏蓋。1(図版39-1)は天井部が丸みをもち、天井部と体部の境界に凹線状の窪みがめぐる。2は口縁部付近を短く屈曲させ、1と比べて器高は低い。1・2ともに、小片のため口径は不確定。3～5は坏身である。3は全形が図上復元できる資料で、内傾する口縁部は短く、底部は丸みをおびる。4(図版39-2)は完形品で、口縁部はやや高さがあり、受け部が短く突出する。5(図版39-3)は底部片で、内底面に同心円文の当て具痕が残る。

6(図版39-4)は、甕の口頸部下半から肩部にかけての破片である。口頸部に断面三角形突帯をめぐらし、その下方に9本1単位の櫛描き波状文を施文する。7(図版39-5)は甕の底部付近の破片。8(図版39-7)は台付壺または甕の脚台部分の破片で、「ハ」字形にひろがる脚台をもち、脚台端面は面取りされている。9(図版39-6)は横瓶。底部周辺を欠損する。口縁部は短く外反し、端部外面を玉縁状に肥厚させる。

図38-1～4は土師器。1～3は甕。1(図版40)は胴部の一部が欠損するが、ほぼ完形品に復元できた。「く」字形に屈折する口縁部で、長胴の胴部をもつ。胴部は卵形に近く、中位より若干下がった位置に最大径がある。2は口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部が胴部から緩やかに外反しながら立ち上がる。胴部との境は明確でない。3は、緩やかに屈折する「く」字形口縁の甕で、胴部との境は明確でない。残存状況は悪く、口径は不確定である。4は完形品に復元できた丸底の鉢である。薄でのつくりである。口縁部は内湾気味にほぼ直立し、口縁端部は横ナゲで丸く収める。5は弥生土器の壺の口縁部片で、口縁端部を上下に拡張し、端面に3条の凹線文をめぐらす。ただし、小片のため、口径は不確定である。

図39-1は結晶片岩製の磨製石庖丁で、約半分

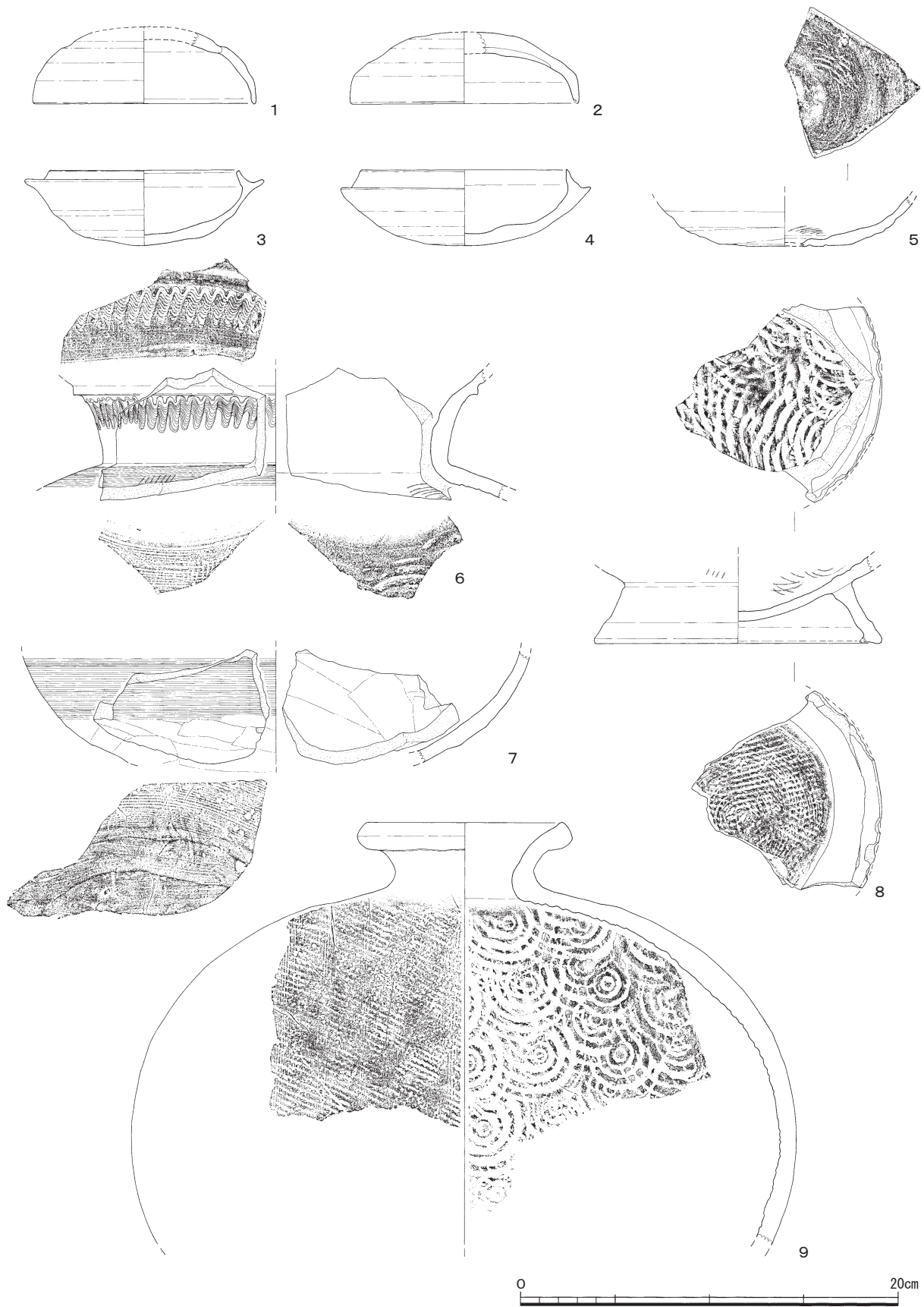


図37 7次調査I区SX-29出土遺物実測図1 (縮尺 1/3)

を欠く。両刃の弧背弧刃形と考えられる。2は流紋岩の砥石で、仕上げ砥と考えた。3は砂岩の垂円礫を利用して。先端に敲打痕がみられ、平らな面は部分的に滑らかで、磨面として使用された磨石及び敲石である。4は閃緑岩類の棒状の垂円礫を利用した敲石。端部に敲打痕が残る。5～7は台石。5は安山岩、6・7は花崗岩の垂角礫を用いている。

以上のSX-29の出土遺物の時間的位置付けについては、第V章で検討する。

7) 柱穴・小穴

7次調査I区で出土した小穴の中で、SP-2・6・11・12・22・23・81・84・85は近世以降の遺構である。これに対して、SP-14・15・21・26・27・31～48・53・57・58・74～76・82・86～89は、埋土の特徴や出土遺物から古代～中世の小穴と考えられる。さらに、SP-20・24・30・54・56・59・60・65～68・70・71・78～80・83の17基は、古墳時代後期以前に比定できる。以下、遺物が出土した小穴と、古代～中世及び古墳時代後期以前の主要な小穴について報告するが、他については遺構観察表を参照されたい(表6)。

SP-3 (図18・41, 図版24-2・3)

I D区に位置する小穴である。Ⅲ-1層を掘り下げた時点で確認できた。径30～33cm, 深さ10～11cmの不整円形の小穴。埋土Aに分類できるやや白っぽく光沢のある灰色シルト質土を埋土とする。検出面の層序と埋土の特徴から、近世以降の小穴と考えるが、埋土中から同安窯系青磁碗の胴部片が出土した(図41-1)。外面には櫛歯文様、内面にはヘラ状工具で花文を描く。外面はヘラケズリ調整を施し、体部下半は露胎のまま。

SP-27 (図40)

I C区に位置する。短径42cm, 長径

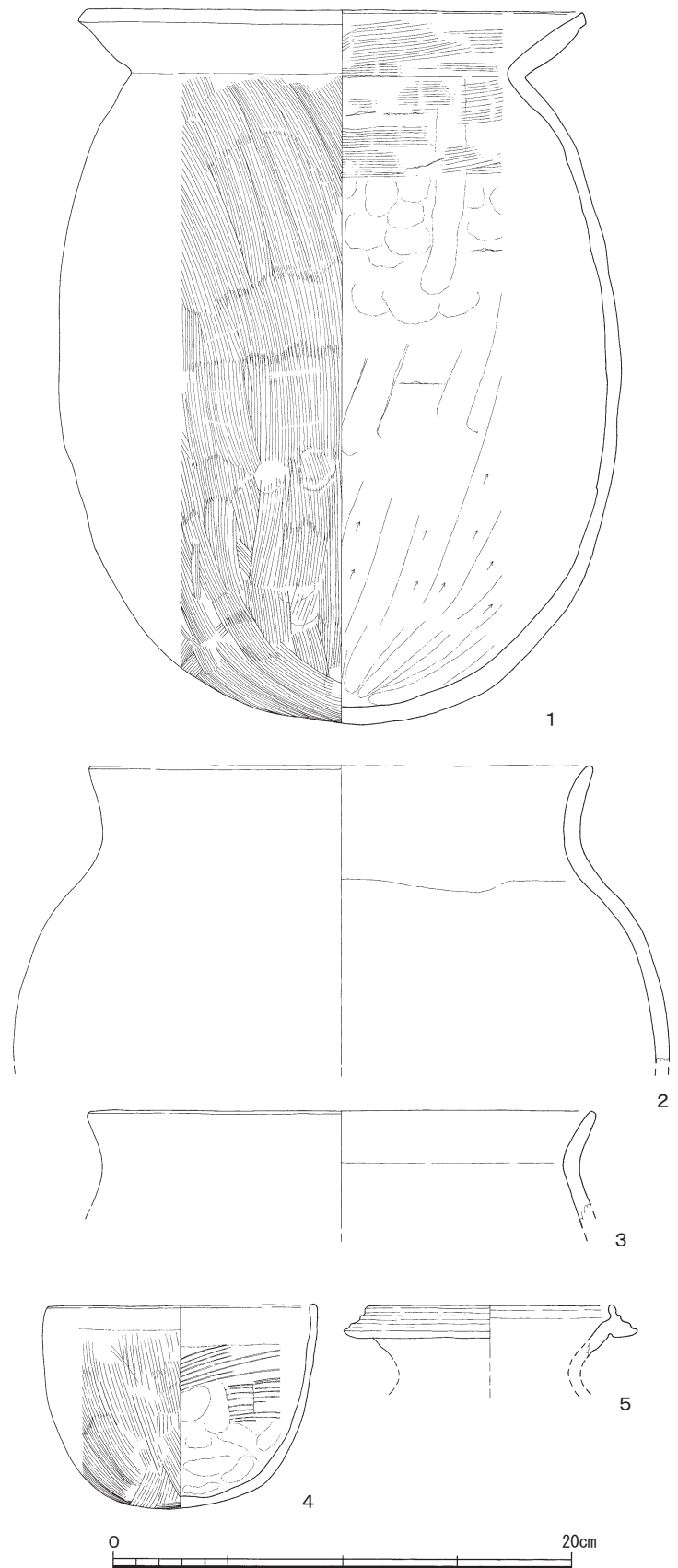


図38 7次調査I区SX-29層出土遺物実測図2 (縮尺 1/3)

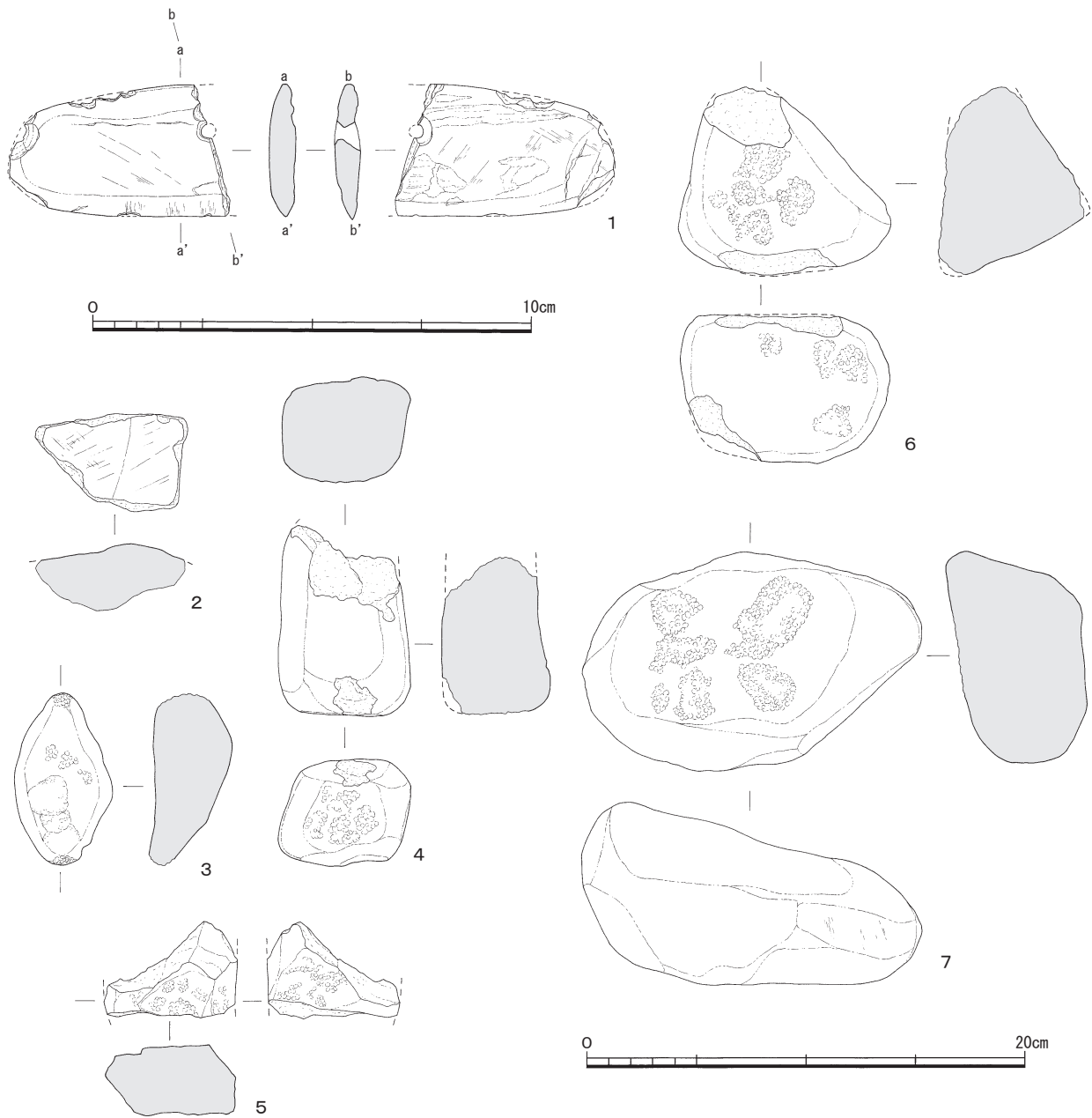


図39 7次調査 I 区SX-29層出土遺物実測図3 (縮尺 1:1/3, 2~7:1/4)

47cmを測る長円形を呈し、北側部分で直径17cm前後の立柱痕跡を確認できた。SC-28を切る。埋土は、やや灰色みをおびた暗褐色砂質シルト質土で、小指先大のにぶい黄褐色砂質土の小塊が点々と混じる。埋土Bに分類できる。土師器の胴部小片3点が出土している。

SP-32 (図40・41)

I G区に位置する。直径15cm、深さ17cmほどを測る円形の小穴。埋土は少量の砂礫が混じる褐灰

色シルトで、埋土Bに分類できる。埋土中から土師器碗(図41-2)、胴部細片、炭化物小片が出土した。2は、土師器碗の輪高台部の破片。内外面ともに荒れが進み、調整は不明である。断面が小さな三角形もしくは台形の輪高台がつくものと考えられるので、12世紀後半を前後する時期に比定できよう。

SP-33 (図40・41, 図版41)

I G区で出土した直径24~28cm、深さ28~30cm

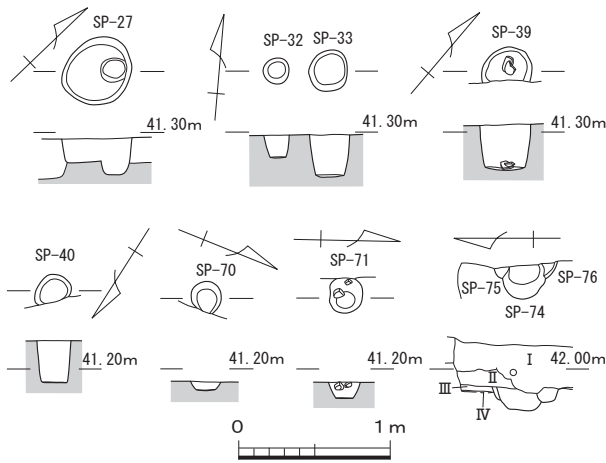


図40 7次調査I区SK-69, SP-32・33・39・40・53・71・74~76実測図(縮尺 1/50)

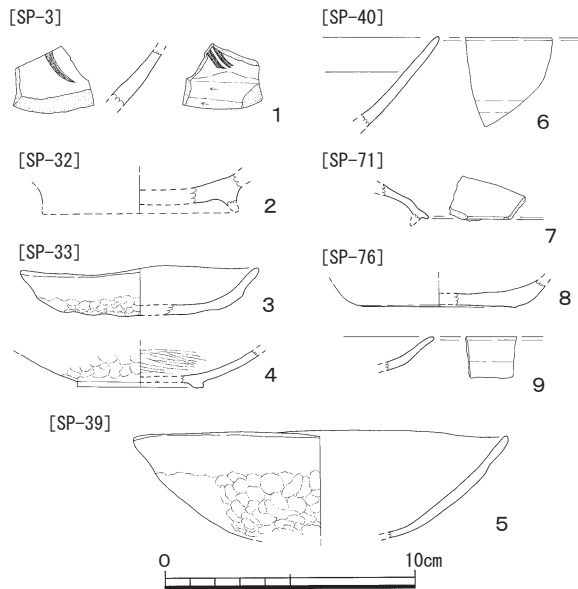


図41 7次調査I区SP-27・32・33・39・40・70・71・74~76出土遺物実測図(縮尺 1/3)

の不整形円形の小穴である。埋土は少量の砂礫が混じる褐灰色シルトで、埋土Bに分類できる。埋土中から出土した遺物には、黒色土器、土師器碗や須恵器胴部片、土師器の胴部片、スサ入り焼粘土塊、炭化物などがある(図41-3・4, 図版41-6・10)。3は、両黒土器の皿で、器体の歪みが著しい。外底面には指頭圧痕が連続して残る。内面は器面が荒れ、調整不明。焼成は堅緻。4は両黒土器の塊である。小さな輪高台をもち、体部外面には指頭圧痕が連続して残る。内面はミガキ仕

上げを施す。ともに12世紀後半に比定できる。

SP-39 (図40・41, 図版25・41)

I G区に位置する径33cm, 深さ30cm前後の円形の小穴である(図40, 図版25-2)。南端部を電線管路で破壊されている。埋土は、SP-33と同じく、少量の砂礫混じりの褐灰色シルトで、埋土Bに分類できる。黒色土器の比較的大きな破片が、底面近くから折り重なって出土した(図41-5, 図版41-7)。器体の歪みが著しい。口縁部周辺は横ナデ。体部外面には連続した指頭圧痕が残る。内面は荒れが著しく調整は不明である。12世紀後半に比定できる。

SP-40 (図40・41, 図版41)

I G区に位置する。径20~25cm, 深さ7cmの長円形の小穴。埋土は褐灰色砂質シルトで、埋土Bに分類できる。埋土中から、同安窯系青磁碗、土師器坏もしくは皿の胴部細片1点が出土している(図41-6, 図版41-8)。6は、同安窯系青磁碗は口縁部内面に細く浅い沈線が1条めぐる。全面施釉されている。

SP-53 (図40)

I I区に位置する。SC-50を切る径47cm, 深さ5cmほどの円形の浅い小穴である。埋土は、暗褐色シルトで、にぶい黄褐色シルトの1~4cm大の不整形な塊が点々と混じる。

SP-70 (図40)

I D区に位置する。径20~22cm, 深さ3cmほどの浅い小穴で、SR-13の埋土①・②層を除去後に確認できた。埋土は、埋土Cに分類できる淡い褐色砂質シルトである。遺物は出土していない。

SP-71 (図40・41)

I D区に位置する径22cm, 深さ10cmほどの不整形円形の小穴である。SR-13の埋土①・②層を除去後に確認できた。埋土は淡い褐色砂質シルトで、埋土Cに分類できる。埋土中からは、花崗岩と砂岩の拳大の円礫、古墳時代後期末の土師器の胴部小片4片、須恵器坏蓋の小片1点(図41-7)が出土している。

SP-74 (図40・41)

I J区の調査区東壁際で検出したⅢ層を切って掘り込まれた深さ40cmほどの円形の小穴である。埋土は砂礫混じりの褐灰色シルトで、にぶい黄褐色シルトの塊が混じる。SP-75を切り、SP-76に

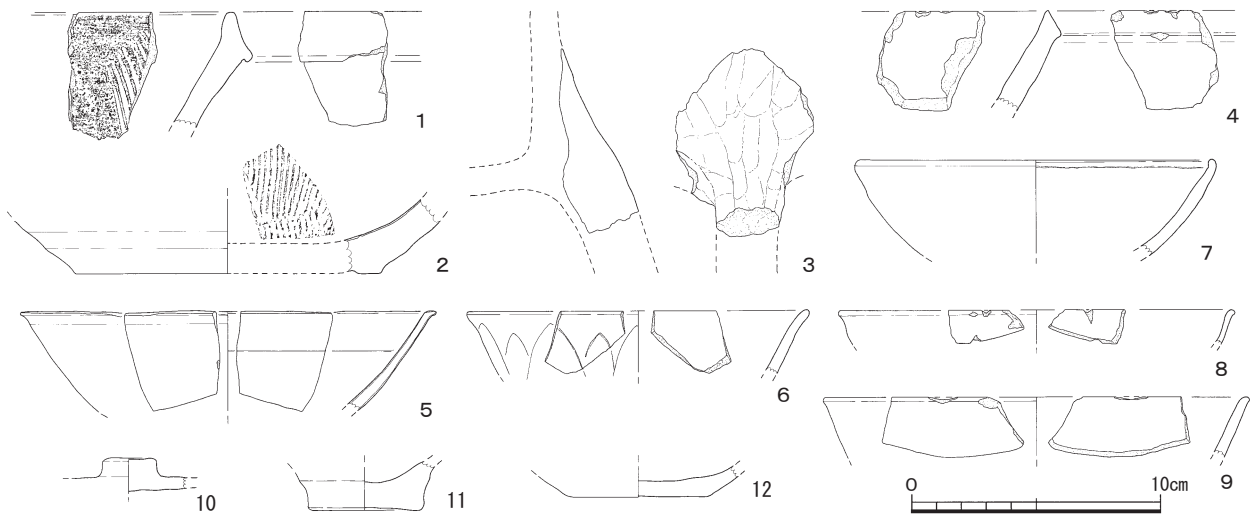


図42 7次調査I区Ⅲ-1・2層出土遺物実測図(縮尺1/3)

切られる。

SP-74~76は当初1基の遺構として調査を進めたため、遺物の取り上げが混乱した。遺物には、弥生土器、古墳時代後期の須恵器・土師器の胴部片に加えて、土師器皿と黒色土器の皿がある(図41-8・9)。8は、土師器皿で、外底面には回転糸切り離し痕が残る。9は黒色土器の皿で、内外面ともに横ナデで仕上げられている。12世紀後半のものか。

SP-75 (図40)

I J区の調査区東壁際で、SP-74に切られる小穴の残欠である。Ⅲ層を切って掘り込まれ、褐灰色シルトを埋土とする。

SP-76 (図40)

I J区の調査区東壁際で、SP-74を切る円形の小穴である。Ⅲ層上面から掘り込まれ、わずかに砂礫を含む褐灰色シルトが埋土である。

8) その他の出土遺物

I区では、Ⅲ層やI層、攪乱から、弥生時代、古墳時代後期、古代~中世の多くの遺物が出土している。代表的な遺物を報告する。

〔Ⅲ-1・2層〕(図42, 図版32・33)

Ⅲ-1層は暗灰黄色砂質シルト、Ⅲ-2層は砂礫が多く混じる暗灰黄色砂質シルトである。Ⅲ-1~Ⅲ-2層は、Ⅲ層に区分したが、土色はⅡ層に近似し、層序的にはSR-13の上部に堆積した土層である。弥生時代~中世までの遺物が混在する状

態で出土している。古代~中世の遺物を報告するが、図42-1・2・4~6・9~11はⅢ-1層、3・7・8はⅢ-1~2層、12はⅢ-2層から出土した遺物である。

1・2は備前焼のすり鉢である。1(図版33-1)は口縁部片で、端部を上下に拡張させる。内面には1単位が最少8本のすり目が施される。2(図版33-2)は底部片で、1単位10本以上のすり目が密に施される。3(図版33-3)は土師質土器の土鍋の脚部片である。体部との接合部分近くの破片で、部分的に煤が付着する。4(図版32-10)は須恵質土器のこね鉢の口縁部の破片。5(図版32-9)は白磁碗で、口縁端部を横ナデ調整によって小さく外方に折り曲げる。内面中ほどに沈線、外面口縁部付近に横ナデによる段がめぐる。6(図版32-8)は龍泉窯系青磁碗で、外面には蓮弁文が描かれ、内外面に淡い緑青色釉が施釉される。7~9は緑釉陶器。7(図版32-7)は碗の口縁部片で、SR-13①層から出土した緑釉陶器碗(図26-18)と同一個体である可能性が高い。体部はゆるやかに内湾し、口縁端部を内側に丸く収める。灰色のやや粗い胎土にうすい緑色釉が施されている。施釉の前に横方向のミガキ調整が施される。8(図版32-5)の口縁部は小さく外反する。石英・長石の微細粒を含む灰白色の精製された胎土に黄色みがかかった緑色釉を施す。9(図版32-6)は体部が外傾しながらほぼ直線的にのびる。回転ナデ調整の後に、全面に濃緑色の釉を施

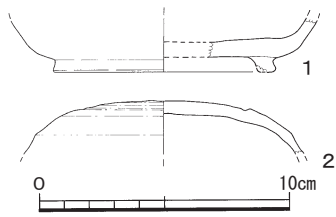


図43 7次調査I区Ⅲ-3出土遺物実測図(縮尺 1/3)

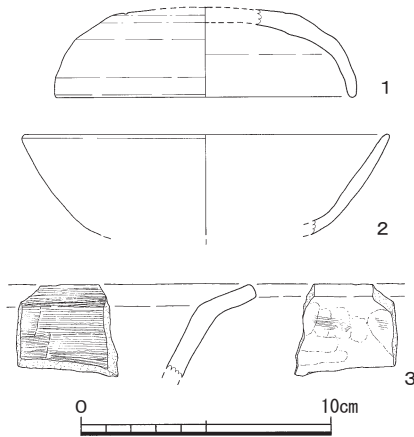


図44 7次調査I区I層出土遺物実測図(縮尺 1/3)

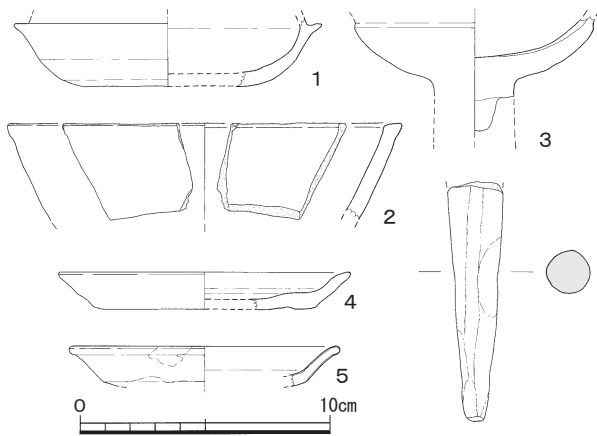


図45 7次調査I区攪乱内出土遺物実測図(縮尺 1/3)

す。10は須恵器の蓋の扁平なボタン状の摘み部。11・12は土師器坏の底部片。11(図版33-5)の底部は糸切り離しと考えられるが、磨滅のため判然としない。厚い底部からいったん立ち上がって体部に至る。胎土はきめ細かいが、3mm以下の細礫がまばらに混じり、粗雑な印象を受ける。12(図版33-4)は外底面にヘラ切り離しの痕跡が残る。

この他、Ⅲ-1層に伴う遺物には、土師質土器

羽釜の口縁部片、瓦器埴口縁部片、同安窯系青磁碗体部片、底部にヘラ切り離し、糸切り離し、板状圧痕などが残る古代の坏底部片、古代須恵器蓋の口縁部片、古墳時代土師器・須恵器、弥生土器のほか、藁状圧痕が残る親指先大の焼土塊や砥石片、緑色片岩の破片などがある。また、Ⅲ-2層からは、中世前半期の土師質羽釜の口縁部片や古代須恵器の高台付坏、古墳時代後期の土師器・須恵器、弥生土器の細片、安山岩の破片が出土している。

〔Ⅲ-3層〕(図43)

Ⅲ-3層は、暗褐色砂質シルトで、下半部はⅣ層の砂礫を含む褐色シルトが混じり、Ⅳ層へ漸移的に移行する。Ⅲ-3層中から出土する遺物は、古墳時代後期の須恵器・土師器が圧倒的に多いが、これに弥生土器甕の底部片、古代～中世の土師器皿、土鍋の脚部片、緑釉陶器片が混じる。

その中で、図43-1は、8世紀前半期の須恵器高坏の高台付き坏。2は、古墳時代後期の須恵器の坏蓋で、回転ヘラケズリ調整によって天井部に不明瞭な段が生じている。他に、古代の須恵器の坏・蓋・甕、古代の土師器の坏、古墳時代後期の土師器・須恵器、弥生土器や、12世紀後半～13世紀初めの瓦器埴の口縁部片が数点出土している。

〔I層〕(図44, 図版32)

表土層のI層からも古墳時代後期～中世の遺物が出土している(図44)。1は須恵器の坏蓋。天井部と体部の境はナデによって浅い窪みがめぐる。2(図版32-1)は土師器埴。体部から口縁部に向かって直線的にのびる。3(図版32-2)は土師質土器で、鍋の口縁部片である。

〔攪乱部〕(図45, 図版32)

近世～現代の攪乱部からも古墳時代後期～中世の遺物が出土している(図45)。1・2は須恵器。1は坏身で、底部は平底に近い。2は鉢の口縁部片と考えた。端部は横ナデ調整で面取りする。3・4は土師器。3(図版32-3)は高坏の坏部下半の破片で、脚部との接合は組み合わせ式による。坏身の体部と口縁部の境に段がめぐる。4は皿。外底面の切り離し方法は不明。5(図版32-4)は同安窯系青磁皿で、灰白色の磁胎に暗オリーブ色の釉を施す。6は土師質土器で、羽釜の脚部片である。

2 II区の調査

II区は、農学部本館と2号館に囲まれた中庭の北西部に埋設される污水管路部分にあたる調査区である。幅0.6m、総延長10mで、管路の北端

部、管路がL字形に折れる南西部、南東側端の3ヶ所に、一辺1.3~1.5mの污水枡設置部分が位置する。南東側端の污水枡設置部分をII A区、管

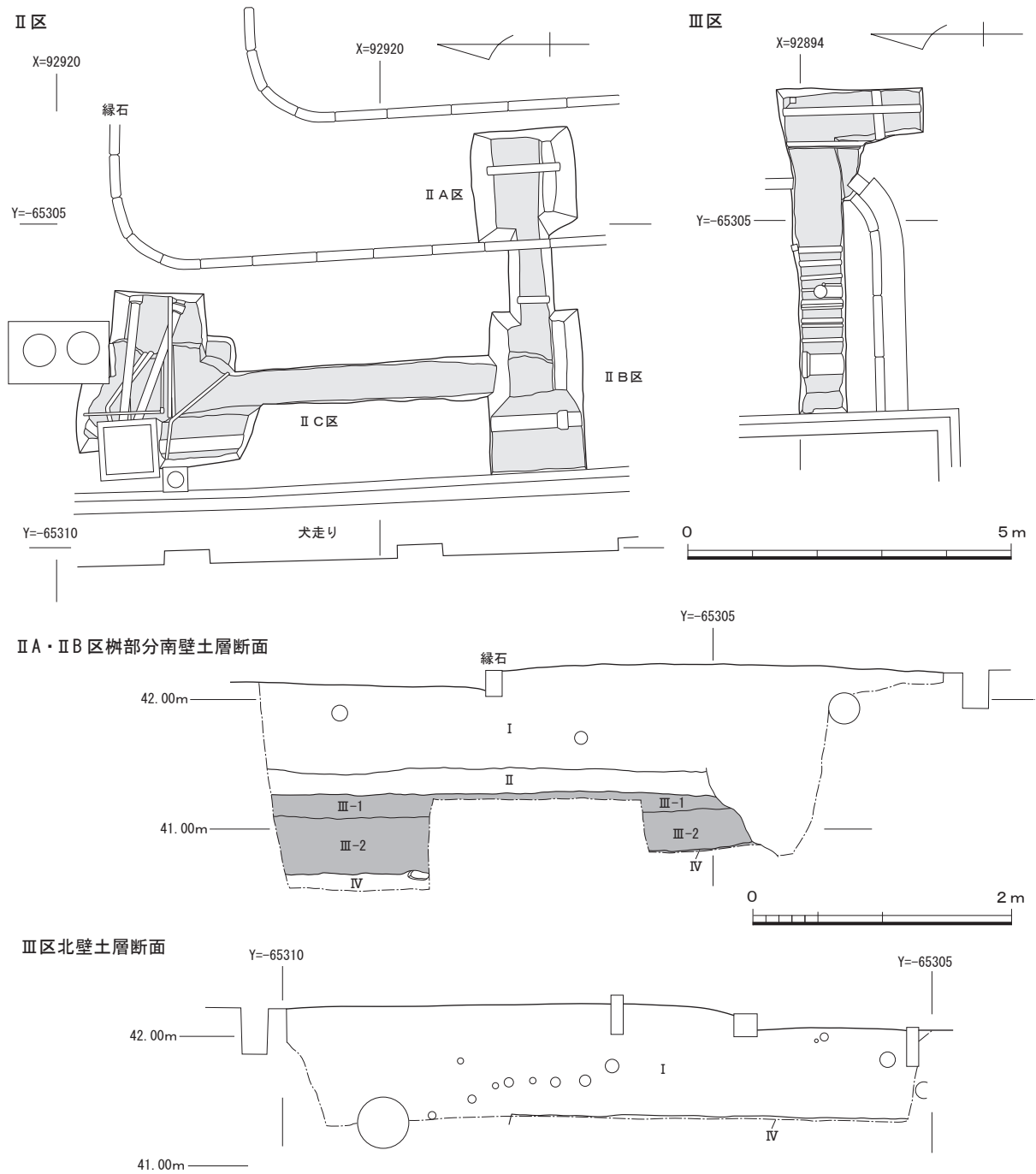


図46 7次調査II・III区全体図及び土層断面図 (縮尺 1/100, 1/50)

路がL字形に折れる南西部の污水枡設置部分をII B区、そして管路の北端部の污水枡設置部分と南へのびる管路部分をII C区として調査を進めた(図46, 図版28-4, 29-1)。

(1) 層序と出土遺構

造成土層であるI層が地表下0.65~0.7mまでつき、その下層に樽味団地が造成される以前の灰色系の近世~近代の水田層であるII層があらわれた。また、II C区では既設の配管が多数埋設されており、地表下0.7mまで掘り下げた時点で調査を終わらざるをえなかった。今回の工事で計画されている掘削深度は道路面から0.7mで、埋蔵文化財に工事による影響がおよばないが、将来予想される工事に対応するため、II A区とII B区で調査区の南壁沿いに幅25cmの带状に深掘りを行い、III層の深度や遺構の有無を確認することとした(図46, 写真29-2・3)。

その結果、II A区では、地表下0.85mでやや灰色みをおびた暗褐色粘質土層であるIII-1層, 1.05mで暗褐色粘質土層であるIII-2層があらわれた。さらに、II A区では地表下1.45m, II B区では1.25mで、樽味団地の基本層序のIV層を確認できた。

II A区とII B区ではIII層の下底面は20cmほどの差があり、II A区のIII-2層下部からは一部弥生土器の小片が混じるが、比較的大型の須恵器坏蓋, 高杯, 土師器甕の口縁部などが集中して出土している。そのため、何らかの遺構, 竪穴式住居跡の可能性が高い。しかし、深掘り部分の狭い範囲での確認であり、遺構の種別も明らかでないので、遺構番号は付していない。

(2) 出土遺物

II区では、II A・II B区のIII層から、中世の土師器, 古墳時代後期の須恵器と土師器, 弥生土器が出土している。II C区では、土師器の胴部片1点がI層から出土したのみである(図47, 図版42)。

III-1層は、上部と下部に分けて遺物を採り上げた。III-1層上部では、中世の土師器を含む遺物が出土している(図47-1~3)。1・2は中世の土師器で、1(図版42-2)は皿, 2(図版42-3)は坏の底部片である。ともに14世紀前半~中

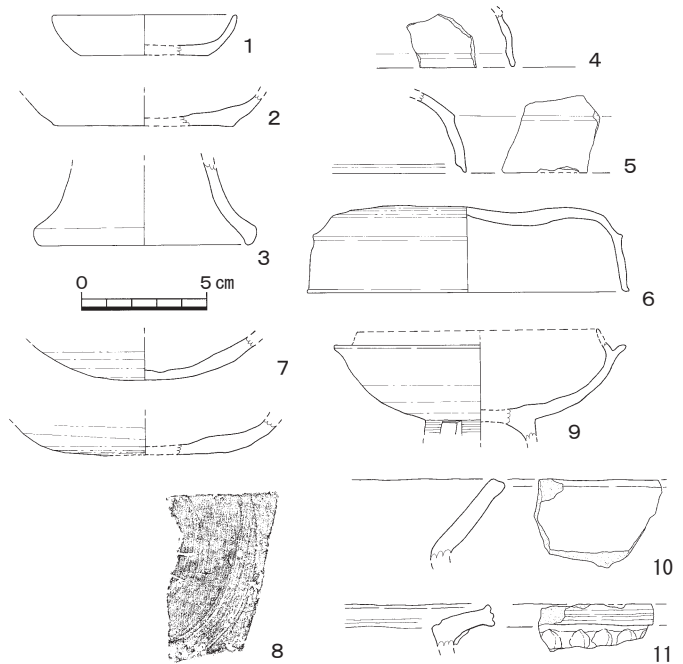


図47 7次調査II区出土遺物実測図(縮尺1/3)

頃に比定できる。3(図版42-1)は古墳時代後期の須恵器の短脚の高坏脚部分である。脚端部をわずかに肥厚させ、下端部を横ナデで摘み出す。この他、弥生時代中期の脚台状の底部の甕の破片, 古墳時代後期の須恵器及び土師器の胴部, 古代の土師器皿または坏, 土鍋の胴部などの破片30点ほどが出土しているが、いずれも細片化している。III-1層下部からは、古墳時代後期の須恵器及び土師器の胴部, 古代の土師器胴部などの破片20点ほど出土しているが、細片化しているため図化できなかった。

III-2層は上部・中部・下部に分けて掘り下げ遺物を採り上げた。ただし、前述したように、II A区ではII B区と比べてIII-2層は20cmほど厚く、III-2層下部として採り上げた遺物はII A区から出土した遺物である。III-2層上部~中部の出土遺物には、古墳時代後期の須恵器及び土師器の胴部, 古代の土師器胴部などの破片40点前後があるが、いずれも小片である。III-2層中部の遺物は上部と比べて少ない。これに対して、II A区のIII-2層下部からは、須恵器坏蓋, 高杯, 土師器甕の口縁部などの大型の破片が出土している(図47-4~11)。4~9は須恵器。4は、細片のため口径は不明であるが、器壁の厚さから短頸壺の蓋と考えた。口縁端内面に1条の沈線状の段が

めぐる。4～6は須恵器の坏蓋。5は、天井部との境界に段がめぐり、口縁端内面にも横ナデ調整で段が生じている。灰白色の焼き上がりである。6(図版42-5)は、箱形に近い器形で、天井部との境界に鋭角的な段がつくられる。口縁端部を横ナデ調整で短く反転させる。7・8は須恵器の底部片である。8の外底面には「ハ」字形のヘラ記号が残されている。9(図版42-4)は須恵器の有蓋高坏である。わずかに残る脚部には、ヘラ状工具であけられた長方形の透し孔を観察できる。10は土師器甕の口縁部片である。口縁部内面がわずかに内湾する。以上は古墳時代後期の6世紀後半

の遺物である。

この他、弥生土器、古墳時代後期の須恵器坏及び土師器の胴部小片などの計30点前後が出土している。この中で、11は弥生時代中期後葉の甕の口縁部片。口縁端部を個々ナデで上下に拡張し、幅が狭いが深めの2条の凹線文をめぐらす。口縁屈曲部外面には粘土を貼り付けて、爪で刻目を施す。内面には1条の沈線状の段がめぐる。

以上、同じⅢ-2層でも、上部や中部には中世の遺物が混じるが、下部にはそうした遺物はみられない。Ⅲ-2層下部は遺構埋土と考えるが、古墳時代後期の6世紀後半に比定できる。

3 Ⅲ区の調査

Ⅲ区は、Ⅱ区と同じく、農学部本館と2号館に囲まれた中庭の南西部に敷設される污水管路にあたる幅0.7m、長さ6mの調査区である(図46, 写真29-1・4, 30-1)。地表下0.3～0.4mで既設配管が多数あらわれ、工事掘削が計画されてい

る地表下0.7mまで掘り下げたところ、Ⅳ層があらわれた。Ⅳ層上面を精査し遺構検出に努めたが、遺構・遺物ともに出土しなかった(図版30-1)。なお、2号館建物壁から2.8mの範囲は、建物建設に伴う余堀り部分である。

4 Ⅳ区の調査

三科実験室建物と農学部本館をつなぐ電気・通信管路部分であるⅣ区は、総延長35mと、細長い調査区である(図48, 写真30-2・3, 31-1～3)。そのため、東から西に向かって5mごとにⅣA～ⅣH区に区割りした。ⅣA区は、農学本館建物から南に管路がのびる $Y = -65275 \sim -65280$, $X = 92870 \sim 92875$ の部分。調査区の東端部分。ⅣB区は、管路が折れ曲がる $Y = -65275 \sim -65280$, $X = 92865 \sim 92870$ の区域。ⅣC～ⅣE区は管路が東西方向にのびる部分で、 $Y = -65280 \sim -65285$ 間をⅣC区、 $Y = -65285 \sim -65290$ 間をⅣD区、 $Y = -65290 \sim -65295$ 間をⅣE区とした。ⅣF区は管路が南に折れる調査区西端部分の $Y = -65295 \sim -65300$, $X = 92865 \sim 92870$ の部分である。ⅣG

～ⅣH区は南北方向の管路部分で、 $X = 92960 \sim 92965$ 間をⅣG区、 $X = 92955 \sim 92960$ 間をⅣH区とした。

(1) 層位

表土剥ぎにあたって、ⅣB区東端で、工事で掘削される深度である地表下1mで掘り下げたが、造成土層であるⅠ層が続く。そのため、工事によって埋蔵文化財に影響はないものと判断できた。しかし、周辺では既往の調査がなく、将来予想される工事に対応するために、ⅣB区～ⅣF区の東西にのびる直線部分を調査することとした(図版30-2)。ただし、ⅣD区西半部～ⅣE区東半部には、調査区を横断するように、コンクリー

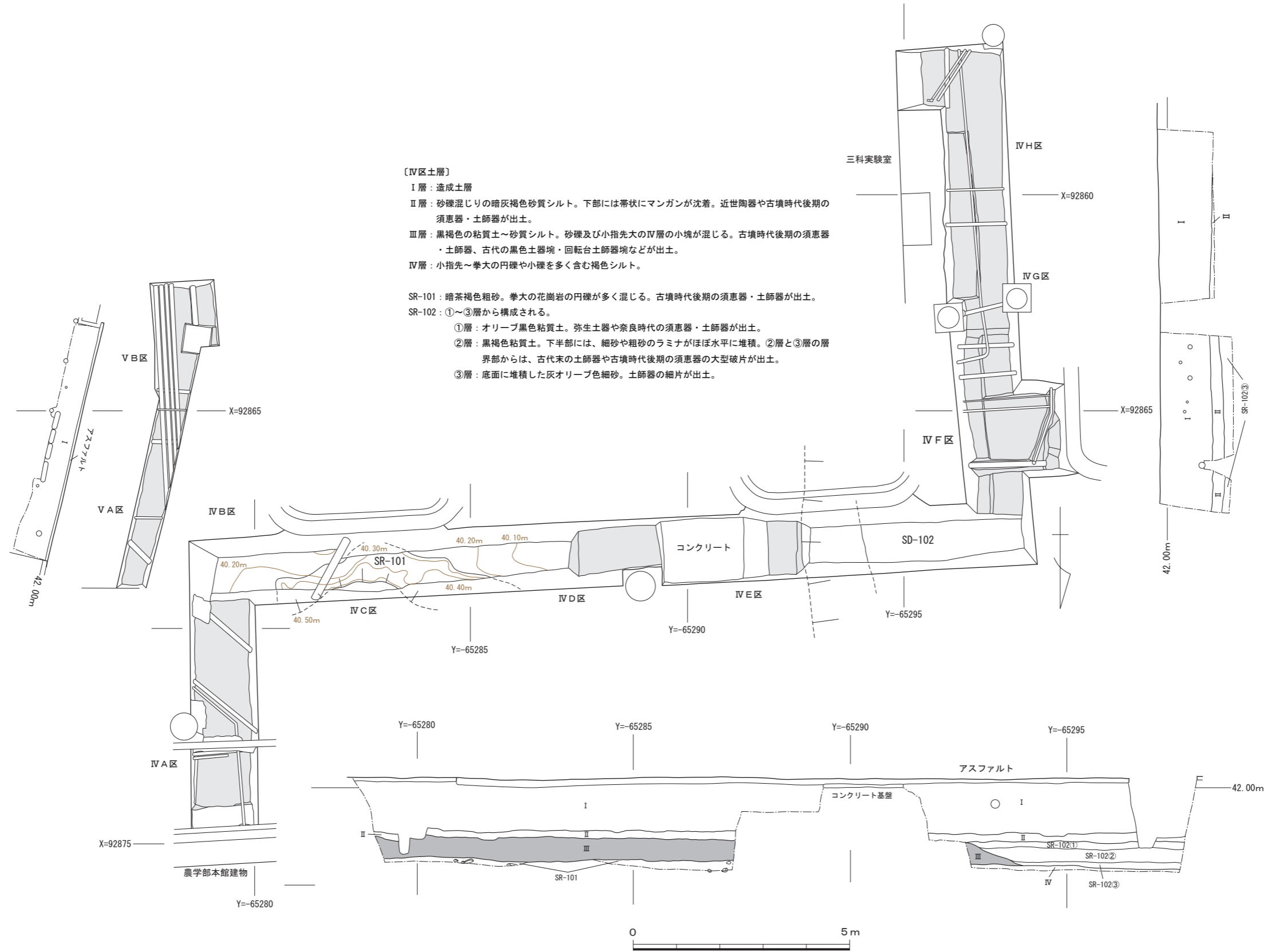


図48 7次調査IV・V区全体図及び土層断面図（縮尺 1/100, 1/50）

トの基礎があらわれた。撤去できないため、Ⅲ層以下を調査できた範囲は、ⅣB区～ⅣD区東半部と、ⅣE区西半部～ⅣF区である。

表土剥ぎの時点でのⅣB区東端の深掘り部分では、地表下1.25mでⅡ層があらわれた。ⅣG区で近代陶器片、古墳時代後期の土師器・須恵器の胴部片が数点出土。また、地表下1.4mでⅢ層があらわれた。砂混じりの黒褐色シルトで、50cmほどの層厚があり、調査では、Ⅲ層検出面から10～15cmごとにⅢ-1～Ⅲ-5層の5層に分けて掘り下げ、遺物を採り上げた。Ⅲ-1層は、Ⅲ層上面から12cmまで最上部にあたり、古墳時代後期の須恵器・土師器・古代の黒色土器塊・回転台土師器塊の細片が、少量出土した。Ⅲ-2層は12～25までⅢ層上半部にあたり、出土遺物はⅢ-1層よりも少なく、細片がほとんどである。Ⅲ-3層は25～35cmのⅢ層下半部、Ⅲ-4層は35～50cmのⅢ層最下部にあたる。遺物は出土しておらず、土質も砂がほとんど混じらないシルト質土である。

(2) 遺構と遺物

ⅣB区～ⅣD区東半部のⅢ層下では、北から南に向かって落ち込むⅣ層を検出した。Ⅳ層の落ち込み部分には、15～25cmの厚さで暗褐色粗砂層が堆積する。自然流路SR-101とした。一方、ⅣE区西半部～ⅣF区では、Ⅲ層を掘り込むSD-102が出土した。

1) 溝

SD-102 (図48・49, 図版31-2)

ⅣE区西半部～ⅣF区で検出した南北にのびる溝である。Ⅲ層を掘り込み、溝底は基本層序のⅤ層に対応する砂礫層に達する。Ⅲ層上面から溝底までは、ⅣF区西端で30cmを測り、ごく緩やかに西に向かって深くなる。

埋土最上部は、厚さ15～20cmのオリブ黒色粘質土(①層)、その下層には黒褐色粘質土(②層)、溝底には灰オリブ細砂(③層)が堆積する。①・②層は湿地環境で堆積した土層で、②層下半部に細砂や粗砂のラミナがみれ、③層が細砂層であり、溝が埋没し湿地環境に変化する過程を読み取れる。

SD-102①層からは、弥生土器胴部片、奈良時代須恵器高台付坏、土師器胴部の細片が出土。出

土量は多いが、小さな破片ばかりである。②層下部からは、古代末～中世前期の土鍋の口縁部片をはじめ古墳時代の須恵器や土師器の細片、ⅣE区の②層と③層の層界部から、古代末の土師器塊、古代時代の須恵器坏蓋天井部片の比較的大形の破片が出土している。③層の砂礫層中からは、器面の荒れが著しい土師器細片が1点出土したのみである(図49-22～28)。

この中で、23・25・26は①～②層から出土。23は土師器の坏もしくは皿の底部片。器壁の芯部に灰色の黒化層が残る。25土師器の甕の肩部片。26は須恵器。肩部から緩やかに屈曲しながら頸部につながる。壺と考える。また、22・27は②・③層界部、24は②層下部から出土している。22は土師器の坏である。接合しないが、全周の1/3ほどの破片がまとまって出土した。わずかに膨らみをもつ体部をもち、比較的厚手のつくりである。10世紀～11世紀前半に比定できる。27は、径から古墳時代後期の須恵器の短頸壺の蓋と考えた。24は、古墳時代後期の土師器の甕。「く」字形に屈曲する口縁部をもつ。外面には粘土接合線が残るとともに、横ナデで生じた粘土の撚れがみられる。この他、28は、古墳時代前期初頭の土師器の甕である。口縁部をヘラ状工具で押さえて「く」字形に屈折させる。

以上、SD-102から出土した遺物には、古墳時代前期初頭や後期の遺物も混じるが、②・③層の層界部から出土した10世紀～11世紀前半の土師器坏から、当該期の溝と考える。

2) 自然流路

SR-101 (図48・49, 図版31-1)

ⅣB区～ⅣD区東半部で南に向かって落ち込む暗褐色粗砂層をSR-101とした。暗褐色粗砂層の層厚は15～25cmを測る。ほぼ東西方向にのびる自然流路であるが、西側のⅣE区西半部～ⅣF区では検出されていない。古墳時代後期の須恵器甕胴部片・土師器甕の胴部片が出土した(図49-20・21)。20は、須恵器の蓋と考えられる。口縁部を短く屈曲させる。21は、須恵器の甕または壺の胴部片。外面は格子タタキ目をカキ目でナデ消す。内面には同心円文の当て具痕が残る。ともに小片で、以外の10点ほども細片であり、古墳時代

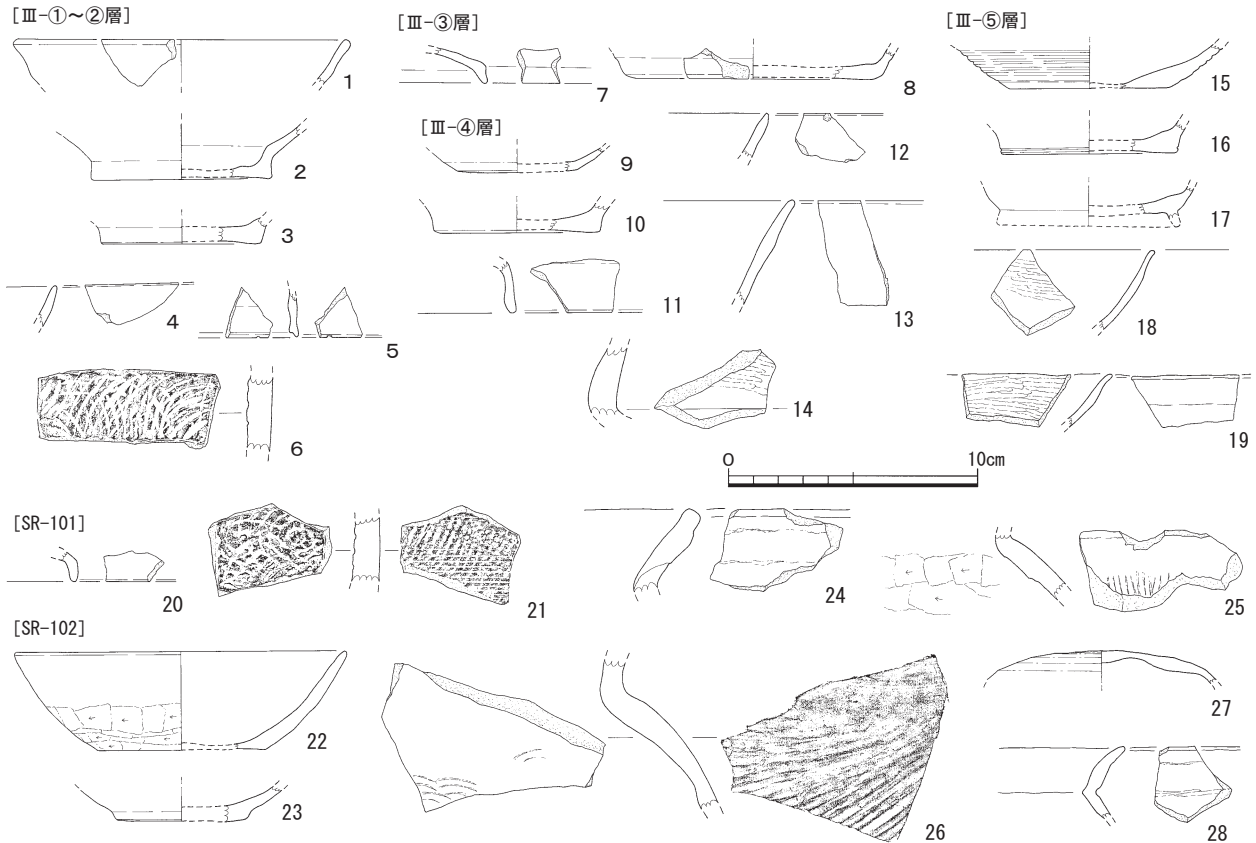


図49 7次調査IV区出土遺物実測図（縮尺 1/3）

後期に比定できる。したがって、SR-101は古墳時代後期に埋没する自然流路と考えられる。

3) III層出土の遺物（図49、図版42）

IV区のIII層は50cmほどの層厚があり、前述したようにIII層検出面から10～15cmごとにIII-①～III-⑤層の5層の人工層位で掘り下げながら遺物を採り上げた（図49-1～19）。1～6はIII-①～②層から出土。1は土師器の甕または坏で、体部上半でわずかに反転して口縁部につながる。小片のため口径は不確実。2（図版42-6）・3は、円盤高台の土師器甕である。ともに外底面の切り離し方法は不明である。2の同一個体と考えられる破片がIV C区西半部III-②層から出土しており、2は本来同②層に包含されていた遺物と考えられる。4は土師器の坏の口縁部片。わずかに膨らむ口縁部で、口縁端部を横ナデ調整で尖り気味に仕上げる。5は須恵器の坏蓋で、口縁端部の内面に横ナデを施し、沈線状に段をつくる。6は須恵器の甕または壺の胴部片。器体の傾きは不明である。この他、III-①～②層からは、図版42-7の瓦器の頸部片が出土している。内外面を回転横ナデし、外

面に生じた凸部に板状工具を押捺して刻目を施す。内外面ともに黒色釉、胎は灰色。近世の遺物と考えられ、II層からの混入の可能性が高い。

7はIII-③層から出土した須恵器の坏蓋である。口縁端部を横ナデで短く折り曲げる。高台付き坏の蓋と考える。8は須恵器の皿の底部片である。ともに8世紀代に比定できる。

9～14はIII-④層から出土。9は土師器の皿の底部片。外底面には回転ヘラ切り離しの痕跡が残る。10は土師器の円盤高台の坏で、III-②層から出土している3と同一個体の可能性も残す。11も須恵器で、薄手のつくりで短頸壺の蓋と考えた。12・13は須恵器の高台付き坏の口縁部片で、13は大型品。14は須恵器の甕または壺。頸部の付け根付近の破片で、外面には自然釉が薄く付着する。

15～19はIII-⑤層から出土。15は土師器の坏で、外底面を除く、体部の内外面を赤色塗彩する。16は土師器の円盤高台をもつ甕で、底部裾部に細い沈線状の条線が1条めぐる。17も土師器の甕で、輪高台をもつ。18・19は内黒土器で、12世紀後半～13世紀初めに比定できる。

5 V区の調査

IV区西側に位置する汚水管路部分であるV区は、 $Y = -65275 \sim -65280$ 、 $X = 92860 \sim 92870$ の区域にあたる東西幅0.7m、南北長7mの調査区である(図48, 図版31-4)。地表下-0.6mまで掘り下げたところ、多くの管路があらわれた。工事

で掘削される深度は地表下1.0mであるが、近接するIVB区の土層観察では、地表下-1.2mまでI層の表土である造成土層が続くので、慎重工事を行うことを依頼することとし、調査を終了した。遺物は出土していない。(田崎・濱田)

表6 樽味遺跡7次調査遺構観察表

遺構 種別 番号	調査区	形状・埋土の特徴等	埋土 類型	時代
SK 1	I D・I E区	径80cm前後のほぼ円形の浅い土壇。詳細は本文38頁に報告。	A	近世以降
SP 2	ID区	Ⅲ-1層を掘り下げ中に確認。長径32cm, 短径22cm, 深さ10cm前後の長円形の小穴。埋土は, やや白っぽく光沢のある灰色シルト質土。弥生中期後葉～後期初頭の甕の口縁屈曲部破片, 古墳後期の須恵器胴部破片, 中世の須恵質の丸瓦破片など4点が出土。	A	近世以降
SP 3	I D区	径30～33cm, 深さ10～11cmの掘り形をもつ不整形円形の小穴。詳細は本文55頁に報告。	A	近世以降
SP 4	I D区	Ⅲ-1層を掘り下げ終わった時点で確認。SK-7を切る。径12cm, 深さ6cmほどの円形の小穴。埋土はSK-1と同じく, やや白っぽく光沢のある灰色シルト質土。	A	近世以降
SP 5	I D区	Ⅲ-1層を掘り下げ終わった時点で確認。径19～22cm, 深さ10cmの長円形の小穴。埋土はSK-1と同じく, やや白っぽく光沢のある灰色シルト質土。	A	近世以降
SP 6	I D区	Ⅲ-1層を掘り下げ終わった時点で確認。SK-7を切る。埋土は, SP-2と同じく, やや白っぽく光沢がある灰色シルト質土。	A	近世以降
SK 7	I D区	隅丸方形の深さ10cm前後の浅い土壇。詳細は本文39頁に報告。	A	近世以降
SD 8	I B区	I B区で南北方向にのびる溝。詳細は本文37頁に報告。	B	古代～中世
欠番 9				
欠番 10		SR-13の①層と②層部分を遺構として誤認。		
SP 11	I B区	径15cm, 深さ20cm前後の円形の小穴。埋土はやや白っぽくツヤのある灰色シルト土。炭化物小片が多く出土。	A	近世以降
SP 12	I E区	径23cm前後の円形の小穴。埋土は, 灰色のやや光沢があるシルト土。Ⅲ-2層下面で検出したが, 埋土の特徴から, Ⅲ層上面からの掘り込みと判断。埋土中から, 炭化物片, 須恵器・土師器の胴部小片が数点出土。	A	近世以降
SR 13	I D～I F区	自然流路。詳細は本文40頁に報告。	C	
SP 14	I C区	径20～25cm, 深さ60cmほどの円形の小穴。SP-12と同じく, Ⅲ-2層下面で確認。埋土は, 灰色みをおびる黒褐色砂質土。下部は粘性が強くなる。1cm大の角張った炭化物片が出土。	B	中世
SP 15	I C区	径23～25cmの小穴。SP-12・14と同じく, 埋土は灰色みをおびる黒褐色砂質土で, Ⅲ-2層下面で確認。	B	中世
欠番 16				
SC 17	I C区	方形の竪穴式住居跡。SD-18に切られる。詳細は本文33頁に報告。	C	古墳後期
SD 18	I C区	ほぼ南北にのびる溝。詳細は本文38頁に報告。	B	古代
SK 19	I C区	深さ16cmほどの小型土壇。詳細は本文39頁に報告。	C	古墳後期
SP 20	I C区	SR-13の埋土②層の下面で検出。深さ10cmほどの浅い皿状の小穴。SK-19に切られる。埋土は黄褐色砂質土で, 黒褐色砂質土の小指先大の小塊が混じる。	C	古墳後期
SP 21	I C区	径20cm前後の円形の小穴で, SD-13埋土①層を切って掘り込まれている。埋土は灰色みをおびた暗褐色シルト土。炭化物の小片が多く混じる。埋土上部から, 黒色土器(両黒土器) 壺の胴部片1点, 土師器胴部片1点が出土。	B	古代
SP 22	I C区	径18cm前後の円形の小穴で, SC-17を切る。埋土は, やや灰色味をおびた暗褐色シルト土。SR-13の埋土②層の下面で確認できたが, 埋土は近世以降の遺構埋土の特徴をもつ。SR-13の①～②層を掘り下げ中に見逃した小穴。炭化物小片が出土。	A	近世以降
SP 23	I C区	径15cm前後の円形の小穴で, SC-17を切る。ほぼ中央に径10cmほどの杭痕跡を確認。埋土は灰色みをおびる暗褐色シルト土で, 小指先大のぶい黄褐色砂質土の小塊が混じる。SP-22と同じく, 埋土は近世以降の遺構埋土の特徴をもつ。	A	近世以降
SP 24	I C区	径15cm前後の円形の小穴で, SR-13埋土②層の下面で検出した。埋土は, ぶい黄褐色砂質土と暗褐色シルトの小塊が混じり合う。埋土上部から土師器甕の胴部片1点が出土。	C	古墳後期
欠番 25		SP-14と重複して遺構番号を付したため, 欠番とした。		

遺構		調査区	形状・埋土の特徴等	埋土 類型	時代
種別	番号				
SP	26	I C区	径27cm, 深さ4cmほどの浅い皿状の小穴。SP-14に切られる。SR-13の埋土②層の下面で確認できたが、②層の中位から掘り込まれたものと判断。埋土は、黄褐色砂質土と褐色砂質シルトが縞状に互層堆積。埋土上部から土師器の坏または皿の胴部小片が1点出土。	B	中世
SP	27	I C区	短径42cm, 長径47cmの長円形の小穴。詳細は本文55頁に報告。	B	中世
SC	28	I C・I D区	隅丸方形と考えられる竪穴式住居跡。詳細は本文35頁に報告。	C	古墳後期
SX	29	I E・I F区	SR-13中に投棄された土器溜まり。詳細は本文53頁に報告。	-	古墳後期
SP	30	I C区	SC-28の床面から掘り込まれた径20cmほどの円形の小穴である。埋土は黒褐色シルト質土で、小指先大のにおい黄褐色シルトの小塊が点々と混じる。	C	古墳後期
SP	31	I G区	調査区東壁沿いに位置する長径45cm, 短径33cm, 深さ12cmの不整な楕円形の小穴。埋土は褐灰色シルト。炭化物小片や径3cm前後の円礫が出土。	B	中世
SP	32	I G区	径15cm, 深さ17cmほどを測る円形の小穴。詳細は本文56頁に報告。	B	中世
SP	33	I G区	径24~28cm, 深さ28~30cmの不整円形の掘り形をもつ小穴。詳細は本文56頁に報告。	B	古代
SP	34	I G区	長径23cm, 短径16cm, 深さ10cm前後の不整な楕円形の小穴。埋土は、SP-33と同じく、少量の砂礫が混じる褐灰色シルト土。土師器の胴部小片3点が出土。	B	古代~中世
SP	35	I G区	径26~28cm, 深さ9cm前後の不整円形の小穴。埋土は褐灰色シルト土に暗褐色シルトの小塊が多く混じる。須恵器と土師器の胴部片が各1点、径3~5cm大の花崗岩円礫が出土。	B	古代~中世
SP	36	I G区	径17×21cm, 深さ9cm前後の不整円形の小穴。埋土は暗褐色シルト土に、褐灰色シルトが少量混じる。	B	古代
SP	37	I G区	長径40cm, 短径23cmの北側が細長くのびる不整形の小穴。深さは18cm前後。埋土は、SP-33と同じく、少量の砂礫混じりの褐灰色シルト。土師器甕の胴部小片1, 径3~5cmの花崗岩の円礫などが出土。	B	古代
SP	38	I G区	径28cm前後, 深さ5cmを測る円形の小穴で、電線管路の掘り形で北側部分が削られている。埋土は、SP-36と同じく、暗褐色シルトで、褐灰色シルトが少量混じる。拳大の花崗岩の円礫が出土。	B	古代
SP	39	I G区	径33cm, 深さ30cm前後の円形の小穴。詳細は本文57頁に報告。	B	古代
SP	40	I G区	径20~25cm, 深さ7cmの長円形の小穴。詳細は本文57頁に報告。	B	中世
SP	41	I H区	径32×35cm, 深さ10cm前後の不整な長円形の掘り形をもつ小穴。埋土は褐灰色砂質シルト土で、暗褐色シルトやにおい黄褐色砂質シルトの小塊が多く混じる。	B	古代~中世
SP	42	I H区	径16~18cm, 深さ14cmの円形の小穴。埋土は、SP-40と同じく、埋土は褐灰色砂質シルト。	B	中世
SP	43	I H区	径40×50cm, 深さ20cm前後の楕円形の小穴。SC-50を切る。埋土は、SP-40と同じく、褐灰色砂質シルト。埋土下部から中世の須恵質土器と土師器の胴部小片が各1点出土。	B	中世
SP	44	I H区	径15cm, 深さ15cmほどの円形の小穴。SC-50を切る。埋土は、SP-40と同じく褐灰色砂質シルト。埋土中から土師器胴部の細片3点が出土。	B	中世
SP	45	I H区	SC-50を切る。径15cm, 深さ12cmほどの円形の小穴。埋土は、SP-40と同じく、褐灰色砂質シルト。	B	中世
SP	46	I H区	SC-50を切る。長軸長26cm, 深さ11cmほどの楕円形の小穴。南側は調査区外にのびる。埋土は、SP-40と同じく、褐灰色砂質シルト土。埋土最下部から、黒色土器(内黒土器)と土師器の胴部細片が数点出土。	B	中世
SP	47	I H区	径35cm, 深さ26~28cmの円形の小穴。埋土は、SP-40と同じく、褐灰色砂質シルト土。	B	中世
SP	48	I H区	径25×35cmほどの円形の小穴。深さ30cm。埋土は褐灰色シルトで、暗褐色シルトやにおい黄褐色シルトの径3cmの塊が混じる。弥生土器の甕胴部片、赤焼き須恵器の坏身口縁部片、黒色土器の碗口縁部片が10点前後出土。	B	古代
欠番	49		SC-50の埋土を誤認したため、欠番とした。		
SC	50	I H・I I区	一辺5mほどの隅丸方形の竪穴式住居跡。詳細は本文36頁に報告。	C	古墳後期

遺構		調査区	形状・埋土の特徴等	埋土 類型	時代
種別	番号				
SK	51	I H・I I区	隅丸方形と考えられる南北辺2.25mを測る土壇。SC-50を切る。詳細は本文39頁に報告。	C	古墳後期
欠番	52		SC-50の埋土の一部を誤認したため、欠番とした。		
SP	53	I I区	径47cm、深さ5cmほどの円形の浅い小穴。詳細は本文57頁に報告。		中世
SP	54	I I区	SB-77の柱穴。詳細は本文36頁に報告。	C	古墳後期
SK	55	I I区	風倒木痕。詳細は本文39頁に報告。		
SP	56	I H・I I区	SB-77の柱穴。詳細は本文39頁に報告。	C	古墳後期
SP	57	I J区	深さ30cmほどの不整楕円形の浅い小穴。SP-40と同じく、埋土は褐灰色砂質シルト土。土師器胴部小片1点出土。	B	中世
SP	58	I J区	径30～35cm、深さ10cmほどの浅い円形の掘り形をもつ小穴。埋土は暗褐色シルト土で、にぶい黄褐色土が混じる。暗褐色のシルトの小塊が斑点状に混じる。		中世
SP	59	I H・I I区	SC-50の床面で検出したが、調査区壁面でSC-51を切って掘り込まれていることを確認。埋土は黒褐色シルト土で、にぶい黄褐色シルトの不整形な小指先大の小塊が混じる。	C	古墳後期
SP	60	I H区	SC-50の床面で検出したが、調査区壁の観察でSC-51を切って掘り込まれていることを確認。暗褐色シルトに小指先大のにぶい黄褐色シルトの小塊が点々と混じる。	C	古墳後期
SK	61	I I区	風倒木痕。詳細は本文39頁に報告。		
欠番	62				
SK	63	I D区	SK-64に切られた不整形の土壇。詳細は本文40頁に報告。	C	古墳後期
SK	64	I D区	長径85cm、短径55cm、深さ22cmほどの長楕円形の小型土壇。詳細は本文40頁に報告。	C	古墳後期
SP	65	I D区	長径32cm、短径28cm、深さ10cmの不整楕円形の浅い小穴。SR-13①・②層を除去後に確認。埋土は淡い褐色砂質シルト土。	C	古墳後期
SP	66	I D区	長径26cm、短径13cm前後、深さ17cmほどの楕円形の浅い小穴。SR-13①・②層を除去後に確認。埋土は淡い褐色砂質シルト土。	C	古墳後期
SP	67	I D区	長径32cm、短径22cm、深さ11cmの不整円形の浅い小穴。SR-13①・②層を除去後に確認。埋土は淡い褐色砂質シルト土。	C	古墳後期
SP	68	I D区	径15～20cm、深さ6cmほどの浅い掘り形をもつ小穴。SR-13①・②層を除去後に確認。埋土は淡い褐色砂質シルト土。須恵器・土師器の胴部片が数点出土。	C	古墳後期
SK	69	I D区	長径55cm、短径35cm、深さ8cmほど浅い楕円形の小型土壇。詳細は本文40頁に報告。	C	古墳後期
SP	70	I D区	径20～22cm、深さ3cmほどの浅い小穴。詳細は本文57頁に報告。	C	古墳後期
SP	71	I D区	径22cm、深さ10cmほどの不整円形の浅い小穴。詳細は本文57頁に報告。	C	古墳後期
欠番	72		SP-6の掘り残り部分をSP-72としていたため、欠番とした。		
欠番	73				
SP	74	I J区	深さ40cmほどの円形の浅い小穴。詳細は本文57頁に報告。	B	中世
SP	75	I J区	SP-74に切られる小穴の残欠。詳細は本文58頁に報告。	B	中世
SP	76	I J区	SP-74を切る円形の浅い小穴。詳細は本文58頁に報告。	B	中世
SB	77	I I・I J区	SP-54・56から構成される掘立柱建物。詳細は本文36頁に報告。		古墳後期
SP	78	I H区	径20×25cmの円形の浅い小穴で、深さ10cmほどを測る。SC-50の床面で検出。埋土は、にぶい黄褐色の小塊が混じる黒褐色シルト土。	C	古墳後期
SP	79	I H区	径18cm前後、深さ24～26cmの円形の浅い小穴。SC-50の床面で検出。埋土は、にぶい黄褐色の小塊が混じる黒褐色シルト土。	C	古墳後期
SP	80	I H区	SC-50と切り合うが、先後関係は不明。径18cm、深さ28cmほどの小穴。埋土は、SC-50と同じく黒色シルト土。	C	古墳後期
SP	81	I H区	径25×30cm、深さ24cmほどの楕円形の浅い小穴。西半部はテラス状となる。埋土はやや白っぽくツヤのある灰色シルト土。	A	近世以降
SP	82	I D区	調査区壁面で確認できたⅢ-2層下面から掘り込まれた小穴。	B	古代～中世
SP	83	I D区	SC-28に切られる浅い皿状の小穴である。調査区壁面で確認。	C	古墳後期

遺構		調査区	形状・埋土の特徴等	埋土 類型	時代
種別	番号				
SP	84	IC区	調査区壁面で確認。Ⅲ-1層を掘り込む。埋土は灰色みをおびた褐色砂質シルト土。埋土には炭化物の薄片を多く含む。	A	近世以降
SP	85	IC区	調査区壁面で確認。Ⅲ-1層を掘り込む。埋土は、灰色みをおびた褐色砂質シルト土。	A	近世以降
SP	86	IC区	調査区壁面で確認。Ⅲ-2層から掘り込まれる。埋土は灰褐色砂質シルト土で、しまりがある。	B	中世
SP	87	IB区	調査区壁面で確認。Ⅲ-2層から掘り込まれる。埋土は、黒褐色粘質土で、粘性が強い。埋土の下部は砂質土で、径0.1~0.3cmの細礫が多く混じる。土器の細片が少量出土。	B	中世
SP	88	IB区	調査区壁面で確認。Ⅲ-1層の中ほどから掘り込まれるが、明確ではない。埋土は、やや灰色みをおび、わずかに粘性のある黒褐色砂質土。埋土には径0.3~0.5cmの炭化物の破片が多く混じる。土器の細片が少量出土。	B	中世
SP	89	ID区	調査区壁面で確認できた褐灰色シルト土を埋土とする小穴。Ⅲ-1層とⅢ-2層の層界部から掘り込まれている。	B	古代~中世
		Ⅱ区	ⅡA区とⅡB区ではⅢ層の下底面は20cmほどの差があり、ⅡA区のⅢ-2層下部からは、比較的大型の須恵器坏蓋、高杯、土師器甕の口縁部などが集中して出土。竪穴式住居跡である可能性もあるが、確定できなかったため、遺構番号は付していない。		
SR	101	IVB~IVD区	北から南に向かって落ち込むIV層の凹部に堆積する暗褐色粗砂層をSR-101とした。詳細は本文63頁に報告。		古墳後期
SD	102	IVE・IVF区	Ⅲ層に掘り込まれた南北にのびる溝。詳細は本文63頁に報告。		古代~中世

表7 7次調査出土遺物観察表

挿図・ 遺物番号	調整区・出土 遺構・層位	種別	器種	出土状況・観察所見ほか	遺物登録 番号	収納 コンテナ	
図20	1 IC区	SC-17	須恵器	蓋	東半部埋土上部から出土。内外面ともに回転横ナデ。	R-493	17
	2 " "	" "	須恵器	高坏	南半部埋土最下部から出土。口縁端部内面に沈線が1条巡る。内外面ともに回転横ナデを施す。図版33-7。	R-492	"
	3 IC~ ID区	SC-28	須恵器	坏蓋	埋土中から出土。口縁端部内面に横ナデで浅い段をめぐる。内外面ともに回転横ナデを施す。	R-488	"
	4 " "	" "	須恵器	壺または甕?	底部破片。内底面に不定方向のナデを施し面ができていたこと、器壁の厚さと径から、短頸壺または甕の底部破片と考えた。外面は回転ヘラケズリを施す。	R-489	"
	5 " "	" "	須恵器	壺?	貼り床部から出土。外面は回転ヘラケズリ、内面は回転横ナデを施す。図版33-8。	R-176	"
	6 IH・ II区	SC-50	土師器	鉢	IH区南側埋土中から出土。外面は荒れが進むが、ヘラ状工具を用いたと考えられる強いナデ痕跡がわずかに残る。内面は口縁屈折部の下方に帯状に指頭痕跡が残る。ナデ仕上げを施す。	R-490	"
	7 " "	" "	石製品	紡錘車	IH区南側埋土中から出土。片岩製。2.85×3.2cm、厚さ5~7mmの楕円形を呈する。片側穿孔。上面及び側面には線条痕が残る。図版33-9。	R-491	"
図21	IC区	SC-17	石製品	台石	埋土より出土。花崗岩の円礫を用いた台石。上面に敲打痕が集中して残る。	R-714	18
図22	1 II区	SB-77 SP-54	須恵器	坏身	SP-54掘り形埋土(②・③層)から出土。内外面ともに横ナデ仕上げ。図版33-10。	R-710	"
	2 " "	" "	須恵器	高坏	SP-54西半部の掘り形埋土から出土。内外面ともに器面が荒れ、調整は不明。	R-711	"
図24	1 IB区	SD-8	黒色土器	壙	埋土上部から出土。両黒土器。	R-707	"
	2 " "	" "	土師器	壙	埋土中部から出土。内外面ともに丁寧な横ナデ仕上げ。	R-706	"
	3 " "	" "	土師器	坏	埋土中部から出土。外面は器面の荒れが進み調整不明。内面はミガキに近い非常に丁寧なナデ仕上げ。	R-704	"
	4 " "	" "	土師器	壙	埋土中部から出土。内外面ともに丁寧な横ナデ仕上げ。	R-705	"
	5 " "	" "	須恵器	甕	埋土中部から出土。肩部~頸部の破片。	R-703	"

挿図・遺物番号	調整区・遺構・層位	種別	器種	出土状況・観察所見ほか		遺物登録番号	収納コンテナ	
図24	6	I C区	SD-18	須恵器	蓋	埋土下部から出土。坏あるいは長頸壺の蓋。図版34-1。	R-500	18
	7	〃	〃	須恵器	甕	埋土下部から出土。長頸壺の可能性もあるが、胴径から甕と考えた。図版34-2。	R-700	〃
	8	〃	〃	土師器	坏	東側壁沿いの埋土中から出土。	R-701	〃
	9	〃	〃	須恵質土器	蓋	東側壁沿いの埋土中から出土。器面調整の方法から蓋と考えた。図版33-12。	R-702	〃
図25	1	I D区	SK-7	土師器	小皿	埋土下部から出土。	R-709	〃
	2	〃	〃	土師器	小皿	埋土下部から出土。全周の1/7~1/8ほどの破片のため、底径は不確実。	R-708	〃
	3	I D区	SK-64	須恵器	高坏	埋土中から出土。内外面ともに回転ナデ調整。	R-712	〃
	4	I H~ I I区	SK-51	須恵器	蓋	埋土中から出土。坏蓋もしくは短頸壺の蓋か、小片のため判断できない。	R-496	〃
	5	〃	〃	須恵器	高坏	遺構検出作業時に出土。坏部中に細い凸線が巡る。内外面ともに回転ナデ。	R-498	〃
	6	〃	〃	弥生土器	壺	遺構検出作業時に出土。口縁端部の上部に粘土を貼り付け口縁端面を拡張し、細い棒状工具で凹線風に沈線を6条巡らせる。ただし、下方から2・3条目は重なり合い、1条の幅広の凹線に見える。	R-499	〃
	7	〃	〃	土師器	甕	埋土中から出土。「く」字形口縁部の甕の破片。	R-497	〃
	8	〃	〃	弥生土器	甕	埋土中から出土。甕の底部破片。外面に残る刷毛目は目が粗い。	R-494	〃
	9	〃	〃	土師器	甕	埋土中から出土。甕の肩部破片。薄でのつくり。	R-495	〃
図26	1	I D区 北半部	SR-13 ①層	土師質土器	羽釜	三足の脚部の先端部付近の破片。	R-688	7
	2	I D区 南半部	〃	土師器	坏または 壺	小破片のため径は不確実。	R-695	〃
	3	I D区 北半部	SR-13 ①層	土師器	坏または 壺	内外面ともナデ仕上げ。	R-689	7
	4	I C区 北西部	〃	土師器	壺	外面とも回転ナデ調整。	R-729	〃
	5	I C区 南西部	〃	土師器	壺	内外面とも回転ナデ調整。小破片のため径は不確実。外底面にはナデ仕上げが施されている。図版34-6。	R-734	〃
	6	〃	〃	土師器	壺	小破片のため径は不確実。外底面は回転ヘラ切り離し後にナデ調整を施す。	R-735	〃
	7	I D区 南半部	〃	土師器	壺	小破片のため径は不確実。外底面は荒れが著しいが、回転ヘラ切り離しか？	R-727	〃
	8	I C区 南西部	〃	土師器	壺	小破片のため径は不確実。外底面には回転ヘラ切り離し痕が不明瞭ながら残る。図版34-3。	R-738	〃
	9	I D区 南半部	〃	土師器	壺	底部破片。内面は回転ナデ調整。外面は磨滅のため不明瞭。外底面は回転ヘラ切り離し後にナデを施す。	R-696	〃
	10	I D区 北半部	〃	土師器	壺	小破片のため径は不確実。外底面の切り離し痕は、器面の荒れ不明確。	R-690	〃
	11	I D区 南半部	〃	土師器	壺	小破片のため、径は不確実。外底面にはナデ仕上げが施される。	R-728	〃
	12	I C区 南西部	〃	土師器	壺	小破片のため、径は不確実。外底面は回転ヘラ切り離し後にナデを施す。	R-736	〃
	13	I F区 南半部	〃	土師器	壺	①層でも下部から出土。外底面にはナデ仕上げが施される。図版34-4。	R-679	〃
	14	I D区 南半部	〃	土師器	壺	円盤状高台壺の底部破片。小破片のため径は不確実。外底面の切り離し痕は、器面の荒れ不明確。	R-697	〃
	15	I C区 南西部	〃	土師器	壺	円盤状高台壺の底部の破片。外底面の切り離し痕は荒れが進み不明確。図版34-5。	R-739	〃
	16	I C区 南東部	〃	土師器	皿	磨滅のため不明瞭だが、内外面とも回転ナデ調整。図版34-7。	R-730	〃
	17	I C区 南西部	〃	土師器	皿	胴部内外面とも回転ナデ調整。外底面は回転ヘラ切り離し後にナデを施す。	R-737	〃
	18	I D区 南半部	〃	緑釉陶器	壺	黄灰色の素地にうすい緑色釉を施す。小破片のため径は不確実。図版34-8。	R-726	〃

挿図・遺物番号	調整区・遺構・層位	種別	器種	出土状況・観察所見ほか	遺物登録番号	収納コンテナ		
図26	19	I E区北半部	SR-13 ①層	須恵器	坏	①層上部から出土。外面にのみ自然釉がかかる。小破片のため径は不確実。	R-672	7
	20	〃	〃	須恵器	坏	①層下部から出土。小破片のため径は不確実。	R-666	〃
	21	〃	〃	須恵器	坏	①層下部から出土。小破片のため径は不確実。	R-667	〃
	22	I D区南半部	〃	須恵器	皿	小破片のため径は不確実。	R-724	〃
	23	〃	〃	須恵器	皿	小破片のため径は不確実。	R-693	〃
	24	〃	〃	須恵器	皿	内外面とも回転ナデ調整。	R-694	〃
	25	〃	〃	須恵器	坏蓋	全面が磨滅しており、調整は不明瞭。	R-691	〃
	26	〃	〃	須恵器	坏蓋	内外とも回転ナデ調整。	R-692	〃
27	I C区南西部	〃	須恵器	壺	小型長頸壺の肩部破片。外面は緑色の自然釉に覆われる。内外面とも回転ナデ調整。小破片のため径は不確実。図版34-9。	R-733	〃	
28	I D区北半部	〃	須恵器	壺	肩部破片。肩部と体部の境に沈線が1条めぐる。内外面とも回転ナデ調整。	R-687	〃	
29	I E区北半部・I D区南半部	〃	須恵器	壺	破片の下半に、わずかではあるが屈曲が確認できるため、高台がつくものと考えた。	R-671 + R-725	〃	
図27	1	I F区南半部	SR-13 ①層	須恵器	坏身	①層上部から出土。器体が焼き歪み、径は不確実。	R-682	〃
	2	〃	〃	須恵器	坏身	①層上部から出土。	R-683	〃
	3	I D区南半部	〃	須恵器	坏身	小破片のため径は不確実。	R-698	〃
	4	I F区南半部	SR-13 ①層	須恵器	坏身	①層下部から出土。図版34-10。	R-676	7
	5	I E区北半部	〃	須恵器	坏身	①層上部から出土。小破片のため径は不確実。図版34-11。	R-670	〃
	6	I F区南半部	〃	須恵器	坏身	①層下部から出土。図版34-12。	R-677	〃
	7	I F区南半部	〃	須恵器	坏蓋	①層下部から出土。内外面とも回転ナデ調整。図版34-13。	R-678	〃
	8	I C区南西部	〃	須恵器	高坏	内外面とも回転ナデ調整。	R-731	〃
	9	I D区南半部	〃	須恵器	高坏	内外面とも回転ナデ調整。小破片で歪みがあり、径は不確実。	R-699	〃
	10	I E区南半部	〃	須恵器	ハク	①層上部から出土。外面は回転ナデ調整。内面は磨滅のため調整は不明。	R-669	〃
	11	I C区南西部	〃	須恵器	ハク	内外面とも回転ナデ調整。	R-732	〃
	12	I D区南半部	〃	須恵器	壺	内外面とも回転ナデ調整。	R-723	〃
	13	I D区北半部	〃	須恵器	壺	内外面とも回転ナデ調整。図版35-1。	R-686	〃
	14	I F区南半部	〃	須恵器	壺	①層上部から出土。全面が磨滅しており、調整は不明。	R-685	〃
	15	〃	〃	須恵器	壺	①層上部から出土。内外面とも回転ナデ調整を施す。	R-684	〃
	16	I E区北半部	〃	土師器	甕	①層上部から出土。内外面とも横方向のナデ調整。	R-673	〃
	17	I F区南半部	〃	土師器	甕	①層下部から出土。外面は横方向の刷毛目調整。内面は横方向の刷毛目調整の後、指頭によるナデ調整を部分的に施す。	R-680	〃
	18	〃	〃	弥生土器	甕	①層下部から出土。内外面とも横方向のナデ調整。小破片のため径は不確実。	R-681	〃
	19	I E区北半部	〃	弥生土器	甕	①層上部から出土。内外面とも板状工具によるナデ調整。	R-675	〃
	20	〃	〃	弥生土器	壺	①層上部から出土。全面が磨滅しており、調整は不明。小破片のため径は不確実。	R-674	〃

挿図・遺物番号	調整区・出土遺構・層位	種別	器種	出土状況・観察所見ほか	遺物登録番号	収納コンテナ
図27	21 I E区北半部 SR-13①層	弥生土器	壺	①層下部から出土。内外面ともにナデ調整を施す。	R-668	7
図28	1 I C区北西部 SR-13②層	土師器	坏	小破片のため径は不確実。	R-649	8
	2 I D区北半部	土師器	坏	全面が磨滅しており、調整は不明瞭。	R-644	〃
	3 I C区南西部	須恵器	坏	小破片のため径は不確実。	R-653	〃
	4 I D区南半部	須恵器	坏蓋	②層下部砂礫層から出土。図版35-2。	R-658	〃
	5 〃	須恵器	坏蓋	外面には自然釉がかかる。	R-640	〃
	6 I D区北半部	須恵器	坏蓋	内外面ともに回転ナデ調整。	R-645	〃
	7 I F区	須恵器	坏蓋	②層上部から出土。	R-625	〃
	8 I C区南西部	須恵器	坏蓋	器体には歪みがあり、径は不確実。図版35-5。	R-654	〃
	9 I E区北半部	須恵器	坏蓋	②層上部から出土。焼成不良品で、外面は暗灰黄色、内面はにぶい橙色を呈する。図版35-6。	R-632	〃
	10 I D区南半部	須恵器	坏身	②層下部砂礫層から出土。	R-657	〃
	11 I E区北半部	須恵器	坏身	②層中部から出土。口縁部下半に焼成時に他の個体の破片が付着している。	R-630	〃
	12 I E区北半部	須恵器	坏身	②層上部から出土。器体には歪みがあり、径は不確実。	R-631	〃
	13 I D区南半部 SR-13②層	須恵器	坏身	受け部周辺の破片。	R-641	8
	14 I E区南半部	須恵器	坏身	②層上部から出土。小破片のため径は不確実。	R-629	〃
	15 I D区南半部	須恵器	高坏	②層下部砂礫層から出土。小破片のため径は不確実。	R-659	〃
	16 I D区北半部	須恵器	高坏	坏部の破片。	R-643	〃
	17 I C区南西部	須恵器	瓶	小破片で歪みがあるため、径は不確実。	R-652	〃
	18 I D区南半部	須恵器	不明	口縁部破片。内外面ともに回転ナデ調整。	R-642	〃
	19 I E区南半部	須恵器	横瓶	②層下部から出土。小破片のため径は不確実で、もう少し大きくなる可能性が高い。図版35-5。	R-638	〃
	20 I D区南半部	須恵器	壺	②層下部砂礫層から出土。肩部から体部にかけての破片。図版35-6。	R-655	〃
	21 I D区北半部	須恵器	壺	②層下部砂礫層から出土。口頸部の破片。	R-661	〃
	22 I D～I E区	須恵器	壺	②層下部砂礫層から出土。口縁部破片小破片のため径は不確実。	R-665	〃
	23 I D区北半部	須恵器	壺埴	口頸部の破片。焼成は堅緻で灰褐色を呈する。	R-647	〃
	24 I E区	須恵器	甕	②層中部から出土。小破片のため、径は不確実。	R-628	〃
	25 I D区北半部	須恵器	甕	②層下部砂礫層から出土。焼成不良で、軟質の焼き上がり。	R-662	〃
	26 〃	須恵器	不明	口縁部の破片。内外面ともに回転ナデ調整。	R-646	〃
	27 I F区	土師器	甕	②層上部から出土。口縁部破片。	R-626	〃
	28 I D区南半部	土師器	甕	②層下部砂礫層から出土。口縁部破片	R-656	〃
	29 I E区北半部	土師器	甕	②層上部から出土。口縁部破片。	R-636	〃
	30 I C区南西部	土師器	甕	②層下部から出土。口縁部破片。	R-651	〃

挿図・遺物番号	調整区・遺構・層位	種別	器種	出土状況・観察所見ほか		遺物登録番号	収納コンテナ	
図28	31	I E区北半部	SR-13②層	土師器	甕	②層上部から出土。口縁部破片。	R-637	8
	32	〃	〃	土師器	鉢	②層上部から出土。口縁部破片。	R-634	〃
	33	〃	〃	土師器	甗	②層上部から出土。口縁部破片。図示したよりも、器体の傾きはもう少し立ち、直線的になる可能性が高い。図版35-7。	R-633	〃
図29	1	I D区南半部	〃	弥生土器	甕	②層下部砂礫層から出土。口縁部破片。小破片のため径は不確実。	R-660	〃
	2	〃	〃	弥生土器	甕	口縁部破片。内外面ともにナデ仕上げ。	R-639	〃
	3	I D区北半部	〃	弥生土器	甕	肩部破片。内外面ともにデ調整。	R-648	〃
	4	〃	〃	弥生土器	甕	②層下部砂礫層から出土。口縁部破片。	R-663	〃
	5	I F区	〃	弥生土器	高坏	②層上部から出土。坏部破片。	R-627	〃
	6	I E区北半部	〃	弥生土器	甕	②層上部から出土。平底の底部の破片。	R-635	〃
	7	I D区北半部	〃	弥生土器	甕	②層下部砂礫層から出土。底部破片。	R-664	〃
	8	I C区北西部	〃	弥生土器	甕	上げ底の底部破片。	R-650	〃
図30	1	I E区南半部	SR-13④層	須恵器	坏蓋	④層下部から出土。図版36-1。	R-568	9
	2	〃	〃	須恵器	坏蓋	天井部と口縁部の境界部分の破片。	R-557	〃
	3	I E区北半部	〃	須恵器	坏蓋	④層下部から出土。口縁部から天井部にかけての破片。図版35-9。	R-538	〃
	4	I E区北半部	SR-13④層	須恵器	坏蓋	④層下部から出土。内外面ともに回転ナデ調整、外面天井部付近には回転ヘラケズリ調整の痕跡が残る。図版35-8。	R-587	〃
	5	I D区	〃	須恵器	坏蓋	④層下部から出土。下半部の破片。内外面とも回転ナデ調整。口縁部外面には、左上がりの刷毛目調整に似た痕跡が残る。図版36-2。	R-584	〃
	6	I E区南半部	〃	須恵器	坏蓋	内外面とも回転ナデ調整。口縁端部外面には刻目が施されている。	R-555	〃
	7	I E区北半部	〃	須恵器	坏蓋	内外面ともに回転ナデ調整。天井部外面は回転ヘラケズリ調整。	R-526	〃
	8	I F区南半部	〃	須恵器	坏蓋	口縁部外面と内面全面には回転ナデ調整を施す。天井部外面には回転ヘラケズリ調整を施すが、天井部と口縁部の境に回転ナデによるくぼみがめぐる。図版36-3。	R-588	〃
	9	I E区南半部	〃	須恵器	坏身	④層下部から出土。内外面ともに回転ナデ調整。図版36-4。	R-528	〃
	10	I E区	〃	須恵器	坏身	内外面ともに回転ナデ調整。	R-523	〃
	11	I E区南半部	〃	須恵器	坏身	④層上部から出土。内外面ともに回転ナデ調整。体部外面下半は回転ヘラケズリ調整を施す。図版36-5。	R-578	〃
	12	〃	〃	須恵器	坏身	内外面ともに回転ナデ調整。	R-560	〃
	13	I E区北半部	〃	須恵器	坏身	④層下部から出土。内外面ともに回転ナデ調整。	R-539	〃
	14	I E区南から0～1m間	〃	須恵器	坏身	内外面ともに回転ナデ調整。	R-549	〃
	15	I E区北半部	〃	須恵器	坏身	④層上部から出土。内外面ともに回転ナデ調整。	R-531	〃
	16	I E区南半部	〃	須恵器	坏身	内外面とも回転ナデ調整。	R-554	〃
	17	I F区南半部	〃	須恵器	坏身	内外面ともに回転ナデ調整。	R-564	〃
	18	I E区	〃	須恵器	坏身	外面下半部は回転ヘラケズリ調整、外面上半部と内面は回転ナデ調整。	R-524	〃

挿図・遺物番号	調整区・出土遺構・層位	種別	器種	出土状況・観察所見ほか	遺物登録番号	収納コンテナ	
図30 19	I E区南半部	SR-13 ④層	須恵器	坏身	④層上部から出土。内外面ともに回転ナデ調整。体部外面下半には回転ヘラケズリ調整を施す。	R-579	9
20	ID区	〃	須恵器	蓋	④層上部から出土。内外面ともに回転ナデ調整。図版36-9。	R-574	〃
21	I E区南から1~2m間	〃	須恵器	高坏	内外面ともに回転ナデ仕上げ。	R-522	〃
22	I E区北半部	〃	須恵器	高坏	内外面ともに回転ナデ調整。	R-527	〃
23	〃	〃	須恵器	高坏	④層上部から出土。内外面ともに回転ナデ調整。	R-532	〃
24	I E区南から0~1m間	〃	須恵器	高坏	内外面ともに回転ナデ仕上げ。図版36-10	R-520	〃
25	I E区南半部	〃	須恵器	高坏	④層下部から出土。内外面ともに回転ナデ調整。図版36-11。	R-530	〃
26	I E区北半部	〃	須恵器	甗	④層下部から出土。内外面ともに回転ナデ調整。図版36-6。	R-540	〃
27	I E区南半部	〃	須恵器	壺	④層上部から出土。内外面ともに回転ナデ調整。	R-570	〃
28	I E区	〃	須恵器	壺	④層下部から出土。内外面ともに回転ナデ調整。	R-566	〃
29	I E区南半部	〃	須恵器	壺	内外面ともに回転ナデ調整。器体の歪みが著しい。	R-556	〃
30	ID区	〃	須恵器	提瓶	④層下部から出土。把手接合部周辺の破片。	R-585	〃
31	I E区南半部	〃	須恵器	壺	④層上部から出土。内外面とも回転ナデ調整を施す。図版36-7。	R-582	9
32	〃	〃	須恵器	広口壺	④層上部から出土。口縁部は内外面とも回転ナデ調整。胴部外面はカキメ調整、内面は回転ナデ調整を施す。図版36-8。	R-569	〃
33	ID区	〃	須恵器	平瓶	④層上部から出土。内外面とも回転ナデ調整であるが、口頸部と体部のナデの方向は異なる。	R-575	〃
34	I E区北半部	〃	須恵器	壺	頸部破片。内外面とも回転ナデ調整。内面には絞り痕が残る。	R-551	〃
-	I E区南半部	〃	須恵器	甗?	④層下部から出土。頸部の破片。図版36-15。	R-138	〃
図31 1	I E区北半部	SR-13 ④層	須恵器	壺	内外面ともに回転ナデ調整。	R-552	〃
2	〃	〃	須恵器	壺	④層上部から出土。内外面ともに回転ナデ調整。図版36-13。	R-534	〃
3	I E区南から3~4m間	〃	須恵器	甗	内外面ともに回転ナデ調整。図版36-14。	R-550	〃
4	I E区北半部	〃	須恵器	甗	④層下部から出土。内外面ともに回転ナデ調整。	R-541	〃
5	ID区	〃	須恵器	甗	④層上部から出土。内外面ともに回転ナデ調整。図版37-1。	R-576	〃
6	I E区南から1~2m間	〃	須恵器	甗	外面上半部は擬格子状タタキの後にカキメ調整を施す。外面下半部と内面は回転ナデ調整。図版36-16。	R-521	〃
7	ID区	〃	須恵器	甗	④層下部から出土。破片上部は内外面ともに回転ナデ調整、下部は外面に擬格子目状のタタキ調整を施し、内面に同心円状の当て具痕跡が残る。図版37-2。	R-589	〃
8	I F区南半部	〃	須恵器	甗	④層上部から出土。外面には擬格子目状タタキ調整、内面には同心円文状の当て具痕跡が残る。上部は口頸部の回転ナデ調整によってナデ消されている。	R-565	〃
9	I E区北半部	〃	須恵器	甗	④層上部から出土。外面はタタキ調整の後にナデ仕上げを施す。内面には同心円文状の当て具痕跡が残る。図版37-3。	R-533	〃
10	I E区南半部	〃	須恵器	甗	④層上部から出土。外面は擬格子目状タタキ調整の後にカキメ調整を施す。内面は指頭によるナデ調整を施す。	R-571	〃

挿図・遺物番号	調整区・遺構・出土層位	種別	器種	出土状況・観察所見ほか	遺物登録番号	収納コンテナ	
図32 1	I F区 南半部	SR-13 ④層	土師器	甕	内外面ともに横方向のナデ仕上げ。	R-563	9
2	I E区 北半部	〃	土師器	甕	④層下部から出土。内外面ともに横方向のナデ調整。	R-544	〃
3	I E区 南半部	〃	土師器	甕	④層下部から出土。内外面ともに横方向のナデ調整。	R-529	〃
4	I E区 北半部	〃	土師器	甕	④層下部から出土。内外面ともに横方向のナデ調整。図版37-4。	R-542	〃
5	〃	〃	土師器	甕	④層下部から出土。内外面ともに横方向のナデ調整。図版37-5。	R-543	〃
6	〃	〃	土師器	甕	④層下部から出土。内外面ともに横方向のナデ調整であるが、器面の荒れが進む。	R-545	〃
7	〃	〃	土師器	甕	④層下部から出土。内面は横方向の刷毛目調整の後にナデ仕上げ。外面は荒れが著しく、調整は不明。	R-546	〃
8	〃	〃	土師器	壺?	④層下部から出土。外面は器面の荒れが著しい。内面には接合痕と指頭圧痕が残る。	R-547	〃
9	I F区 南から0~1m間	〃	土師器	甕 または 甗	指頭によるナデ整形。内面は磨滅のため不明瞭であるが刷毛目調整が観察できる。図版37-6。	R-562	〃
10	I E区 南半部	〃	土師器	高坏	④層上部から出土。器面全面が磨滅し、調整は不明。	R-572	9
11	〃	〃	土師器	高坏	脚部内面の上部は上方向からの指頭圧調整、下半は下方向からのナデ調整で、上方から下方へナデ仕上げされる。脚部外面と坏部内外面は器面が荒れ、調整は不明。図版37-7。	R-590	〃
12	〃	〃	土師器	高坏	④層下部から出土。器面全面が荒れ、調整は不明。	R-567	〃
図33 1	I E区 南半部	SR-13 ④層	弥生土器	甕	④層上部から出土。内外面ともに器面が荒れているが、内面の一部には横方向のナデ調整の痕跡が残る。	R-583	〃
2	〃	〃	弥生土器	甕	内外面ともにナデ仕上げ。	R-561	〃
3	〃	〃	弥生土器	甕	④層上部から出土。外面は荒れが進み、調整は不明。	R-580	〃
4	I D区	〃	弥生土器	甕	④層上部から出土。外面は横方向のナデ調整を施す。内面は刷毛目調整の痕跡が見られるが、磨滅しており不明瞭。	R-577	〃
5	I E区 南半部	〃	弥生土器	甕	口縁部破片。内外面ともにナデ仕上げ。	R-559	〃
6	I D区	〃	弥生土器	甕	④層下部から出土。器面全体の荒れが進み、調整は不明であるが、接合痕の周辺には指頭によるオサエ痕が残る。図版37-8。	R-586	〃
7	I E区 南半部	〃	弥生土器	甕	内外面ともに器面が荒れ、調整は不明だが、指頭圧痕が部分的に残る。	R-558	〃
8	〃	〃	弥生土器	甕	④層上部から出土。外面は荒れ、調整は不明。内底面には、クモの巣状に刷毛目調整が残る。	R-581	〃
9	I E区 北半部	〃	弥生土器	壺	④層上部から出土。内外面ともに横方向のナデ仕上げ。	R-535	〃
10	I E区	〃	弥生土器	壺	内外面はナデ仕上げ。	R-525	〃
11	I E区 北半部	〃	弥生土器	壺	内面に刷毛目調整の痕跡が部分的に残るが、内外面ともに器面の荒れが著しく、調整は不明。	R-553	〃
12	〃	〃	弥生土器	壺	④層上部から出土。内外面ともに横方向のナデ仕上げ。	R-536	〃
13	〃	〃	弥生土器	壺	④層上部から出土。内外面ともに横方向のナデ仕上げ。	R-537	〃
14	〃	〃	弥生土器	壺	④層下部から出土。内外面ともに器面の荒れが著しいが、内面には指頭によるナデ調整を観察できる。	R-548	〃
15	I E区 南半	〃	弥生土器	壺	④層上部から出土。器面全面の荒れが進み、調整は不明。	R-573	〃

挿図・遺物番号	調整区・出土遺構・層位	種別	器種	出土状況・観察所見ほか	遺物登録番号	収納コンテナ
図34 1	I E区南から1~2m間 SR-13④層	石製品	砥石	3面を砥面として使用。研ぎ痕は約1cm幅のものが多くみられる。重量1349g。流紋岩の亜角礫を利用か。	R-592	14
2	I F区	石製品	砥石	大部分を欠損しているが、破損面を使用している可能性も残る。残存重量105g。流紋岩を利用か。	R-608	〃
3	I E区北半部	石製品	砥石	④層下部から出土。一部を欠損。比較的目的は細かい。残存重量184.7g。流紋岩の亜角礫を利用か。	R-600	〃
4	〃	石製品	砥石	④層上部から出土。一部を欠損。比較的目的は細かい。残存重量597.2g。流紋岩の亜角礫を利用か。図版37-9。	R-603	〃
5	I E区南から0~1m間	石製品	砥石	砂岩の亜角礫を利用。幅3mm程度の線条痕が残る。残存重量568.4。図版38-1。	R-596	〃
6	I E区北半部	石製品	磨石・敲石	④層上部から出土。砂岩の拳大の円礫を利用。両端部に敲打痕が集中的に残る。表裏面には擦過痕がみられる。重量288.5g。図版38-2。	R-622	〃
7	I F区	石製品	磨石・敲石	④層上部から出土。砂岩の拳大の円礫を利用。両端部に敲打痕が集中的に残る。表裏面には擦過痕がみられる。重量183.5g。図版37-10。	R-623	〃
8	I E区南から0~1m間	石製品	磨石・敲石	砂岩の亜円礫を利用。平坦な1面を磨面として使用。先端に敲打痕残る。重量238.7g。	R-594	〃
9	I E区南半部	石製品	敲石	④層下部から出土。一部欠損。砂岩の円礫を利用。端部に敲打痕が残る。残存重量171.5g。	R-605	〃
10	〃	石製品	敲石	④層下底部から出土。一部欠損。砂岩の円礫を利用。上下端に敲打痕が残る。残存重量318.7g。図版37-11。	R-604	〃
11	I D区	石製品	磨石	④層上部から出土。一部欠損。砂岩の亜角礫を利用。残存重量168.6g。	R-597	〃
12	I E区南半部	石製品	敲石	④層下部から出土。砂岩の扁平な円礫を利用。縁辺部に敲打痕が部分的に残る。重量47.4g。図版38-3。	R-612	〃
13	〃	石製品	磨石・敲石	④層最下底部から出土。砂岩の円礫を利用。敲打痕が散発的にみられ、一部を磨面として使用。重量175.2g。図版38-4。	R-621	〃
14	〃	石製品	磨石・敲石	④層最下底部から出土。花崗岩類の円礫を利用。敲打痕が残る。重量268.9g。	R-620	〃
15	I E区北半部	石製品	磨石・敲石	④層下部から出土。閃緑岩類の拳大の亜円礫を利用。平坦な一面と両端部に敲打痕が集中的にみられる。重量764.2g。	R-616	〃
16	〃	石製品	磨石・敲石	④層下部から出土。緑岩類の円礫を利用。両先端部に集中して敲打痕が残る。重量377.9g。	R-611	〃
図35 1	I E区北半部 SR-13④層	石製品	台石	④層上部から出土。砂岩の円礫を利用。平坦な一面に敲打痕の集中がみられ、磨面としても使っている。側面も一部磨面として利用か？ 重量2641g。	R-617	13
2	〃	石製品	台石	④層下部から出土。砂岩の亜円礫を利用。敲打痕と磨痕が残る。残存重量970.9g。	R-606	〃
3	I E区南半部	石製品	台石	④層下部から出土。一部欠損。砂岩の亜円礫を利用。敲打痕が残るが、流水による磨滅で表面は平滑。残存重量347.1g。	R-598	〃
4	I E区南から0~1m間	石製品	台石	砂岩の亜円礫を利用。平坦な1面に敲打痕が残る。重量1263g。図版38-6。	R-595	14
5	I E区南半部	石製品	台石	④層最下底部から出土。砂岩の亜円礫を利用。敲打痕と磨痕が残る。残存重量624.8g。	R-602	13
6	I E区北半部	石製品	台石	④層下部から出土。砂岩の亜円礫を利用。点々と敲打痕が残る。残存重量1247.8g。図版38-7。	R-610	14
7	〃	石製品	台石	④層下部から出土。砂岩の扁平な亜円礫を利用。平坦な2面に敲打痕がみとめられ、一面は集中的、他方は散発的である。重量1188.8g。図版38-5。	R-618	13
8	I E区南4~5m間	石製品	台石	大部分が欠損。砂岩を利用している。平坦な1面に敲打痕が残る。残存重量259.8g。	R-593	〃

挿図・遺物番号	調整区・遺構・層位	種別	器種	出土状況・観察所見ほか	遺物登録番号	収納コンテナ
図35	9 I E区南半部 SR-13 ④層	石製品	台石	④層上部から出土。一部欠損。砂岩の亜角礫を利用。2面に敲打痕が残る。残存重量835.6g。表面は一部、うすい褐色の部分が広がる。埋没後の鉄分のしみこみか？	R-609	〃
	10 I D区	石製品	台石	④層上部から出土。一部欠損。砂岩の亜角礫を利用。3面に敲打痕が残る。残存重量826g。	R-607	〃
	11 I E区南半部	石製品	台石	④層下部から出土。一部欠損。砂岩の亜角礫を利用。両側面と前面を磨面として利用している可能性がある。前面は一部自然面を残す。残存重量561.7g。図版38-11。	R-599	14
	12	石製品	台石	④層下部から出土。粗砂と細礫の堆積岩の亜角礫を利用。平坦な一面に集中的な敲打痕が残っており。台石と考えたが、竈の支石の可能性もある。重量1460.1g。図版38-10。	R-614	13
	13 I E区北半部	石製品	台石	④層下部から出土。花崗岩類の亜角礫を利用。平坦な一面と敲打面、磨面として用いているが、痕跡は不明瞭。重量1605.8g。	R-615	〃
	14	石製品	台石	④層下部から出土。花崗岩類の扁平な亜円礫を利用。平坦な一面に敲打痕と擦過痕がみられるが、磨滅のため不明瞭である。重量2561.9g。図版38-8。	R-619	〃
	15 I E区南半部	石製品	台石	④層上部から出土。閃緑岩類の亜角礫を利用。平坦な一面に集中的な敲打痕がみられる。残存重量1227.6g。	R-613	13
図36	1 I E区南から0~1m間 SR-13 ④層	石製品	台石	花崗岩類の扁平な亜円礫を利用。3側面を特に使用しており、非常に平滑。重量15.3kg。図版38-12。	R-740	12
	2 I E区南半部	石製品	台石	④層上部から出土。大部分が欠損。砂岩を利用。残存重量3528.7g。	R-601	〃
図37	1 I区 SX-29	須恵器	坏蓋	内外面ともに回転ナデ調整の後に、外面の一部をヘラケズリ調整。	R-507	4
	2	須恵器	坏蓋	内外面ともに回転ナデ調整。	R-508	〃
	3	須恵器	坏身	内外面ともに回転ナデ調整。図版39-1。	R-506	〃
	4	須恵器	坏身	器面は全体的に著しく荒れている。外面は口縁部付近回転ナデ調整、底部は回転ヘラケズリ調整。内面は回転ナデ調整。図版39-2。	R-513	〃
	5	須恵器	坏身	外面回転はヘラケズリ、上半は回転ナデ調整。内面は回転ナデ仕上げされ、内底面に同心円文状の当て具痕が残る。図版39-3。	R-505	〃
	6	須恵器	甕	肩部外面はタタキの後にカキメ調整を施す。肩部内面は口頸部とともにナデ仕上げされるが、部分的に同心円文の当て具痕が残る。図版39-4。	R-509	〃
	7	須恵器	壺または甕	外面はカキメ調整の後に下半に強いヘラナデ調整を施す。内面は指頭によるナデ調整。図版39-5。	R-510	〃
	8	須恵器	台付壺または甕	脚台部は内外面ともに回転ナデ調整。底部外面には擬格子状タタキ、内面には同心円文状の当て具痕が残る。図版39-7。	R-511	〃
	9	須恵器	横瓶	外面は擬格子状タタキの後にカキメ調整。内面には同心円文状の当て具痕が残る。側面は前・背面の調整と底部の調整が重なり合う。図版39-6。	R-503	〃
図38	1 I区 SX-29	土師器	甕	口縁部外面はナデ仕上げ、内面は横方向の刷毛目調整。胴部外面は左上がりの刷毛目調整、内面は口縁部付近に横方向の刷毛目調整、胴部上半に指頭によるナデ上げ調整、下半にケズリ調整を施す。刷毛目工具の板目は上半が密で下半は粗い。図版40。	R-501	3
	2	土師器	甕	器面全面が磨滅し、調整は不明。	R-502	〃
	3	土師器	甕	器面全面が磨滅し、調整は不明。	R-514	4
	4	土師器	鉢	外面は縦方向の刷毛目調整、内面は横方向の刷毛目調整の後にナデ仕上げ。	R-504	〃
	5	弥生器	壺	内外面ともに横方向の指ナデ調整。	R-512	〃
図39	1 I区 SX-29	石製品	石庖丁	全面を磨いているが、もともとの凹みには一部磨きが及ばない。円孔周辺には光沢があり、紐ずれ痕と考えられる。残存重量34g。	R-591	5

挿図・遺物番号	調整区・遺構・層位	種別	器種	出土状況・観察所見ほか		遺物登録番号	収納コンテナ
図39	2 I区 SX-29	石製品	砥石	仕上げ砥。よく使用されている。残存重量215g。流紋岩を利用か。		R-518	5
	3 " "	石製品	磨石・敲石	砂岩の垂円礫を利用。平坦な1面の一部分のみ磨面として使用。先端に敲打痕残る。重量350g。		R-517	"
	4 " "	石製品	敲石	一部欠損。閃緑岩類の棒状の垂円礫を利用。端部に敲打痕が残る。現重量884.9g。		R-624	"
	5 " "	石製品	台石	安山岩の垂角礫を利用。大部分が欠損。磨・敲打の作業面として3面を使用している。残存重量210g。		R-516	"
	6 " "	石製品	台石	花崗岩の垂角礫を利用。平坦な2面を敲打面として使用。重量1420g。		R-519	"
	7 " "	石製品	台石	花崗岩の垂角礫を利用。平坦な1面を敲打面として使用。2側面も作業面として使用した可能性が高い。重量3044g。		R-515	"
図41	1 ID区 SP-3	青磁	碗	同安窯系青磁碗。外面はヘラケズリ。		R-713	18
	2 IG区 SP-32	土師器	碗	内外面ともに荒れが進み、調整は不明。		R-719	"
	3 IG区 SP-33	黒色土器	皿	両黒土器。器体の歪みが著しい。図版41-10。		R-715	"
図41	4 " "	黒色土器	碗	両黒土器。体部外面には指頭圧痕が連続して残る。内面はミガキ仕上げ。図版41-6。		R-716	"
	5 IG区 SP-39	黒色土器	碗	口縁部周辺は横ナデ。体部外面には連続した指頭圧痕が残る。内面は荒れが著しく調整は不明。図版41-7。		R-720	"
	6 IG区 SP-40	青磁	碗	同安窯系青磁。体部下半は回転ケズリ。図版41-8。		R-718	"
	7 ID区 SP-41	須恵器	蓋	内外面ともに回転横ナデ仕上げ。		R-717	"
	8 IJ区 SP-74~76	土師器	皿	外底面には回転糸切り離し痕が残る。他は器面が荒れているため調整は不明。		R-721	"
	9 " "	黒色土器	皿	内外面ともに横ナデ仕上げ。		R-722	"
図42	1 IB・IC区 Ⅲ-1・2層界部	備前焼	すり鉢	内外面ともに横方向のナデ調整。図版33-1。		R-757	16
	2 IF区 南半部 Ⅲ-1層	備前焼	すり鉢	外面は回転横ナデ調整。図版33-2。		R-753	"
	3 IB区 西半部 Ⅲ-1・2層	土師質土器	羽釜	内外面ともにナデ仕上げ。図版33-3。		R-756	"
	4 IB・IC区 Ⅲ-1層	須恵質土器	こね鉢	内外面ともに回転ナデ調整。図版32-10。		R-751	"
	5 IF区 北半部 Ⅲ-1層	白磁	碗	白色の磁胎に微細な黒色粒がわずかに混じる。胎には極小の空隙がわずかに見られるが緻密。図版32-9。		R-759	"
	6 IB・IC区 Ⅲ-1層	青磁	碗	龍泉窯系青磁。淡い緑青色釉を施釉。図版32-8。		R-752	"
	7 IB区 Ⅲ-1・2層	緑釉陶器	碗	施釉前に横方向のミガキ調整を施すが、単位は不明瞭。図版32-7。		R-754	"
	8 IB区 Ⅲ-1・2層	緑釉陶器	碗	釉は部分的に剥がれているが、本来は全面施釉と考えられる。施釉前は横方向のナデを施す。図版32-5。		R-755	"
	9 IF区 北半部 Ⅲ-1層	緑釉陶器	碗	胎土は密であるが、やや粒子が粗く、石英・長石の微細粒がまばらに混じる。図版32-6。		R-760	"
	10 IF区 北半部 Ⅲ-1層	須恵器	坏蓋	内外面ともに回転ナデ調整の後に、内面に不定方向のナデ調整を施す。		R-761	"
	11 IB・IC区 Ⅲ-1層	土師器	坏	外底面の荒れてはいるが、不明瞭ながら糸切り離し痕跡が確認できる。外面は回転ナデ調整。図版33-5。		R-750	"
	12 IB・IC区 Ⅲ-2層	土師器	坏	内外面ともに回転ナデ調整。図版33-4。		R-758	"
図43	1 IG区 南半部 Ⅲ-3層下部	須恵器	坏	内外面ともに回転ナデ調整。図版33-6。		R-762	"
	2 IH区 北半部 Ⅲ層	須恵器	坏蓋	天井部外面は回転ヘラケズリ調整、内面と体部外面は回転ナデ調整。		R-763	"
図44	1 IH区 I層	須恵器	坏蓋	内外面ともに回転ナデ調整、外面天井部には回転ヘラケズリ調整が施される。		R-746	"
	2 IH区 I層	土師器	碗	内外面ともに磨滅しており、調整は不明瞭。図版32-1。		R-747	"

挿図・遺物番号	調整区・遺構	出土層位	種別	器種	出土状況・観察所見ほか	遺物登録番号	収納コンテナ	
図44	3	I G区	I層	土師質土器	鍋	外面は横方向の刷毛目調整の後にナデ仕上げ。内面は横方向の刷毛目調整。図版32-2。	R-748	16
図45	1	I E区	攪乱部	須恵器	坏身	内外面とも回転ナデ調整。受け部上面のみに自然釉が付着。焼成時の坏蓋端部の張り付き痕が残る。	R-743	〃
	2	I C区	攪乱部	須恵器	鉢	口縁部破片。内外面とも回転ナデ調整。内面のみ自然釉が一面に付着	R-742	〃
	3	I E区	攪乱部	土師器	高坏	坏部下半の破片。全面が磨滅しており不明瞭であるが、ナデ仕上げか。図版32-3。	R-744	〃
	4	I B区	攪乱部	土師器	皿	全形を復元できる破片。内外面とも磨滅しており、調整は不明瞭。ナデ仕上げか。	R-741	〃
	5	I F区	攪乱部	青磁	皿	同安窯系青磁。図版32-4。	R-749	〃
	6	I E区	攪乱部	土師質土器	羽釜?	指頭によるナデ仕上げを施す。	R-745	〃
図47	1	II A区	III-1層上部	土師器	皿	内外面ともに器面の荒れが進み、調整不明。図版42-2。	R-486	〃
	2	II A区	III-1層上部	土師器	坏	内外面ともに器面の荒れが進み調整不明。図版42-3。	R-487	〃
	3	II A・II B区	III-1層上部	須恵器	高坏	内外面ともに横ナデ調整を施す。図版42-1。	R-485	16
	4	II A区	III-2層下部	須恵器	蓋	器壁の厚さから短頸壺の蓋と考えた。内外面ともに横ナデ仕上げ。	R-483	〃
	5	II A区	III-2層下部	須恵器	坏蓋	灰白色の焼き上がり。内外面ともに器面の荒れが進み、調整は不明。	R-482	〃
	6	II A区	III-2層下部	須恵器	坏蓋	焼き歪みが著しい。天井部外面は回転ヘラケズリ。他は回転横ナデ。図版42-5。	R-477	〃
	7	II A区	III-2層下部	須恵器	碗	外底面は回転ヘラケズリ。内底面はナデ、一部指頭圧痕が残る。	R-480	〃
	8	II A区	III-2層下部	須恵器	坏身碗	外面は回転ヘラケズリ、内面は横ナデ調整。	R-479	〃
	9	II A区	III-2層下部	須恵器	高坏	坏部外面は横ナデ。受け部及び内面は回転横ナデ。脚部外面はカキメを施し、内面はナデ調整。図版42-4。	R-478	〃
	10	II A区	III-2層下部	須恵器	甕	内外面ともに横ナデ。器壁の芯部には灰黒色の厚い黒化層が残る。	R-481	〃
	11	II A区	III-2層下部	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ調整を施す。	R-484	〃
図49	1	IV C区東半部	III-2層	土師器	碗または坏	内外面ともに回転横ナデ仕上げ。	R-463	〃
	2	IV C区西半部	III-1層	土師器	碗	内面は横ナデ仕上げ。外面は器面の荒れが進み調整は不明。外底面の切り離し方法も不明。図版42-6。	R-457	〃
	3	IV C区東半部	III-2層	土師器	碗	内外面ともに横ナデ仕上げ。外底面もナデ仕上げするため、切り離し方法は不明。	R-464	〃
	4	IV C区西半部	III-2層	須恵器	坏	内外面ともに回転横ナデ仕上げ。	R-456	〃
	5	IV C区東半部	III-1層	須恵器	坏蓋	内外面ともに回転横ナデ調整。	R-462	〃
	6	IV D区東半部	III-2層	須恵器	甕または壺	外面は格子タタキ目をナデ消し、内面には晴海波の同心円文の当て具痕が残る。	R-458	〃
	7	IV C区東半部	III-3層	須恵器	坏蓋	内外面ともに回転ナデ仕上げ。	R-465	〃
	8	IV B区	III-3層	須恵器	皿	内外面ともに横ナデ仕上げ。外底面は不定方向のナデ仕上げ。	R-450	〃
	9	IV C区東半部	III-4層	土師器	皿	外底裾にヘラ状もしくは板状工具によるケズリに近い強いナデ調整を施す。内面はナデ仕上げ。	R-467	〃
	10	IV C区東半部	III-4層	土師器	碗	内外面ともに横ナデ仕上げ。外底面の切り離し方法は不明。	R-466	〃
	11	IV C区東半部	III-4層	須恵器	蓋	内外面ともに回転横ナデ仕上げ。	R-468	〃

挿図・ 遺物番号	調整区・出土 遺構・層位	種別	器種	出土状況・観察所見ほか	遺物登録 番号	収納 コンテナ	
図49	12 IV D区 東半部	Ⅲ-4層	須恵器	坏	内外面とも横ナデ仕上げ。高坏の可能性も考えられる。	R-459	16
	13 IV C区 西半部	Ⅲ-4層	須恵器	坏	器体の傾きは小片のため不確実。口縁部周辺～胴部外面は回転横ナデ、内面はナデ仕上げ。	R-455	〃
	14 IV D区 東半部	Ⅲ-4層	須恵器	甕または壺	外面には平行条線のタタキ目が残る。内面は横ナデ。	R-460	〃
	15 IV B区	Ⅲ-5層	土師器	坏	胴部外面にはロクロ目が残る。内面はミガキ仕上げ。図版42-8。	R-451	〃
	16 IV B区	Ⅲ-5層	土師器	埴	外底面は丁寧なナデ仕上げ。胴部外面は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	R-452	〃
	17 IV B区	Ⅲ-5層	土師器	埴	外面は荒れが進み調整不明。内面は丁寧な横ナデ。	R-453	〃
	18 IV B区	Ⅲ-5層	黒色土器	埴	内黒土器。外面は横ナデ埴 内面はミガキ仕上げ。	R-454	〃
	19 IV C区 東半部	Ⅲ-5層	黒色土器	埴	内黒土器。口縁部外面は横ナデ調整。内面はミガキ仕上げ。	R-469	〃
	20 IV D区	SR-101	須恵器	蓋	内外面ともに横ナデ仕上げ。	R-461	〃
	21 IV D区	SR-101	須恵器	甕または壺	外面は格子タタキ目をカキ目でナデ消す。内面には同心円文の当て具痕が残る。	R-341	〃
	22 IV E区 西半部	SR-102 ②・③ 層界部	土師器	坏	口縁部～胴部外面及び内面は横ナデ。胴部外面は手持ちヘラケズリ。内底面は不定方向のナデ。外底の切り離し方法は回転ヘラ切りか埴。図版42-9。	R-476	〃
	23 IV F区	SR-102 ①～② 層	土師器	坏または皿	小片のため底径は不確実。器面の荒れが進み、調整は不明。	R-472	〃
	24 IV F区	SR-102 ②層下 部	土師器	甕	「く」字形に屈曲する口縁部。内外面ともに横ナデ。外面には粘土接合線が残るとともに、横ナデで生じた粘土のよれがみられる。	R-474	〃
	25 IV F区	SR-102 ①～② 層	土師器	甕	口縁屈曲部付近は横ナデ、以下には4条/1cmの粗いハケメが残る。内面は乱雑なヘラケズリを施す。	R-470	〃
	26 IV F区	SR-102 ①～② 層	須恵器	壺	頸部の付け根付近は横ナデ。胴部外面には平行条線のタタキ目が残る。内面は横ナデ仕上げ。部分的に同心円文の当て具痕がみられる。図版42-10。	R-471	〃
	27 IV E区 西半部	SR-102 ②・③ 層界部	須恵器	蓋	外面は回転ヘラケズリ。内面は回転横ナデ仕上げ。	R-475	〃
	28 IV E区 西半部	SR-102 ②層	土師器	甕	内外面ともに横ナデ仕上げ。胴部外面にわずかにヘラケズリの痕跡が残る。	R-473	〃

IV 樽味遺跡 8 次調査の記録

調査番号 00608
 調査面積 42m²
 調査期間 2006年12月4日～2007年1月26日
 調査原因 (樽味団地) 総合研究棟改修工事
 調査担当 三吉秀充・田崎博之

5区と分散している(図4)。1・2・5区では遺構は出土せず、3・4区で土壇3、溝1、柱穴及び小穴39が検出され、中世の遺物が出土している(表8)。調査に当たっては、3・4区を通じて1～44の遺構番号を付して調査を進めることとした。7次調査と同じく、8次調査についても調査区ごとに報告を行う。

8次調査の調査地点は、樽味団地北西部の1～

1 1区の調査

1区は、農学部本館南北棟の余掘り範囲を確認するために、建物の東側に設定した(図4, 図版43-1)。その結果、調査区内西側では、建物壁から2.6mまで建物建設時の余掘りがおよんでいることを確認できた。一方、調査区東壁沿いでは、75～80cmの幅で帯状に基本層序のⅡ～Ⅳ層が残存していた。後述するように2区の調査が早くおわり、時間的余裕もあったので、Ⅲ層の精査とⅣ層上面で遺構検出に努めた(図版43-2・3)。

1区では、現地表下70cmで、樽味団地造成以前の水田層であるⅡ層があらわれた(図50)。Ⅱ層は、径1mm前後の砂粒が少量混じるシルト質土で、上

半部は灰色、下半部はマンガンが沈着してオリーブ黄色を呈する。上半部は水田耕作土層、下半部は床土層にあたる。Ⅰ・Ⅱ層中からは古代～中世の遺物が混じって出土しており、中世の土師器(図53-8)などがみられる。Ⅱ層の直下では、灰黄色のシルト質土層があらわれた。樽味団地の基本層序Ⅲ層に当たる。基本層序Ⅲ層は本来黒色～黒褐色系の土層であるが、灰黄色となっているのは、上層のⅡ層の影響を受けているためと考えられる。人力で精査したが土師器・須恵器の小片が2点出土したのみである。Ⅲ層の下層は浅黄色シルト質土層で、樽味団地の基本層序Ⅳ層にである。

表8 樽味遺跡 8 次調査遺構一覧表

	遺構の種別	出土遺構数	遺構名
1区	遺構・遺物は出土していない。		
2区	遺構・遺物は出土していない。		
3区	土壇(SK)	2	SK-1, SK-3
	溝(SD)	1	SD-2
	柱穴もしくは小穴(SP)	22	SP-4～20・40～44 (SP-5・7・8・10～13では立柱または杭痕跡を確認)
4区	土壇	1	SK-32
	柱穴もしくは小穴(SP)	17	SP-21～31・34～39 (SP-5・7・8・10～13では立柱または杭痕跡を確認)
5区	遺構・遺物は出土していない。		

2 2区の調査

2区は、農学部本館東西棟の余掘り範囲を確認するために、建物南側の壁面から約2m離れた位置に設定した(図4)。現地表下1.27mまで掘り下げたが、客土された真砂土層がつづく。2区調査範囲内は余掘り範囲に収まっていると判断した(図版43-1・4)。

3 3区の調査

(1) 層序と遺構の概要

3区は、農学部本館東西棟の北側に設置される検水槽部分にあたる(図4, 図版44)。東西長4.4m, 南北幅3.3mの調査区である。造成土である表土層のI層を掘り下げると、樽味団地造成以前の水田層である基本層序II層, さらに現地表下約60cmで基本層序IV層があらわれた。基本層序III層はみられない。

II層は、上半部の径1~2mmの粗砂や礫が多く混じる灰色シルト質土であるII-1層, 下半部の明黄褐色シルト質土のII-2層からなる。II-1層は水田耕作土層, II-2層は床土層である。

IV層の上面で出土した遺構には、1~20, 40~44の遺構番号を付した。遺構を種別ごとにみると、土壇2(SK-1・3), 溝1(SD-2), 柱穴及び小穴22(SP-4~23)がある。SP-5・7・8・10~13では立柱痕跡や杭痕跡を確認できた。しかし、調査範囲が狭く、これらが掘立柱建物や柵列を構成するかは確定できなかった(図51, 図版45・46)。

また、3区で出土した遺構の埋土は、黒褐色シルト質土を主体とする埋土Aと、灰色みをおびる暗褐色シルト質土の埋土Bに区分できる。SK-1, SP-15・18・19は埋土Aの遺構で、他はいずれも埋土Bをもつ遺構である。これまでの樽味遺跡での調査成果から、埋土Aの遺構は弥生時代~古墳時代, 埋土Bを埋土とする遺構は古代後半~中世

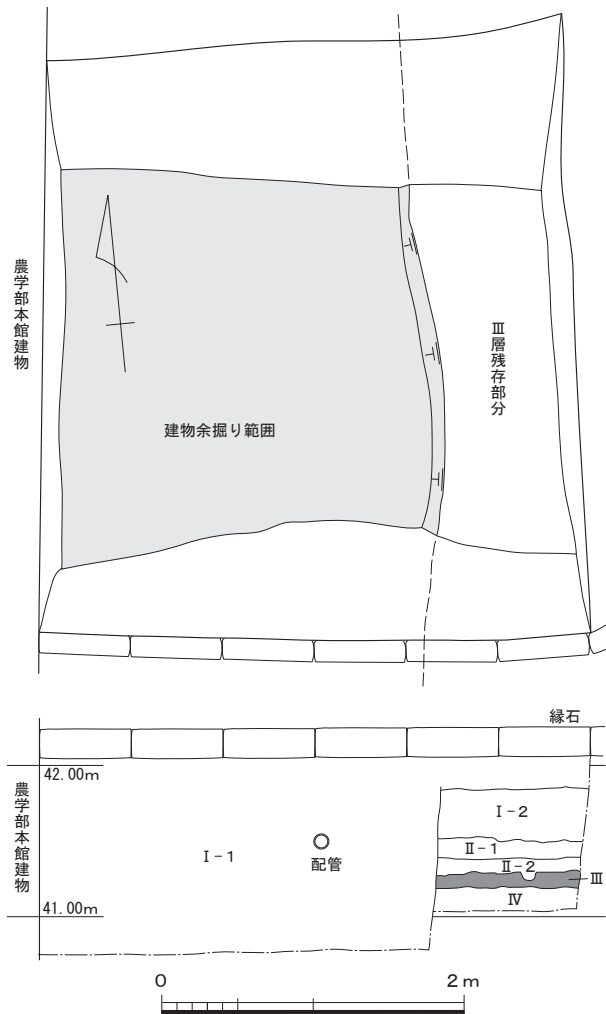


図50 8次調査1区全体図及び土層断面図
(縮尺 1/50)

と考えられる。以下、土壇, 溝, 柱穴・小穴を報告する。

(2) 出土遺構と遺物の記録

1) 土壇

SK-1 (図51, 図版47-1~3)

調査区の北東部で出土した隅丸方形の土壇である。東西幅1.25mを測る。SP-5に切られている。底面にはわずかに凹凸があり、一部円形の窪み状となった部分もある。埋土は、サラサラした質感をもつクロボク土を母材とし、調査区北壁面での土層観察では①~③層に分層できる。最上面にレンズ状に堆積する①層は、黒色シルト質土で、にぶい黄褐色シルト質土の径1~5mmの小塊が混じる。②層は、褐灰色~黒色のシルト質土

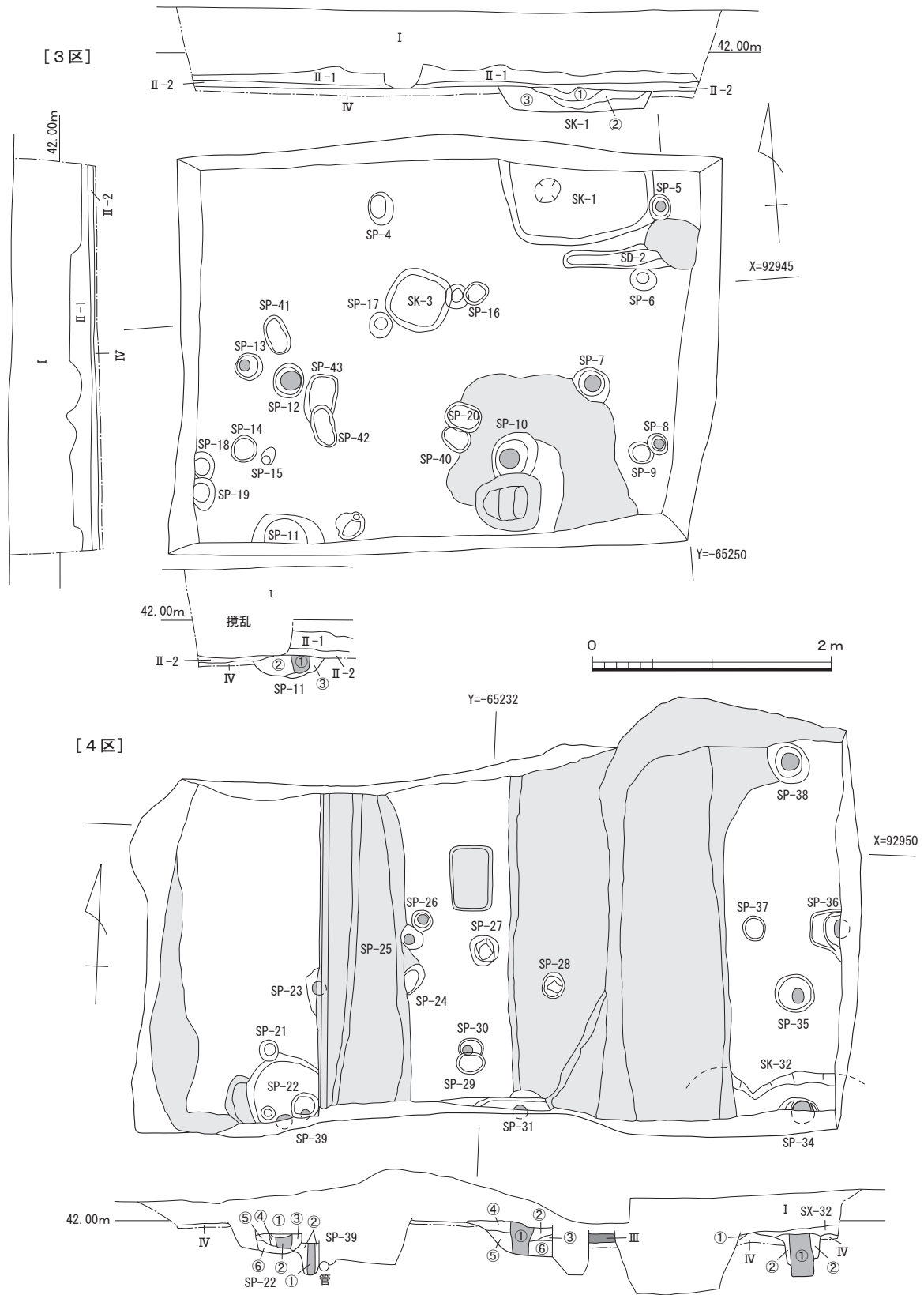


図51 8次調査3・4区全体図及び土層断面図 (縮尺 1/50)

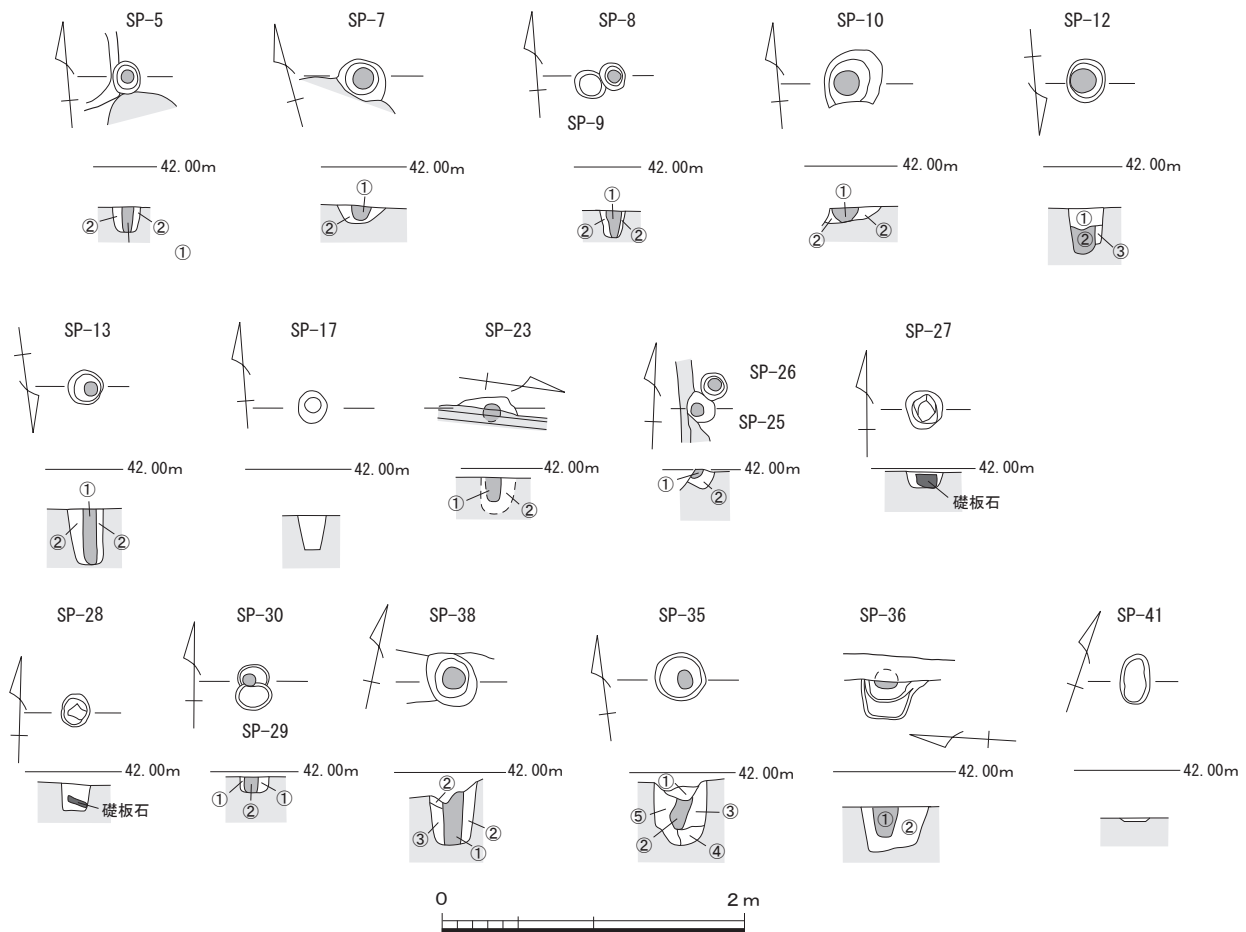


図52 8次調査3・4区柱穴及び小穴実測図（縮尺 1/50）

で、にぶい黄褐色シルト質土の径1～3mmの小塊を含むが、①層と比べて小塊は少なめである。埋土下部に当たる③層は、褐灰色シルトを主体とし、にぶい黄褐色シルト質土のレンズ状ブロックが多くみられる。土壌が廃棄された後に③層が流れ込んだものとする。出土遺物は、埋土上部から堆積岩片が1点出土しているのみである。

SK-3（図51，図版47-4）

3区のほぼ中央に位置する。一辺52～54cmの隅丸方形の掘り形をもつ小型土坑である。深さは4cmと浅く、底面は舟底状で、小さな凹凸がみられる。埋土は、後述するSD-2と同じく、砂礫まじりの暗褐色シルト質土で、小指先大のにぶい黄褐色シルトの小塊が多く混じる。

2) 溝

SD-2（図51，図版45・46）

調査区北東部のSK-1の南側で出土した長さ90

cm、幅14～21cmの幅狭の溝状遺構である。調査区壁沿いは攪乱部で破壊されている。東西方向にのび、SP-6と切り合うが、先後関係は明らかにできなかった。埋土は、砂礫混じりの暗褐色シルト質土で、小指先大のにぶい黄褐色シルトの小塊が多く混じる。埋土上半部には灰色シルト質土の小塊が点々とみられる。

3) 柱穴・小穴

3区では、SP-4～20・40～44の計22基の柱穴及び小穴が出土し、SP-5・7・8・10～13では立柱痕跡や杭痕跡を確認できた。これらを中心として、報告する。以外については、表9を参照されたい。

SP-5（図52，図版47-5）

調査区北東角に位置する。18×22cmの長円形の掘り形をもつ。SK-1に切られる。ほぼ中央で径7～8cm、深さ18cmの杭痕跡を確認できた。埋土

①層は杭痕跡で、砂礫混じりの暗褐色シルト質土で、小指先大のにおい黄褐色の小塊が点々と混じる。②層は掘り形埋土で、砂礫混じりの暗褐色砂質シルト質土である。小指先大のにおい黄褐色の小塊が多く混じる。埋土中から古墳時代後期の須恵器蓋坯の天井部片1点と土師器小片が1点出土している。

SP-7 (図52, 図版48-1)

調査区南東部に位置する。南西側を攪乱部で破壊されているが、径33cmほどの円形の掘り形をもつものと考えられる。掘り形の中央やや北東よりで径12cm、深さ9cmの立柱痕跡を確認できた。埋土は、全体にやや黒みをおび、砂礫が比較的多く混じり、SD-2の埋土に類似した土質である。埋土①層は立柱痕跡で、暗褐色シルト質土。径1～2mmのにおい黄褐色シルト塊が点々と混じる。掘り形埋土の②層は暗褐色シルト質土で、親指先大のにおい黄褐色シルト塊が多く混じる。埋土中から瓦器塼の口縁部近くの小片が1点出土している。

SP-8 (図52・53, 図版48-2)

調査区南東角で出土した径16×19cmの長円形の掘り形をもつ。掘り形のほぼ中央で径7～8cm、深さ16cmの杭痕跡を確認できた。埋土は全体として暗褐色土で、埋土①層は黒褐色シルト土の杭痕跡。②層は掘り形埋土で、黒褐色シルト質土に径1cmほどのにおい黄褐色シルトが多く混じる。埋土下部から中世の土師器の底部片が出土している(図53-1)。小片ではあるが、底径から皿と考えられる。

SP-10 (図52・53, 図版48-3)

調査区南東部に位置する。攪乱部の底面で掘り形の全形を確認できた。短径37cmの不整楕円形の掘り形をもつ。掘り形の中央西よりで径17cmの立柱痕跡を確認できた。埋土はSD-2と近似し、立柱痕跡の埋土①層は暗褐色シルト質土で、径1～2mmのにおい黄褐色質土や灰色シルト質土の小塊が点々と混じる。掘り形埋土の②層は、①層と比べて、暗褐色シルト質土や灰色シルト質土の小塊が特に多く混じる。埋土中から古代の土師器や須恵質土器が出土している(図53-2・3)。2はわずかに内湾する口縁部をもつ坯の口縁部片である。3は甕の胴部片で、外面には平行タキ調

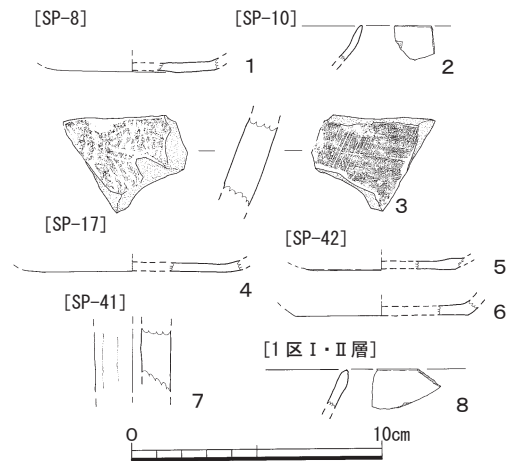


図53 8次調査出土遺物実測図1 (縮尺 1/3)

整、内面には同心円文の当て具痕が残る。平安時代の須恵質土器である。

SP-11 (図51, 図版48-4)

調査区南西角の調査区壁際に位置する。南半分は調査区外へと続くが、径62cmの円形の掘り形と考えられる。調査区壁面での土層観察で、径16cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡の①層は、砂礫が混じる暗褐色シルト質土。上半部には径1～2mmのにおい黄褐色シルト質土の小塊が多く混じる。②・③層は掘り形埋土。②層は暗褐色シルト質土で、径1mm～1cmのにおい黄褐色シルト質土の塊が混じる。下半部を中心として灰色シルト質土の小塊が多く混じる。③層は暗褐色シルト質土で、径1mm前後のにおい黄褐色シルトの塊が少量混じる。遺物は出土していない。

SP-12 (図52, 図版48-5・6)

調査区西半部に位置する。径25×28cmの楕円形の掘り形をもつ。埋土を中ほどまで掘り下げた段階で、掘り形の東よりで径16cmの立柱の抜き跡を確認できた。埋土①層は立柱が抜き取られた後に流入した土層で、暗褐色シルト質土に径1～3cm大のにおい黄褐色シルト質土の塊が非常に多く混じる。埋土②は立柱痕跡で、暗褐色シルト質土に径1cm以下のにおい黄褐色シルト塊が少量混じる。炭化物片が少量出土。③層は掘り形埋土で、暗褐色シルト質土で、におい黄褐色シルトが縞状に混じる。柱穴北半部の埋土中位から古代～中世の土師器の小片が3点出土している。

SP-13 (図52, 図版48-5・7)

調査区西半部のSP-12の西側に位置する。径22～23cmの円形の掘り形をもち、掘り形の中央西よりで径8～9cm、深さ36cmの先端が尖り気味の杭痕跡を確認できた。杭痕跡である①層は、微細砂が混じる黒褐色シルト質土で、径2mm大のにおい黄褐色シルトの小塊が混じる。②層は砂礫混じりの黒褐色シルト質土で、径1～5mm大のにおい黄褐色シルトの小塊が多く混じる。遺物は出土していない。

SP-17 (図51・53, 図版48-8)

調査区中央部に位置する。長径21cm, 短径19cmを測る長円形の掘り形をもち。深さは23cm。埋土は、SP-12と同じく、暗褐色シルト土で、上面ではにおい黄褐色シルトの小塊が多く混じるが、上部5cm以下は砂礫混じりの灰褐色シルト土に変化する。埋土下部から古代～中世の土師器坏が1点出土している(図53-4)。しかし、器表面が荒れ、外底面の切り離し痕跡は確認できなかった。

SP-41 (図52・53)

調査区西半部に位置する。深さ2cmほどと浅

く、IV層上面の凹み部分の可能性も残す。埋土は暗褐色シルトと灰色シルト、におい黄褐色シルトの径2～5cmの塊が混じり合う。埋土中から古代の土師器高坏の脚部片が1点出土している(図53-7)。脚部外面の表面は磨滅しているが、ヘラケズリで面取りした痕跡を観察できる。

SP-42 (図51・53)

調査区西半部に位置する。長径35cm, 短径19cmの細長い楕円形の掘り形をもち。SP-43と切り合う。深さ65cmと他の遺構と比べて深く、掘り形の平面形も不整であるので、樹木の根の跡である可能性が高い。埋土は暗褐色シルト土に、小指先大のにおい黄褐色シルト、灰色シルトが多く混じる。弥生土器甕の胴部片4点、瓦器片2点、土師器小片4点、焼成粘土塊3点が出土した(図53-5・6)。5は土師器の皿または坏の底部片。器表面が荒れ、調整は不明。6は土師器の坏の底部片で、外底面には回転糸切り離し痕が残る。この他に、図示していないが、径約1.5cmを測る焼成粘土塊が出土している。

4 4区の調査

(1) 層序と遺構の概要

4区は3区の東側約15mに位置する。3区と同じく検水槽部分にあたる。調査に着手した当初は、東西9m, 南北7m幅で調査区を設定した。ところが、重機を用いて表土剥ぎ中に調査区の東西で既設の配管路があらわれた。そのため、調査区を東側へ3m拡張することとし、最終的に4区は東西12m, 南北7mの調査範囲となった(図4, 図版44)。

道路面下、約26cmまで瓦礫を伴ったI層がつづき、その直下でIV層を検出した。IV層上面で検出した遺構には、21～39の遺構番号を付した。ただし、遺構33は欠番である。遺構の種別ごとにみると、土壙1(SK-32)、柱穴・杭穴・小穴17(SP-21～31・34～39)がある。柱穴及び杭穴は、調査区が狭いため、掘立柱建物や柵列を構成するかは確定できなかった(図51, 図版49・50)。

また、埋土の特徴からは、暗褐色～黒褐色の埋土Aと灰褐色の埋土B、灰色の埋土Cに遺構を分類できる。埋土Aの遺構には、SP-22・23・30・31・34・36・38、埋土Bの遺構にはSP-24・25・26・27・28・29・35・37、埋土Cの遺構にはSP-21がある。ここでは、土壙、立柱痕跡や杭痕跡を確認できた柱穴・小穴や、遺物が出土した小穴を報告する。以外については表9を参照されたい。

(2) 出土遺構と遺物の記録

1) 土壙

SK-32 (図51, 図版51-8)

表土剥ぎ作業を終えた時点で、調査区南東隅に灰褐色シルト質土が東西長85cm, 南北幅30cmの範囲に広がることを確認できた。灰褐色ではあるが、基本層序III層である暗褐色土が脱色された土色である。また、深さ約8cmと浅いものの、北側

の掘り形が明瞭に掘り込まれており、またIV層との層界が明瞭であることから土壙と考えた。遺物は出土していない。

2) 柱穴・小穴

SP-22 (図51, 図版51-1)

調査区南西隅に位置する。当初、1つの遺構と考えて調査を進めたが、調査区南壁面で2つの柱穴が重複していることに気がついた。そこで、東側をSP-39、西側をSP-22とした。そのため、SP-22として採り上げた遺物には、SP-39の遺物が混じっている。

SP-22は、円形の掘り形で、推定径約60cm、深さ16cmを測る。SP-39を切り、SP-21に切られる。調査区南壁での土層観察では、埋土は①～⑥層に分層できる。①層は、暗褐色シルト質土に明黄褐色土の丸いブロックが混じる。②層は立柱痕跡で、黒色シルト質土である。立柱痕跡の直径は14cmを測る。③～⑥層は掘り形埋土である。③・④層は黒褐色シルト質土を主体とし、明黄褐色砂質土の丸い小塊が少量混じる。⑤層は黒～灰褐色シルト質土を主体とし、明黄褐色砂質土の塊が少量混じる。⑥層は、明黄褐色砂質シルト質土を主体として、黒色シルト質土のブロックが少量混じる。土師器片が2点出土している。

SP-23 (図52, 図版51-2)

調査区西部に位置する。既設管路の掘り形で大部分を破壊されている。残存径40cm、深さ24cmを測り、径10cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡である①層は黒褐色シルト質土、掘り形埋土の②層は黒褐色シルト質土で、灰色と明黄褐色の砂質土のレンズ状ブロックが少量混じる。遺物は出土していない。

SP-25 (図52, 図版51-3)

調査区中央部に位置する。東半部を既設管路の掘り形で破壊されている。SP-26に切られる。径20cmの円形の掘り形をもち、深さ13cmを測る。径8cmの杭痕跡を確認できた。杭痕跡の①層は灰褐色シルト質土、掘り形埋土の②層は灰褐色シルト質土を主体として径2～3mmの明黄褐色土の丸い塊が混じる。埋土中から土師器片が3点出土している。そのうちの1点は土師器皿の底部片であるが、時期は不明である。

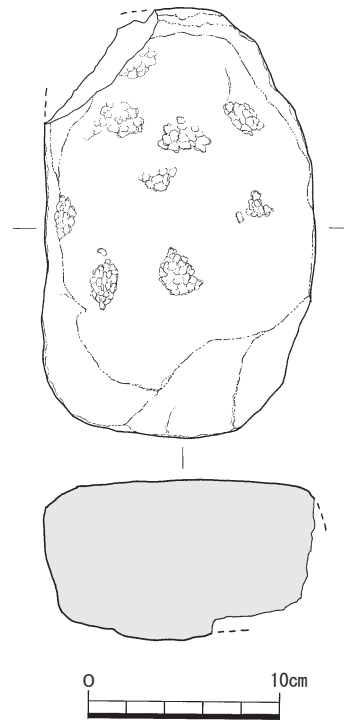


図54 8次調査出土遺物実測図2
(縮尺 1/4)

SP-26 (図52, 図版51-3)

調査区中央部で出土した径18cm、深さ7cmの円形の杭穴である。SP-25を切る。径8cmの杭痕跡を確認できた。杭痕跡である①層は灰褐色シルト質土、掘り形埋土の②層は灰褐色シルト質土を主体として、明黄褐色土の丸い小塊が少量混じる。埋土から瓦器片が1点出土している。

SP-27 (図52・54, 図版51-4)

調査区のはほぼ中央に位置する。径24cm前後、深さ10cmの円形の掘り形をもち、埋土は灰褐～暗褐色シルトで、明黄褐色土の丸い塊が混じる。底面には、台石を転用した礎石が据えられているが、土層断面も含めて立柱痕跡は確認されていない。礎石に転用された台石は、長辺20cm、幅14cm、厚さ9cm、重量4.1kgの花崗岩の扁平な垂円礫で、側面の一部を欠くが、上面の平坦な面の各所に敲打痕が残る(図54)。その他の遺物は出土していない。

SP-28 (図52, 図版51-5)

調査区の中央東よりに位置する。径19～22cm、深さ18cmの円形の掘り形をもち、埋土は灰褐色シルトで、暗褐色シルトの丸い小塊が混じる。柱穴底面からやや浮いた状態で、長辺10cm、幅8cmの深成岩の割り石が出土した。礎板として利用され

ていたと考えられる。埋土中から土師器細片が2点出土している。

SP-30 (図52, 図版51-6)

調査区の中央南よりに位置する。SP-29に切られる。径21cm前後、深さ10cmの長円形の掘り形をもち、径9cmの杭痕跡を確認できた。杭痕跡に当たる①層は暗褐色シルト質土、掘り形埋土の②層は灰褐色シルト質土を主体として、小指先大の炭化物片が少量混じる。②層から土師器細片が4点出土している。

SP-31 (図51, 図版51-7)

調査区南壁沿いに位置する。当初、3つの遺構が重複するものと考え、調査を進めたが、遺構完掘後に調査区南壁面で確認したところ、一連の遺構であることを確認でき、SP-31とした。残存径70cm以上、深さ29cmの掘り形をもち、立柱を抜き取った痕跡を検出できた。柱の抜き取り痕跡である埋土①層は黒褐色シルト質土。抜き取り痕跡は径20cmを測り、西側部分は上下に直線的にのびるのに対して、東は上部で東側へ屈曲する。立柱を東側へ抜き取ったことが考えられる。②～⑥層は掘り形埋土である。②層は黒褐色シルト質土で、明黄褐色土の丸い小塊が少量混じる。③層は暗褐色シルト質土で、明黄褐色土の丸い小塊が混じる。④層は灰褐色シルト質土を主体として明黄褐色土のレンズ状ブロックが少量挟まる。⑤層は暗褐色シルト質土で、明黄褐色土の丸い塊が混じる。⑥層は暗褐色シルト質土を主体として明黄褐色土の大きな丸い塊が多く混じる。遺物は出土していない。

SP-34 (図51, 図版51-7)

調査区南東隅に位置する。前述したSK-32を掘り下げた時点で、掘り形の平面形を検出できた。掘り形は径40cm前後、深さ40cmを測る円形で、立柱の抜き跡を確認できた。立柱の抜き跡に当たる①層は、暗褐色～灰褐色のシルト質土で、明黄褐色土の小塊が少量混じる。抜き取り痕の底面から、径17cmの立柱を復元できる。掘り形埋土である②層は、暗褐色シルト質土で、明黄褐色土の大きな塊が混じる。古代～中世の土師器片2点と古墳時代後期の須恵器坏蓋の天井部片1点が出土している。

SP-35 (図52, 図版52-1)

調査区東部に位置する。径34cm、深さ42cmを測る円形の掘り形をもち。埋土は、柱抜き取り後の流入土である①層、柱抜き取り痕跡である②層、掘り形埋土である③～⑤層からなる。①層は灰褐色シルト質土で、明黄褐色土の塊が少量混じる。②層は灰褐色シルト質土で、径1～3mmの明黄褐色土の丸い塊が多く混じる。③層は灰褐色シルト質土が主体で、明黄褐色土の径1～3mmの丸い塊が混じる。②層よりも明黄褐色の小塊の割合は少ない。④層は灰褐色シルト質土。⑤層は灰褐色シルト質土を主体とし、明黄褐色土の幅5cm前後の薄いレンズ状ブロックが挟まる。古代～中世の土師器皿の底部片2点を含む土師器4点出土している。

SP-36 (図52, 図版52-2)

調査区東壁際に位置する。径55cm、深さ30cmの円形の掘り形をもち。東半分は調査区外へのびる。柱抜き取り痕跡を確認できた。抜き取り跡である①層は、暗褐色シルト質土で、明黄褐色土の塊が少量混じる。掘り形埋土である②層は、①層と共通した土質であるが、明黄褐色土塊の割合は少ない。古代～中世の土師器細片が出土している。

SP-38 (図52, 図版52-3)

調査区北東隅に位置する。径30cm、深さ42cmの長円形の掘り形をもち。掘り形の中央で、径16cmの立柱痕跡を確認した。立柱痕跡に当たる①層は暗褐色シルト質土。②・③層は掘り形埋土。②層は暗褐色シルト質土で、径1～5mmの明黄褐色砂質土の塊が混じる。③層は②層と類似するが、明黄褐色砂質土の塊が多い。掘り形南半部から土師器細片1点と鉄滓片1点(残存重量15.6g)が出土している。

SP-39 (図51, 図版51-1)

調査区南壁で、SP-22底面で検出した。SP-22に切られる。径24cm、深さ26cmの円形の掘り形をもち。調査区壁面で径6cmの杭痕跡を確認できた。①層は杭痕跡で、暗灰褐色シルト質土。②層は掘り形埋土で灰褐色シルト質土。SP-22の報告でも述べたように、調査時の経緯からSP-22として採り上げた遺物の一部には本来SP-39の遺物を含んでいる。

5 5区の調査

5区は農学部本館の南側東西棟の西端部に設置される検水槽部分にあたる(図4)。重機を用いて造成土のI層を掘り下げると、現地表下65cmで、調査区西端でIV層が部分的にあらわれた。したがって、建物建設時の余掘り範囲は、建物壁面から西側へ3.5mまでおよんでいることになる。IV層上面で遺構検出を試みたが、遺構は出土していない。出土遺物もない(図55, 図版52-4・5)。

8次調査を終了した後、5区の西側4mの地点で立会調査(00614調査3トレンチ)を実施した。この立会調査では、標高40.75mでIII層が出土している。また、樽味8次調査5区では標高41.50mでIV層を確認しており、近接した調査で、地形が大きく異なることになる。00614調査3トレンチでは、III層の一部発掘でIV層の確認ができていないことから、5区で確認できたIV層の位置づけについては、周辺にお

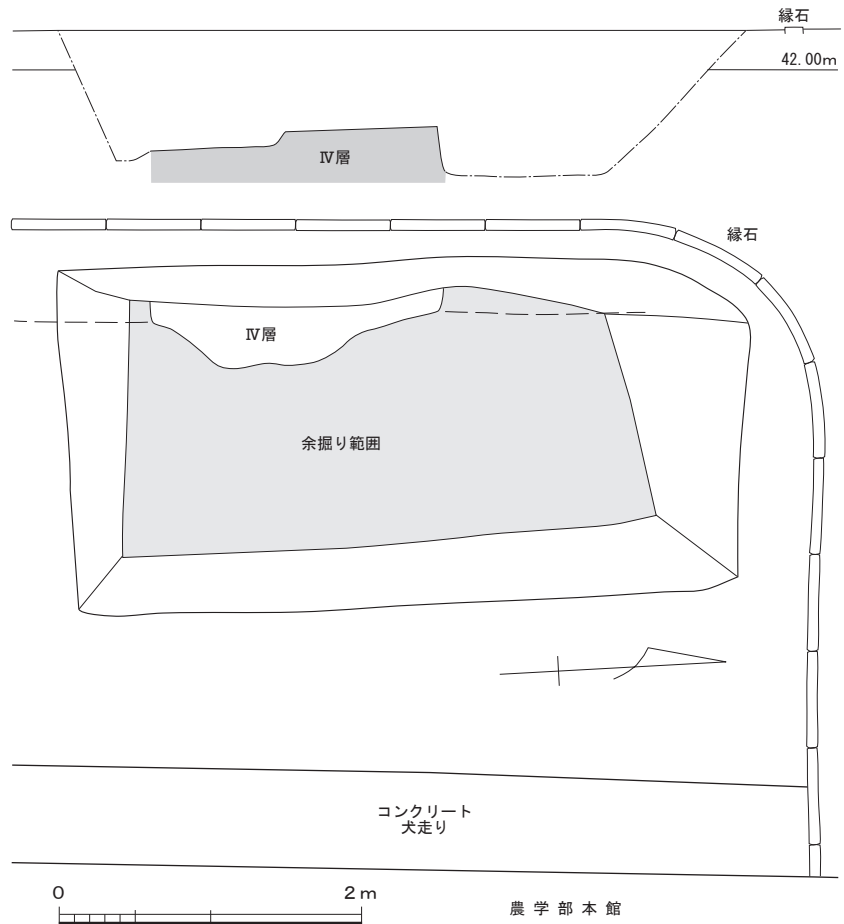


図55 8次調査5区全体図及び土層断面図(縮尺 1/4)

ける今後の発掘調査で再検討する必要がある。

(三吉)

表9 8次調査遺構観察表

遺構 種別	番号	調査区	形状・埋土の特徴等	埋土 類型	時代
SK	1	3区	一辺約1.25mの隅丸方形の掘り形をもつ土壇。詳細は本文82頁に報告。	A	弥生～古墳
SD	2	3区	長さ90cm, 幅14～21cmの溝状遺構。詳細は本文84頁に報告。	B	古代～中世
SK	3	3区	一辺52～54cmの隅丸方形の掘り形をもつ土壇。詳細は本文84頁に報告。	B	古代～中世
SP	4	3区	長辺28cm, 短辺20cmの長楕円形の掘り形をもつ。深さ約3cm。埋土は砂礫混じりの暗褐色シルト土。下部にも灰色シルトの小塊が点々と混じる。	B	古代～中世
SP	5	3区	径22×18cmの長円形の杭穴。詳細は本文84頁に報告。	B	古代～中世
SP	6	3区	長辺22cm, 短辺18cmの楕円形の掘り形をもつ。深さ3.4cm。埋土は砂礫混じりの暗褐色シルト土。SD-2と同じく, 小指先大のにおい黄褐色シルト塊が多く混じる。埋土中から花崗岩の自然礫片1点, 土師器小片3点が出土。	B	古代～中世
SP	7	3区	推定径33cmの柱穴。詳細は本文85頁に報告。	B	古代～中世
SP	8	3区	径16×19cmの長円形の杭穴。詳細は本文85頁に報告。	B	古代～中世
SP	9	3区	径18cmの円形の掘り形をもつ。深さ21cm。埋土は砂礫混じりの暗褐色シルト土。埋土から土師器小片が1点出土。	B	古代～中世
SP	10	3区	残存長径46cm, 短径37cmの不整楕円形の柱穴。詳細は本文85頁に報告。	B	古代～中世
SP	11	3区	径62cmの柱穴。詳細は本文85頁に報告。	B	古代～中世
SP	12	3区	径28×25cmの楕円形の柱穴。詳細は本文85頁に報告。	B	古代～中世
SP	13	3区	径22～23cmの円形の杭穴。詳細は本文85頁に報告。	B	古代～中世
SP	14	3区	径21cmの円形の掘り形をもつ。深さ47cm。埋土は砂礫が多く混じる暗褐色シルト土。	B	古代～中世
SP	15	3区	長径16cm, 短径11cmの楕円形の掘り形をもつ。深さ10cm。埋土は黒色シルト土で, 灰色シルト土の小塊が少量混じる。	A	弥生～古墳
SP	16	3区	長径22cm, 短径18cmの楕円形の掘り形をもつ。埋土は砂礫混じりの暗褐色シルト土。深さ3cmほどの皿状の浅い小穴で, IV層上の凹部である可能性が強い。	B	古代～中世
SP	17	3区	長径21cm, 短径19cmの長円形の掘り形をもつ。詳細は本文86頁に報告。	B	古代～中世
SP	18	3区	残存径23cm。埋土は砂礫混じりの暗褐色シルト土で, 灰色及びにおい黄褐色のシルト土の小指先大の塊が非常に多く混じり, 全体として灰色みが強く明るい土色。	A	弥生～古墳
SP	19	3区	長径27cm, 短径約20cmの楕円形の掘り形をもつ。深さ46cm。埋土は, 砂礫が少量混じる黒褐色シルト土で, 径2～4cmのにおい黄褐色シルト塊が多く混じる。埋土中から弥生土器あるいは土師器片が5点出土している。	A	弥生～古墳
SP	20	3区	長径30cm, 短径24cmの楕円形の掘り形をもつ。深さ約8cm。埋土は, 砂礫が少量混じる黒褐色シルト土で, 径2～4cmのにおい黄褐色シルト塊が多く混じる。	B	古代～中世
SP	21	4区	長径18cm, 短径15cmの長楕円形の掘り形をもつ。深さは24cm。SP-22を切る。埋土は灰色シルト土。径1cm前後の炭化物片が出土。	C	古代～中世
SP	22	4区	調査区南西隅で出土した推定径約60cmの柱穴。詳細は本文87頁に報告。	B	古代～中世
SP	23	4区	残存径約40cmを測る。詳細は本文87頁に報告。	B	古代～中世
SP	24	4区	残存径約25cm, 深さ48cmを測る。埋土は灰褐色シルト土で, 灰色シルト土の丸いブロックが混じる。土師器皿あるいは坏の底部片が1点出土。	B	古代～中世
SP	25	4区	径20cmの円形の杭穴。詳細は本文87頁に報告。	B	古代～中世
SP	26	4区	径18cmの円形の杭穴。詳細は本文87頁に報告。	B	古代～中世
SP	27	4区	調査区中央部で検出した径約24cmの柱穴。詳細は本文87頁に報告。	B	古代～中世
SP	28	4区	径22×19cmの円形の柱穴。詳細は本文87頁に報告。	B	古代～中世
SP	29	4区	長径23cm, 短径18cmの長楕円形の掘り形をもつ。深さ12cm。SP-30を切る。埋土は灰褐色シルト土で, 明黄褐色土の丸いブロックが混じる。長さ2cm, 径0.5cmほどの炭化材片が出土。	B	古代～中世
SP	30	4区	径21cmほどの長円形の杭穴。詳細は本文88頁に報告。	B	古代～中世

遺構 種別	番号	調査区	形状・埋土の特徴等	埋土 類型	時代
SP	31	4区	残存径70cmの柱穴。詳細は本文88頁に報告。	B	古代～中世
SK	32	4区	径85×30cmの不整形の土壇。詳細は本文86頁に報告。	B	古代～中世
欠番	33	4区	—		
SP	34	4区	径40cm前後、深さ40cmの円形の柱穴。詳細は本文88頁に報告。	B	古代～中世
SP	35	4区	径34cm、深さ42cmの円形の柱穴。詳細は本文88頁に報告。	B	古代～中世
SP	36	4区	径55cmの円形の柱穴。詳細は本文88頁に報告。	B	古代～中世
SP	37	4区	径20cm、深さ3cmの掘り形をもつ。埋土は暗褐色～にぶい灰褐色のシルト土で、明黄褐色土の小塊が混じる。	B	古代～中世
SP	38	4区	径30cmの長円形の柱穴。詳細は本文88頁に報告。	A	弥生～古墳
SP	39	4区	径24cmの円形の杭穴。詳細は本文88頁に報告。	B	古代～中世
SP	40	3区	長径25cm、短径19cmの楕円形の掘り形をもつ。深さ7cm。SP-20に切られる。埋土は暗褐色シルト土。小指先大の灰色シルトや径5cmほどのにぶい黄褐色シルト塊が多く混じる。	B	古代～中世
SP	41	3区	深さ約2cmの浅い凹み状の小穴。	B	古代～中世
SP	42	3区	長径35cm、短径19cmの細長い楕円形の小穴。木の根の跡とも考えられる。	B	古代～中世
SP	43	3区	残存長辺45cm、短辺26cmの隅丸長方形の掘り形をもつ。深さ32cm。SP-42と切り合う。埋土の特徴を記録化していない。	—	
SP	44	3区	径20cm、深さ5cmの掘り形をもつ。SP-3・16に切られる。埋土は、砂礫が少量混じる暗褐色シルト土で、にぶい黄褐色シルトの小塊が多く混じる。	B	古代～中世

表10 8次調査出土遺物観察表

挿図・ 遺物番号	調査区・出土 遺構・層位	種別	器種	出土状況・観察所見ほか	遺物登録 番号	収納 コンテナ		
図53	1	3区	SP-8	土師器	皿	器表面は内外面ともに磨滅し、調整は不明。	R-101	1
	2	〃	SP-10	土師器	坏	器表面は内外面ともに磨滅し、調整は不明。	R-102	〃
	3	〃	〃	須恵質 土器	甕	外面は平行タタキの後ケズリ調整。内面は青海波の当て具痕が残る。	R-103	〃
	4	〃	SP-17	土師器	坏	器表面は内外面ともに磨滅し、調整は不明。	R-104	〃
	5	〃	SP-41	土師器	高坏	外面は磨滅しているが、わずかにヘラケズリで面取りされている。	R-105	〃
	6	〃	SP-42	土師器	皿または坏	器表面は内外面ともに磨滅し、調整は不明。	R-106	〃
	7	〃	〃	土師器	皿または坏	器表面は内外面ともに磨滅してはいるが、外底面には回転糸切り離しの痕跡がわずかに残る。	R-107	〃
	8	1区	I・II 層	土師器	坏	内外面ともに回転横ナデ調整を施す。	R-109	
図54	4区	SP-27	石器	台石	花崗岩の亜円礫を利用した台石。礎石に転用。	R-110	〃	

V 樽味遺跡6～8次調査のまとめ

本書で報告した樽味遺跡6～8次調査では、古墳時代後期と古代後半～中世の遺構・遺物が出土した。ここでは、各調査地点の概要をまとめ、7次調査I区SX-29出土遺物の時間的位置づけ、そして周辺の既往調査の成果とあわせた樽味団地西半部を中心とする古代後半～中世の集落域の変遷を検討し、調査のまとめとしたい。

1 6～8次調査の遺構・遺物について

6次調査では、調査区西半部を中心として、掘立柱建物1棟、土壇19基（風倒木痕を含む）、溝1条、柱穴もしくは小穴61基が出土した。調査面積が1,200㎡と広い割に出土した遺構は少なく、周辺の2次調査地点や5次調査II区と比べて遺構密度も低い。調査区東半で本来IV層の下半部に堆積する砂礫が多く混じる黄褐色砂質シルト層がII層直下であられるので、調査区東半部を中心として削平を受けているためと考えられる。また、調査区西半部で出土した遺構は、出土遺物が少なく、個々の時期比定が難しい。しかし、掘立柱建物や土壇の一部は出土遺物から10世紀～11世紀前半に比定できる。他の遺構もほぼ同時期のものと考えられる。今回の調査区の南側に隣接する樽味遺跡5次調査区（調査番号：99807）や00909調査では、10～14世紀の遺物が大量に出土する旧河道が確認されている（図4）。河道北側に接するように、古代後半期の集落域が展開していたものと言える。

7次調査の調査地点は、樽味遺跡北西部に点在する。その中で、北部に位置するI区では、古墳時代後期の6世紀後半～7世紀初めの竪穴式住居跡3棟、掘立柱建物1棟、溝2条、自然流路1条、土壇、柱穴などが出土している。その中で、自然流路SR-13は、16mほど北東に離れた1次調査IV区SR-3と一連の自然流路と考えられる。SR-13では、埋没過程で投棄された遺物と考えられる土器溜まりSX-29を確認できた。

また、古代の遺構としては、10世紀～11世紀

前半に比定できるSD-8・18号溝がある。SD-18は、SD-8から分岐した同時期の溝と考えられる。この他、10世紀まで遡る遺構としては土壇（SK-7）がある。さらに、12世紀後半の柱穴もしくは小穴が出土している。

7次調査II区では、古墳時代後期の遺構と考えられる落ち込みを確認できた。調査範囲が狭く、遺構の種別は明らかにできなかったが、西側の3次調査で出土した古墳時代中期後半～後期の竪穴式住居跡群と関連する遺構であることは明らかである。樽味遺跡における既往の調査では、古墳時代中期～後期の遺構は遺跡北西部に集中している。近年の周辺における発掘調査によって、北側の樽味立添遺跡、西側の樽味高木遺跡や樽味四反地遺跡まで、面的に連続して拡がることが明らかにされている。7次調査ではIV区で古墳時代後期に埋没する自然流路SR-101が確認されているので、これを南限として、西は樽味四反地遺跡9次調査地点（図3-44・45）、そして東は樽味遺跡7次調査I・II区（図3-14・15）周辺に広がる石手川に沿った南北250m、東西450mの範囲に展開する当該期の集落域を推定できる。

8次調査1・2・5区では、遺構・遺物は出土していない。これに対して、3・4区では土壇、溝、柱穴、杭穴などを確認できた。出土遺物が少なく、個々の遺構の時期は確定できないが、遺構埋土の特徴から古代後半～中世に比定できる遺構が中心となるものと考えられる。3・4区の北東側に位置する樽味遺跡1次調査I区（図3-1）ではL字状の溝が調査され、2次調査（図3-5）では掘立柱建物群を溝や柵列で囲む方形区画が調査されるなど14～16世紀の集落遺跡が確認されている。8次調査で出土した柱穴や杭穴なども、こうした14～16世紀の集落の一角を構成するものである。（田崎）

2 7次調査I区SX-29出土遺物について

SX-29は、7次調査I区のSR-13の埋没過程で

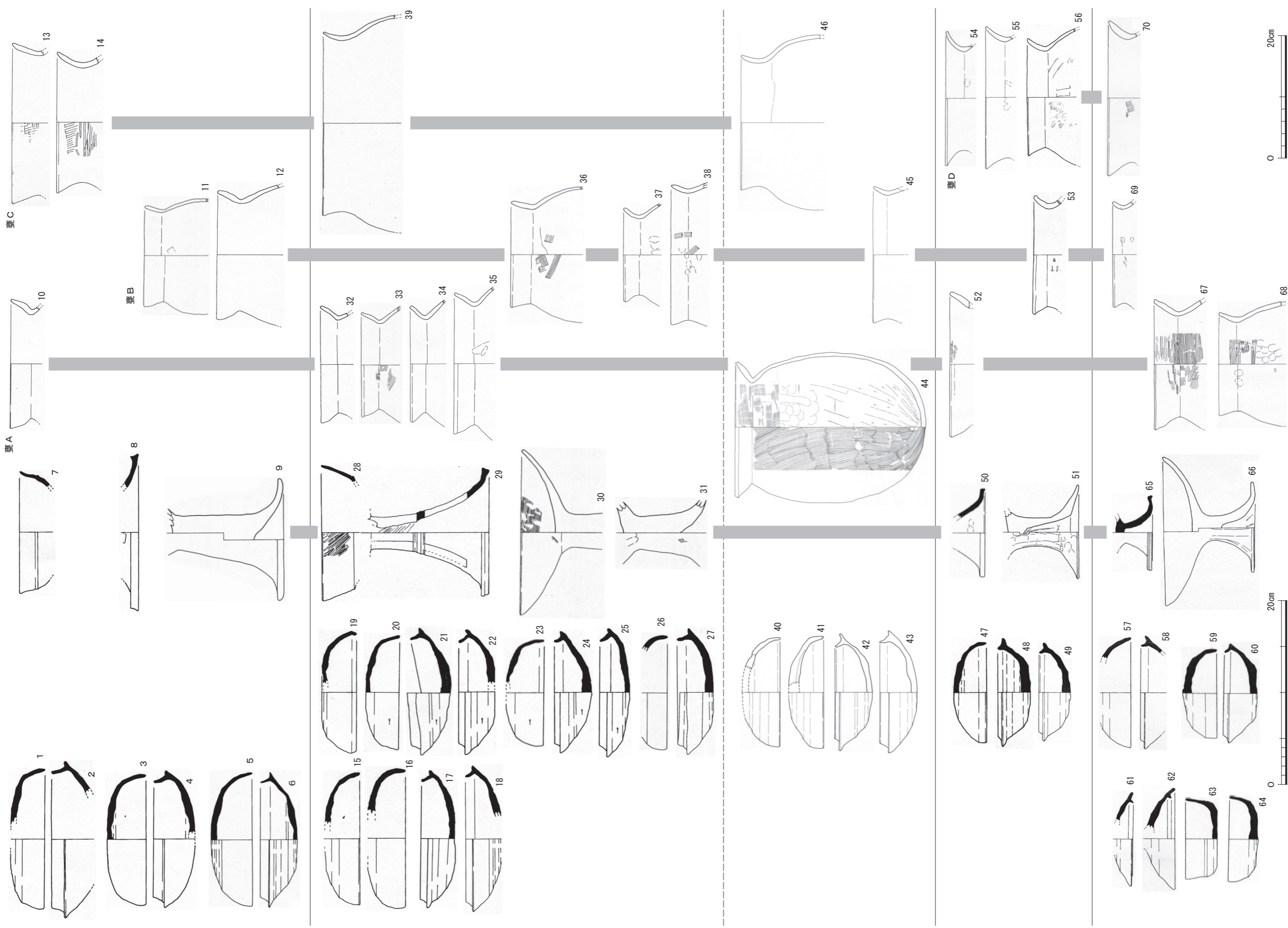


図56 6世紀中頃～7世紀の土師器・須恵器の比較 (須恵器・土師器高坏 1/4, 土師器甕 1/6)

(1～4、7・8・10・12～14：下苅屋遺跡3次SB-6、5・6・9～11：北井門遺跡MSK6区SI-03竈周辺、15～17・19～25・28・29・32・46：下苅屋遺跡3次SK-1、18・26・27・30・31・33～38：北井門遺跡MSK1区SI-08、40～46：榊味遺跡7次I区SX-29、49～52・54・55：平井遺跡9次SK-1、47・48・53・56：久米窪田古屋敷遺跡A区SD-1、57～70：平井遺跡9次SK-2)

投棄された土器溜まりである。出土遺物は、弥生土器や石庖丁などを除けば、須恵器・土師器ばかりで、完形品や全形を復元できるものが多い。ここでは、松山平野の6世紀中頃～7世紀の出土資料と比較することで、SX-29出土遺物の時間的位置づけを考えたい。

松山平野の6世紀中頃～7世紀の集落遺跡としては、松山市下菟屋遺跡、井門北遺跡、平井遺跡、久米窪田古屋敷遺跡などの資料がある(図56)。その中で、下菟屋遺跡3次調査SB-6号住居跡と北井門遺跡MSK6区IS-03号住居跡出土資料は、6世紀中頃に比定できる(図56-1～14)。須恵器の坏蓋は、天井部は丸みをおび、6世紀前半期に比定できる蓋坏にみられる口縁端部内面の小さな段はなくなり丸く収められる。口径は14～15cm前後(1・3・5)。坏身は、口縁部が内湾しながら内傾する受け部をもつ。先端は丸く収められる(2・4・6)。口径は12.5～14.5cm。土師器の高坏は中実の脚柱部に「ハ」字形に広がる裾をもつ(9)。土師器の甕には、「く」字形口縁の上面がわずかに内湾する甕A(10)、口縁部が長く直立気味の甕B(11・12)、長い口縁部が緩やかに湾曲しながら外反する大型の甕C(13・14)の3者がある。

これに続く6世紀後半に比定できる資料には、下菟屋遺跡3次調査SK-1号土壙がある。須恵器の蓋坏の蓋には、前段階と比べて器高が低く丸みをおびて口縁端部がわずかに内湾するもの(15・16)と、口径が11～12cmと丸みをおびた器形のもの(19・20・23・26)がある。前者に伴う坏身は、前段階と比べて、口縁部がより内傾するとともに短い(17・18)。後者に伴う坏身は、口径が11～12cm前後と小さく口縁部も短く、受け部が短いものが含まれる(21・22・24・27)。土師器の高坏は、浅い皿状の坏部に、中実の脚柱部がつく。前段階と同じく、「ハ」字形に広がる裾部をもつと考えられる。土師器の甕は、前段階でみられた甕A～Cがある。甕Aは「く」字形口縁の上面の内湾がほとんどみられなくなる(32～35)。甕Bは、前段階と共通するが、口縁部の屈折が緩やかなものがみられる(38)。甕Cは肩部から緩やかに反転しながら口縁部につながる(39)。

6世紀中頃～後半の資料に対して、7世紀に比

定できる資料には、平井遺跡9次調査SK-1号土壙と久米窪田古屋敷遺跡A区SD-1号溝がある。須恵器の蓋坏の蓋は、口径が10～11cmとより小型で(47)、坏身も小型で受け部が小さく退化している(48・49)。土師器の高坏は、前段階と同じく、中実の脚柱部をもち裾部が「ハ」字形に開くが、脚が短く低脚化する(51)。土師器の甕には、甕A・Bがある一方で、大型の甕Cはみられない。かわって、口縁部が反りながら反転する「く」字形口縁をもつ甕Dが登場する(54～56)。須恵器の蓋坏から考えれば、7世紀前葉に比定できる。

平井遺跡9次調査SK-1号土壙や久米窪田古屋敷遺跡A区SD-1号溝と同じ型式の蓋坏が出土する資料として、平井遺跡9次調査SK-2号土壙がある(57～60)。低脚の土師器の高坏がある(66)。ただし、同資料では、蓋坏には、それまでの蓋と身の形態が逆転するものが含まれる(61～64)。また、口縁部が肥厚し端部を尖り気味に仕上げる甕Dがみられる。甕Aも器壁が厚めで口縁部が立ち上がり(67)、さら口縁部の立ち上がりが強くなったもの(68)がみられる。したがって、平井遺跡9次調査SK-2号土壙の資料は7世紀後半に比定できる。

以上の6世紀中頃～7世紀の須恵器と土師器と樽味遺跡7次調査I区SX-29出土資料を比較すると、まず須恵器の蓋坏では、下菟屋遺跡3次調査SK-1号土壙で出土している口径が11～12cmと丸みをおびる蓋(40・41)と、口径が11～12cm前後と小さく口縁部も短く受け部が短い坏身(42・43)がある。土師器の甕でも甕B・Cがある。ただし、甕Cは、肩部から緩やかに反転して口縁部へつづき、下菟屋遺跡3次調査SK-1号土壙の土師器の甕Cとは形態的な違いが読み取れる。また、器高が低く丸みをおびて口縁端部がわずかに内湾するもの(15・16)や、口縁部がより内傾するとともに短いもの(17・18)はみられない。一方、7世紀前葉の平井遺跡9次調査SK-1号土壙や久米窪田古屋敷遺跡A区SD-1号溝の甕Dはみられず、須恵器の蓋坏も口径が大きく型式差が認められる。

以上から、樽味遺跡7次調査I区SX-29の資料は、下菟屋遺跡3次調査SK-1号土壙と、平井遺

跡9次調査SK-1号土壙や久米窪田古屋敷遺跡A区SD-1号溝の中間時期、6世紀末～7世紀初めに年代を求めることができる。ただし、土師器の甕でも44は、強く屈折する「く」字形の口縁部をもち、甕A～Dの形態変化の中に位置づけることができない。他地域からの搬入品である可能性が高く、今後の検討課題としておきたい。

(濱田・田崎)

3 古代～中世の集落域の変遷

樽味遺跡6～8次調査地点では、10世紀～15世紀の遺物と遺構が出土している。当該期の周辺の遺跡の調査成果とあわせ、10世紀、11世紀～12世紀前半、12世紀後半～13世紀初もしくは前半、13世紀後半～14世紀前半、14世紀中頃～15世紀前半ごとに、集落域の変遷を概観したい(図3・57)。

①10世紀

樽味遺跡6次調査で、10世紀～11世紀前半の掘立柱建物(SB-17)、10世紀の土壙(SK-40・41など)が出土している。南側に近接する5次調査Ⅲ・Ⅳ区(図3-10・11)の自然流路(SR-1)及び北岸に堆積する粘質土層(SX-2)、そして北東に約100m離れた4次調査(図3-7)の自然流路(SR-1)からは10世紀の遺物が出土している。6次調査で確認できた集落域の南限と東限を推定できる。これまでの既往の調査成果から、径100m前後の範囲に営まれる小規模な集落を推定できる。

さらに、7次調査Ⅰ区で出土したSD-8の北側の延長線上の1次調査Ⅳ区では、SR-2が確認されている。このSR-2からは6世紀末の遺物が少量出土しているが、古代の遺物を含む暗茶褐色土が埋土上部に堆積することは今回調査のSD-8と共通しており、北北東から南南西にのびる一連の溝と考えられる。さらに、Ⅰ区から南に65mほど離れたⅣ区で確認できたSD-102も10世紀～11世紀に比定できる。1次調査Ⅳ区SR-2から7次調査Ⅰ区SD-8、そして7次調査Ⅳ区SD-102につながる総延長90m以上の直線な溝である可能性が高い。総延長は90m以上となり、かつ直線な溝である。出土遺物からは、10世紀～11世紀前半としか位置づけられないが、このSD-8が10世紀に開鑿されることから、樽味遺跡周辺の本格的な土地

開発が進むものとする。

一方、周辺では、6次調査地点から西へ230mほど離れた樽味四反地遺跡1次調査(図3-63)で10世紀の溝、430mほど離れた樽味四反地遺跡8次調査Ⅰ区(図3-48)では10～11世紀の土壙、南南西に300mほど離れた桑原西稲葉遺跡4次調査Ⅱ区(図3-35)でも10世紀の柱穴や土壙が出土している。発掘範囲が溝状で狭い調査区もあり、明確な集落の姿を確認できないが、各地点に遺構が伴うことから、小規模な住居域が200～300m離れて点在する景観を推定できる。

②11世紀～12世紀前半

樽味遺跡では、4次調査で東から自然流路(SR-1)に連なる東から西に向かっている溝(SD-2)及び暗褐色土層、5次調査Ⅲ・Ⅳ区(図3-10・11)の自然流路(SR-1)及び粘質土層(SX-2)から11～12世紀の遺物が多く出土している。しかし、掘立柱建物や土壙、溝などの遺構は確認されておらず、樽味遺跡では住居域は営まれていない可能性が高い。一方、東野森ノ木遺跡1次調査Ⅱ区(図3-85)では11世紀後半の隅丸方形の一辺2.35mを測る大型土壙や、樽味四反地遺跡15次調査では11世紀後半～12世紀の溝4条が調査されている。樽味遺跡周辺では、東西に500～600mほど離れた2ヶ所に、小規模な集落が営まれていることになる。

③12世紀後半～13世紀初もしくは前半

樽味遺跡7次調査Ⅰ区では、SP-33・39の土師器や黒色土器が出土する小穴が出土している。大型の破片であり、埋納された可能性が高い。また、SP-3・40からは同安窯系青磁碗が出土しており、同時期の小穴と考えられる。調査区が狭く、小穴が掘立柱建物を構成するかは明らかでないが、基本層序Ⅲ層からも12世紀後半～13世紀の遺物が出土しているため、当該期の集落遺跡が営まれていたことは間違いない。また、7次調査Ⅰ区から北側に100mほど離れた樽味高木8次調査Ⅲ区(図3-78)では、灰褐色土あるいは褐灰色土の埋土をもつ土壙1、溝3、性格不明遺構5、樽味高木遺跡11次調査Ⅰ区(図3-75)でも土壙3基が発見されているが、当該期の遺構と考えれば、集落域は径100～150mの範囲に収まることになる。

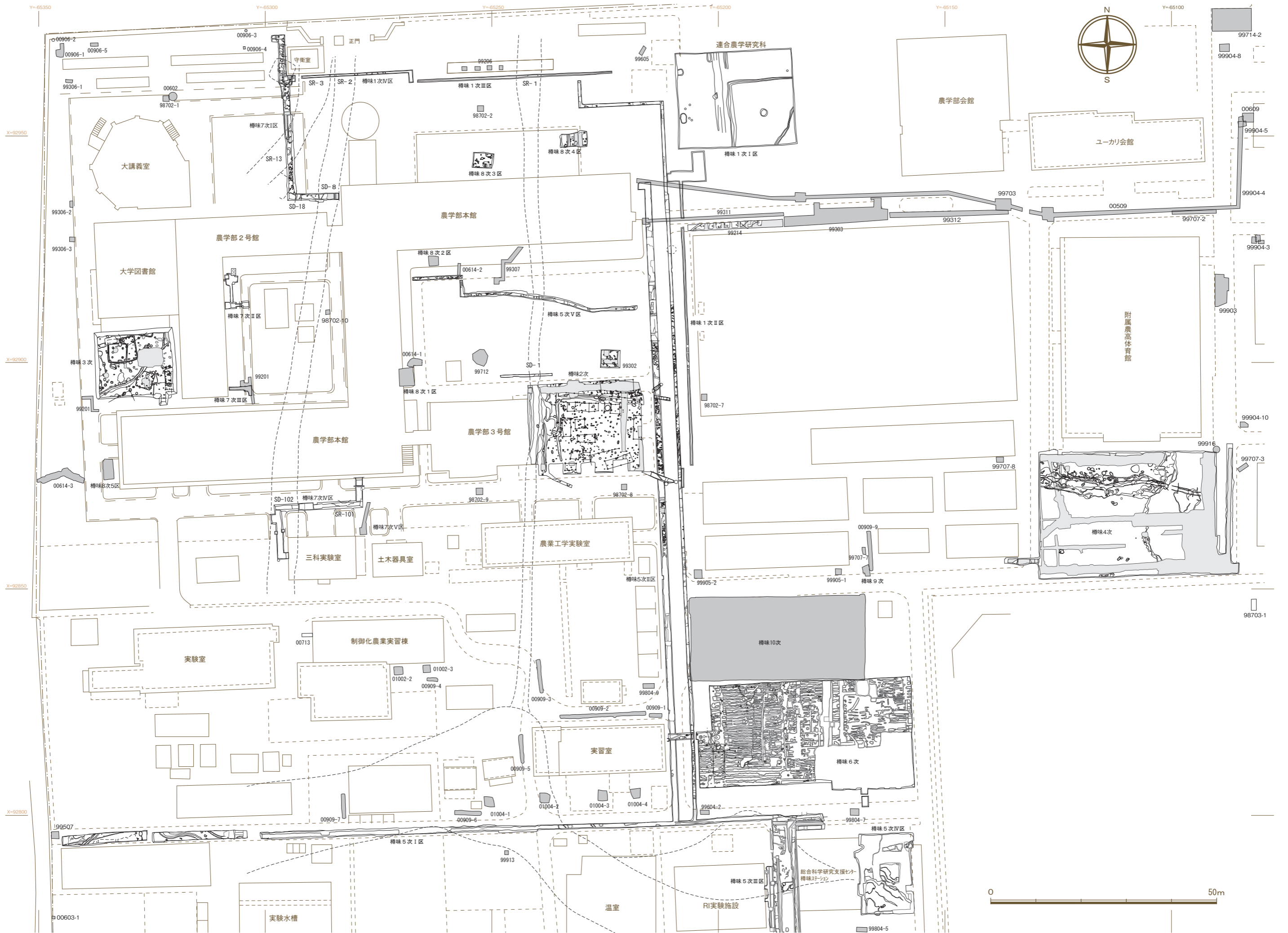


図57 樽味遺跡周辺の古墳時代後期及び古代後半～中世の遺構分布

さらに、東北に250～350m離れた東野森ノ木遺跡1次調査I区(図3-86)では12世紀後半以降の溝1条, 12世紀末～13世紀初めの溝3条, 東野森ノ木遺跡1次調査III区(図3-84)でも13世紀前半の白磁四耳壺が埋納された土壌を含む遺構群が確認されている。7次調査I区～樽味高木8次調査III区を中心とする集落域に付随する遺構群と考えられる。

④13世紀後半～14世紀前半

樽味遺跡では、この時期に比定できる遺構は明らかでない。集落の空白期と言える時期である。周辺の遺跡では、樽味遺跡の北東側の東野森ノ木遺跡と枝松遺跡と樽味四反地遺跡西半部で当該期の遺構群が出土している。東野森ノ木遺跡1次調査I区(図3-86)では、14世紀前半以前の土壌1, 14世紀前半の土壌4, 16世紀の土壌1, 東野森ノ木遺跡1次調査III区(図3-84)では13世紀後半の土壌1と14世紀前半の掘立柱建物2, 溝1, 土壌2, 東野森ノ木遺跡4次調査VI区(図3-92)では14世紀の土壌1, 柱穴2, 他に中世の柱穴1があり, 枝松遺跡6次調査I区(図3-41)では13世紀後半の溝1, 樽味四反地遺跡19次調査では13世紀後半の土壌2(内1基は地鎮関連以降)1, 樽味四反地遺跡15次調査では13世紀の土壌3, 柱穴が出土している。

⑤14世紀中頃～15世紀前半

樽味遺跡1・2次調査では、小規模な掘立柱建

物群を溝で方形に区画した集落域が確認されている。

樽味遺跡5次調査V区でもSD-1の延長部を確認できている。2次調査SD-1は、樽味遺跡南半部では、当該期の遺物が数多く出土する西へ向かって流れる自然流路が確認されている。さらに、8次調査3・4区の柱穴や杭穴なども、当該期のものと考えられる。

一方、樽味遺跡の北西側に位置する樽味高木遺跡9次調査IV・V区(図3-69)では14世紀の土壌1が出土している。さらに、樽味四反地遺跡20次調査2区では14～15世紀の土壌1, 柱穴, 樽味四反地遺跡19次調査では14世紀以降の土壌1, 枝松遺跡6次調査I区(図3-41)では14世紀後半の土壌3, 樽味四反地遺跡8次調査II B区(図3-50)では14世紀前後の土壌1と14世紀後半～15世紀の土壌1が確認されている。

以上から考えれば、樽味遺跡の当該期の集落域は東西250m, 南北200mと推定される。こうした、それまでとは異なる集落域が成立する契機は、樽味遺跡1次調査SR-1から5次調査SD-1, 2次調査SD-1にはほぼ南北に延びる幹線水路が整備されたことと考えられる。樽味遺跡は、14世紀に道後平野を支配した河野氏が築いた湯築城跡と石手川を挟み1kmほどと至近の距離にあり、河野氏の勢力と関係を取り結ぶ中世集落の姿を復元することができる。(田崎)

[参考文献]

- ・愛媛大学埋蔵文化財調査室1989『鷹子・樽味遺跡の調査』(愛媛大学埋蔵文化財調査報告I)
- ・愛媛大学埋蔵文化財調査室1993『樽味遺跡II-樽味遺跡2次調査報告-』(愛媛大学埋蔵文化財調査報告IV)
- ・愛媛大学埋蔵文化財調査室1993『愛媛大学構内遺跡調査集報I(図版篇)』(愛媛大学埋蔵文化財調査報告V)
- ・愛媛大学埋蔵文化財調査室1997『愛媛大学構内遺跡調査集報I』(愛媛大学埋蔵文化財調査報告V)
- ・愛媛大学埋蔵文化財調査室1997『樽味遺跡III-樽味遺跡3次調査報告-』(愛媛大学埋蔵文化財調査報告VI)
- ・愛媛大学埋蔵文化財調査室2001『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報-1995・1996年度-』(愛媛大学埋蔵文化財調査報告VII)
- ・愛媛大学埋蔵文化財調査室2002『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報-1997・1998年度-』(愛媛大学埋蔵文化財調査報告VIII)

- ・愛媛大学埋蔵文化財調査室2003『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－1999・2000年度－』（愛媛大学埋蔵文化財調査報告X）
- ・愛媛大学埋蔵文化財調査室2003『樽味遺跡Ⅳ－樽味遺跡4次調査・樽味遺跡5次調査・桑原西稲葉遺跡3～5次（北吉井団地）調査－』（愛媛大学埋蔵文化財調査報告IX）
- ・愛媛大学埋蔵文化財調査室2004『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2001・2002年度－』（愛媛大学埋蔵文化財調査報告XI）・愛媛大学埋蔵文化財調査室2005『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2003年度－』（愛媛大学埋蔵文化財調査報告XIII）
- ・愛媛大学埋蔵文化財調査室2006『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2004年度－』（愛媛大学埋蔵文化財調査報告XV）
- ・愛媛大学埋蔵文化財調査室『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2005年度－』（愛媛大学埋蔵文化財調査報告XVII）
- ・愛媛大学埋蔵文化財調査室2008『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2006年度－』（愛媛大学埋蔵文化財調査報告XVIII）
- ・愛媛大学埋蔵文化財調査室2009『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2007年度－』（愛媛大学埋蔵文化財調査報告XIX）
- ・愛媛大学埋蔵文化財調査室2010『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2008年度－』（愛媛大学埋蔵文化財調査報告XXI）
- ・愛媛大学埋蔵文化財調査室2011『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2009年度－』（愛媛大学埋蔵文化財調査報告XXII）
- ・愛媛大学埋蔵文化財調査室2012『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2010年度－』（愛媛大学埋蔵文化財調査報告XXIII）
- ・鹿島愛彦・高橋治郎1980「四国松山平野の環境地質学的研究（1）－松山平野とその周辺の地質－」『愛媛大学教養部紀要』自然科学DシリーズIX-1
- ・平井幸弘1989「鷹子遺跡および樽味遺跡をとりまく地形環境」『鷹子・樽味遺跡』（愛媛大学埋蔵文化財調査報告I）
- ・平井幸弘1991「石手川扇状地城北地区における沖積低地の地形発達と考古遺跡の立地環境」『愛媛大学教育学部紀要』第Ⅲ部自然科学9
- ・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター1992『桑原地区の遺跡－樽味立添・樽味高木・樽味四反地・桑原西稲葉1・2次・桑原田中・経石山古墳・枝松3次』（松山市文化財報告書26）
- ・松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター1994『桑原地区の遺跡Ⅱ－樽味高木2・3次，樽味四反地2・3・4次，桑原田中2次－』（松山市文化財報告書46）
- ・松山市教育委員会2005『樽味四反地遺跡Ⅱ－6次調査－』（松山市文化財調査報告書106）
- ・松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター1996『東本遺跡4次調査，枝松遺跡4次調査』（松山市文化財調査報告書54）
- ・松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター1997『桑原地区の遺跡Ⅲ－経石山古墳2次・枝松5次・樽味高木4次・桑原田中3次・畑寺6号墳－』（松山市文化財報告書58）
- ・松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2002『桑原地区の遺跡Ⅳ－桑原本郷遺跡・桑原遺跡・桑原小石原遺跡・東野お茶屋台遺跡1次・2次・3次－』（松山市文化財調査報告書86）
- ・松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2002『樽味四反地遺跡－5次調査－』（松山市文化財調査報告書87）
- ・松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2005『－松山市中村桑原線関連遺跡－東本遺跡6次調査地・桑原遺跡2次調査地・桑原遺跡4次調査地』（松山市文化財調査報告書105）
- ・松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2007『市道樽味溝辺線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－東野森ノ木遺跡1・2・3・4次調査地，樽味立添遺跡3次調査地，樽味高木遺跡7・8・9・11次調査地，樽味四反地遺跡7・8・9・11調査地，枝松遺跡6次調査地』（松山市文化財調査報告書117）
- ・松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2009『樽味四反地遺跡－12次・13次調査－』（松山市文化財調査報告書130）
- ・松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2009『樽味四反地遺跡－12次・13次調査－』（松山市文化財調査報告書131）
- ・松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2009『樽味四反地遺跡－14次・16次調査－』（松山市文化財調査報告書133）

- ・松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2010『樽味四反地遺跡-17次・18次調査-』(松山市文化財調査報告書139)
- ・松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2011『樽味四反地遺跡-19次・20次調査-』(松山市文化財調査報告書151)
- ・松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2011『樽味立添遺跡4次調査・樽味高木遺跡15次調査』(松山市文化財調査報告書152)

報告書抄録

ふりがな	たるみいせき V						
書名	樽味遺跡 V						
副書名	樽味遺跡6～8次調査報告						
巻次							
シリーズ名	愛媛大学埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	XXV						
編著者名	田崎博之・三吉秀充・濱田美加						
編集機関	愛媛大学埋蔵文化財調査室						
所在地	〒790-8577 松山市道後樋又10番13号						
発行年月日	2013年3月29日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
たるみいせき遺跡 6次調査	松山市樽味 3丁目5番7号	38201	33° 47' 07"	132° 47' 48"	2001.11.15) 2002. 2. 4	1,205㎡	環境産業研究施設新営 工事
たるみいせき遺跡 7次調査	〃	〃	〃	〃	2002. 4. 3) 2002. 5.23	170㎡	農学部2号 館改修工事
たるみいせき遺跡 8次調査	〃	〃	〃	〃	2006.12. 4) 2007. 1.26	42㎡	(樽味団地) 総合研究棟 改修工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
樽味遺跡 6次調査	集落	古代	掘立柱建物	1	土師器		
			土壙	19	須恵質土器		
			溝	1	白磁		
			柱穴もしくは小穴	61	砥石 敲石		
樽味遺跡 7次調査	集落	古墳・古代	竪穴式住居跡	3	土師器		
			竪穴式住居跡?	1	須恵器		
			掘立柱建物	1	黒色土器		
			土壙	9	須恵質土器		
			溝	3	石包丁		
			自然河道	2	砥石		
			土器溜まり	1	敲石		
			柱穴もしくは小穴	63	台石		
樽味遺跡 8次調査	集落	古代	土壙	3	須恵質土器		
			溝	1	土師器		
			柱穴もしくは小穴	39	台石		

版 图



1 愛媛大学樽味団地全景（北西から）



2 6次調査区遠景（表土剥ぎ後、北東から）

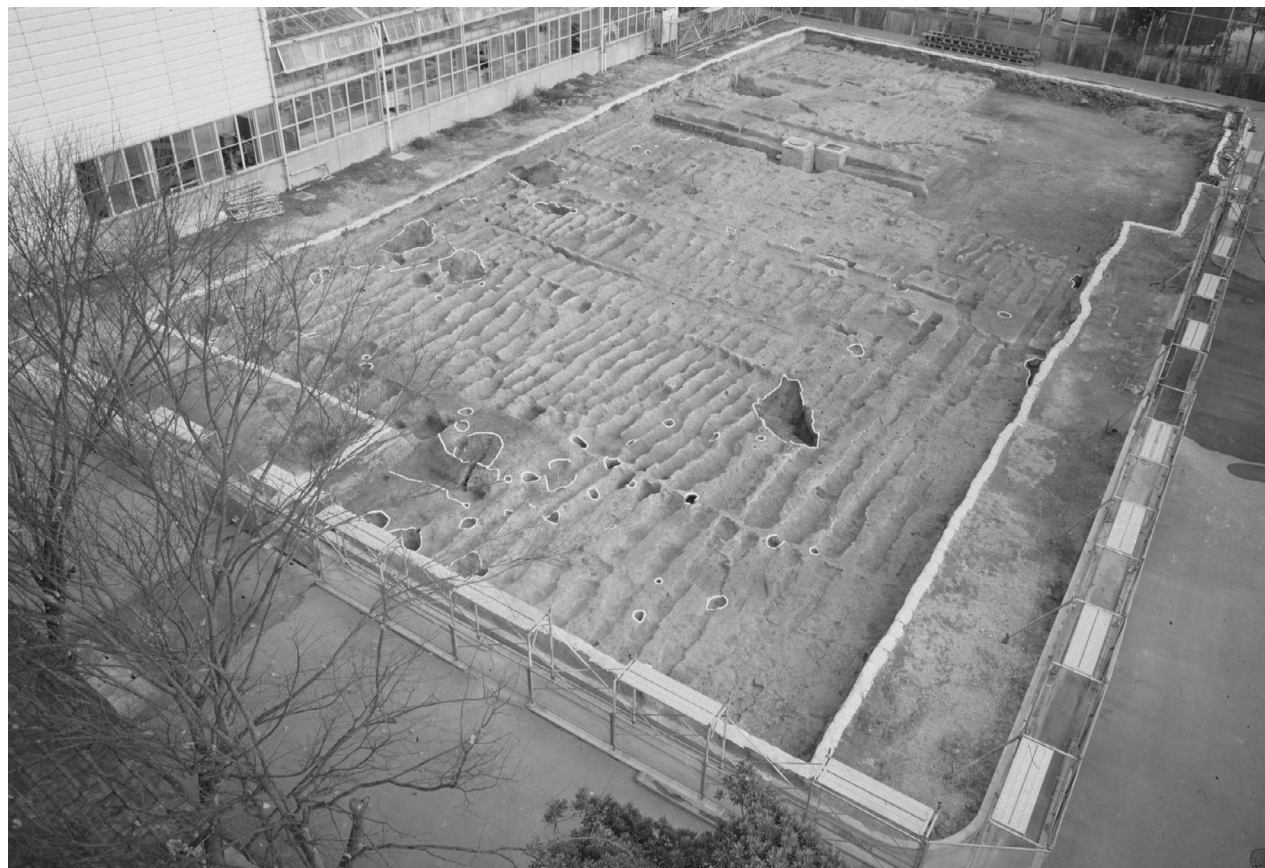
図版2



1 6次調査区遠景（完掘後、北東から）



2 6次調査区遠景（完掘後、東から）



1 6次調査区全景（完掘後、南西から）



2 6次調査区西半部（完掘後、南から）

図版4



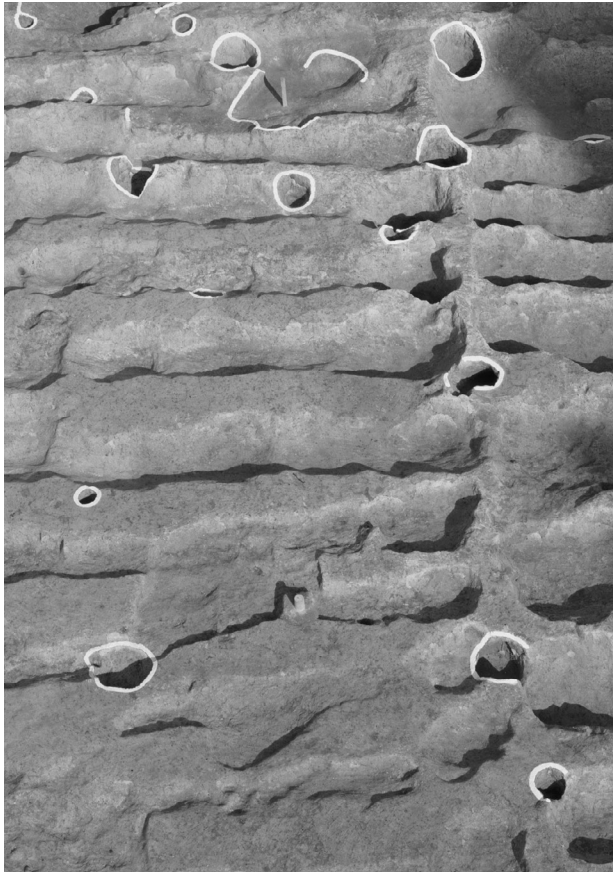
1 6次調査J-2・3区調査区西壁土層断面（天地返し状況、北東から）



2 6次調査-4・5区
調査区西壁土層断面
（遺構の残存状況）



3 6次調査
天地返し部分を除去し
た後の遺構精査状況



1 6次調査SB-17 (南から)



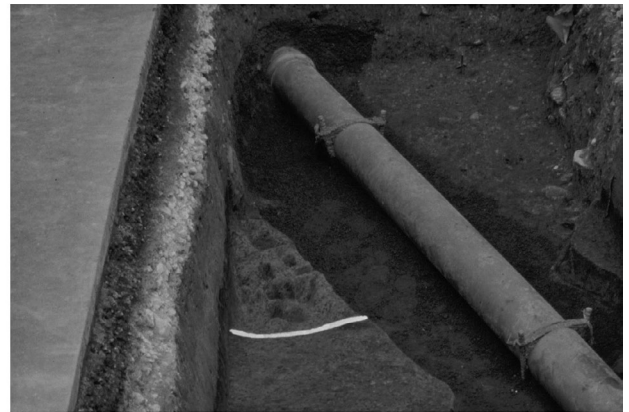
2 6次調査SB-17SP-30立柱痕跡検出状況



3 6次調査SB-17SP-43立柱痕跡検出状況



4 6次調査SB-17SP-48立柱痕跡検出状況



5 6次調査SK-1完掘状況から (東から)



6 6次調査SK-2完掘状況 (東から)

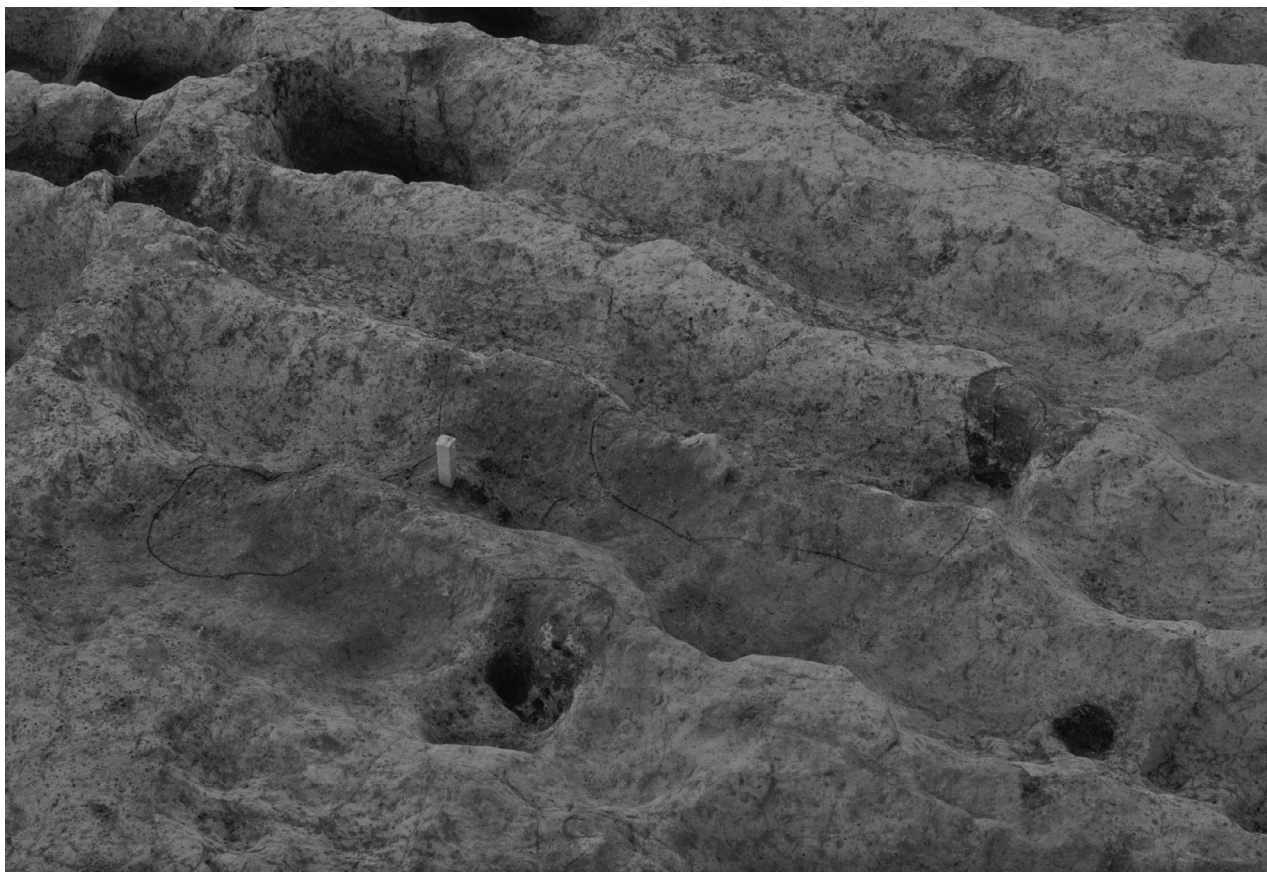
図版6



1 6次調査I・J-3・4区遺構検出状況（北から）



2 6次調査I・J-3・4区遺構完掘状況（南から）



1 6次調査SK-3・4・32検出状況(南東から)



2 6次調査SK-3・4・32完掘状況(北から)

図版8



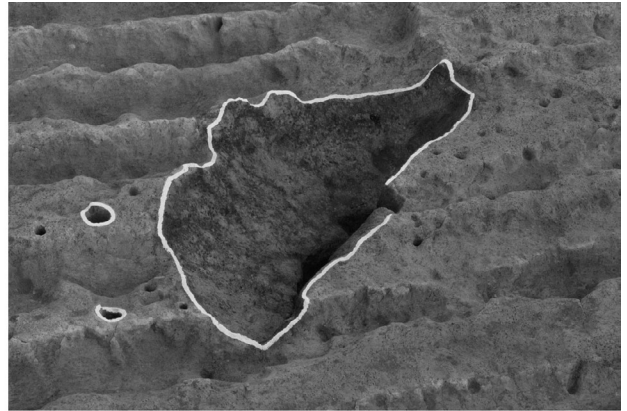
1 6次調査SK-5、SD-6完掘状況（南から）



2 6次調査SK-7土層断面（南西から）



1 6次調査SK-7検出状況（南から）



2 6次調査SK-7完掘状況（南から）

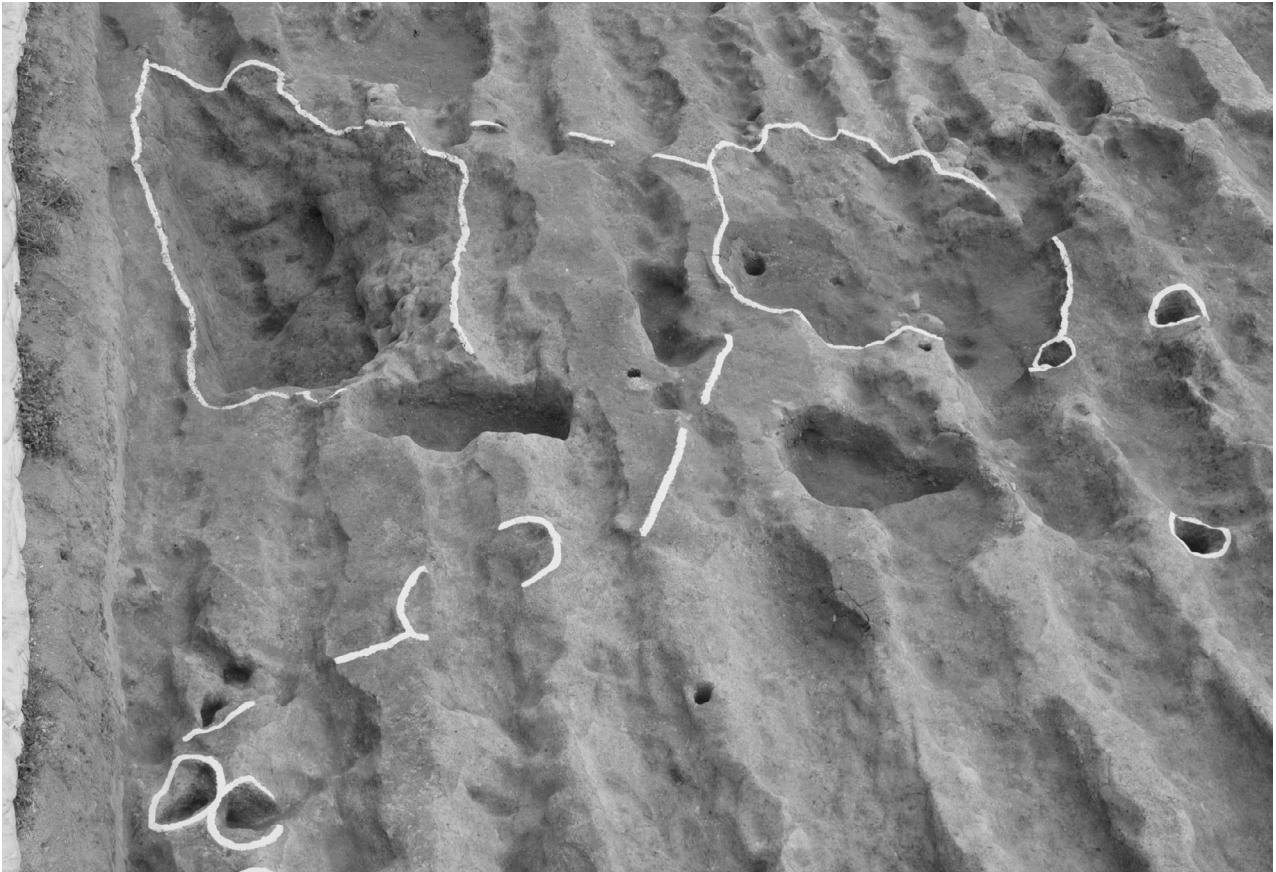


3 6次調査SK-8
完掘状況
（北から）



4 6次調査
F~H-7・8区
遺構検出状況
（南から）

図版10



1 6次調査SK-9・13・14完掘状況（西から）



2 6次調査SK-10・12完掘状況（北西から）



1 6次調査SK-9土層断面（北から）



2 6次調査SK-10土層断面（南から）

図版12



1 6次調査SK-12完掘状況（南西から）



2 6次調査SK-13土層断面（南西から）



1 6次調査SK-18、SP-79完掘状況（北から）



2 6次調査SK-38完掘状況（南東から）

図版14



1 6次調査SK-38土層断面（南から）



2 6次調査SK-40・41検出状況（北から）



1 6次調査SK-40・41完掘状況（南東から）



2 6次調査SK-40遺物出土状況（北西から）

図版16



1 6次調査SK-40土層断面（北から）



2 6次調査SK-41土層断面（南から）



1 6次調査SP-32土層断面（北から）



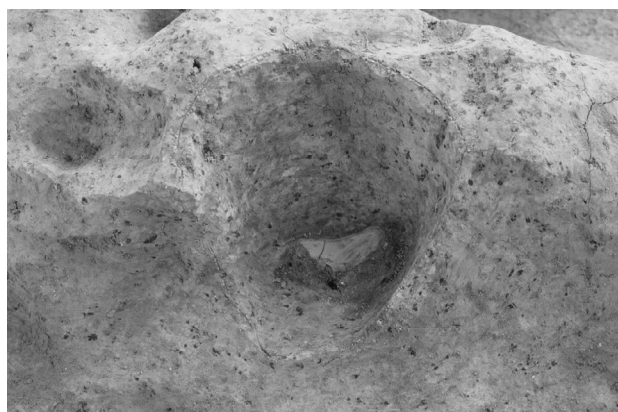
2 6次調査SP-39土層断面（北から）



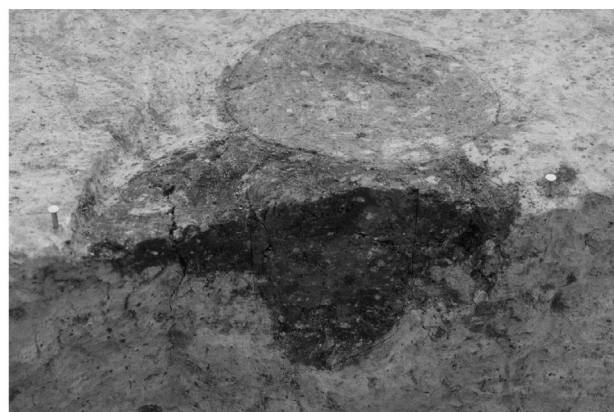
3 6次調査SP-35土層断面（北から）



4 6次調査SP-49土層断面（南西から）



5 6次調査SP-59遺物出土状況（北から）



6 6次調査SP-74土層断面（東から）



7 6次調査SP-75土層断面（南から）

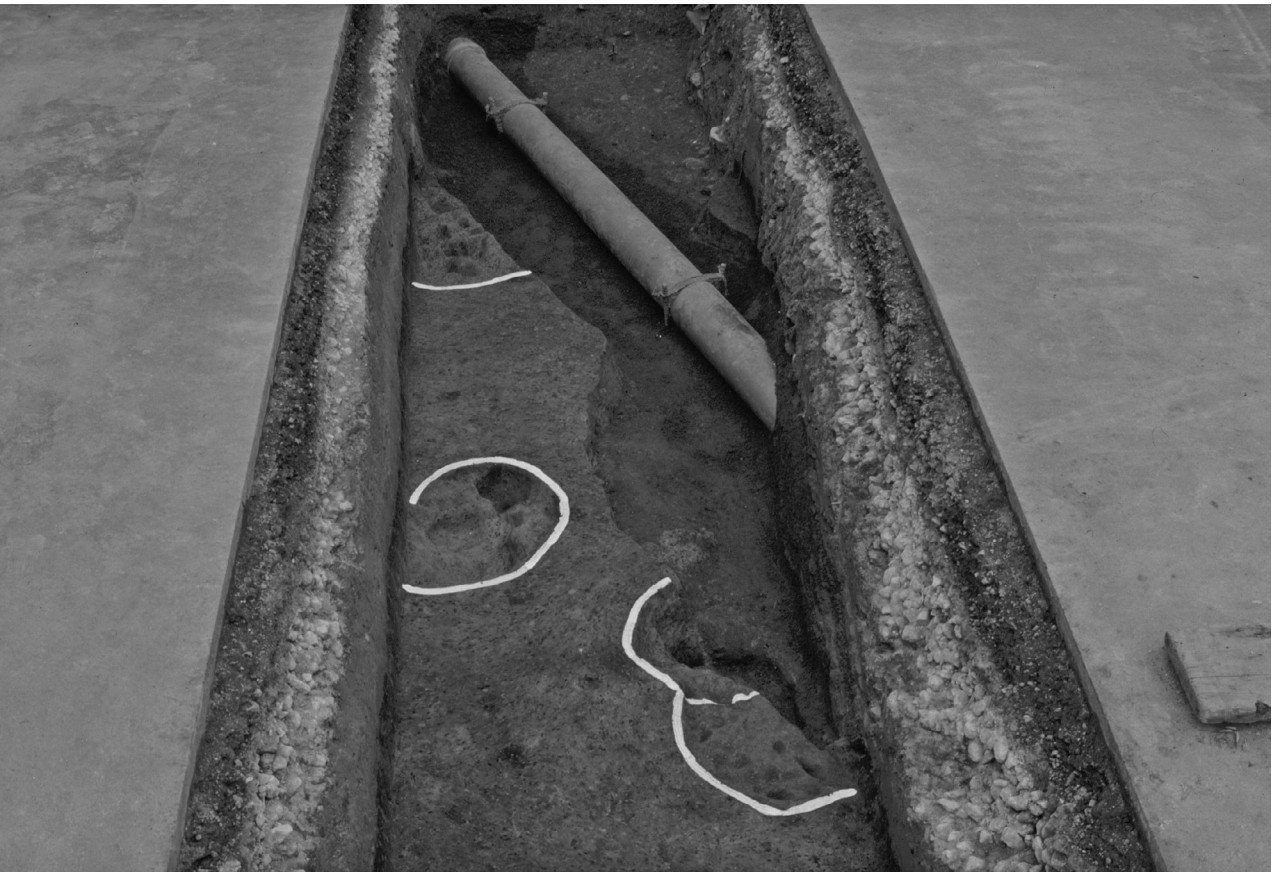


8 6次調査C-1区拡張区西壁土層断面（東から）

図版18



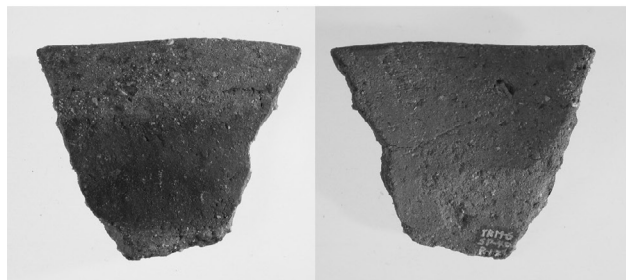
1 6次調査K-4区拡張区完掘状況（北西から）



2 6次調査K-4区拡張区完全発掘状況（東から）



1



2



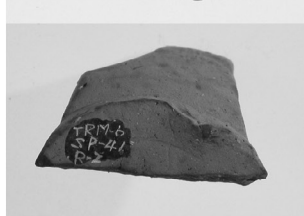
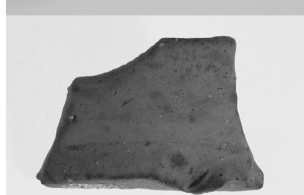
3



4



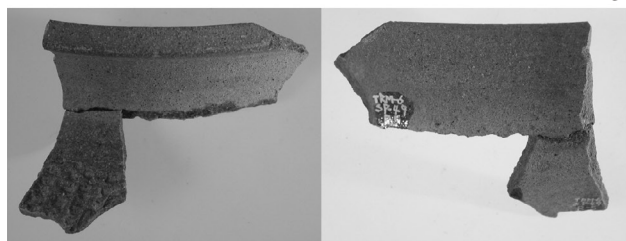
5



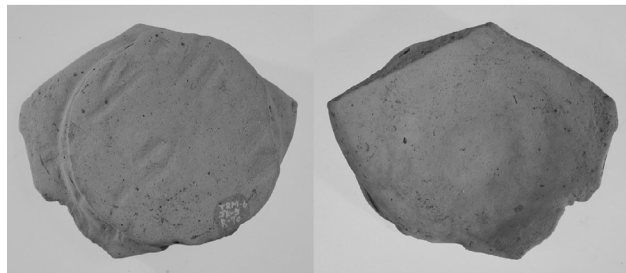
7



8



6



9



10



11



11

図版20



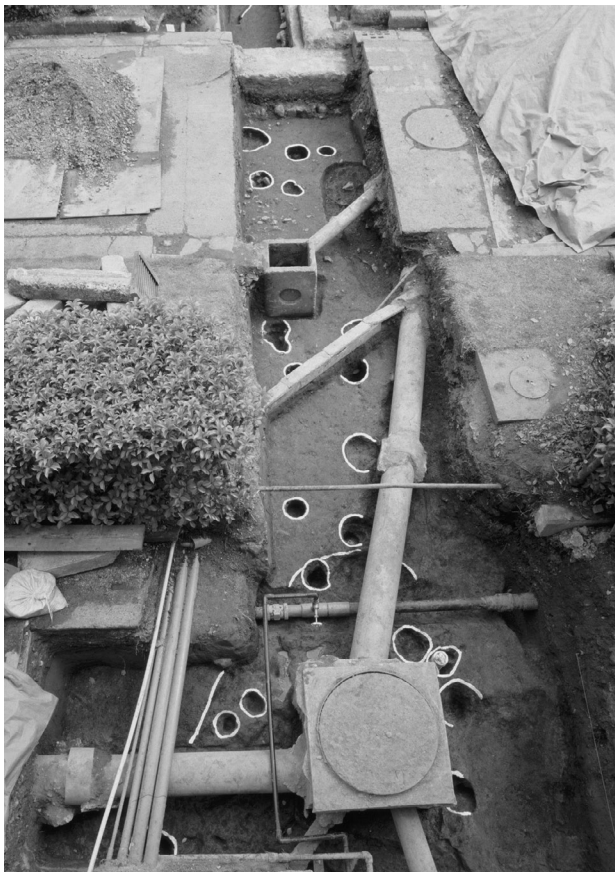
1 7次調査IA~IF区全景(Ⅲ層除去後、南西から)



2 7次調査ID~IH区全景(完掘後、南から)



3 7次調査ID~IH区全景(完掘後、北から)



1 7次調査IH・IG区全景(完掘後、北から)



2 7次調査II・IJ区IV層上面遺構検出状況(南から)



3 7次調査IJ区IV層上面遺構検出状況(南から)



4 7次調査IA~IC区IV層上面の遺構検出状況(南から)

図版22



1 7次調査IA～IC区IV層上面の検出遺構完掘状況（南から）



2 7次調査IB区SD-8完掘状況（南から）



1 7次調査IB・IC区北壁土層断面（南西から）



2 7次調査IC区SC-17・SD-18完掘状況及びSC-28検出状況（南から）

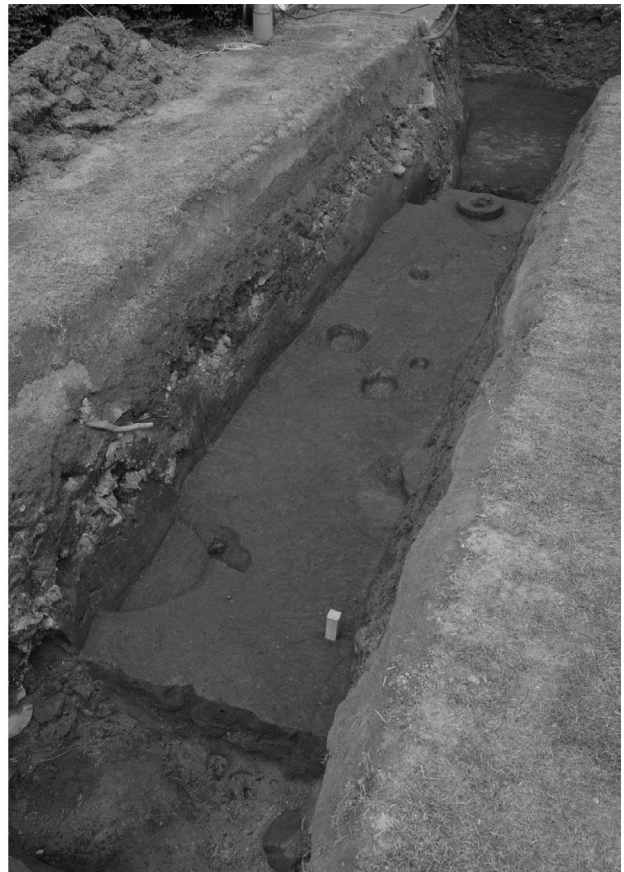
図版24



1 7次調査IC区SC-17・SD-18完掘状況（北から）



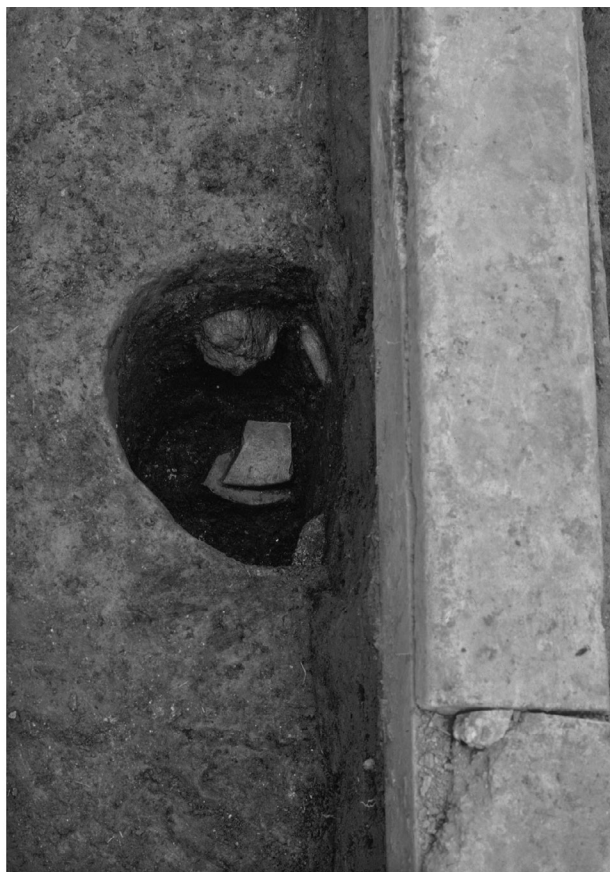
2 7次調査IC・ID区Ⅲ層下面の遺構検出状況（北から）



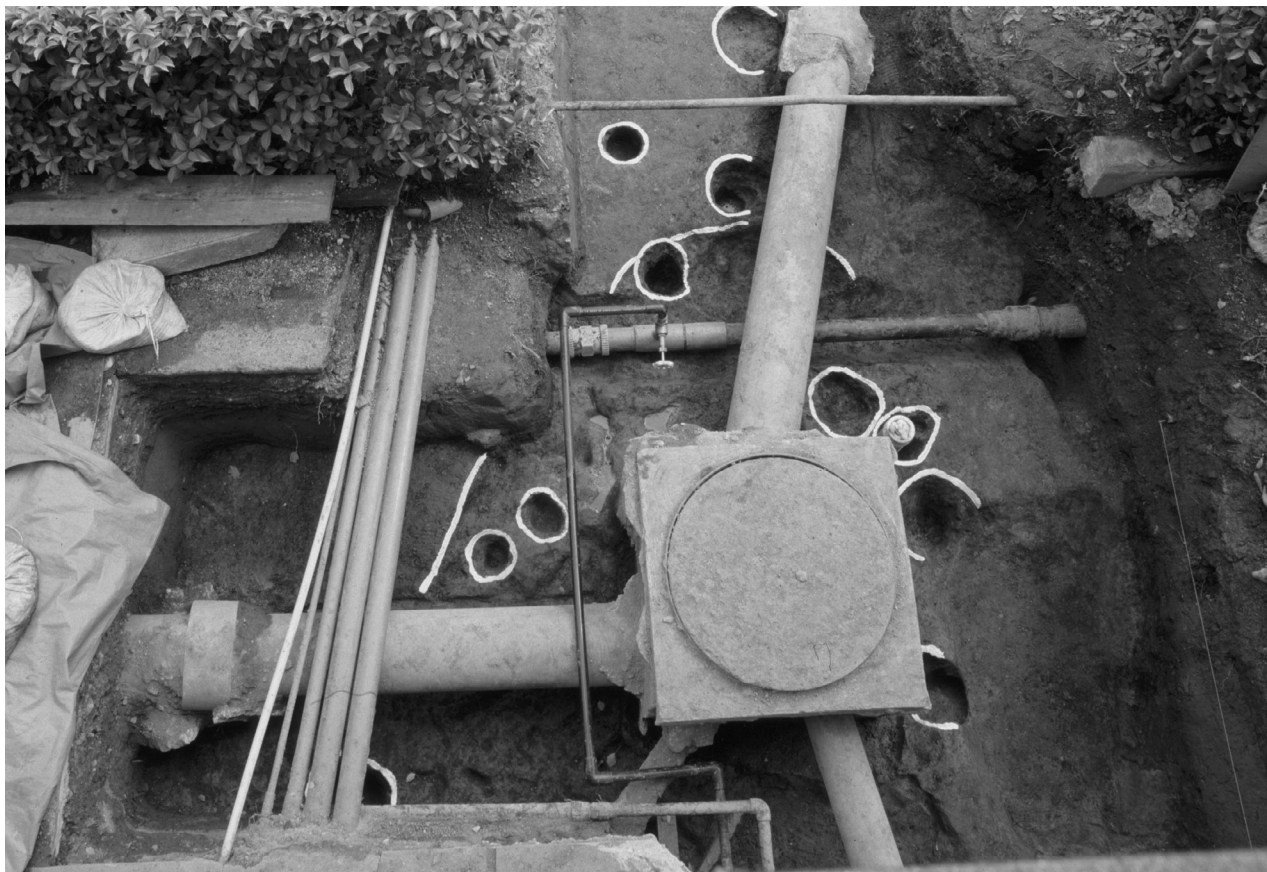
3 7次調査IC・ID区Ⅲ層下面の遺構完掘状況（北西から）



1 7次調査ID区SK-63・64・69完掘状況(南から)



2 7次調査IG区SP-39遺物出土状況(西から)



3 7次調査IH区完掘状況(北から)



1 7次調査ID・IF区SR-13完掘状況(南から)



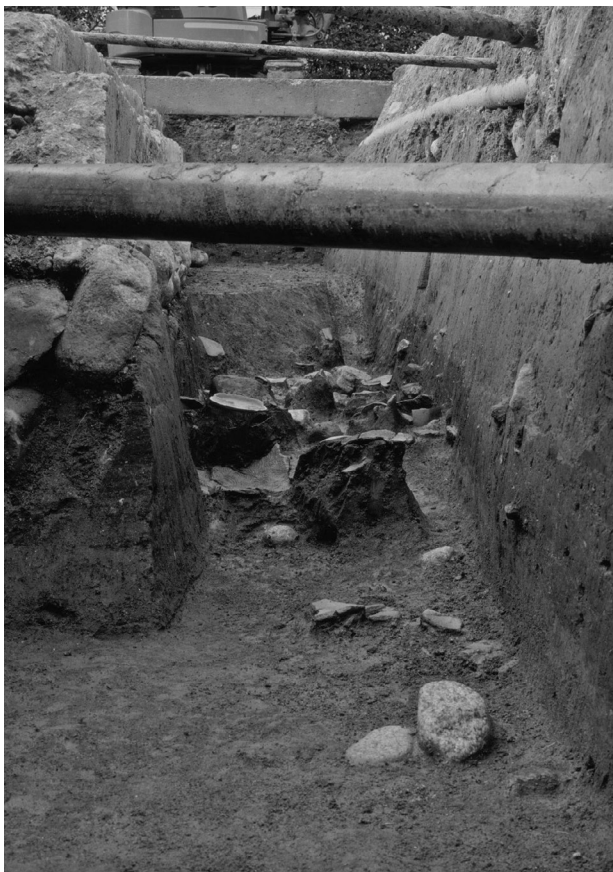
2 7次調査ID・IF区SR-13埋土②~④層の礫出土状況(北から)



1 7次調査ID~IF区SR-13埋土②~④層の礫土出土状況2(南から)



2 7次調査IE・IF区SR-13上部SX-29遺物出土状況(北から)



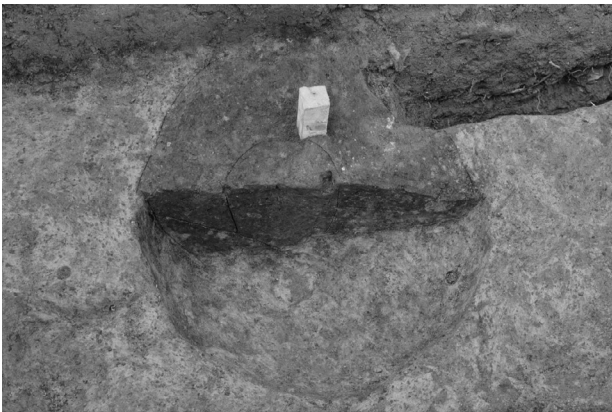
3 7次調査IE・IF区SR-13上部SX-29遺物出土状況(南から)



4 7次調査IH・II区SK-51検出状況(北東から)



1 7次調査II・IJ区SB-77 (北西から)



2 7次調査SB-77SP-56土層断面 (西から)



3 7次調査SB-77SP-54土層断面 (西から)



4 7次調査II区全景 (北から)



1 7次調査Ⅱ・Ⅲ区遠景（北東から）



2 7次調査ⅡA区南壁土層断面



3 7次調査ⅡB区南壁土層断面



4 7次調査Ⅲ区全景（南東から）

図版30



1 7次調査Ⅲ区Ⅳ層上面検出状況（東から）



2 7次調査ⅣD～ⅣF区全景（西から）



3 7次調査ⅣA・ⅣB区全景（南から）



1 7次調査IVC・IVD区北壁土層断面（南東から）



2 7次調査IVE・IVF区北壁土層断面（南東から）

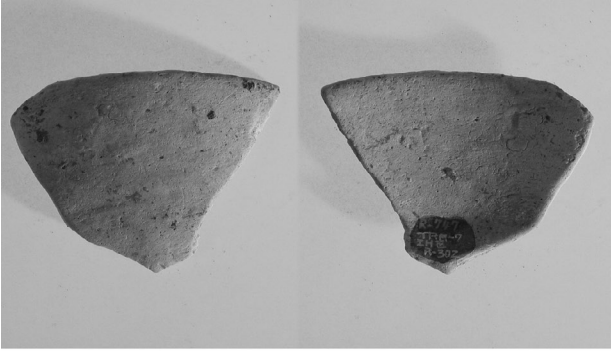


3 7次調査IVG・IVH区東壁土層断面（北西から）

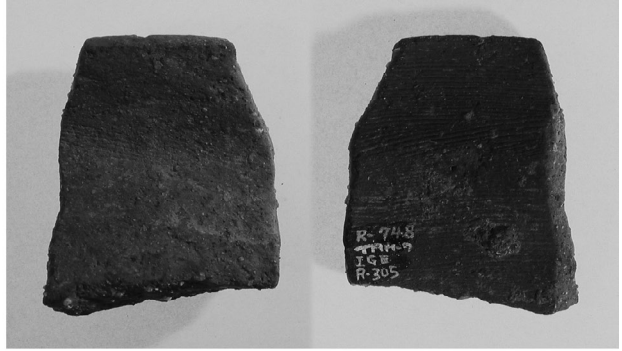


4 7次調査V区全景（北から）

图版32



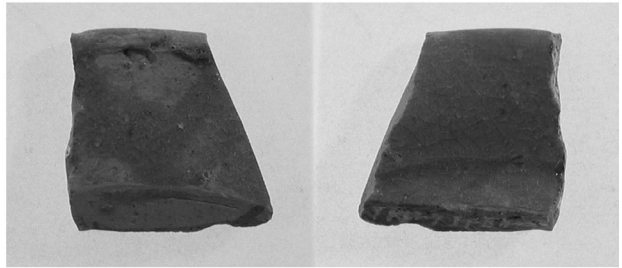
1 : I区I層



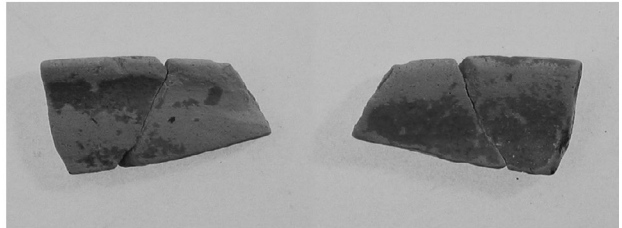
2 : I区I層



3 : I区攪乱



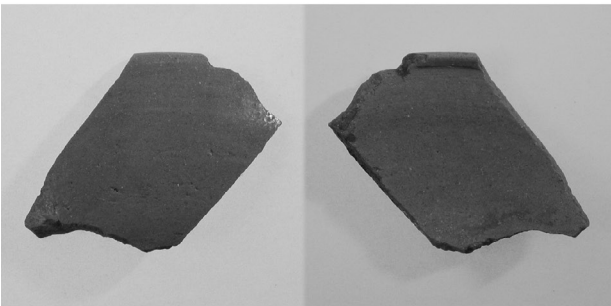
4 : I区攪乱



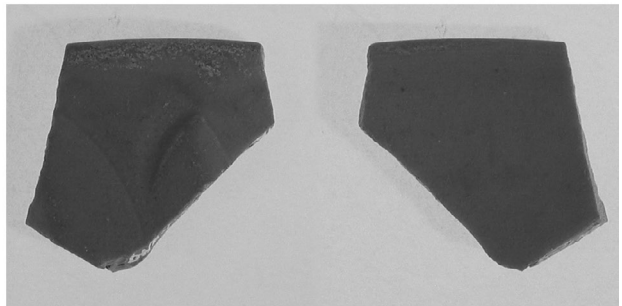
5 : I区Ⅲ-1・2層



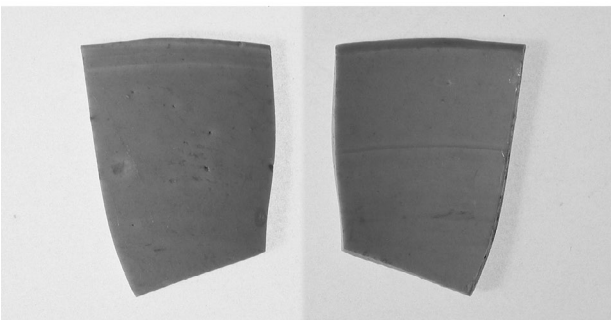
6 : I区Ⅲ-1層



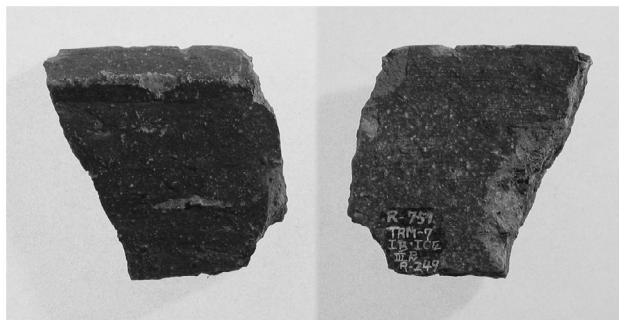
7 : I区Ⅲ-1・2層



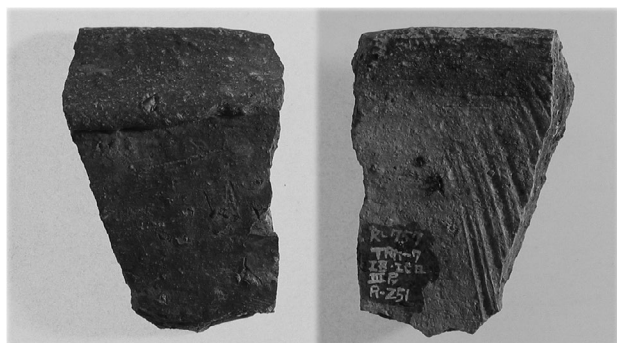
8 : I区Ⅲ-1層



9 : I区Ⅲ-1層



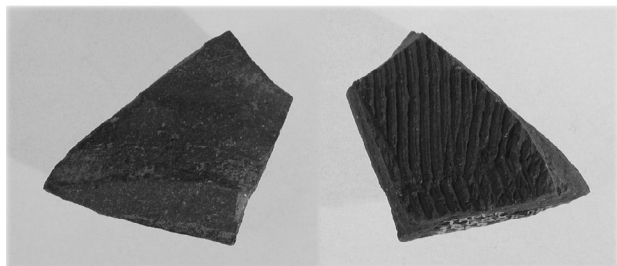
10 : I区Ⅲ-1層



1 : I区Ⅲ-1・2層界部



3 : I区Ⅲ-1・2層



2 : I区Ⅲ-1層



5 : I区Ⅲ-1層

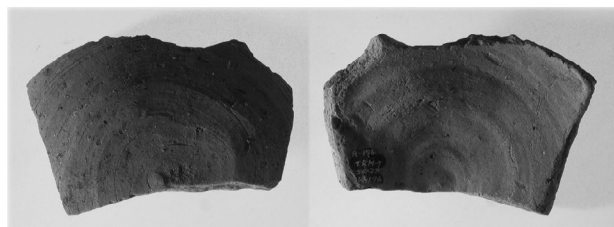
6 : I区Ⅲ-3層



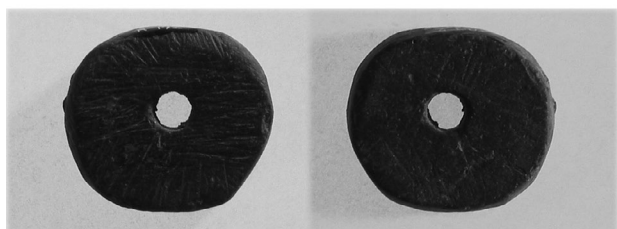
4 : I区Ⅲ-2層



7 : I区SC-17



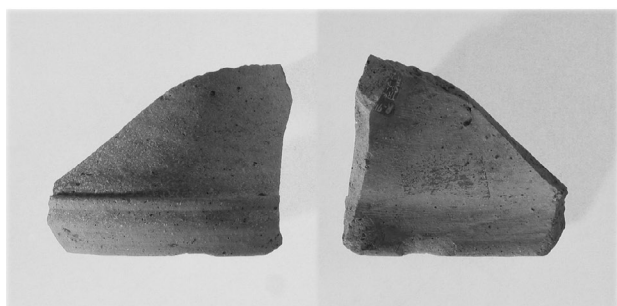
8 : I区SC-28



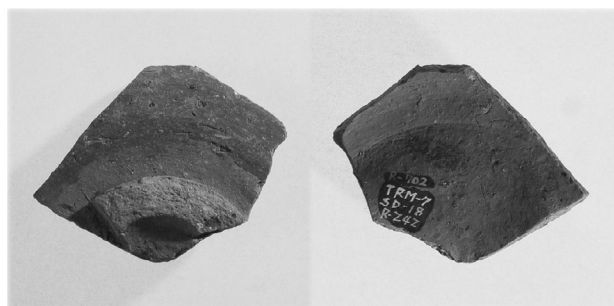
9 : I区SC-50



10 : I区SB-77



11 : I区SK-64



10 : I区SD-18

図版34



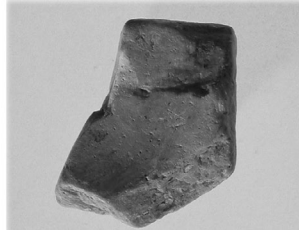
1 : I区SD-18



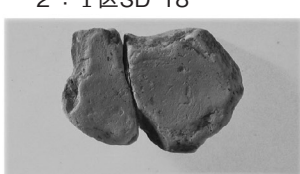
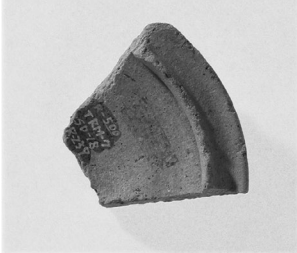
2 : I区SD-18



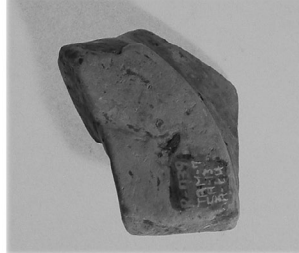
4 : I区SR-13①層



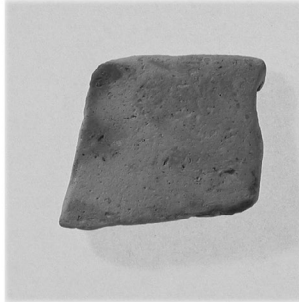
5 : I区SR-13①層



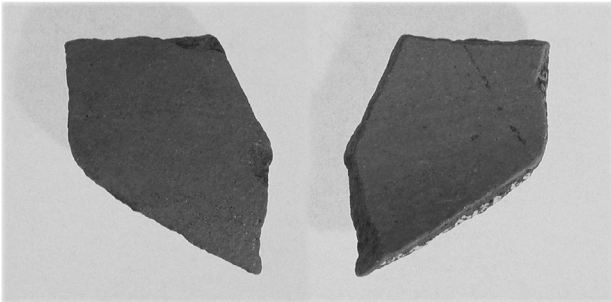
3 : I区SR-13①層



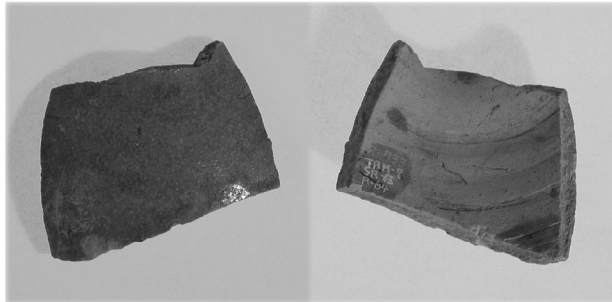
6 : I区SR-13①層



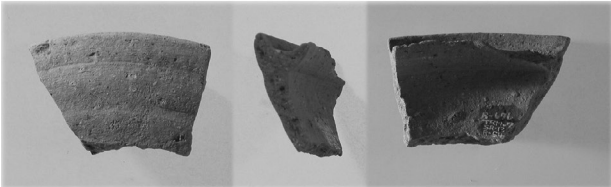
7 : I区SR-13①層



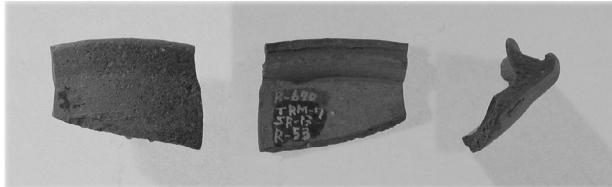
8 : I区SR-13①層



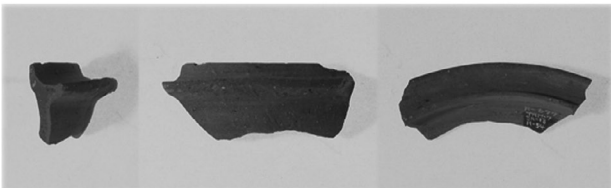
9 : I区SR-13①層



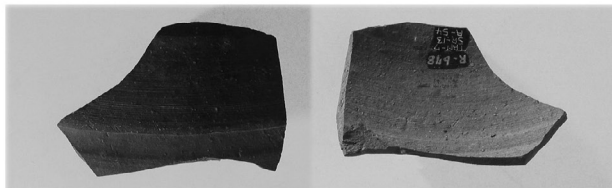
10 : I区SR-13①層



11 : I区SR-13①層



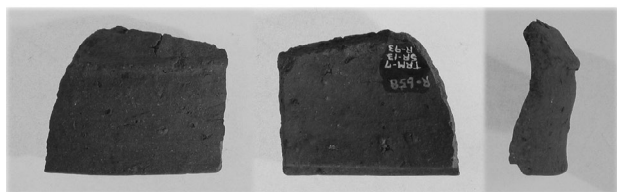
12 : I区SR-13①層



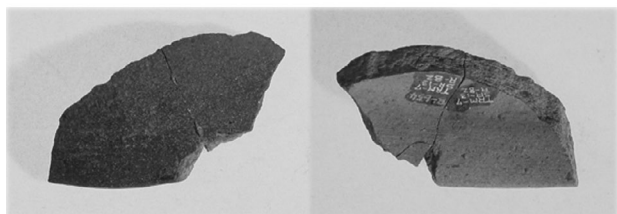
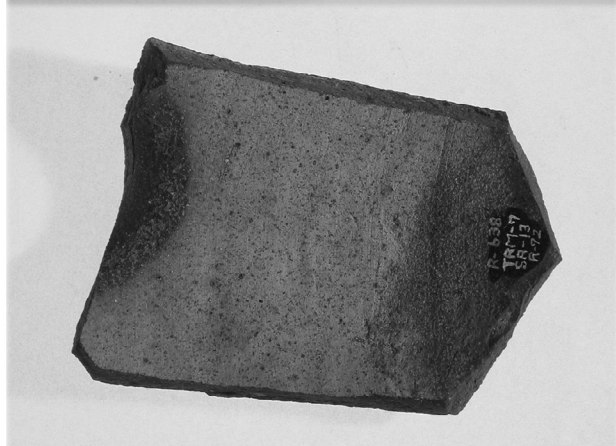
13 : I区SR-13①層



1 : I区SR-13①層



2 : I区SR-13②層

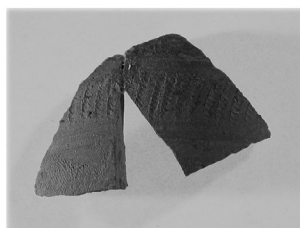


3 : I区SR-13②層

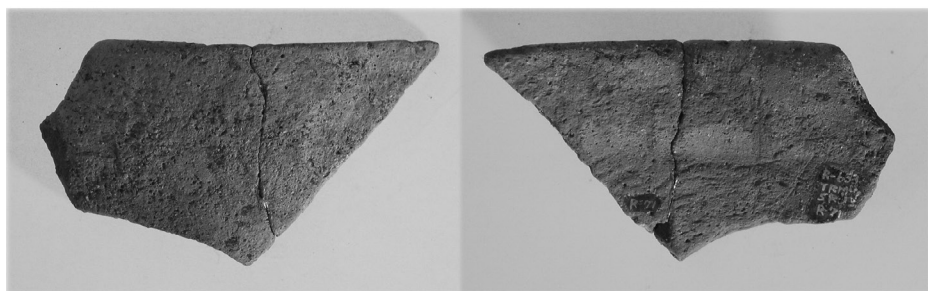
5 : I区SR-13②層



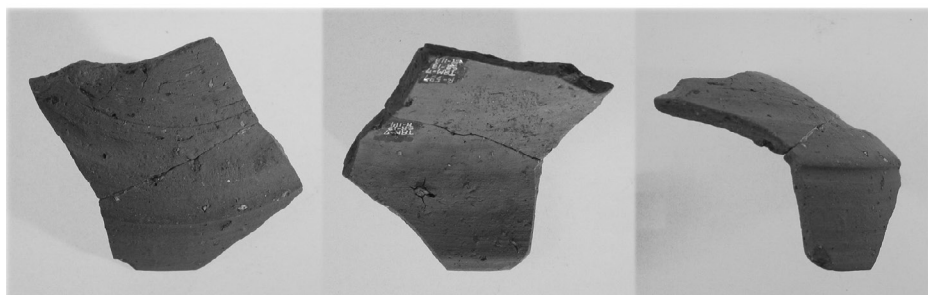
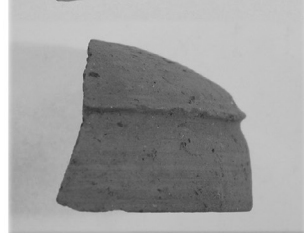
4 : I区SR-13②層



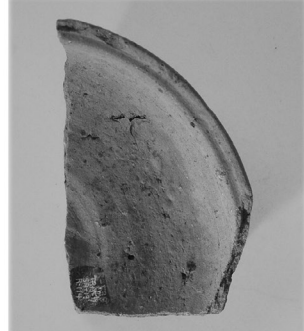
6 : I区SR-13②層



7 : I区SR-13②層

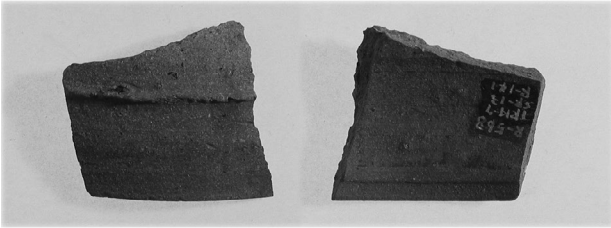


8 : I区SR-13④層



9 : I区SR-13④層

図版36



1 : I区SR-13④層



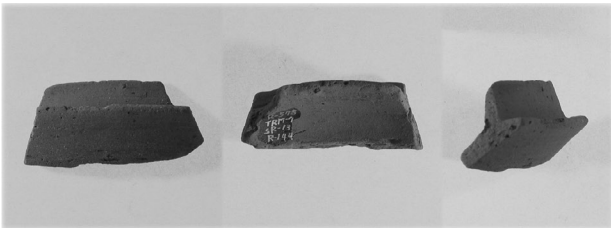
2 : I区SR-13④層



3 : I区SR-13④層



4 : I区SR-13④層



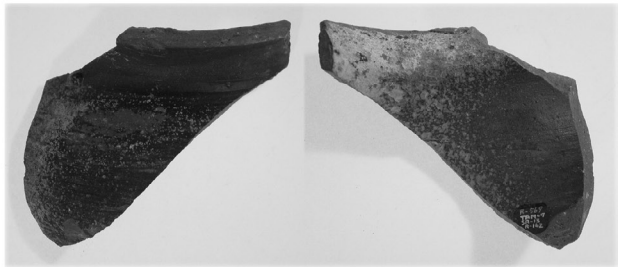
5 : I区SR-13④層



6 : I区SR-13④層



7 : I区SR-13④層



8 : I区SR-13④層



9 : I区SR-13④層



10 : I区SR-13④層



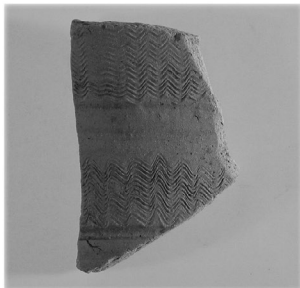
11 : I区SR-13④層



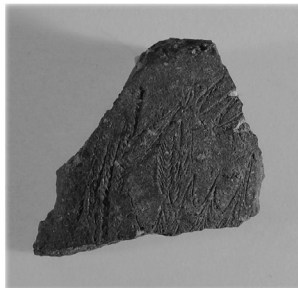
12 : I区SR-13④層



13 : I区SR-13④層



14 : I区SR-13④層



15 : I区SR-13④層



16 : I区SR-13④層



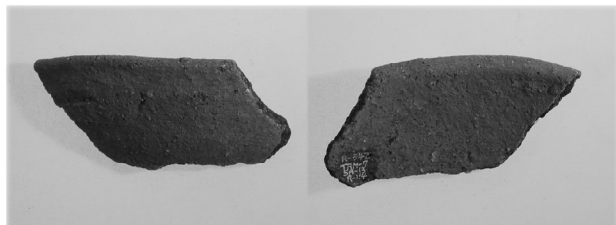
1 : I区SR-13④層



2 : I区SR-13④層



3 : I区SR-13④層



4 : I区SR-13④層



5 : I区SR-13④層



7 : I区SR-13④層



8 : I区SR-13④層



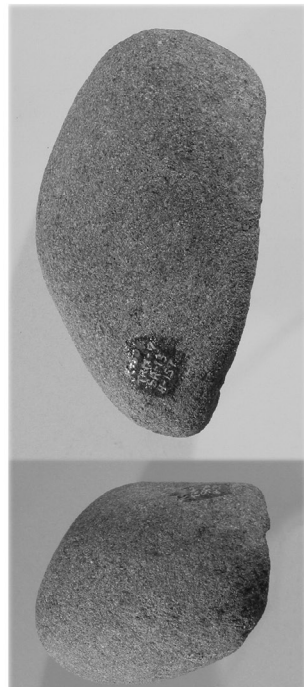
6 : I区SR-13④層



9 : I区SR-13④層

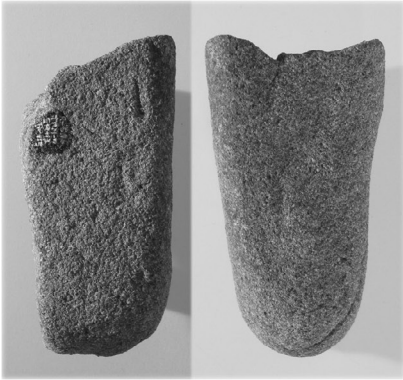


10 : I区SR-13④層

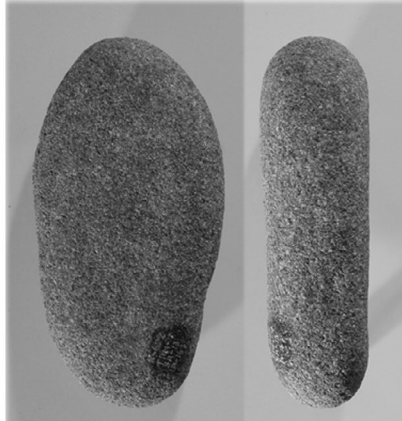


10 : I区SR-13④層

図版38



1 : I 区SR-13④層



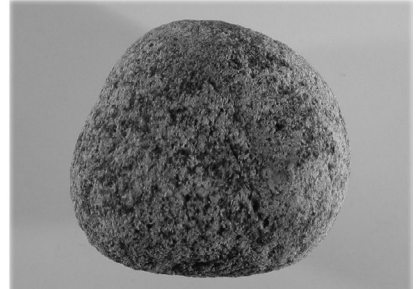
2 : I 区SR-13④層



3 : I 区SR-13④層



5 : I 区SR-13④層



4 : I 区SR-13④層



6 : I 区SR-13④層



7 : I 区SR-13④層



8 : I 区SR-13④層



9 : I 区SR-13④層



10 : I 区SR-13④層



11 : I 区SR-13④層



12 : I 区SR-13④層

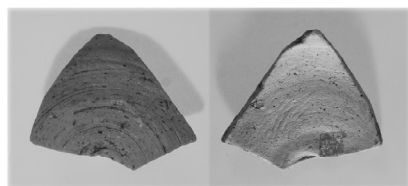




1 : I 区SX-29



2 : I 区SX-29



3 : I 区SX-29



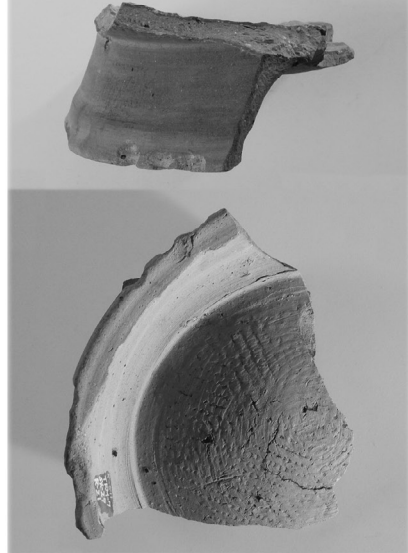
4 : I 区SX-29



5 : I 区SX-29



6 : I 区SX-29

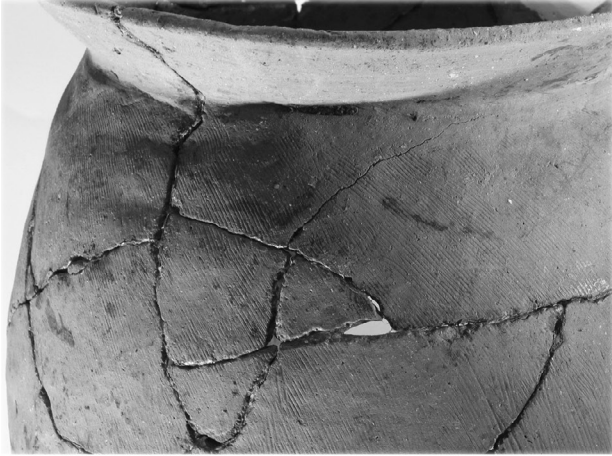


7 : I 区SX-29

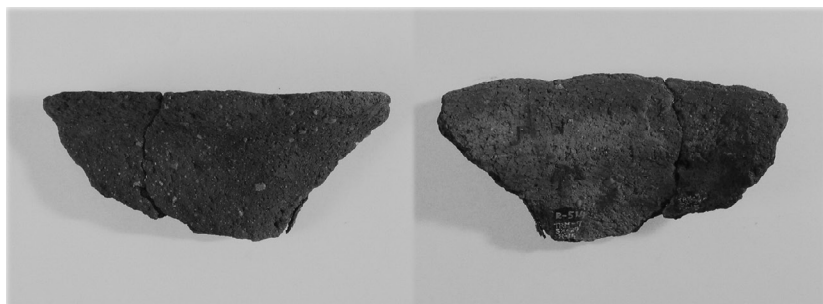


8 : I 区SX-29

图版40



1 : I 区SX-29



1 : I 区SX-29



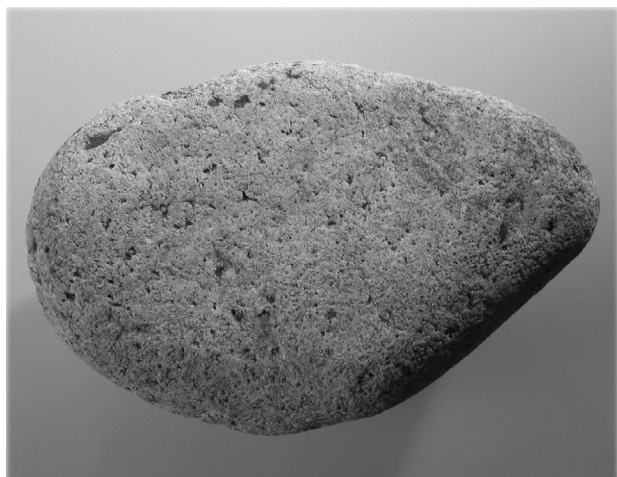
2 : I 区SX-29



3 : I 区SX-29



4 : I 区SX-29



5 : I 区SX-29



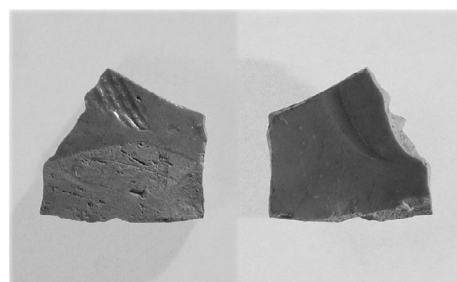
6 : I 区SP-33



7 : I 区SP-39



8 : I 区SP-40



9 : I 区SP-3



8 : I 区SP-33

図版42



1 : II区III-1層



4 : II区III-2層



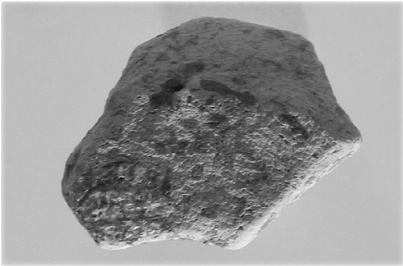
2 : II区III-1層



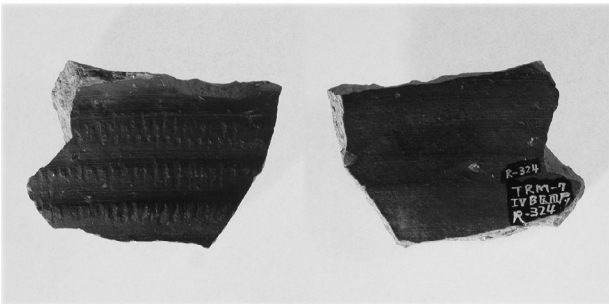
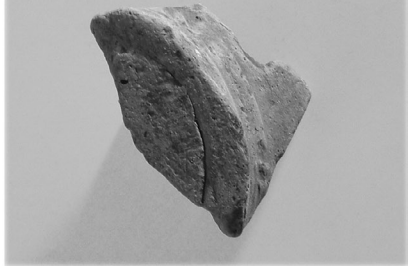
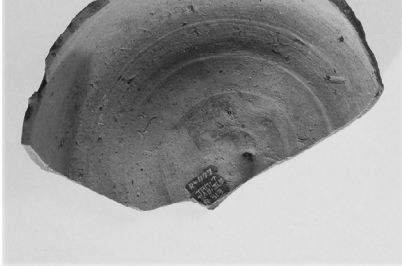
5 : II区III-2層



6 : IV区III-①層



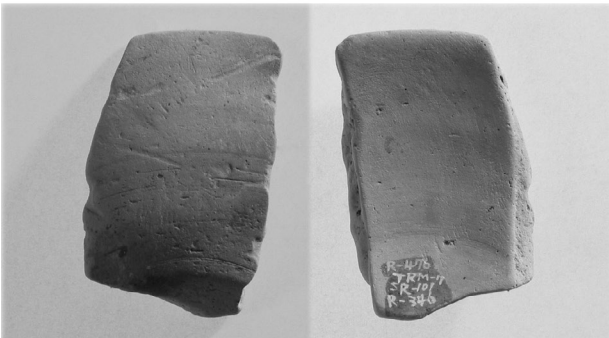
3 : II区III-1層



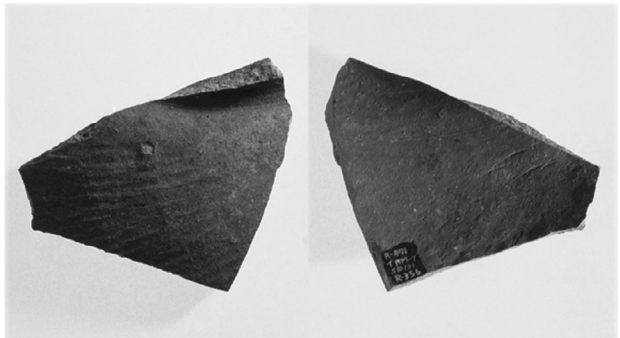
7 : IV区III-①~②層



8 : IV区III-⑤層



9 : IV区SR-102①・③層界部



10 : IV区SR-102①~②層



1 8次調査1・2区遠景（南から）



2 8次調査1区完掘状況（北から）



3 8次調査1区南壁土層断面（北から）



4 8次調査2区完掘状況（東から）

図版44



1 8次調査3・4区遠景（北東から）



2 8次調査3・4区遠景（東から）



1 8次調査3区遺構検出状況（西から）



2 8次調査3区遺構完掘状況（西から）

図版46



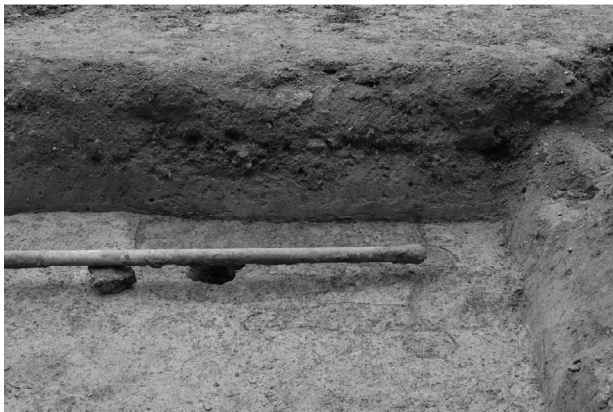
1 8次調査3区遺構検出状況（北から）



2 8次調査3区遺構完掘状況（北から）



1 8次調査3区北壁土層断面（南東から）



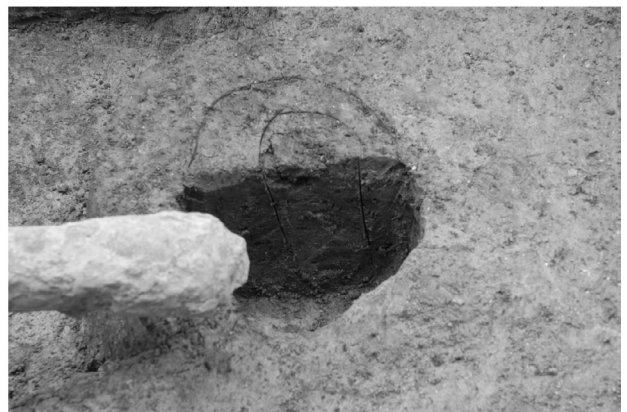
2 8次調査3区SK-1検出状況（南から）



3 8次調査3区SK-1完掘状況（南から）



4 8次調査3区SP-3土層断面（北から）



5 8次調査3区SP-5土層断面（南から）

図版48



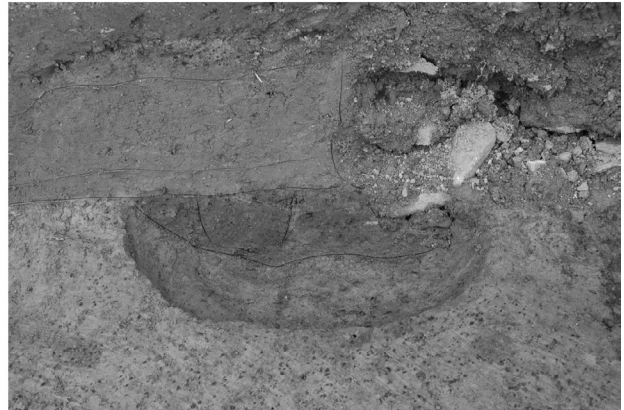
1 8次調査4区SP-7土層断面(南から)



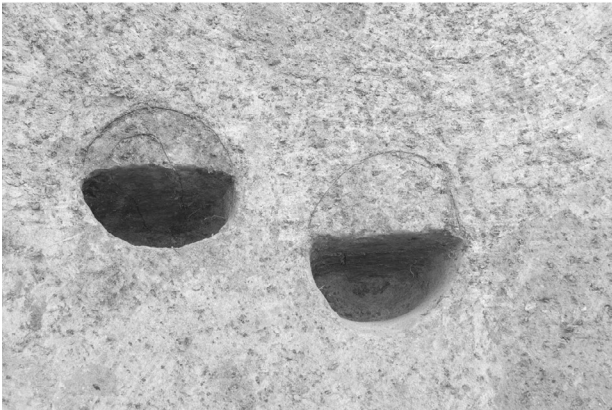
2 8次調査4区SP-8・9土層断面(南から)



3 8次調査4区SP-10土層断面(北から)



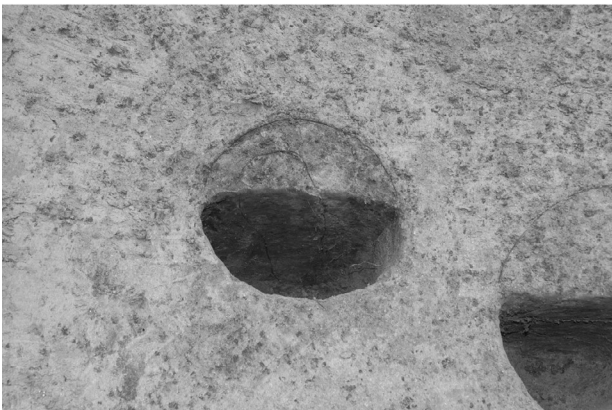
4 8次調査4区SP-11土層断面(北から)



5 8次調査4区SP-12・13土層断面(南から)



6 8次調査4区SP-12土層断面(南から)



7 8次調査4区SP-13土層断面(南から)



8 8次調査4区SP-17土層断面(南から)



1 8次調査4区遺構検出状況（東から）



2 8次調査4区完掘状況（東から）

図版50



1 8次調査4区遺構検出状況（西から）



2 8次調査4区完掘状況（西から）



1 8次調査4区SP-22・39（北から）



2 8次調査4区SP-23土層断面（東から）



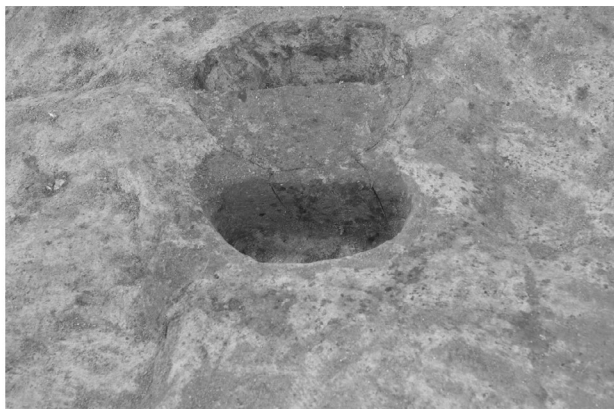
3 8次調査4区SP-25・26土層断面（南から）



4 8次調査4区SP-27（北から）



5 8次調査4区SP-28（北から）



6 8次調査4区SP-30土層断面（北から）



7 8次調査4区SP-31土層断面（北から）



8 8次調査4区SK-32, SP-34土層断面（北から）

図版52



1 8次調査4区SP-35土層断面（北から）



2 8次調査4区SP-36土層断面（西から）



3 8次調査4区SP-38土層断面（南から）



4 8次調査5区遠景（北東から）



5 8次調査5区完掘状況（南から）

樽味遺跡 V

— 樽味遺跡6～8次調査報告 —
愛媛大学埋蔵文化財調査報告 XXV
2013年 3月29日

発行 愛媛大学埋蔵文化財調査室
〒790-8577 松山市道後樋又10番13号
TEL・FAX 089-927-9127
印刷 原印刷株式会社
〒799-1594 今治市喜田村1丁目2番1号
TEL 0898-48-5511
